



Unable to locate subtitle

AWS Data Exchange ユーザーガイド



AWS Data Exchange ユーザーガイド: ***Unable to locate subtitle***

Copyright © 2024 Amazon Web Services, Inc. and/or its affiliates. All rights reserved.

Amazon の商標およびトレードドレスは、Amazon 以外の製品およびサービスに使用することはできません。また、お客様に誤解を与える可能性がある形式で、または Amazon の信用を損なう形式で使用することもできません。Amazon が所有していないその他のすべての商標は、Amazon との提携、関連、支援関係の有無にかかわらず、それら該当する所有者の資産です。

Table of Contents

とは AWS Data Exchange	1
のデータ許可とは AWS Data Exchange	1
AWS Marketplace データ製品とは	2
サポートされるデータセット	3
アクセス AWS Data Exchange	4
データレシーバー	4
データ送信者とデータプロバイダー	4
サポートされるリージョン	4
関連サービス	5
設定	6
にサインアップする AWS アカウント	6
にサインアップする AWS アカウント	6
管理アクセスを持つユーザーを作成する	6
ユーザーの作成	8
AWS データセットでの Open Data の使用	10
コンソールの使用 AWS Data Exchange を開始する	11
ステップ 1: AWS データセットでオープンデータを検索する	11
ステップ 2: AWS データセットで Open Data を使用する	12
を使用せずに開始する AWS アカウント	12
ステップ 1: AWS データセットでオープンデータを検索する	12
ステップ 2: AWS データセットで Open Data を使用する	13
のデータ AWS Data Exchange	14
アセット	14
アセットの構造	14
アセットタイプ	15
リビジョン	17
リビジョンの構造	18
データセット	19
所有データセット	20
権限を持つデータセット	20
データセットタイプ	20
Amazon S3 データアクセスデータセット	22
AWS Lake Formation データセット (プレビュー)	22
AWS リージョン および データセット	22

データセットの構造	22
データセットのベストプラクティス	23
タグ	24
データ許可の作成	25
プログラマ的なアクセス	26
ファイルベースのデータを含む	26
ステップ 1: アセットを作成する	26
ステップ 2: データセットを作成する	27
ステップ 3: リビジョンを作成する	27
ステップ 4: リビジョンにアセットをインポートする	28
ステップ 5: 新しいデータ許可を作成する	29
を含む APIs	30
前提条件	31
ステップ 1: APIリソースポリシーを更新する	33
ステップ 2: APIデータセットを作成する	34
ステップ 3: リビジョンを作成する	36
ステップ 4: リビジョンにAPIアセットを追加する	37
ステップ 5: を含む新しいデータ許可を作成する APIs	42
Amazon Redshift データセットを含める	43
ステップ 1: Amazon Redshift のデータ共有アセットを作成する	44
ステップ 2: Amazon Redshift データセットを作成する	45
ステップ 3: リビジョンを作成する	45
ステップ 4: リビジョンに Amazon Redshift のデータ共有アセットを追加する	46
ステップ 5: 新しいデータ許可を作成する	47
Amazon S3 データアクセスを含む	48
ステップ 1: Amazon S3 データセットを作成する	57
ステップ 2: Amazon S3 データアクセスを設定する	57
ステップ 3: データセットを確認して完成する	59
ステップ 4: 新しいデータ許可を作成する	59
データアクセス許可データセットを含む AWS Lake Formation (プレビュー)	61
ステップ 1: AWS Lake Formation データセットを作成する (プレビュー)	61
ステップ 2: AWS Lake Formation データアクセス許可を作成する (プレビュー)	62
ステップ 3: 確認して確定する	63
ステップ 4: リビジョンを作成する	63
ステップ 5: AWS Lake Formation データセットを含む新しいデータ許可を作成する (プレビュー)	63

AWS Lake Formation データ許可データセットを含むデータ許可を作成する際の考慮事項 (プレビュー)	65
AWS Data Exchange でのデータ許可の承諾とデータへのアクセス	66
関連トピック	67
データ許可の承諾後にデータセットにアクセスする	67
ファイルベースのデータを含む	68
を含む APIs	69
Amazon Redshift データセットを含める	70
Amazon S3 データアクセスを含む	71
AWS Lake Formation データセットを含む (プレビュー)	74
組織内の AWS Data Exchange データ付与ライセンスの共有	75
ライセンス共有の前提条件	76
ライセンスの表示	76
ライセンスの共有	77
データ製品のサブスクライブ	78
関連トピック	79
製品のサブスクリプション	79
データセットとリビジョン	82
データディクショナリ、サンプル	83
サブスクライバーとしての使用の開始	83
ステップ 1: をセットアップする AWS Data Exchange	84
ステップ 2: カタログを参照する	84
ステップ 3 : (オプション) データ製品に関するレコメンデーションをリクエストする	85
ステップ 4: (オプション) データディクショナリとサンプルを含む製品を評価する	86
ステップ 2: 製品をサブスクライブおよびアクセスする	88
製品のサブスクライブ	89
ファイルベースのデータを含む	89
を含む APIs	94
Amazon Redshift データセットを含める	98
Amazon S3 データアクセスの抑制	101
AWS Lake Formation データセットを含む (プレビュー)	106
データディクショナリの表示とダウンロード	108
サブスクライバーのサブスクリプション検証	109
サブスクリプションリクエストの完了	109
保留中のサブスクリプションリクエストを確認する	110
E メール通知	110

組織内でのライセンスサブスクリプションの共有	111
ライセンス共有の前提条件	111
ライセンスの表示	112
ライセンスの共有	113
BYOS オファー	113
プライベート製品とオファー	114
サブスクリプションの管理	116
サブスクリプションの表示	116
サブスクリプションの自動更新を有効にする、無効にする	116
製品のサブスクリプションを解除する	117
とのやり取りについて学ぶための製品 AWS Data Exchange	117
AWS Data Exchange ハートビート	118
AWS Data Exchange の APIs	121
ワールドワイドイベント出席	124
AWS Data Exchange 用 AWS Lake Formation (プレビュー)	127
AWS Data Exchange Amazon S3 用	132
AWS Data Exchange プロバイダー生成通知	136
でのデータ製品の提供 AWS Marketplace	140
拡張プロバイダープログラム (EPP)	142
プログラマ的なアクセス	142
関連トピック	142
プロバイダーとしての使用開始	143
ステップ 1: 登録資格を確認する	143
ステップ 2: プロバイダーになるための登録を行う	145
ステップ 3: データの適格性を確認する	146
公開ガイドライン	146
新しい製品の公開	149
ファイルベースのデータを含む	149
を含む APIs	156
Amazon Redshift データセットを含める	174
Amazon S3 データアクセスを含む	181
AWS Lake Formation データアクセス許可データセットを含む (プレビュー)	197
製品の詳細	204
製品の可視性	204
機密カテゴリの情報	205
製品名	207

製品ロゴ	207
サポート連絡先	207
[製品カテゴリ]	208
簡単な説明	208
[詳しい説明]	208
リビジョンアクセスルール	210
データディクショナリ	211
サンプル	211
製品の説明テンプレート	212
汎用テンプレート	213
金融サービステンプレート	215
ヘルスケアとライフサイエンスのテンプレート	218
マーケティングおよび広告テンプレート	220
メディアおよびエンターテイメントテンプレート	222
パブリックセクターテンプレート	225
小売およびロケーションテンプレート	227
オファーの作成	229
オファーの料金	230
米国の消費税と使用税	230
データサブスクリプション契約	230
返金ポリシー	231
サブスクリプション検証	231
オファーの自動更新	231
プライベートオファー	232
BYOS オファー	233
サブスクリプションの表示	235
製品の更新	236
製品とオファーの詳細の更新	237
データディクショナリの更新	239
サンプルを更新する	240
カスタムメタデータの更新	240
データセットの新しいリビジョンを発行する	241
製品を発行解除する	243
リビジョンの削除	244
リビジョンの取り消し	245
プロバイダーのサブスクリプション検証	249

E メール通知	250
サブスクリプション検証リクエストの表示	251
サブスクリプション検証リクエストを編集する	251
リクエストを承認または拒否する	252
プロバイダー生成通知	254
でのプロバイダー財務 AWS Marketplace	255
支払い	255
米国の消費税と使用税	255
AWS Marketplace 販売者レポート	256
サブスクライバーの返金リクエスト	256
のジョブ AWS Data Exchange	257
ジョブプロパティ	257
AWS リージョン および ジョブ	259
アセットのインポート	259
S3 バケットからのアセットのインポート	259
署名付きからのアセットのインポート URL	261
Amazon API Gateway からのアセットのインポート API	262
Amazon Redshift AWS Data Exchange のデータ共有からのアセットのインポート	264
からのアセットのインポート AWS Lake Formation (プレビュー)	265
アセットのエクスポート	267
S3 バケットへのアセットのエクスポート	267
署名付きへのアセットのエクスポート URL	270
リビジョンのエクスポート	272
S3 バケットへのリビジョンのエクスポート (AWS SDKs)	273
プロバイダーとしての S3 バケットへのリビジョンのエクスポート (コンソール)	274
サブスクライバーとしての S3 バケットへのリビジョンのエクスポート (コンソール)	275
サブスクライバーとしての S3 バケットへのリビジョンの自動エクスポート	275
リビジョンをエクスポートするときのキーパターン	281
クォータ	283
Service Quotas	283
サービスエンドポイント	283
エクスポートとインポートジョブのガイドライン	283
リソースフィールドに対する制約	285
ログ記録とモニタリング	286
モニタリング	286
の Amazon EventBridge イベント AWS Data Exchange	287

ファイルベースのデータセットを追加するイベント	290
Amazon S3 データアクセスデータセットの追加に関するイベント	291
AWS Lake Formation データアクセス許可データセットを追加するためのイベント (プレビュー)	292
Amazon Redshift データ共有データセットを追加するためのイベント	293
Amazon API Gateway APIデータセットを追加するためのイベント	294
リビジョンの追加に関するイベント	295
Amazon S3 データアクセスデータセットのリビジョンを追加する	296
AWS Lake Formation データ許可データセットリビジョンを追加するためのイベント (プレビュー)	297
Amazon Redshift データ共有データセットのリビジョンを追加する	298
Amazon API Gateway APIデータセットリビジョンを追加するためのイベント	299
リビジョンを取り消すためのイベント	303
Amazon Redshift リソースで実行されるアクションのイベント	304
Amazon Redshift データ共有にアクセスできなくなった場合のイベント	305
自動エクスポートジョブのイベントが完了しました	306
自動エクスポートジョブのイベントが失敗しました	307
プロバイダーが生成するデータ更新通知のイベント	308
プロバイダーが生成するスキーマ変更通知のイベント	309
プロバイダーが生成するデータ遅延通知のイベント	311
プロバイダーが生成するデータ廃止通知のイベント	312
AWSAWS Data Exchange イベントのユーザー通知	313
を使用した通話のログ記録 AWS Data Exchange API AWS CloudTrail	315
AWS Data Exchange の情報 CloudTrail	317
AWS Data Exchange ログファイルエントリについて	318
今後のログ記録の変更 AWS Data Exchange CloudTrail点	319
セキュリティ	323
データ保護	323
保管中の暗号化	324
転送中の暗号化	325
コンテンツに対するアクセス制限	325
Amazon S3 データアクセスのキー管理	325
AWS KMS 許可の作成	325
暗号化コンテキストと許可制約	326
AWS KMS keys での のモニタリング AWS Data Exchange	326
アイデンティティとアクセス権の管理	330

認証	331
アクセスコントロール	332
API アクセス許可リファレンス	340
AWS マネージドポリシー	348
コンプライアンス検証	365
PCI DSS コンプライアンス	366
耐障害性	366
インフラストラクチャセキュリティ	367
VPC エンドポイント (AWS PrivateLink)	367
エンドポイントに関する AWS Data Exchange VPC考慮事項	368
のインターフェイスVPCエンドポイントの作成 AWS Data Exchange	368
のVPCエンドポイントポリシーの作成 AWS Data Exchange	368
AWS Marketplace カタログ API	371
AddDataSets	371
チュートリアル: 公開済みのデータ製品への新しいデータセットの追加	372
AddDataSets 例外	376
ドキュメント履歴	377
.....	cccxcix

とは AWS Data Exchange

AWS Data Exchange は、AWS お客様が他の組織からのデータエンタイトルメントを大規模に簡単に共有および管理できるようにするサービスです。

データレシーバーは、すべてのデータ許可と AWS Marketplace データサブスクリプションを 1 か所で追跡および管理できます。AWS Data Exchange データセットにアクセスできる場合は、互換性のある AWS 分析またはパートナー分析と機械学習を使用して、データセットからインサイトを抽出できます。からデータ製品を購入する方法については AWS Marketplace、「」を参照してください [AWS Data Exchange のデータ製品のサブスクリプション AWS Data Exchange](#)。

データ送信者の場合、はデータ配信とエンタイトルメントインフラストラクチャを構築および維持する必要性 AWS Data Exchange を排除します。を持つユーザーは誰でも、データ権限を作成してデータレシーバーに送信 AWS アカウント できます。でデータを製品として販売するには AWS Marketplace、ガイドラインに従って適格性を判断してください。詳細については、「[で AWS Data Exchange のデータ製品の提供 AWS Marketplace](#)」を参照してください。

さらに、の有無にかかわらず、誰でも AWS アカウントプログラム [上の Open Data AWS](#) の一部である公開されているデータセットを検索して使用できます。詳細については、「[での AWS データセットでの Open Data の使用 AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

トピック

- [のデータ許可とは AWS Data Exchange](#)
- [AWS Marketplace データ製品とは](#)
- [サポートされるデータセット](#)
- [アクセス AWS Data Exchange](#)
- [サポートされるリージョン](#)
- [関連サービス](#)

のデータ許可とは AWS Data Exchange

データグラントは、データセットへのアクセスをデータレシーバーに許可するためにデータ送信者によって作成される の交換単位 AWS Data Exchange です。データ送信者がデータ許可を作成すると、許可リクエストがデータレシーバーの AWS アカウントに送信されます。データレシーバーはデータ許可を承諾し、基になるデータへのアクセス権を取得します。

データ製品は、以下の部分で構成されます。

- データセット – のデータセット AWS Data Exchange は、送信者によってキュレートされたリソースです。データグラントを承諾した後に受信者がアクセスするデータアセットが含まれています。は、Files、Amazon RedshiftAPI、Amazon S3、および AWS Lake Formation (プレビュー) の 5 種類のデータセット AWS Data Exchange をサポートしています。
- データ許可の詳細 — この情報には、データレシーバーに表示されるデータ許可の名前と説明が含まれます。
- 受信者アクセスの詳細 – この情報には受信者の AWS アカウント ID が含まれ、受信者がデータにアクセスできる期間を指定します。

AWS Marketplace データ製品とは

製品は、プロバイダーによって AWS Marketplace 発行され、サブスクライバーが使用できるの交換単位です。データ製品は、AWS Data Exchange データセットを含む製品です。データプロバイダーがデータ製品を公開すると、その製品は、当社のガイドラインと条件 AWS に照らしてによってレビューされた後、AWS Marketplace 製品カタログに一覧表示されます。発行する各製品は、製品 ID によって一意に識別されます。

データ製品には、次の部分があります。

- 製品の詳細 – この情報には、名前、説明 (簡単な説明と詳しい説明の両方)、データサンプル、ロゴ画像、およびサポート連絡先情報が含まれます。製品の詳細は、プロバイダーが入力します。
 - サブスクライバーである場合の詳細については、「[の製品サブスクリプション AWS Data Exchange](#)」を参照してください。
 - プロバイダーである場合の詳細については、「[の製品詳細のベストプラクティス AWS Data Exchange](#)」を参照してください。
- 製品オファー – オファーは、製品をサブスクライブするときにサブスクライバーが同意する条件を定義します。パブリック AWS Marketplace カタログで製品を使用可能にするには、プロバイダーがパブリックオファーを定義する必要があります。このオファーには、料金と期間、データサブスクリプション契約、返金ポリシーが含まれ、カスタムオファーを作成するオプションもあります。
 - サブスクライバーである場合の詳細については、「[でのプライベート製品とオファーの受け入れ AWS Data Exchange](#)」と「[での Bring Your Own Subscription \(BYOS\) オファーの承諾 AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

- プロバイダーである場合の詳細については、「[AWS Data Exchange 製品のオファ어의作成](#)」を参照してください。
- データセット – 製品には、1 つ、または複数のデータセットを含めることができます。のデータセット AWS Data Exchange は、データプロバイダーによってキュレートされたリソースであり、データグラントを承諾した後に受信者がアクセスするデータアセットが含まれています。は、ファイル、、Amazon RedshiftAPI、Amazon S3、および AWS Lake Formation (プレビュー) の 5 種類のデータセット AWS Data Exchange をサポートしています。
- サブスクライバーである場合の詳細については、「[データセットとリビジョン](#)」を参照してください。
- プロバイダーである場合の詳細については、「[のデータ AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

サポートされるデータセット

AWS Marketplace は、service. AWS Marketplace reviews permitted data types, restricting products that not permitted. は、許可されたデータ型を確認し、許可されていない製品を制限することで、透明性を高めることで、データトランザクションを容易にするための責任あるアプローチを取ります。プロバイダーによるデータセットの配信は、AWS Marketplace 販売者向けの利用規約に規定された法的な適格要件を満たすデータセットに制限されています。

許可されるデータのタイプに関する詳細については、「[の公開ガイドライン AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

Important

AWS お客様として、適用されるデータプライバシー法を確実に遵守するために、独自の追加のデューデリジェンスを実施することが推奨されます。上の製品やその他のリソース AWS Data Exchange が不正または違法な目的で使用されていると思われる場合は、[Amazon AWS不正使用レポートフォーム](#) を使用して報告してください。

アクセス AWS Data Exchange

データレシーバー

データレシーバーとして、AWS Data Exchange コンソールから現在、保留中、期限切れのデータ許可をすべて表示できます。

また、AWS Data Exchange を通じて [AWS Marketplace カタログ](#) から新しいサードパーティのデータセットを見つけてサブスクライブすることもできます。

データ送信者とデータプロバイダー

データ送信者またはプロバイダーとして、次のオプション AWS Data Exchange を使用して にアクセスできます。

- [AWS Data Exchange コンソール](#) を使用して直接アクセス ([データを発行])
- で利用可能なデータ製品を持つデータプロバイダー AWS Marketplace は、次の を使用してプログラムで にアクセスできますAPIs。
 - AWS Data Exchange API – APIオペレーションを使用して、データセットとリビジョンを作成、表示、更新、削除します。これらのAPIオペレーションを使用して、これらのリビジョンとの間でアセットをインポートおよびエクスポートすることもできます。詳細については、「[AWS Data Exchange APIリファレンス](#)」を参照してください。
 - AWS Marketplace Catalog API – APIオペレーションを使用して、 に公開されたデータ製品を表示および更新します AWS Marketplace。詳細については、[AWS Marketplace カタログAPIリファレンス](#) を参照してください。

サポートされるリージョン

AWS Data Exchange データ許可、サブスクリプション、データセット、リビジョン、アセットは、プログラムで管理することも、サポートされているリージョンで AWS Data Exchange コンソールを介して管理することもできます。サポートされているリージョンの詳細については、「[グローバルインフラストラクチャのリージョン表](#)」を参照してください。に発行 AWS Marketplace されるデータ製品は、グローバルに利用可能な単一の製品カタログで入手できます。サブスクライバーは、使用しているカタログに関係なく同じカタログを表示できます AWS リージョン。

関連サービス

次のサービスはに関連しています AWS Data Exchange。

- Amazon S3 – AWS Data Exchange プロバイダーが Amazon S3 バケットからデータファイルをインポートおよび保存できるようにします。データ受信者は、これらのファイルをプログラムで Amazon S3 にエクスポートできます。AWS Data Exchange また、受信者はプロバイダーの Amazon S3 バケットに直接アクセスして使用できます。詳細については、「Amazon Simple Storage Service ユーザーガイド」の「[Amazon S3 とは?](#)」を参照してください。
- Amazon API Gateway – データセットでサポートされているもう 1 つのアセットタイプは です APIs。データ受信者は、API プログラムで を呼び出すか、AWS Data Exchange コンソール API から を呼び出すか、OpenAPI 仕様ファイルをダウンロードすることができます。詳細については、「[Amazon API Gateway デベロッパーガイド](#)」の「[Amazon Gateway とは](#)」を参照してください。 API
- Amazon Redshift – Amazon Redshift データセット AWS Data Exchange をサポートします。データ受取人は、データを抽出、変換、ロードすることなく Amazon Redshift 内のデータをクエリするための読み取り専用アクセス権を取得できます。詳細については、「Amazon Redshift 入門ガイド」の「[Amazon Redshift の開始方法](#)」、および「Amazon Redshift データベースデベロッパーガイド」の「[Amazon Redshift システムの概要](#)」を参照してください。
- AWS Marketplace – データセットを の製品として公開 AWS Data Exchange することを許可します AWS Marketplace。AWS Data Exchange データプロバイダーは販売者として登録 AWS Marketplace する必要があり、AWS Marketplace 管理ポータル または を使用できます AWS Marketplace Catalog API。AWS Marketplace サブスクライバーになる方法については、「AWS Marketplace 購入者ガイド」の「[とは AWS Marketplace](#)」を参照してください。AWS Marketplace 販売者になる方法については、販売者ガイドの「[とは AWS Marketplace](#)」を参照してください。 AWS Marketplace
- AWS Lake Formation – AWS Lake Formation データアクセス許可データセット (プレビュー) AWS Data Exchange をサポートします。データ受信者は、データプロバイダーのデータレイクに保存されている AWS Lake Formation データにアクセスし、独自の AWS Lake Formation データセットからこのデータへのアクセスをクエリ、変換、共有できます。詳細については、[AWS 「Lake Formation」](#) を参照してください。

セットアップ AWS Data Exchange

AWS のサービスを含む を使用する前に AWS Data Exchange、次のタスクを完了する必要があります。

タスク

- [にサインアップする AWS アカウント](#)
- [ユーザーの作成](#)

にサインアップする AWS アカウント

にサインアップする AWS アカウント

がない場合は AWS アカウント、次の手順を実行して作成します。

にサインアップするには AWS アカウント

1. <https://portal.aws.amazon.com/billing/サインアップ> を開きます。
2. オンラインの手順に従います。

サインアップ手順の一環として、通話呼び出しを受け取り、電話キーパッドで検証コードを入力するように求められます。

にサインアップすると AWS アカウント、AWS アカウントのルートユーザー が作成されます。ルートユーザーには、アカウントのすべての AWS のサービス とリソースへのアクセス権があります。セキュリティのベストプラクティスとして、ユーザーに管理アクセスを割り当て、ルートユーザーのみを使用して [ルートユーザーアクセスが必要なタスク](#) を実行してください。

AWS は、サインアッププロセスが完了した後に確認 E メールを送信します。/ に移動し、マイアカウント を選択して、いつでも現在のアカウントアクティビティを表示 <https://aws.amazon.com> し、アカウントを管理できます。

管理アクセスを持つユーザーを作成する

にサインアップしたら AWS アカウント、 のセキュリティを確保し AWS アカウントのルートユーザー、 を有効にして管理ユーザーを作成し AWS IAM Identity Center、日常的なタスクにルートユーザーを使用しないようにします。

のセキュリティ保護 AWS アカウントのルートユーザー

1. ルートユーザーを選択し、AWS アカウント E メールアドレスを入力して、アカウント所有者 [AWS Management Console](#) としてサインインします。次のページでパスワードを入力します。

ルートユーザーを使用してサインインする方法については、AWS サインイン ユーザーガイドの [ルートユーザーとしてサインインする](#) を参照してください。

2. ルートユーザーの多要素認証 (MFA) を有効にします。

手順については、[「ユーザーガイド」の AWS アカウント「ルートユーザー \(コンソール\) の仮想 MFA デバイスの有効化](#)」を参照してください。IAM

管理アクセスを持つユーザーを作成する

1. IAM Identity Center を有効にします。

手順については、「AWS IAM Identity Center ユーザーガイド」の [「AWS IAM Identity Center の有効化](#)」を参照してください。

2. IAM Identity Center で、ユーザーに管理アクセスを許可します。

を ID ソース IAM アイデンティティセンターディレクトリとして使用する方法的チュートリアルについては、AWS IAM Identity Center ユーザーガイドの [「デフォルトを使用してユーザーアクセスを設定する IAM アイデンティティセンターディレクトリ](#)」を参照してください。

管理アクセス権を持つユーザーとしてサインインする

- IAM Identity Center ユーザーでサインインするには、IAM Identity Center ユーザーの作成時に E メールアドレスに URL 送信されたサインインを使用します。

IAM Identity Center ユーザーを使用してサインインする方法については、AWS サインイン「ユーザーガイド」の [AWS 「アクセスポータルへのサインイン](#)」を参照してください。

追加のユーザーにアクセス権を割り当てる

1. IAM Identity Center で、最小権限のアクセス許可を適用するベストプラクティスに従うアクセス許可セットを作成します。

手順については、「AWS IAM Identity Center ユーザーガイド」の「[権限設定を作成する](#)」を参照してください。

2. グループにユーザーを割り当て、そのグループにシングルサインオンアクセス権を割り当てます。

手順については、「AWS IAM Identity Center ユーザーガイド」の「[グループの参加](#)」を参照してください。

ユーザーの作成

管理者ユーザーを作成するには、以下のいずれかのオプションを選択します。

管理者を管理する方法を1つ選択します	目的	方法	以下の操作も可能
IAM Identity Center で (推奨)	<p>短期の認証情報を使用して AWS にアクセスします。</p> <p>これはセキュリティのベストプラクティスと一致しています。ベストプラクティスの詳細については、IAM「ユーザーガイド」の「セキュリティのベストプラクティスIAM」を参照してください。</p>	AWS IAM Identity Center ユーザーガイドの「 開始方法 」の手順に従います。	AWS Command Line Interface ユーザーガイド で使用する AWS CLI ようにを設定 AWS IAM Identity Center して、プログラムによるアクセスを設定します。

管理者を管理する方法を1つ選択します	目的	方法	以下の操作も可能
で IAM (非推奨)	長期認証情報を使用して AWS にアクセスする。	IAM ユーザーガイドの「 最初のIAM管理者ユーザーとユーザーグループの作成 」の手順に従います。	IAM ユーザーガイドの IAM 「 ユーザーのアクセスキーを管理する 」を使用して、プログラムによるアクセスを設定します。

Note

でデータ製品を提供するために登録されている AWS アカウント AWS Marketplace とのみが製品 AWS Data Exchange を作成できます。

での AWS データセットでの Open Data の使用 AWS Data Exchange

AWSの [Open Data](#) プログラムには、無料で公開されている 300 を超えるデータセットが集められています。AWS Marketplace を使用して、AWS データセットのオープンデータ、その他の無料製品、有料製品をすべて 1 か所で検索できます。

カタログで利用可能な AWS データセットのオープンデータは、以下の関連プログラムの一部です。

- [オープンデータスポンサーシッププログラム](#) – AWS このプログラムは、一般公開されている高価値のクラウド最適化データセットのストレージコストをカバーします。
- [Amazon Sustainability Data Initiative \(ASDI\)](#) – AWS このプログラムは、大規模な持続可能性データセットの取得と分析に必要なコストと時間を最小限に抑えます。

これらの無料のオープンデータは、の有無にかかわらず AWS、誰でも検索して検索できます。サブスクリプション AWS アカウントは必要ありません。

Amazon Elastic Compute Cloud (Amazon EC2)、Amazon Athena、Amazon などのコンピューティングおよびデータ分析サービスを使用して AWS Lambda、オープンデータデータセット上にサービスを分析および構築できますEMR。

Note

該当するデータセットドキュメントに特に明記されていない限り、のオープンデータレジストリを通じて利用可能なデータセット AWS は、によって提供および維持されません AWS。データセットは、さまざまなライセンスに基づいてさまざまな第三者によって提供および管理されています。データセットをアプリケーションに使用できるかどうかを判断するには、データセットのライセンスと関連ドキュメントを確認してください。

以下のトピックでは、AWS データセットで Open Data を開始する方法について説明します。

トピック

- [AWS Data Exchange コンソールを使用した AWS データセットの Open Data の開始方法](#)
- [を使用せずに AWS データセットで Open Data を開始する AWS アカウント](#)

AWS Data Exchange コンソールを使用した AWS データセットの Open Data の開始方法

以下のトピックでは、AWS Data Exchange コンソール AWS Data Exchange を使用してデータセットで Open Data を検索して使用方法について説明します。このプロセスを完了するには AWS アカウント、が必要です。

このプロセスには以下のステップがあります。

ステップ

- [ステップ 1: AWS データセットでオープンデータを検索する](#)
- [ステップ 2: AWS データセットで Open Data を使用する](#)

ステップ 1: AWS データセットでオープンデータを検索する

で AWS データセットのオープンデータを検索するには AWS Data Exchange

1. にサインイン AWS Management Console し、[AWS Data Exchange コンソール](#) を開きます。
2. 左側のナビゲーションペインで、 をサブスクライブするには AWS Marketplace、カタログを参照 を選択します。
3. [復元タイプ] で、以下のいずれかを実行します。
 - a. [提携プログラム]フィルターでは、以下のオプションのいずれかまたは両方を選択します。
 - AWS オープンデータスポンサーシッププログラム
 - Amazon Sustainability Data Initiative
 - b. (オプション) 契約タイプフィルタで、[Open Data Licenses] を選択すると、公開されているアフィリエイトデータセットと非アフィリエイトデータセットがすべて表示されます。

詳細については、「[カタログを参照](#)」を参照してください。

4. (オプション) 検索バーに用語または語句を入力し、[検索] を選択します。

検索語に一致する AWS データセットのオープンデータのリストが表示されます。

5. AWS データセットで Open Data を選択し、詳細ページを表示します。

詳細ページの情報には、説明、 のリソース AWS、使用例、リンクが含まれています。

- a. (オプション) 「提供者情報」で、プロバイダーの情報へのリンクを選択すると、そのプロバイダーに関する詳細情報が表示されます。
- b. (オプション) ラベルでラベルを選択すると、類似商品のリストが表示されます。

ステップ 2: AWS データセットで Open Data を使用する

AWS データセットで Open Data を使用するには

1. [製品の詳細] ページで、[AWSのリソース] タブを選択します。
2. Amazon リソースネーム (ARN) の下に表示される Amazon リソースネーム (ARN) をコピーします。
3. AWS CLI Access (AWSアカウント不要) の場合は、AWS CLIリンクを選択します。
AWS Command Line Interface (AWS CLI) ドキュメントが開きます。
4. コマンドラインから AWS CLI を呼び AWS のサービス 出すために を使用する方法については、ドキュメントを参照してください。

詳細については、[AWS Command Line Interface ユーザーガイド](#)をご参照ください。

を使用せずに AWS データセットで Open Data を開始する AWS アカウント

以下のトピックでは、を使用せずに AWS データセットで Open Data を検索して使用方法について説明します AWS アカウント。このプロセスには以下のステップがあります。

ステップ

- [ステップ 1: AWS データセットでオープンデータを検索する](#)
- [ステップ 2: AWS データセットで Open Data を使用する](#)

ステップ 1: AWS データセットでオープンデータを検索する

AWS データセットでオープンデータを検索するには

1. [AWS Data Exchange](#)に進み、「3,000 以上のサードパーティのデータセットを参照」を選択します。

AWS Marketplace カタログが表示され、AWS Data Exchange 配信方法と AWS Open Data Sponsorships Program および Amazon Sustainability Data Initiative 関連プログラムが選択されています。

2. (オプション) 契約タイプ フィルタで [Open Data Licenses] を選択すると、公開されているアフィリエイトデータセットと非アフィリエイトデータセットがすべて表示されます。
3. (オプション) 検索バーに用語または語句を入力します。

検索語に一致する AWS データセットのオープンデータのリストが表示されます。

4. Open Data データセットを選択して、その詳細ページを表示します。

詳細ページの情報には、説明、 のリソース AWS、使用例、リンクが含まれています。

- a. (オプション) 「提供者情報」で、プロバイダーの情報へのリンクを選択すると、そのプロバイダーに関する詳細情報が表示されます。
- b. (オプション) ラベルでラベルを選択すると、類似商品のリストが表示されます。

ステップ 2: AWS データセットで Open Data を使用する

AWS データセットで Open Data を使用するには

1. [製品の詳細] ページで、[AWSのリソース] タブを選択します。
2. Amazon リソースネーム (ARN) の下に表示される Amazon リソースネーム (ARN) をコピーします。
3. AWS CLI Access (AWSアカウント不要) の場合は、AWS CLIリンクを選択します。

AWS Command Line Interface (AWS CLI) ドキュメントが開きます。

4. コマンドラインから AWS CLI を呼び AWS のサービス 出すために を使用する方法については、ドキュメントを参照してください。

詳細については、[AWS Command Line Interface ユーザーガイド](#)をご参照ください。

のデータ AWS Data Exchange

データは、次の 3 つの構成要素 AWS Data Exchange を使用して整理されます。

- [アセット](#) – 1 つのデータ
- [リビジョン](#) – 1 つ、または複数のアセットのコンテナ
- [データセット](#) – 1 つ、または複数のリビジョンの一連

これらの 3 つの構成要素は、AWS Data Exchange コンソールまたは を使用して管理する製品の基盤を形成します AWS Data Exchange API。

データセットを作成、表示、更新、または削除するには、AWS Data Exchange コンソール、(AWS CLI)、AWS Command Line Interface 独自のRESTクライアント、または のいずれかを使用できます AWS SDKs。プログラムによる AWS Data Exchange データセットの管理の詳細については、[AWS Data Exchange APIリファレンス](#) を参照してください。

アセット

アセットは のデータです AWS Data Exchange。

アセットのタイプは、データセット、データ許可、およびデータ格納元の製品を通じてレシーバーやサブスクライバーにどのようにデータを配信するかを定義します。

アセットは、以下のいずれかになり得ます。

- ローカルコンピュータに保存されたファイル
- (Amazon Simple Storage Service Amazon S3) にオブジェクトとして保存されているファイル
- Amazon API Gateway でRESTAPI作成された
- Amazon Redshift のデータセット
- AWS Lake Formation データアクセス許可 (プレビュー)
- Amazon S3 データアクセスデータセット

アセットの構造

アセットには、以下のパラメータがあります。

- DataSetId – このアセットが含まれるデータセットの ID。
- RevisionId – このアセットが含まれるリビジョンの ID。
- Id – アセットの作成時に生成された一意の ID。
- Arn – AWS リソース名の一意の識別子。
- CreatedAt および UpdatedAt – アセットの作成と最終更新の日付とタイムスタンプ。
- AssetDetails – アセットに関する情報。
- AssetType – Amazon S3 オブジェクト、Amazon API Gateway API、Amazon Redshift データセット、または Amazon S3 データセットのスナップショット。

Example アセットリソース

```
{
  "Name": "automation/cloudformation.yaml",
  "Arn": "arn:aws:dataexchange:us-east-1::data-sets/29EXAMPLE24b82c6858af3cEXAMPLEcf/
revisions/bbEXAMPLE74c02f4745c660EXAMPLE20/assets/baEXAMPLE660c9fe7267966EXAMPLEf5",
  "Id": "baEXAMPLE660c9fe7267966EXAMPLEf5",
  "CreatedAt": "2019-10-17T21:31:29.833Z",
  "UpdatedAt": "2019-10-17T21:31:29.833Z",
  "AssetType": "S3_SNAPSHOT",
  "RevisionId": "bbEXAMPLE74c02f4745c660EXAMPLE20",
  "DataSetId": "29EXAMPLE24b82c6858af3cEXAMPLEcf",
  "AssetDetails": {
    "S3SnapshotAsset": {
      "Size": 9423
    }
  }
}
```

アセットタイプ

型

- [ファイルデータセット](#)
- [API アセット](#)
- [Amazon Redshift データ共有アセット](#)
- [AWS Lake Formation データアクセス許可 \(プレビュー\)](#)
- [Amazon S3 データアクセス](#)

ファイルデータセット

ファイルを使用すると、加入者は資格のあるデータセットとしてデータセットのコピーにアクセスし、資産をエクスポートできます。

データセット所有者は、AWS Data Exchange コンソール、プログラムで、独自のRESTアプリケーション、AWS CLI、またはのいずれかを使用してファイルをインポートおよびエクスポートできます。AWS SDKs。Amazon S3 アセットのインポートに関する詳細については、「[S3 バケットからのアセットのインポート](#)」を参照してください。アセットのエクスポートに関する詳細については、「[S3 バケットへのアセットのエクスポート](#)」を参照してください。

API アセット

API アセットを使用すると、データ受信者またはサブスクライバーは、APIを表示し、権限のあるデータセットとしてAPI仕様をダウンロードできます。AWS Data Exchange マネージドエンドポイントをAPI呼び出すこともできます。このエンドポイントはAPI所有者エンドポイントにプロキシされます。

既存の Amazon API Gateway を持つデータセット所有者APIは、AWS Data Exchange コンソール、プログラムでAWS CLI、またはのいずれかを使用してAPIアセットを追加できます。AWS SDKs。API アセットのインポートの詳細については、「[Amazon API Gateway からのアセットのインポート API](#)」を参照してください。

Note

現在、SendApiAsset操作は、次の SDKs ではサポートされていません。

- AWS SDK for .NET
- AWS SDK for C++
- SDK for Java 2.x

既存の Amazon API Gateway を持たないデータセット所有者は、製品にAPIアセットを追加する前に作成APIする必要があります。詳細については、「[Amazon API Gateway デベロッパーガイド](#)」の「[API Gateway REST APIでの開発](#)」を参照してください。

Amazon Redshift データ共有アセット

Amazon Redshift データ共有アセットの場合、受取人はデータを抽出、変換、ロードすることなくAmazon Redshift 内のデータをクエリするための読み取り専用アクセス権を取得できます。

Amazon Redshift データ共有アセットのインポートに関する詳細については、「[Amazon Redshift AWS Data Exchange のデータ共有からのアセットのインポート](#)」を参照してください。

AWS Lake Formation データアクセス許可 (プレビュー)

AWS Lake Formation データアクセス許可アセットを使用すると、受信者またはサブスクライバーは、指定されたタグに関連付けられたすべてのデータベース、テーブル、または列にアクセスしてクエリを実行できます。

データセット所有者は、AWS Data Exchange アセットの一部としてタグインポートする前に、データを作成してタグ付けする必要があります。Lake Formation データ権限アセットのインポートの詳細については、「[からのアセットのインポート AWS Lake Formation \(プレビュー\)](#)」を参照してください。

Amazon S3 データアクセス

Amazon S3 データアクセスアセットを使用すると、受取人またはサブスクライバーは、データのコピーを作成または管理しなくても、プロバイダーのデータに直接アクセスして使用できます。データセット所有者は、既存の Amazon S3 バケットの上に AWS Data Exchange for Amazon S3 をセットアップして、S3 バケット全体または特定のプレフィックスと Amazon S3 オブジェクトへの直接アクセスを共有できます。

リビジョン

リビジョンは、1 つ、または複数のアセットのコンテナです。

リビジョンは、Amazon S3 内のデータを更新するために使用します。例えば、.csv ファイルの一連、または単一の.csv ファイルとディクショナリをグループ化して、リビジョンを作成できます。新しいデータが利用可能になるとともに、リビジョンを作成して、アセットを追加します。AWS Data Exchange コンソールを使用してリビジョンを作成し、確定したら、そのリビジョンはサブスクライバーに対して直ちに利用可能になります。詳細については、「[で新製品を公開する AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

以下に留意してください。

- リビジョンを確定するには、リビジョンに少なくとも 1 つのアセットが含まれている必要があります。
- リビジョンを確定する前にアセットが正しいことを確認するのは、ユーザーの責任になります。

- 少なくとも 1 つのデータ許可または製品に発行された確定済みリビジョンは、その方法を問わず、未確定状態にしたり、変更したりすることはできません (リビジョンの取り消しプロセスを除く)。
- リビジョンが確定されると、自動的にデータ許可または製品に発行されます。

リビジョンの構造

リビジョンには、以下のパラメータがあります。

- `DataSetId` – このリビジョンが含まれるデータセットの ID。
- `Comment` – リビジョンに関するコメント。このフィールドは 128 文字にすることができます。
- `Finalized` – `true` または `false` です。リビジョンが確定されているかどうかを示すために使用されます。
- `Id` – リビジョンの作成時に生成されたリビジョン用の一意の識別子。
- `Arn` – AWS リソース名の一意の識別子。
- `CreatedAt` – リビジョンの作成の日付とタイムスタンプ。権限のあるリビジョンは、リビジョンの発行時に作成されます。
- `UpdatedAt` – リビジョンの最終更新の日付とタイムスタンプ。
- `Revoked` – リビジョンへのサブスクライバーのアクセスが取り消されたことを示すステータス。
- `RevokedAt` – リビジョンへのサブスクライバーのアクセスが取り消された日時を示す日付とタイムスタンプ。
- `RevocationComment` – リビジョンへのアクセスが取り消された理由を購読者に知らせるための必須コメント。必要最小長は 1 文字です。このフィールドは 10 ~ 512 文字にすることができます。
- `SourceID` – 表示中のタイトル付きリビジョンに対応する所有リビジョンのリビジョン ID。このパラメータは、リビジョン所有者が所有リビジョンのエンタイトルドコピーを閲覧しているときに返されます。

Example リビジョンリソース

```
{
  "UpdatedAt": "2019-10-11T14:13:31.749Z",
  "DataSetId": "1EXAMPLE404460dc9b005a0d9EXAMPLE2f",
  "Comment": "initial data revision",
```

```
"Finalized": true,  
"Id": "e5EXAMPLE224f879066f9999EXAMPLE42",  
"Arn": "arn:aws:dataexchange:us-east-1:123456789012:data-  
sets/1EXAMPLE404460dc9b005a0d9EXAMPLE2f/revisions/e5EXAMPLE224f879066f9999EXAMPLE42",  
"CreatedAt": "2019-10-11T14:11:58.064Z"  
}
```

データセット

のデータセット AWS Data Exchange は、時間の経過とともに変化する可能性のあるデータのコレクションです。

受取人またはサブスクライバーがファイルデータセットにアクセスする場合は、データセット内の特定のリビジョンにアクセスすることになります。この構造は、プロバイダーが、履歴データに対する変更について心配することなく、データセットで利用可能なデータを徐々に変更していくことを可能にします。

受信者またはサブスクライバーがAPIデータセットにアクセスすると、APIアセットを含むデータセットにアクセスしています。これにより、サブスクライバーは AWS Data Exchange マネージドエンドポイントをAPI呼び出し、プロバイダーエンドポイントにプロキシされます。

受取人またはサブスクライバーが Amazon Redshift データセットにアクセスする場合は、Amazon Redshift の AWS Data Exchange データ共有にアクセスすることになります。このデータ共有は、データ所有者がデータ共有に追加したスキーマ、テーブル、ビュー、およびユーザー定義の関数に対する読み取り専用アクセス権をサブスクライバーに付与します。

受信者またはサブスクライバーが AWS Lake Formation データアクセス許可データセットにアクセスすると、データセットの所有者によって指定された LF タグでタグ付けされたデータベース、テーブル、および/または列にアクセスします。

受取人またはサブスクライバーが Amazon S3 データアクセスデータセットにアクセスする場合は、プロバイダーの Amazon S3 バケットでホストされている Amazon S3 共有オブジェクトへの読み取り専用アクセスが許可されます。受取人またはサブスクライバーは、このデータを他の AWS のサービスで直接使用できます。

データセットを作成、表示、更新、または削除するには、プロバイダーは AWS Data Exchange コンソール、AWS CLI 独自の REST クライアント、またはのいずれかを使用できます AWS SDKs。プログラムによる AWS Data Exchange データセットの管理の詳細については、[AWS Data Exchange API リファレンス](#) を参照してください。

トピック

- [所有データセット](#)
- [権限を持つデータセット](#)
- [データセットタイプ](#)
- [Amazon S3 データアクセスデータセット](#)
- [AWS Lake Formation データセット \(プレビュー\)](#)
- [AWS リージョン および データセット](#)
- [データセットの構造](#)
- [データセットのベストプラクティス](#)

所有データセット

データセットは、それを作成したアカウントが所有します。所有データセットは、OWNED に設定されている origin パラメータを使用して識別できます。

権限を持つデータセット

権限を持つデータセットは、送信者が所有するデータセットの読み取り専用ビューです。権限を持つデータセットは、データ許可の作成時または製品の発行時に作成され、製品に対するアクティブなデータ許可またはサブスクリプションを持つ受取人またはサブスクライバーが利用できます。権限を持つデータセットは、ENTITLED に設定されている origin パラメータで識別できます。

受信者は、AWS Data Exchange コンソールで API または AWS Data Exchange を使用して、権限のあるデータセットを表示および操作できます。

データセット所有者も、受取人またはサブスクライバーに表示される権限を持つデータセットビューにアクセスできます。これを行うには、を使用するか AWS Data Exchange API、AWS Data Exchange コンソールのデータグラントまたは製品ページでデータセット名を選択します。

データセットタイプ

では、次のデータセットタイプがサポートされています AWS Data Exchange。

- [the section called “ファイルデータセット”](#)
- [API データセット](#)

- [Amazon Redshift のデータセット](#)
- [the section called “Amazon S3 データアクセスデータセット”](#)
- [AWS Lake Formation データセット \(プレビュー\)](#)

ファイルデータセット

ファイルデータセットは、Amazon S3 によって許可されたフラットファイルが含まれるデータセットです。

受取人またはサブスクライバーは、データをローカルにエクスポート (コンピュータにダウンロード) するか、Amazon S3 バケットにエクスポートできます。

データセット所有者は、Amazon S3 バケットから任意のタイプのフラットファイルをインポートして、データセットに追加できます。

API データセット

API データセットは、APIアセットを含むデータセットです。API アセットを使用すると、受信者またはサブスクライバーは AWS Data Exchange マネージドエンドポイントをAPI呼び出し、データセット所有者エンドポイントにプロキシされます。

データセット所有者は、Amazon API Gateway API を作成し、データセットに追加して、データ許可の作成またはサブスクリプションAPI時に へのアクセスをライセンスします。

Amazon Redshift のデータセット

Amazon Redshift データセットには、Amazon Redshift AWS Data Exchange のデータ共有が含まれます。データ共有が含まれたデータセットをサブスクライブすると、データ共有のコンシューマーとして追加されます。これにより、データセット所有者がデータ共有に追加したスキーマ、テーブル、ビュー、およびユーザー定義の関数に対する読み取り専用アクセス権が付与されます。

データセット所有者は、Amazon Redshift でデータ共有からデータベースを作成し、ファイルを抽出、変換、ロードすることなく、ライブデータにクエリを実行できます。データ許可またはサブスクリプションがアクティブ化されると、データ共有へのアクセス権が自動的に付与され、いずれかの有効期限が切れると、アクセス権が失われます。

データセット所有者は、Amazon Redshift でデータ共有を作成してデータセットに追加し、データ許可の作成時やサブスクリプション時にデータ共有にアクセスするライセンスを付与します。

Amazon S3 データアクセスデータセット

AWS Data Exchange for Amazon S3 データアクセスでは、データ受信者またはサブスクライバーは、データセット所有者の Amazon S3 バケットから直接サードパーティーのデータファイルにアクセスできます。

AWS Data Exchange for Amazon S3 データアクセス製品をサブスクライブすると、は以下 AWS Data Exchange を自動的に実行します。

- Amazon S3 アクセスポイントをプロビジョニングします。Amazon S3 アクセスポイントは Amazon S3 バケットへのデータ共有を簡素化する Amazon S3 の機能です。
- S3 アクセスポイントのリソースポリシーを更新して、読み取り専用アクセスを許可します。

AWS Data Exchange for Amazon S3 を使用すると、データセット所有者は Amazon S3 バケット全体、または特定のプレフィックスと Amazon S3 オブジェクトへの直接アクセスを共有できます。さらに、を使用して、データ許可、サブスクリプション、エンタイトルメント、請求、支払いを自動的に管理 AWS Data Exchange できます。

AWS Lake Formation データセット (プレビュー)

AWS Lake Formation データセットは、AWS Lake Formation データアクセス許可アセットを含むデータセットです。

データ受取人またはサブスクライバーは、AWS Lake Formationで利用できるデータを管理できます。でリソースリンクを作成したら AWS Lake Formation、Amazon Athena などの分析サービスを使用してデータをクエリできます。

データセット所有者は、で LF タグを使用してデータをタグ付け AWS Lake Formation し、データセットを作成するときにそれらのタグをアセットとしてインポートします。

AWS リージョン および データセット

データセットは、サポートされている任意のに配置できますが AWS リージョン、単一のデータ許可または製品内のすべてのデータセットは、同じにある必要があります AWS リージョン。

データセットの構造

データセットには、以下のパラメータがあります。

- Name – データセットの名前。この値は最大 256 文字にすることができます。
- Description – データセットの説明。この値は最大 16,348 文字にすることができます。
- AssetType – データセットに含まれるアセットのタイプを定義します。
- Origin – データセットを、プロバイダーのアカウントによって Owned (所有) されている、またはサブスクライバーのアカウントに Entitled (権利が付与) されているとして定義するプロパティ。
- Id – データセットを一意に識別する ID。データセットIDsは、データセットの作成時に生成されます。権限を持つデータセットには、元の所有データセットとは異なる ID があります。
- Arn – AWS リソース名の一意の識別子。
- CreatedAt および UpdatedAt – データセットの作成と最終更新の日付とタイムスタンプ。

Note

データセット所有者は、名前や説明など、所有データセットの一部のプロパティを変更できません。所有データセットのプロパティを更新しても、対応する権限を持つデータセットのプロパティは更新されません。

Example データセットリソース

```
{
  "Origin": "OWNED",
  "AssetType": "S3_SNAPSHOT",
  "Name": "MyDataSetName",
  "CreatedAt": "2019-09-09T19:31:49.704Z",
  "UpdatedAt": "2019-09-09T19:31:49.704Z",
  "Id": "fEXAMPLE1fd9a5c8b0d2e6fEXAMPLEe1",
  "Arn": "arn:aws:dataexchange:us-east-2:123456789109:data-sets/fEXAMPLE1fd9a5c8b0d2e6fEXAMPLEe1",
  "Description": "This is my data set's description that describes the contents of the data set."
}
```

データセットのベストプラクティス

データセット所有者は、データセットを作成および更新するときに、以下のベストプラクティスに留意してください。

- データセットの名前は、カタログのデータ許可または製品の詳細に表示されます。顧客がデータセットの内容を簡単に理解できるように、内容を説明する簡潔な名前を選択することをお勧めします。
- 説明は、製品に対するアクティブなデータ許可またはサブスクリプションを持つ受取人またはサブスクライバーに表示されます。これには、データセットのカバレッジ情報、機能、および利点を含めることをお勧めします。

タグ

所有データセットとそのリビジョンにはタグを追加できます。タグ付けを使用する場合、AWS Identity and Access Management (IAM) ポリシーでタグベースのアクセスコントロールを使用して、これらのデータセットとリビジョンへのアクセスを制御することもできます。

権限を持つデータセットにタグを付けることはできません。所有データセットとそのリビジョンのタグは、対応する権限のあるバージョンには反映されません。つまり、権限を持つデータセットやリビジョンに対する読み取り専用アクセス権を持つ受取人やサブスクライバーには、元の所有データセットのタグは表示されません。

Note

現在、アセットとジョブはタグ付けをサポートしていません。

でのデータ許可の作成 AWS Data Exchange

大まかに説明すると、でデータ許可を作成する方法は次のとおりです AWS Data Exchange。

1. の作成 AWS アカウント – データ許可を作成する前に、に AWS サインアップしてユーザーを作成する必要があります。詳細については、「[設定](#)」を参照してください。
2. データセット、リビジョン、およびインポートアセットの作成 – AWS Data Exchange コンソールまたはを使用してデータセットを作成できますAPI。データセットの作成後、データセットでリビジョンを作成し、そのリビジョンにアセットを追加できます。
3. データグラントの作成 – データグラントを作成するには、データグラントの名前と説明を指定し、データグラントに含めるデータセットを選択し、データグラントを共有する受信者の AWS アカウント ID を指定し、オプションでデータグラントの有効期限が切れる終了日を設定する必要があります。詳細については、以下のトピックを参照してください。
4. 新しいリビジョンを公開する – または コンソールを使用して新しいリビジョンを作成することで、動的データセットを AWS Data Exchange API 経時的に更新できます。次に、これらのリビジョンをアクティブなデータ許可に発行できます。

Note

でデータ許可を作成する前に AWS Data Exchange、の情報を確認してください[設定](#)。

次のトピックでは、で新しいデータ製品を公開する方法について詳しく説明します AWS Data Exchange。

トピック

- [プログラマ的なアクセス](#)
- [ファイルベースのデータ AWS Data Exchange を含む でのデータ許可の作成](#)
- [AWS Data Exchange を含む でのデータ許可の作成 APIs](#)
- [Amazon Redshift データセット AWS Data Exchange を含む でデータ許可を作成する](#)
- [Amazon S3 データアクセス AWS Data Exchange を含む でのデータ許可の作成](#)
- [データ許可データセット AWS Data Exchange を含む AWS Lake Formation のデータ許可の作成 \(プレビュー\)](#)

プログラムのなアクセス

AWS Data Exchange は、次の を使用して、リソースへのプログラムによるアクセスも提供します API。

- AWS Data Exchange API – これらのAPIオペレーションを使用して、データセットとリビジョンを作成、表示、更新、削除します。これらのAPIオペレーションを使用して、これらのリビジョンとの間でアセットをインポートおよびエクスポートすることもできます。詳細については、[AWS「Data Exchange APIリファレンス」](#)を参照してください。

ファイルベースのデータ AWS Data Exchange を含む でのデータ許可の作成

以下のトピックでは、AWS Data Exchange コンソール AWS Data Exchange を使用して、でデータセットとファイルベースのデータを含む新しいデータ許可を作成するプロセスについて説明します。このプロセスには以下のステップがあります。

ステップ

- [ステップ 1: アセットを作成する](#)
- [ステップ 2: データセットを作成する](#)
- [ステップ 3: リビジョンを作成する](#)
- [ステップ 4: リビジョンにアセットをインポートする](#)
- [ステップ 5: 新しいデータ許可を作成する](#)

ステップ 1: アセットを作成する

アセットは のデータです AWS Data Exchange。詳細については、「[アセット](#)」を参照してください。

新しいファイルベースのデータ許可を作成する前に、以下を実行する必要があります。

1. ファイルを作成します。

AWS Data Exchange はすべてのファイルタイプをサポートします。

2. ファイルをオブジェクトとして Amazon Simple Storage Service (Amazon S3) またはローカルコンピュータに保存します。

Amazon S3 でのファイルの保存に関する詳細については、「[Amazon S3 ユーザーガイド](#)」を参照してください。

ステップ 2: データセットを作成する

のデータセット AWS Data Exchange は動的で、リビジョンを使用してバージョン管理され、リビジョンごとに少なくとも 1 つのアセットが含まれます。詳細については、「[のデータ AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

データセットを作成する

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインで、[マイデータ] の [所有データセット] を選択します。
3. [所有データセット] で [データセットを作成] を選択し、[データセット作成のステップ] ウィザードを開きます。
4. [データセットタイプを選択] で [ファイル] を選択します。
5. [データセットを定義] で、データセットの [名前] と [説明] を入力します。詳細については、「[データセットのベストプラクティス](#)」を参照してください。
6. (オプション) [タグを追加 – オプション] でタグを追加します。
7. [データセットを作成] を選択します。

ステップ 3: リビジョンを作成する

以下の手順では、AWS Data Exchange コンソールでデータセットを作成した後でリビジョンを作成します。詳細については、「[リビジョン](#)」を参照してください。

リビジョンを作成する

1. データセットの詳細ページの [データセットの概要] セクションで以下を実行します。
 - a. (オプション) [名前を編集] を選択してデータセットに関する情報を編集します。
 - b. (オプション) [削除] を選択してデータセットを削除します。
2. [リビジョン] セクションで [リビジョンを作成] を選択します。
3. [リビジョンを定義] で、リビジョンの目的を説明するリビジョンのオプションのコメントを入力します。

4. (オプション) [タグを追加 – オプション] で、リソースに関連付けられているタグを追加します。
5. [リビジョンを作成] を選択します。
6. 前のステップからの変更を確認、編集、または削除します。

ステップ 4: リビジョンにアセットをインポートする

次の手順では、データアセットをインポートし、AWS Data Exchange コンソールでリビジョンを確定します。詳細については、「[アセット](#)」を参照してください。

リビジョンにアセットをインポートする

1. データセットの詳細ページの [インポートされたアセット] で、データセットのデータアセットが現在保存されている場所に基づいて [Amazon S3 からインポート] または [アップロード] (コンピュータからアップロードするため) を選択します。
2. 選択内容に応じて、プロンプトに従います。アセットをデータセットにインポートするジョブが開始されます。
3. ジョブが終了したら、[ジョブ] セクションの [状態] フィールドが [完了] に更新されます。
4. 追加するデータがある場合は、ステップ 1 を繰り返します。
5. [リビジョンの概要] で、リビジョンとそのアセットを確認します。
6. [リビジョンの最終処理] を選択します。

データセットのリビジョンが正常に確定されました。

リビジョンは、製品に追加する前に編集または削除できます。

トピック

- [リビジョンを編集する](#)
- [リビジョンを削除する](#)

リビジョンを編集する

確定後にリビジョンを編集する

1. [リビジョンの概要] で [確定解除] を選択します。

このリビジョンは確定済み状態ではなくなりましたというメッセージが表示されます。

2. リビジョンを編集するには、[リビジョンの概要] で、[アクション]、[編集] の順に選択します。
3. 変更を行ってから、[更新] を選択します。
4. 変更内容を確認してから、[確定] を選択します。

リビジョンを削除する

確定後にリビジョンを削除する

1. [リビジョンの概要] で [削除] を選択します。
2. [リビジョンを削除しますか?] ダイアログボックスに **Delete** を入力してから、[削除] を選択します。

Warning

これで、リビジョンとそのアセットのすべてが削除されます。このアクションを元に戻すことはできません。

ステップ 5: 新しいデータ許可を作成する

少なくとも 1 つのデータセットを作成し、アセットを含むリビジョンを確定すると、そのデータセットをデータ許可の一部として使用する準備が整います。

新しいデータ許可を作成するには

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) の左側のナビゲーションペインで、[交換されたデータ許可] の [送信されたデータ許可] を選択します。
2. [送信されたデータ許可] から [データ許可を作成] を選択し、[データ許可を定義] ウィザードを開きます。
3. [所有しているデータセットを選択] セクションで、追加するデータセットの横にあるチェックボックスをオンにします。

Note

選択するデータセットには、確定済みのリビジョンが必要です。確定済みのリビジョンがないデータセットは、データ許可に追加できません。

で共有されるデータ製品に含まれるデータセットとは異なり AWS Marketplace、データ権限に追加されたデータセットにはリビジョンアクセスルールはありません。つまり、データ権限が承認されると、データ権限の受信者は、特定のデータセットの最終リビジョン (データ権限の作成前に確定された過去のリビジョンを含む) にアクセスできません。

4. [許可の概要] セクションに、データ許可名やデータ許可の説明など、データ許可に関して受取人に表示する情報を入力します。
5. [Next (次へ)] を選択します。

詳細については、「[の製品詳細のベストプラクティス AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

6. 受信者アクセス情報セクションの AWS アカウント ID の下に、データ許可を受け取る受信者アカウントの AWS アカウント ID を入力します。
7. [アクセスの終了日] で、データ許可の有効期限が切れる特定の終了日を選択するか、許可を永続的にする場合は [終了日なし] を選択します。
8. [Next (次へ)] を選択します。
9. [確認して送信] セクションで、データ許可情報を確認します。
10. データ許可を作成して、選択した受取人に送信することを確定する場合は、[データ許可を作成して送信] を選択します。

これで、データ許可を手動で作成する部分が完了しました。これで、データ許可の作成ジョブで、[送信されたデータ許可] ページの [アクティビティ履歴] タブに「処理中」状態が表示されます。ジョブの状態が [成功] になると、データ許可は [送信されたデータ許可] ページの [送信されたデータ許可] タブに表示され、受取人アカウントが承諾するまで [承諾を保留中] 状態になります。

AWS Data Exchange を含む でのデータ許可の作成 APIs

以下のトピックでは、REST API データセットを作成し、APIs 上の を含むデータグラントに追加するプロセスについて説明します AWS Data Exchange。このプロセスは、AWS Data Exchange コンソール、または AWS Command Line Interface を使用して完了することができます。

Amazon API Gateway REST をセットアップしたら API、 で新しい API データセットを作成できます AWS Data Exchange。その後、リビジョンを作成し、API アセットを追加できます。

API アセットを使用してデータグラントを作成すると、AWS Data Exchange エンドポイントへの受信者リクエストがAPIゲートウェイにプロキシスルーされますAPI。

このプロセスには以下のステップがあります。

ステップ

- [前提条件](#)
- [ステップ 1: APIリソースポリシーを更新する](#)
- [ステップ 2: APIデータセットを作成する](#)
- [ステップ 3: リビジョンを作成する](#)
- [ステップ 4: リビジョンにAPIアセットを追加する](#)
- [ステップ 5: を含む新しいデータ許可を作成する APIs](#)

前提条件

を含む製品を公開する前にAPIs、以下の前提条件を満たす必要があります。

- AWS のサービスを含む を使用する前に AWS Data Exchange、 にサインアップ AWS して管理ユーザーを作成する必要があります。詳細については、AWS IAM Identity Center ユーザーガイドの「[使用開始](#)」を参照してください。
- は、Amazon DynamoDB や などのデータにアクセスするための適切なリクエストとレスポンスモデルを使用する統合で Amazon API Gateway 上にあるRESTAPI必要があります AWS Lambda。詳細については、「[Amazon Gateway デベロッパーガイド](#)」の「[APIGateway RESTAPIでの の開発](#)」と「[の使用RESTAPIs](#)」を参照してください。 API

Note

パブリックAPIゲートウェイのみがサポートAPIsされています。

- API Gateway は、サービスプリンシパルからの呼び出しを AWS Data Exchange 認証および承認できるRESTAPI必要があります。から AWS Data Exchange へのすべてのリクエストAPIは、AWS Data Exchange Credentials. AWS Data Exchange works で署名された Signature Version 4 (SigV4) プロトコルを使用し、カスタムドメインとドメインキーマッピングを使用します。

Note

AWS Data Exchange は、Amazon Cognito、No-Auth、および AWS Lambda オーソライザーをサポートしていません。

- API Gateway が認証と認可にカスタム ID システム REST API を使用している場合は、IAM 認証を使用するように設定し、を記述する OpenAPI スキーマをインポートします API。AWS Data Exchange は、独自のサービス認証情報 REST API を使用して API Gateway を呼び出し、アカウント ID などのサブスクライバー情報を含めます。
- API Gateway REST API は、バックエンドとの統合を担当します。これを行うには、次のいずれかを実行します。
 - バックエンドが検証できる API Gateway 経由のすべてのリクエストに、長寿命認証トークン REST API をアタッチします。
 - API Gateway を使用して、認証情報を生成して を呼び出すことができる Lambda 関数を呼び出します API。

API は、[API 統合リクエスト仕様](#) に従って呼び出されます。

詳細については、以下の各トピックを参照してください。

トピック

- [API データセットのセキュリティ](#)
- [API 統合リクエストの仕様](#)
- [ヘッダー転送](#)

API データセットのセキュリティ

AWS Data Exchange Transport Layer Security (TLS) 1.2 を使用してトラフィックをエンドツーエンドで暗号化します。すべてのメタデータは保管時に暗号化されます。AWS Data Exchange は、サブスクライバーリクエストやバックエンドからのレスポンスを保存しません。

API 統合リクエストの仕様

on は、カスタマーリクエストからすべてのヘッダー (にリストされているヘッダーを除く [ヘッダー転送](#))、本文、http メソッド、パス、クエリ文字列をそのまま API AWS Data Exchange 通過し、次のヘッダーを追加します。

```
// These headers help prevent Confused Deputy attacks. They enable the SourceAccount
// and SourceArn variables in IAM policies.
'x-amz-source-account': ACCOUNT_ID,
'x-amz-source-arn': `arn:aws:dataexchange:${REGION}:${OWNER_ACCOUNT_ID}:data-sets/
${DATA_SET_ID}/revisions/${REVISION_ID}/assets/${ASSET_ID}`,

// These headers identify the API Asset in Data Exchange.
'x-amzn-dataexchange-asset-id': ASSET_ID,
'x-amzn-dataexchange-data-set-id': DATA_SET_ID,
'x-amzn-dataexchange-revision-id': REVISION_ID,

// This header identifies the Data Exchange Product.
'x-amzn-dataexchange-product-id': PRODUCT_ID,

// This header identifies the caller of Data Exchange. It will contain subscriber
// information.
'x-amzn-dataexchange-requester-account-id': REQUESTER_ACCOUNT_ID,

// Providers can attach custom metadata in the form of key/value pairs
// to a particular subscription. We will send these key/value pairs as stringified
// JSON.
'x-amz-dataexchange-subscription-metadata': STRINGIFIED_METADATA,
```

ヘッダー転送

AWS Data Exchange は、データ所有者のバックエンドに転送する前に、Amazon に認証または名前空間化されたヘッダーを削除します。具体的には、以下 AWS Data Exchange を削除します。

- Authentication ヘッダー
- x-amz で始まるヘッダー

host ヘッダーは、プロキシの結果として上書きされます。

ステップ 1: APIリソースポリシーを更新する

[前提条件](#) RESTAPIを満たす Amazon API Gateway がある場合は、APIリソースポリシーを更新して、サブスクライバーが APIのスキーマを取得するリクエストを行ったAPIときに を呼び出す AWS Data Exchange 機能を付与する必要があります。

API リソースポリシーを更新するには

1. APIのリソースポリシーに次のポリシーを追加します。

```
{
  "Effect": "Allow",
  "Principal": {"Service": "dataexchange.amazonaws.com"},
  "Action": "execute-api:Invoke",
  "Resource": "*",
  "Condition": {"StringEquals": {"aws:SourceAccount": "<account-id>"}}
}
```

2. を、APIデータセットを作成するアカウントaccount-idに置き換えます。

API Gateway リソースを持つアカウントは、データセットを作成するのと同じアカウントに存在する必要はありません。

このポリシーは、これらのアクセス許可を AWS Data Exchange サービスプリンシパルによって行われた呼び出しに制限し、アカウントのみがとの統合 AWS Data Exchange を許可できることを要求しますAPI。

Note

この呼び出しの実行 AWS Data Exchange を明示的に拒否するリソースポリシーがある場合は、この拒否を削除または制限する必要があります。

これで、[APIデータセットを作成する](#)準備が整いました。

ステップ 2: APIデータセットを作成する

のデータセット AWS Data Exchange は動的で、リビジョンを使用してバージョン管理され、リビジョンごとに少なくとも1つのアセットが含まれています。詳細については、「[のデータ AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

AWS Data Exchange コンソールまたは AWS Command Line Interface を使用してAPIデータセットを作成します。

- [API データセットの作成 \(コンソール\)](#)
- [API データセットの作成 \(AWS CLI\)](#)

API データセットの作成 (コンソール)

API データセットを作成するには (コンソール)

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインで、[マイデータ] の [所有データセット] を選択します。
3. [所有データセット] で [データセットを作成] を選択し、[データセット作成のステップ] ウィザードを開きます。
4. データセットタイプを選択で、Amazon API Gateway APIを選択します。
5. [データセットを定義] で、データセットの [名前] と [説明] を入力します。詳細については、「[データセットのベストプラクティス](#)」を参照してください。
6. (オプション) [タグを追加 – オプション] でタグを追加します。
7. [作成] を選択します。

これで、リビジョンを作成する準備が整いました。

API データセットの作成 (AWS CLI)

API データセットを作成するには (CLI)

1. create-data-set コマンドを使用してAPIデータセットを作成します。

```
$ aws dataexchange create-data-set \  
-\\-asset-type API_GATEWAY_API \  
-\\-description 'Data Set Description' \  
-\\-name 'Data Set Name' \  
  
{  
  "Arn": "arn:aws:dataexchange:us-east-1:123456789012:data-sets/$DATA_SET_ID",  
  "AssetType": "API_GATEWAY_API",  
  "CreatedAt": "2021-09-11T00:16:46.349000+00:00",  
  "Description": "Data Set Description",  
  "Id": "$DATA_SET_ID",  
  "Name": "Data Set Name",  
  "Origin": "OWNED",  
  "UpdatedAt": "2021-09-11T00:16:46.349000+00:00"  
}
```

2. 新しいアセットタイプの API_GATEWAY_API に注目してください。

これで、リビジョンを作成する準備が整いました。

ステップ 3: リビジョンを作成する

以下の手順では、データセットの作成後にリビジョンを作成します。詳細については、「[リビジョン](#)」を参照してください。

AWS Data Exchange コンソールまたは AWS Command Line Interface を使用してリビジョンを作成します。

- [リビジョンの作成 \(コンソール\)](#)
- [リビジョンの作成 \(AWS CLI\)](#)

リビジョンの作成 (コンソール)

リビジョンを作成する (コンソール)

1. データセットの詳細ページの [データセットの概要] セクションで以下を実行します。
 - a. (オプション) [名前を編集] を選択してデータセットに関する情報を編集します。
 - b. (オプション) [削除] を選択してデータセットを削除します。
2. [リビジョン] セクションで [リビジョンを作成] を選択します。
3. [リビジョンを定義] で、リビジョンの目的を説明するリビジョンのオプションのコメントを入力します。
4. (オプション) [タグを追加 – オプション] で、リソースに関連付けられているタグを追加します。
5. [リビジョンを作成] を選択します。
6. 前のステップからの変更を確認、編集、または削除します。

これで、[リビジョンにAPIアセットを追加する](#)準備が整いました。

リビジョンの作成 (AWS CLI)

リビジョンを作成する (AWS CLI)

1. create-revision コマンドを使用して、リビジョンを作成します。

```
$ aws dataexchange create-revision \
```

```
-\\-data-set-id $DATA_SET_ID \  
-\\-comment 'First Atlas Revision'  
{  
  "Arn": "arn:aws:dataexchange:us-east-1:123456789012:data-sets/$DATA_SET_ID/  
revisions/$REVISION_ID",  
  "Comment": "First Atlas Revision",  
  "CreatedAt": "2021-09-11T00:18:49.160000+00:00",  
  "DataSetId": "$DATA_SET_ID",  
  "Finalized": false,  
  "Id": "$REVISION_ID",  
  "UpdatedAt": "2021-09-11T00:18:49.160000+00:00"  
}
```

2. [リビジョンにAPIアセットを追加します。](#)

Note

インポートRESTAPIするAPIゲートウェイの ID とステージを知る必要があります。

ステップ 4: リビジョンにAPIアセットを追加する

API アセットには、サブスクライバーが を呼び出すために必要な情報が含まれていますAPI。詳細については、「[アセット](#)」を参照してください。

以下の手順では、データアセットをインポートし、その後リビジョンを確定します。

AWS Data Exchange コンソールまたは を使用して AWS CLI、リビジョンにアセットを追加します。

- [リビジョンへのAPIアセットの追加 \(コンソール\)](#)
- [リビジョンへのAPIアセットの追加 \(AWS CLI\)](#)

リビジョンへのAPIアセットの追加 (コンソール)

リビジョンにアセットを追加する (コンソール)

1. データセットの詳細ページのAPIアセットセクションで、APIステージの追加 を選択します。
2. Amazon API Gateway APIの場合は、APIステージ を選択 でAPI入力ボックスに を入力するか、ドリップダウンリストから次のいずれかを選択します。

- API 別の AWS アカウント- これは、アクセス許可APIが付与されたクロスアカウントです。
 - これ AWS アカウント- これは APIの です AWS アカウント。
- a. API 別の で AWS アカウント を選択した場合は、入力ボックスに API ID API とステージ名を入力します。
 - b. この AWS アカウントで を選択した場合は、ドロップダウンリストからAPIステージ名を選択します。

Note

新しいAPIステージを作成するには、Create new を選択し、Amazon API Gateway API モーダルで Create new のステップに従います。新しいステージが作成されたら、ステップ 2 を繰り返します。

3. 詳細設定 – オプション で、既存の Amazon API Gateway 使用プランを接続して、既存の使用プランで定義されているスロットリングとクォータの制限を使用し、APIキー を入力できます。
4. サブスクライバーAPIのドキュメント で、受信者APIがデータグラントを承諾した後に表示される の詳細を指定します。
 - a. API 名前 には、受信者がAPIアセットの識別に使用できる名前を入力します。

Note

これで AWS アカウント を選択した場合、API名前は自動的に入力され、必要に応じて変更できます。

API 別の で AWS アカウント を選択した場合、API名前にはデフォルト名が入力されます。受信者が名前を簡単に理解できるように、に変更する必要があります。

- b. OpenAPI 3.0 仕様 の場合、次のいずれかを実行します。
 - i. Open API3.0 仕様ファイルを入力またはコピーして貼り付けます。
 - ii. .JSON ファイル からインポート を選択し、ローカルコンピュータから .json ファイルを選択してインポートします。

インポートされた仕様がボックスに表示されます。
 - iii. Amazon API Gateway からインポート を選択し、インポートする仕様を選択します。

インポートされた仕様がボックスに表示されます。

- c. 追加ドキュメント - オプション については、サブスクライバーが について知るのが役立つ追加情報を入力しますAPI。Markdown がサポートされています。

Note

このアセットをリビジョンに追加した後は、OpenAPI 仕様と追加のドキュメントを編集することはできません。

リビジョンが確定されていないときにこの情報を更新する場合は、アセットを置き換えることができます。

リビジョンが確定されているときにこの情報を更新する場合は、更新されたアセットで新しいリビジョンを作成できます。

5. API ステージの追加 を選択します。

ジョブが開始され、アセット (この場合は API) がデータセットにインポートされます。

Note

Amazon API Gateway APIに がない場合は、作成するよう求められます。

6. ジョブが終了したら、[ジョブ] セクションの [状態] フィールドが [完了] に更新されます。
7. 追加APIsする項目がある場合は、ステップ 2 を繰り返します。
8. [リビジョンの概要] で、リビジョンとそのアセットを確認します。
9. [確定] を選択します。

データセットのリビジョンが正常に確定されました。

リビジョンをデータ許可に追加する前に、リビジョンを[編集](#)または[削除](#)できます。

これで、[含む新しいデータ許可を作成するAPIs](#)準備が整いました。

リビジョンへのAPIアセットの追加 (AWS CLI)

IMPORT_ASSET_FROM_API_GATEWAY_API ジョブを実行してAPIアセットを追加できます。

リビジョンにAPIアセットを追加するには (AWS CLI):

1. create-job コマンドを使用して、リビジョンにAPIアセットを追加します。

```
$ aws dataexchange create-job \  
-\\-type IMPORT_ASSET_FROM_API_GATEWAY_API \  
-\\-details '{"ImportAssetFromApiGatewayApi":  
{"DataSetId":"$DATA_SET_ID","RevisionId":"$REVISION_ID","ApiId":"$API_ID","Stage":"$API_STA  
{  
  "Arn": "arn:aws:dataexchange:us-east-1:123456789012:jobs/$JOB_ID",  
  "CreatedAt": "2021-09-11T00:38:19.875000+00:00",  
  "Details": {  
    "ImportAssetFromApiGatewayApi": {  
      "ApiId": "$API_ID",  
      "DataSetId": "$DATA_SET_ID",  
      "ProtocolType": "REST",  
      "RevisionId": "$REVISION_ID",  
      "Stage": "$API_STAGE"  
    }  
  },  
  "Id": "$JOB_ID",  
  "State": "WAITING",  
  "Type": "IMPORT_ASSET_FROM_API_GATEWAY_API",  
  "UpdatedAt": "2021-09-11T00:38:19.875000+00:00"  
}  
  
$ aws dataexchange start-job -\\-job-id $JOB_ID  
$ aws dataexchange get-job -\\-job-id $JOB_ID  
{  
  "Arn": "arn:aws:dataexchange:us-east-1:0123456789012:jobs/$JOB_ID",  
  "CreatedAt": "2021-09-11T00:38:19.875000+00:00",  
  "Details": {  
    "ImportAssetFromApiGatewayApi": {  
      "ApiId": "$API_ID",  
      "DataSetId": "$DATA_SET_ID",  
      "ProtocolType": "REST",  
      "RevisionId": "$REVISION_ID",  
      "Stage": "$API_STAGE"  
      "ApiEndpoint": "string",  
      "ApiKey": "string",  
      "ApiName": "string",  
      "ApiDescription": "string",  
      "ApiSpecificationDownloadUrl": "string",
```

```
        "ApiSpecificationDownloadUrlExpiresAt": "string"
    }
},
"Id": "$JOB_ID",
"State": "COMPLETED",
"Type": "IMPORT_ASSET_FROM_API_GATEWAY_API",
"UpdatedAt": "2021-09-11T00:38:52.538000+00:00"
}
```

2. `list-revision-assets` コマンドを使用して、新しいアセットが適切に作成されたことを確認します。

```
$ aws dataexchange list-revision-assets \
  -\\-data-set-id $DATA_SET_ID \
  -\\-revision-id $REVISION_ID
{
  "Assets": [
    {
      "Arn": "arn:aws:dataexchange:us-east-1:123456789012:data-sets/$DATA_SET_ID/
revisions/$REVISION_ID/assets/$ASSET_ID",
      "AssetDetails": {
        "ApiGatewayApiAsset": {
          "ApiEndpoint": "https://$API_ID.execute-api.us-
east-1.amazonaws.com/$API_STAGE",
          "ApiId": "$API_ID",
          "ProtocolType": "REST",
          "Stage": "$API_STAGE"
        }
      },
      "AssetType": "API_GATEWAY_API",
      "CreatedAt": "2021-09-11T00:38:52.457000+00:00",
      "DataSetId": "$DATA_SET_ID",
      "Id": "$ASSET_ID",
      "Name": "$ASSET_ID/$API_STAGE",
      "RevisionId": "$REVISION_ID",
      "UpdatedAt": "2021-09-11T00:38:52.457000+00:00"
    }
  ]
}
```

これで、を含む新しいデータ許可を作成する準備が整いましたAPIs。

リビジョンを編集する

確定後にリビジョンを編集する

1. [リビジョンの概要] で [確定解除] を選択します。

このリビジョンは確定済み状態ではなくなりましたというメッセージが表示されます。

2. リビジョンを編集するには、[リビジョンの概要] で、[アクション]、[編集] の順に選択します。
3. 変更を行ってから、[Update] (アップデート) を選択します。
4. 変更内容を確認してから、[確定] を選択します。

リビジョンを削除する

確定後にリビジョンを削除する

1. [リビジョンの概要] で [削除] を選択します。
2. [リビジョンを削除しますか?] ダイアログボックスに **Delete** を入力してから、[削除] を選択します。

Warning

これで、リビジョンとそのアセットのすべてが削除されます。この操作は元に戻すことができません。

ステップ 5: を含む新しいデータ許可を作成する APIs

少なくとも 1 つのデータセットを作成して、アセットを含むリビジョンを確定すると、そのデータセットをデータ許可の一部として発行する準備が整います。

新しいデータ許可を作成するには

1. AWS Data Exchange コンソールの左側のナビゲーションペインで、Exchanged data grants で、Sent data grants を選択します。
2. [送信されたデータ許可] から [データ許可を作成] を選択し、[データ許可を定義] ウィザードを開きます。

3. [所有しているデータセットを選択] セクションで、追加するデータセットの横にあるチェックボックスをオンにします。

Note

選択するデータセットには、確定済みのリビジョンが必要です。確定済みのリビジョンがないデータセットは、データ許可に追加できません。

で共有されるデータ製品に含まれるデータセットとは異なり AWS Marketplace、データ権限に追加されたデータセットにはリビジョンアクセスルールはありません。つまり、データ権限が承認されると、データ権限の受信者は、特定のデータセットの最終リビジョン (データ権限の作成前に確定された過去のリビジョンを含む) にアクセスできません。

4. [許可の概要] セクションに、データ許可名やデータ許可の説明など、データ許可に関して受取人に表示する情報を入力します。
5. 次へ を選択します。
6. 受信者アクセス情報セクションの AWS アカウント ID に、データ許可を受け取る受信者アカウントの AWS アカウント ID を入力します。
7. また、[受信者アクセス情報] セクションの [アクセスの終了日] で、[終了日なし] を選択してデータ許可を永続的に実行するか、[特定の終了日] を選択して希望の終了日を選択します。
8. [Next (次へ)] を選択します。
9. [確認して送信] セクションで、データ許可情報を確認します。
10. データ許可を作成して、選択した受取人に送信することを確定する場合は、[データ許可を作成して送信] を選択します。

これで、データ許可を手動で作成する部分が完了しました。これで、データ許可の作成ジョブで、[送信されたデータ許可] ページの [アクティビティ履歴] タブに [処理中] 状態が表示されます。ジョブの状態が [成功] になると、データ許可は [送信されたデータ許可] ページの [送信されたデータ許可] タブに表示され、受取人アカウントが承諾するまで [承諾を保留中] 状態になります。

Amazon Redshift データセット AWS Data Exchange を含むでデータ許可を作成する

Amazon Redshift データセットには、Amazon Redshift AWS Data Exchange のデータ共有が含まれています。データ共有を含む製品をサブスクライブすると、データ所有者がデータ共有に追加した

テーブル、ビュー、スキーマ、およびユーザー定義の関数に対する読み取り専用アクセス権が付与されます。

データ所有者として、クラスターに for Amazon Redshift データ共有 AWS Data Exchange 用の を作成します。次に、受取人にアクセスを許可するスキーマ、テーブル、ビュー、およびユーザー定義の関数をデータ共有に追加します。次に、データ共有を にインポートし AWS Data Exchange、データセットを作成し、データグラントに追加します。受取人は、データ許可リクエストを承諾すると、データ共有へのアクセス権が付与されます。

Amazon Redshift で Amazon Redshift のデータ共有を設定したら、AWS Data Exchangeで新しい Amazon Redshift データセットを作成できます。その後、リビジョンを作成し、Amazon Redshift のデータ共有アセットを追加できます。これにより、AWS Data Exchange エンドポイントへのリクエストを Amazon Redshift データ共有にプロキシできます。次に、このデータセットをデータ許可に追加できます。

以下のトピックでは、AWS Data Exchange コンソールを使用して Amazon Redshift データセットとデータグラントを作成するプロセスについて説明します。このプロセスには以下のステップがあります。

ステップ

- [ステップ 1: Amazon Redshift のデータ共有アセットを作成する](#)
- [ステップ 2: Amazon Redshift データセットを作成する](#)
- [ステップ 3: リビジョンを作成する](#)
- [ステップ 4: リビジョンに Amazon Redshift のデータ共有アセットを追加する](#)
- [ステップ 5: 新しいデータ許可を作成する](#)

ステップ 1: Amazon Redshift のデータ共有アセットを作成する

アセットは のデータです AWS Data Exchange。詳細については、「[アセット](#)」を参照してください。

Amazon Redshift のデータ共有アセットを作成する

1. Amazon Redshift クラスター内にデータ共有を作成します。

データ共有の作成方法の詳細については、「[Amazon Redshift データベースデベロッパーガイド](#)」の「プロデューサーとして AWS Data Exchange のデータ共有の操作」を参照してください。

Note

データ共有はパブリックアクセス可能に設定することをお勧めします。そうしなければ、パブリックアクセス可能なクラスターを持つ顧客がデータを消費できなくなります。

2. [ステップ 2: Amazon Redshift データセットを作成する](#)

ステップ 2: Amazon Redshift データセットを作成する

Amazon Redshift データセットには、Amazon Redshift AWS Data Exchange のデータ共有が含まれます。詳細については、「[Amazon Redshift のデータセット](#)」を参照してください。

Amazon Redshift データセットを作成する

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインで、[マイデータ] の [所有データセット] を選択します。
3. [所有データセット] で [データセットを作成] を選択し、[データセット作成のステップ] ウィザードを開きます。
4. [データセットタイプを選択] で、[Amazon Redshift のデータ共有] を選択します。
5. [データセットの定義] で、データセットの [名前] と [説明] を入力します。詳細については、「[データセットのベストプラクティス](#)」を参照してください。
6. [タグを追加 - オプション] でタグを追加します。
7. [作成] を選択します。

ステップ 3: リビジョンを作成する

次の手順では、AWS Data Exchange コンソールでデータセットを作成した後にリビジョンを作成します。詳細については、「[リビジョン](#)」を参照してください。

リビジョンを作成する

1. データセットの詳細ページの [データセットの概要] セクションで以下を実行します。
 - a. (オプション) [名前を編集] を選択してデータセットに関する情報を編集します。
 - b. (オプション) [削除] を選択してデータセットを削除します。

2. [リビジョン] セクションで [リビジョンを作成] を選択します。
3. [リビジョンを定義] で、リビジョンの目的を説明するリビジョンのオプションのコメントを入力します。
4. [タグを追加 – オプション] で、リソースに関連付けられているタグを追加します。
5. [作成] を選択します。
6. 前のステップからの変更を確認、編集、または削除します。

ステップ 4: リビジョンに Amazon Redshift のデータ共有アセットを追加する

次の手順では、Amazon Redshift データ共有アセットをリビジョンに追加し、AWS Data Exchange コンソールでリビジョンを確定します。詳細については、「[アセット](#)」を参照してください。

リビジョンにアセットを追加する

1. データセットの詳細ページの AWS Data Exchange [Amazon Redshift のデータ共有] セクションで [データ共有を追加] を選択します。
2. [AWS Data Exchange Amazon Redshift のデータ共有] でデータ共有を選択し、[データ共有を追加] を選択します。

Note

リビジョンには、最大 20 個のデータ共有を追加できます。

アセットをリビジョンにインポートするジョブが開始されます。

3. ジョブが終了したら、[ジョブ] セクションの [状態] フィールドが [完了] に更新されます。
4. 追加するデータがある場合は、ステップ 1 を繰り返します。
5. [リビジョンの概要] で、リビジョンとそのアセットを確認します。
6. [確定] を選択します。

データセットのリビジョンが正常に確定されました。

リビジョンは、データ許可に追加する前に[編集](#)または[削除](#)できます。

ステップ 5: 新しいデータ許可を作成する

少なくとも 1 つのデータセットを作成し、アセットを含むリビジョンを確定すると、そのデータセットをデータ許可の一部として使用する準備が整います。

新しいデータ許可を作成するには

1. [AWS Data Exchange コンソール](#)の左側のナビゲーションペインで、[交換されたデータ許可] の [送信されたデータ許可] を選択します。
2. [送信されたデータ許可] から [データ許可を作成] を選択し、[データ許可を定義] ウィザードを開きます。
3. [所有しているデータセットを選択] セクションで、追加するデータセットの横にあるチェックボックスをオンにします。

Note

選択するデータセットには、確定済みのリビジョンが必要です。確定済みのリビジョンがないデータセットはデータ許可に追加されません。

で共有されるデータ製品に含まれるデータセットとは異なり AWS Marketplace、データ権限に追加されたデータセットにはリビジョンアクセスルールはありません。つまり、データ権限が承認されると、データ権限の受信者は、特定のデータセットの最終リビジョン (データ権限の作成前に確定された過去のリビジョンを含む) にアクセスできません。

4. [許可の概要] セクションに、データ許可名やデータ許可の説明など、データ許可に関して受取人に表示する情報を入力します。
5. [Next (次へ)] を選択します。

詳細については、「[の製品詳細のベストプラクティス AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

6. 受信者アクセス情報セクションの AWS アカウント ID の下に、データ許可受信者アカウントの AWS アカウント ID を入力します。
7. [受取人アクセス情報] セクションの [アクセスの終了日] で、[終了日なし] を選択してデータ許可を永続的に実行するか、[特定の終了日] を選択して希望の終了日を指定するかを選択します。
8. [Next (次へ)] を選択します。
9. [確認して送信] セクションで、データ許可情報を確認します。

10. データ許可を作成して、選択した受取人に送信することを確定する場合は、[データ許可を作成して送信] を選択します。

これで、データ許可を手動で作成する部分が完了しました。これで、データ許可の作成ジョブで、[送信されたデータ許可] ページの [アクティビティ履歴] タブに [処理中] 状態が表示されます。ジョブの状態が [成功] になると、データ許可は [送信されたデータ許可] ページの [送信されたデータ許可] タブに表示され、受取人アカウントが承諾するまで [承諾を保留中] 状態になります。

Amazon S3 データアクセス AWS Data Exchange を含む でのデータ許可の作成

AWS Data Exchange for Amazon S3 を使用すると、データ所有者は Amazon S3 バケットまたは特定のプレフィックスと Amazon S3 オブジェクトへの直接アクセスを共有できます。データ所有者は、を使用して AWS Data Exchange、データ許可を通じて権限を自動的に管理します。

データ所有者は、コピーを作成または管理しなくても、Amazon S3 バケット全体、または特定のプレフィックスと Amazon S3 オブジェクトへの直接アクセスを共有できます。これらの共有 Amazon S3 オブジェクトは、(AWS KMS) または (AWS マネージドキー SSE-S3) に保存 AWS Key Management Service されているカスタマー管理キーを使用してサーバー側で暗号化できます。KMS キーのモニタリングと暗号化コンテキストの理解の詳細については、「」を参照してください [the section called “Amazon S3 データアクセスのキー管理”](#)。受信者がデータ製品へのアクセスを取得すると、は Amazon S3 アクセスポイント AWS Data Exchange を自動的にプロビジョニングし、ユーザーに代わってリソースポリシーを更新して、受信者に読み取り専用アクセスを許可します。受取人は、Amazon S3 バケット名を使用して Amazon S3 のデータにアクセスする場所で、Amazon S3 アクセスポイントのエイリアスを使用できます。

サブスクリプションが終了すると、レシーバーの許可は取り消されます。

Amazon S3 データアクセスを含むデータ許可を作成する前に、以下の前提条件を満たす必要があります。

前提条件

- データをホストする Amazon S3 バケットが、Amazon S3 バケット所有者強制設定が ACLs 無効な に有効になっていることを確認します。詳細については、「[Amazon Simple Storage Service ユーザーガイド](#)」の「[オブジェクトの所有権の制御](#)」と「[バケット ACLs の無効化](#)」を参照してください。

- 共有オブジェクトに受信者が正常にアクセスするには、共有オブジェクトが Amazon S3 Standard ストレージクラス内に存在するか、Amazon S3 Intelligent Tiering を使用して管理されている必要があります。共有オブジェクトが他のストレージクラス内に存在しているか、Intelligent Tiering を Deep Archive で有効にしている場合、レシーバーは RestoreObject への許可がないため、エラーが発生します。
- データをホストする Amazon S3 バケットで、暗号化が無効になっているか、Amazon S3 マネージドキー (SSE-S3) またはカスターマネージドキーが AWS Key Management Service (AWS) に保存されていることを確認しますKMS。
- カスタマー管理キーを使用している場合は、次のものがが必要です。
 1. IAM KMSキーkms:CreateGrantに対する のアクセス許可。これらのアクセス許可には、キーポリシー、IAM認証情報、またはKMSキーの AWS KMS 許可を使用してアクセスできます。キー管理と AWS Data Exchange がAWSKMS許可を使用する方法の詳細については、「」を参照してください[AWS KMS 許可の作成](#)。

アクセス権限を付与するには、ユーザー、グループ、またはロールにアクセス許可を追加します。

- のユーザーとグループ AWS IAM Identity Center :

アクセス許可セットを作成します。「AWS IAM Identity Center ユーザーガイド」の「[権限設定を作成する](#)」の手順に従ってください。

- ID プロバイダーIAMを介して で管理されるユーザー :

ID フェデレーションのロールを作成します。IAM ユーザーガイドの「[サードパーティー ID プロバイダーのロールの作成 \(フェデレーション\)](#)」の指示に従います。

- IAM ユーザー :

- ユーザーが担当できるロールを作成します。「[ユーザーガイド](#)」のIAM「[ユーザーのロールを作成する](#)」の手順に従います。IAM
- (お奨めできない方法) ポリシーをユーザーに直接アタッチするか、ユーザーをユーザーグループに追加する。IAM 「ユーザーガイド」の「[ユーザー \(コンソール\) へのアクセス許可を追加する](#)」の手順に従います。

ユーザーが の AWS 外部とやり取りする場合は、プログラムによるアクセスが必要です AWS Management Console。プログラムによるアクセスを許可する方法は、 にアクセスするユーザーのタイプによって異なります AWS。

ユーザーにプログラマチックアクセス権を付与するには、以下のいずれかのオプションを選択します。

プログラマチックアクセス権を必要とするユーザー	目的	方法
<p>ワークフォースアイデンティティ</p> <p>(IAMアイデンティティセンターで管理されるユーザー)</p>	<p>一時的な認証情報を使用して AWS CLI、AWS SDKs、または へのプログラムによるリクエストに署名します AWS APIs。</p>	<p>使用するインターフェイス用の手引きに従ってください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • については AWS CLI、AWS Command Line Interface 「ユーザーガイド」の「を使用する AWS CLI ようにを設定する AWS IAM Identity Center」を参照してください。 • AWS SDKs、ツール、および については AWS APIs、「およびツール リファレンスガイド」の IAM 「アイデンティティセンター認証」を参照してください。 AWS SDKs
IAM	<p>一時的な認証情報を使用して AWS CLI、AWS SDKs、または へのプログラムによるリクエストに署名します AWS APIs。</p>	<p>IAM 「ユーザーガイド」の「AWS リソースで一時的な認証情報を使用する」の手順に従います。</p>

プログラマチックアクセス権を必要とするユーザー	目的	方法
IAM	(非推奨) 長期認証情報を使用して、AWS CLI AWS SDKs、またはへのプログラムによるリクエストに署名します AWS APIs。	<p>使用するインターフェイス用の手引きに従ってください。</p> <ul style="list-style-type: none"> については AWS CLI、AWS Command Line Interface 「ユーザーガイド」のIAM「ユーザー認証情報を使用した認証」を参照してください。 および ツールについては AWS SDKs、AWS SDKs 「および ツール リファレンスガイド」の「長期認証情報を使用した認証」を参照してください。 については AWS APIs、「ユーザーガイド」のIAM「ユーザーのアクセスキーの管理」を参照してください。 IAM

KMS キーのキーJSONポリシーに を追加する方法を示すポリシーの例を次に示します。

```
{
  "Sid": "AllowCreateGrantPermission",
  "Effect": "Allow",
  "Principal": {
    "AWS": "<IAM identity who will call Dataexchange API>"
  },
  "Action": "kms:CreateGrant",
  "Resource": "*"
}
```

```
}
```

次のポリシーは、使用される IAM ID のポリシー追加の例を示しています。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Sid": "AllowCreateGrantPermission",
      "Action": [
        "kms:CreateGrant"
      ],
      "Resource": [
        <Enter KMS Key ARNs in your account>
      ]
    }
  ]
}
```

Note

クロスアカウントKMSキーは、KMSキーに対するkms:CreateGrantアクセス許可が前のステップで取得された場合にも許可されます。別のアカウントがキーを所有している場合は、上記の例で詳しく説明されているように、キーポリシーとIAM認証情報に対するアクセス許可が必要です。

2. KMS キーを使用して、Amazon S3 バケットキー機能を使用して Amazon S3 バケット内の既存および新しいオブジェクトを暗号化してください。詳細については、Amazon Simple Storage Service ユーザーガイドの「[S3 バケットキーの設定](#)」を参照してください。

- Amazon S3 バケットに追加された新しいオブジェクトについては、デフォルトで Amazon S3 バケットキー暗号化を設定できます。Amazon S3Bucket キー機能を使用せずに既存のオブジェクトを暗号化した場合、これらのオブジェクトは Amazon S3 バケットキーを使用して暗号化するように移行する必要があります。

既存のオブジェクトの Amazon S3 バケットキーを有効にするには、copy オペレーションを使用します。詳細については、「[バッチオペレーションを使用してオブジェクトレベルで Amazon S3 バケットキーを設定する](#)」を参照してください。

- AWS マネージドKMSキー または AWS 所有のキー はサポートされていません。サポートされていない暗号化スキームから現在サポートされている暗号化スキームに移行できます。詳細については、AWS ストレージブログの[Amazon S3暗号化の変更](#)を参照してください。
3. データをホストする Amazon S3 バケットを信頼 AWS Data Exchange 所有アクセスポイントに設定します。これらの Amazon S3 バケットポリシーを更新して、Amazon S3 アクセスポイントを作成し、ユーザーに代わってサブスクライバーのアクセスを許可または削除するための AWS Data Exchange アクセス許可を付与する必要があります。ポリシーステートメントがない場合は、バケットポリシーを編集して Amazon S3 ロケーションをデータセットに追加する必要があります。

次にポリシーの例を示します。<Bucket ARN> を適切な値に置き換えてください。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Principal": {
        "AWS": "*"
      },
      "Action": [
        "s3:GetObject",
        "s3:ListBucket"
      ],
      "Resource": [
        "<Bucket ARN>",
        "<Bucket ARN>/*"
      ],
      "Condition": {
        "StringEquals": {
          "s3:DataAccessPointAccount": [
            "337040091392",
            "504002150500",
            "366362662752",
            "330489627928",
            "291973504423",
            "461002523379",
            "036905324694",
            "540564263739",
            "675969394711",
            "108584782536",
```

```
        "844053218156"
      ]
    }
  }
]
}
```

を通じて Amazon S3 バケット全体にデータ共有 AWS Data Exchange を委任できます。ただし、データセット内で共有したいバケットの特定のプレフィックスとオブジェクトに委任の範囲を委任することができます。以下に、スコープ付きポリシーの例を示します。<Bucket ARN> と "mybucket/folder1/*" を自分の情報で置き換えます。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Sid": "DelegateToAdxGetObjectsInFolder1",
      "Effect": "Allow",
      "Principal": {
        "AWS": "*"
      },
      "Action": [
        "s3:GetObject"
      ],
      "Resource": [
        "arn:aws:s3:::mybucket/folder1/*"
      ],
      "Condition": {
        "StringEquals": {
          "s3:DataAccessPointAccount": [
            "337040091392",
            "504002150500",
            "366362662752",
            "330489627928",
            "291973504423",
            "461002523379",
            "036905324694",
            "540564263739",
            "675969394711",
            "108584782536",
            "844053218156"
          ]
        }
      }
    }
  ]
}
```

```
    ]
  }
}
},
{
  "Sid": "DelegateToAdxListObjectsInFolder1",
  "Effect": "Allow",
  "Principal": {
    "AWS": "*"
  },
  "Action": "s3:ListBucket",
  "Resource": "arn:aws:s3:::mybucket",
  "Condition": {
    "StringLike": {
      "s3:prefix": [
        "folder1/*"
      ]
    }
  },
  "StringEquals": {
    "s3:DataAccessPointAccount": [
      "337040091392",
      "504002150500",
      "366362662752",
      "330489627928",
      "291973504423",
      "461002523379",
      "036905324694",
      "540564263739",
      "675969394711",
      "108584782536",
      "844053218156"
    ]
  }
}
}
]
```

同様に、アクセス範囲を1つのファイルのみに限定する場合、データ所有者は次のポリシーを使用できます。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
```

```
"Statement": [
  {
    "Sid": "DelegateToAdxGetMyFile",
    "Effect": "Allow",
    "Principal": {
      "AWS": "*"
    },
    "Action": [
      "s3:GetObject"
    ],
    "Resource": [
      "arn:aws:s3:::mybucket/folder1/myfile"
    ],
    "Condition": {
      "StringEquals": {
        "s3:DataAccessPointAccount": [
          "337040091392",
          "504002150500",
          "366362662752",
          "330489627928",
          "291973504423",
          "461002523379",
          "036905324694",
          "540564263739",
          "675969394711",
          "108584782536",
          "844053218156"
        ]
      }
    }
  }
]
```

以下のトピックでは、AWS Data Exchange コンソールを使用して Amazon S3 データセットと Amazon S3 データセットでデータグラントを作成するプロセスについて説明します。このプロセスには以下のステップがあります。

ステップ

- [ステップ 1: Amazon S3 データセットを作成する](#)
- [ステップ 2: Amazon S3 データアクセスを設定する](#)
- [ステップ 3: データセットを確認して完成する](#)

• [ステップ 4: 新しいデータ許可を作成する](#)

ステップ 1: Amazon S3 データセットを作成する

Amazon S3 データセットを作成するには

1. 左側のナビゲーションペインで、[マイデータ] の [所有データセット] を選択します。
2. [所有データセット] で [データセットを作成] を選択し、[データセット作成のステップ] ウィザードを開きます。
3. [データセットタイプを選択] で [Amazon S3 オブジェクト] を選択します。
4. [データセットを定義] で、データセットの [名前] と [説明] を入力します。詳細については、「[データセットのベストプラクティス](#)」を参照してください。
5. (オプション) [タグを追加 – オプション] でタグを追加します。
6. [データセットを作成] を選択して、続行します。

ステップ 2: Amazon S3 データアクセスを設定する

受取人に提供する Amazon S3 バケットまたは Amazon S3 バケットロケーションを選択します。Amazon S3 バケット全体を選択することも、Amazon S3 バケット内で最大 5 つのプレフィックスまたはオブジェクトを指定することもできます。Amazon S3 バケットをさらに追加するには、別の Amazon S3 データ共有を作成する必要があります。

Amazon S3 データ共有アクセスを設定する

1. 「Amazon S3 データアクセスの設定」ページで、「Amazon S3 ロケーションの選択」を選択します。
2. [Amazon S3 ロケーションの選択] で、検索バーに Amazon S3 バケット名を入力するか、Amazon S3 バケット、プレフィックス、または Amazon S3 ファイルを選択して [選択項目を追加] を選択します。次に、[アプリケーションを追加] を選択します。

Note

データ所有者がどのプレフィックスやオブジェクトを共有するかを再設定する必要がないように、大半のオブジェクトやプレフィックスが保存されている最上位のフォルダを選択することをお勧めします。

3. 「設定の詳細」で、リクエスト支払い設定を選択します。2つのオプションがあります。
 - リクエスト支払いを有効にする (推奨) — リクエストは Amazon S3 バケット内のすべてのリクエストと転送に対して支払いを行います。このオプションをお勧めするのは、レシーバーのリクエストや転送に伴う意図しないコストを防ぐのに役立つためです。
 - リクエスト支払いを無効にする — Amazon S3 バケット内のレシーバーのリクエストと転送に対して支払います。

リクエスト支払いの詳細については、「Amazon Simple Storage Service デベロッパーガイド」の「[リクエスト支払いバケットのオブジェクト](#)」を参照してください。

4. ニーズに最適なバケットポリシーを選択してください。Amazon S3 バケット全体に1つのバケットポリシーを使用するには、[一般]を選択します。これは1回限りの設定で、future プレフィックスやオブジェクトを共有するために追加の設定を行う必要はありません。選択した Amazon S3 ロケーションに固有のバケットポリシーを使用するには、[特定]を選択します。共有 Amazon S3 バケットには、Amazon S3 データアクセスデータセットを正常に作成するためのバケットポリシーが必要であり、ACLsを有効にすることはできません。
 - a. を無効にするにはACLs、バケットのアクセス許可に移動し、オブジェクトの所有権をバケット所有者強制に設定します。
 - b. バケットポリシーを追加するには、バケットステートメントをクリップボードにコピーします。Amazon S3 コンソールの Amazon S3 権限タブのバケットポリシーセクションで、[編集]を選択し、バケットポリシーをステートメントに貼り付けて、変更を保存します。
5. Amazon S3 バケットに AWS KMS カスタマーマネージドキーを使用して暗号化されたオブジェクトが含まれている場合は、そのようなすべてのKMSキーをと共有する必要があります AWS Data Exchange。KMS キーを使用して Amazon S3 バケット内のオブジェクトを暗号化するときに必要な前提条件については、「」を参照してください [the section called “Amazon S3 データアクセスを含む”](#)。これらのKMSキーをと共有するには AWS Data Exchange、以下を実行します。
 - Amazon S3 データアクセスの設定ページ、カスタマーマネージドKMSキーで、から選択 AWS KMS keys または Enter AWS KMS key ARN を選択し、Amazon S3 共有ロケーションの暗号化にAWS KMS keys現在使用されているすべての を選択します。は、これらのKMS キー AWS Data Exchange を使用して、受信者が共有ロケーションにアクセスするための権限を作成します。詳細については、「[AWS KMSの許可](#)」を参照してください。

Note

AWS KMS には、既存のグラントを含め、KMSキーごとに 50,000 個のグラントの制限があります。

6. Amazon S3 の場所、選択したKMSキー、設定の詳細を確認し、保存して続行を選択します。

ステップ 3: データセットを確認して完成する

新しく作成したデータセットを確認して完成させます。別の Amazon S3 データアクセスを作成して追加し、追加の Amazon S3 バケット、プレフィックス、オブジェクトへのアクセスを共有する場合は、[別の Amazon S3 データアクセスを追加] を選択します。

Note

これは、最初の Amazon S3 データアクセスで選択した Amazon S3 バケットとは別の Amazon S3 バケットでホストされているデータへのアクセスを共有する必要がある場合にお勧めします。

公開前に変更を加える場合は、[下書きを保存] を選択してデータセットをドラフトとして保存できます。次に、[データセットを確定] を選択してデータ許可に追加します。

ステップ 4: 新しいデータ許可を作成する

少なくとも 1 つのデータセットを作成し、アセットを含むリビジョンを確定すると、そのデータセットをデータ許可の一部として使用する準備が整います。

新しいデータ許可を作成するには

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) の左側のナビゲーションペインで、[交換されたデータ許可] の [送信されたデータ許可] を選択します。
2. [送信されたデータ許可] から [データ許可を作成] を選択し、[データ許可を定義] ウィザードを開きます。
3. [所有しているデータセットを選択] セクションで、追加するデータセットの横にあるチェックボックスをオンにします。

Note

選択するデータセットには、確定済みのリビジョンが必要です。確定済みのリビジョンがないデータセットは、データ許可に追加できません。

で共有されるデータ製品に含まれるデータセットとは異なり AWS Marketplace、データ権限に追加されたデータセットにはリビジョンアクセスルールはありません。つまり、データ権限が承認されると、データ権限の受信者は、特定のデータセットの最終リビジョン (データ権限の作成前に確定された過去のリビジョンを含む) にアクセスできません。

4. [許可の概要] セクションに、データ許可名やデータ許可の説明など、データ許可に関して受取人に表示する情報を入力します。
5. [Next (次へ)] を選択します。

詳細については、「[の製品詳細のベストプラクティス AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

6. 受信者アクセス情報セクションの AWS アカウント ID の下に、データ許可を受け取る受信者アカウントの AWS アカウント ID を入力します。
7. [アクセスの終了日] で、データ許可の有効期限が切れる特定の終了日を選択するか、許可を永続的にする場合は [終了日なし] を選択します。
8. [Next (次へ)] を選択します。
9. [確認して送信] セクションで、データ許可情報を確認します。
10. データ許可を作成して、選択した受取人に送信することを確定する場合は、[データ許可を作成して送信] を選択します。

これで、データ許可を手動で作成する部分が完了しました。これで、データ許可の作成ジョブで、[送信されたデータ許可] ページの [アクティビティ履歴] タブに「処理中」状態が表示されます。ジョブの状態が [成功] になると、データ許可は [送信されたデータ許可] ページの [送信されたデータ許可] タブに表示され、受取人アカウントが承諾するまで [承諾を保留中] 状態になります。

データ許可データセット AWS Data Exchange を含む AWS Lake Formation のデータ許可の作成 (プレビュー)

このプレビュー中にデータアクセス許可データセットを含む AWS Lake Formation データ許可を作成する場合は、[お問い合わせください](#) [AWS Support](#)。

AWS Lake Formation データアクセス許可データセットには、[によって管理されるデータの LF タグとアクセス許可のセットが含まれています](#) AWS Lake Formation。Lake Formation データ許可を含むデータ許可を承諾すると、データセットに追加された LF タグに関連するデータベース、テーブル、および列に対する読み取り専用アクセス権が付与されます。

データ所有者は、[で LF タグを作成し](#) AWS Lake Formation、それらのタグを受信者が利用できるデータに関連付けることから始めます。Lake Formation でのリソースのタグ付けについては、「[AWS Lake Formation デベロッパーガイド](#)」の「[Lake Formation タグベースのアクセス制御](#)」を参照してください。次に、これらの LF タグと一連のデータアクセス許可をアセット AWS Data Exchange として [にインポートします](#)。受取人は、データ許可を承諾すると、これらの LF タグに関連付けられたデータへのアクセス権を付与されます。

次のトピックでは、データアクセス許可を含む AWS Lake Formation データ許可を作成するプロセスについて説明します。このプロセスには以下のステップがあります。

ステップ

- [ステップ 1: AWS Lake Formation データセットを作成する \(プレビュー\)](#)
- [ステップ 2: AWS Lake Formation データアクセス許可を作成する \(プレビュー\)](#)
- [ステップ 3: 確認して確定する](#)
- [ステップ 4: リビジョンを作成する](#)
- [ステップ 5: AWS Lake Formation データセットを含む新しいデータ許可を作成する \(プレビュー\)](#)
- [AWS Lake Formation データ許可データセットを含むデータ許可を作成する際の考慮事項 \(プレビュー\)](#)

ステップ 1: AWS Lake Formation データセットを作成する (プレビュー)

AWS Lake Formation データセットを作成するには

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインで、[マイデータ] の [製品] を選択します。

3. [所有データセット] で [データセットを作成] を選択し、[データセット作成のステップ] ウィザードを開きます。
4. 「データセットタイプを選択」 で、AWS Lake Formation データ権限を選択します。
5. [データセットを定義] で、データセットの [名前] と [説明] を定義します。詳細については、[「the section called “データセットのベストプラクティス”](#)」を参照してください。
6. [タグを追加 — オプション] で [新しいタグを追加] を選択します。
7. [データセットを作成]を選択して続行します。

ステップ 2: AWS Lake Formation データアクセス許可を作成する (プレビュー)

AWS Data Exchange は LF タグを使用してデータアクセス許可を付与します。共有するデータに関連付けられている LF タグを選択して、データに対する許可を受取人に付与します。

AWS Lake Formation データアクセス許可を作成するには

1. 「Lake Formation のデータ許可を作成」 ページで、「LF タグを追加」を選択します。
2. キーを入力し、LF タグ値を選択します。
3. 「リソースをプレビュー」を選択すると、LF タグがどのように解釈されるかを確認できます。
 - 「リソースのプレビュー」から、関連するデータカタログリソースを選択します。

Note

以下のリソースの IAMAllowedPrincipals グループを必ず取り消してください。詳細については、IAM 「ユーザーガイド」の[IAM 「ロールの一時的なセキュリティ認証情報の取り消し」](#)を参照してください。

4. 下のダイアログボックスの LF タグ表現の解釈と、データセットに関連する権限を確認してください。
5. [サービス アクセス] では、AWS Data Exchange がそのロールを引き受け、ユーザーに代わって Lake Formation データ権限へのアクセス、付与、資格の取り消しを許可する既存のサービスロールを選択します。次に、「Lake Formation のデータ許可を作成」を選択します。のロールの作成の詳細については AWS のサービス、[「へのアクセス許可を委任するロールの作成 AWS のサービス」](#)を参照してください。

ステップ 3: 確認して確定する

AWS Lake Formation データアクセス許可 (プレビュー) を作成したら、データセットを確認して確定できます。

確認して確定するには

1. ステップ 1 のデータセットの詳細とタグが正しいかどうかを確認してください。
2. LF タグ表現を確認し、別の Lake Formation データ権限 (オプション)、関連するデータカタログリソース、ジョブの詳細を追加します。

Note

ジョブは、作成されてから 90 日後に削除されます。

3. [確定] を選択します。

ステップ 4: リビジョンを作成する

リビジョンを作成する

1. 「所有データセット」セクションから、リビジョンを追加したいデータセットを選択します。
2. [リビジョン] タブを選択します。
3. [リビジョン] セクションで [リビジョンを作成] を選択します。
4. 「Lake Formation データ権限を変更」ページで、「LF タグを追加」を選択します。
5. 「データベース」と「テーブル」の権限を確認してください。
6. 「サービスアクセス」から、既存のサービスロールを選択し、「Lake Formation データ権限を作成」を選択します。

ステップ 5: AWS Lake Formation データセットを含む新しいデータ許可を作成する (プレビュー)

少なくとも 1 つのデータセットを作成し、アセットを使用してリビジョンを確定したら、データアクセス許可データセットを使用して AWS Lake Formation データ許可を作成する準備が整います。

新しいデータ許可を作成するには

1. [AWS Data Exchange コンソール](#)の左側のナビゲーションペインで、[交換されたデータ許可]の[送信されたデータ許可]を選択します。
2. [送信されたデータ許可]から[データ許可を作成]を選択し、[データ許可を定義]ウィザードを開きます。
3. [所有しているデータセットを選択]セクションで、追加するデータセットの横にあるチェックボックスをオンにします。

Note

選択するデータセットには、確定済みのリビジョンが必要です。確定済みのリビジョンがないデータセットは、データ許可に追加できません。

で共有されるデータ製品に含まれるデータセットとは異なり AWS Marketplace、データ権限に追加されたデータセットにはリビジョンアクセスルールはありません。つまり、データ権限が承認されると、データ権限の受信者は、特定のデータセットの最終リビジョン (データ権限の作成前に確定された過去のリビジョンを含む) にアクセスできます。

4. [許可の概要]セクションに、データ許可名やデータ許可の説明など、データ許可に関して受取人に表示する情報を入力します。
5. [Next (次へ)]を選択します。

詳細については、「[の製品詳細のベストプラクティス AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

6. 受信者アクセス情報セクションの AWS アカウント ID の下に、データ許可を受け取る受信者アカウントの AWS アカウント ID を入力します。
7. [アクセスの終了日]で、データ許可の有効期限が切れる特定の終了日を選択するか、許可を永続的にする場合は [終了日なし]を選択します。
8. [Next (次へ)]を選択します。
9. [確認して送信]セクションで、データ許可情報を確認します。
10. データ許可を作成して、選択した受取人に送信することを確定する場合は、[データ許可を作成して送信]を選択します。

これで、データ許可を手動で作成する部分が完了しました。これで、データ許可の作成ジョブで、[送信されたデータ許可]ページの [アクティビティ履歴] タブに「処理中」状態が表示されます。

ジョブの状態が [成功] になると、データ許可は [送信されたデータ許可] ページの [送信されたデータ許可] タブに表示され、受取人アカウントが承諾するまで [承諾を保留中] 状態になります。

AWS Lake Formation データ許可データセットを含むデータ許可を作成する際の考慮事項 (プレビュー)

レシーバーエクスペリエンスを最適化するために、Lake Formation データセット (プレビュー) AWS Data Exchange 用に製品に含まれるアクセス許可に以下の変更を加えることは強くお勧めします。

- AWS Lake Formation データセットを含むアクティブなデータ許可 AWS Data Exchange でに渡されたIAMロールを削除または変更しないことをお勧めします。このようなIAMロールを削除または変更すると、次の問題が発生します。
 - AWS アカウント Lake Formation データアクセス許可にアクセスできる は、アクセスを無期限に保持する場合があります。
 - AWS アカウント はデータ許可の受信者ですが、Lake Formation データ許可へのアクセスをまだ受け取っていない場合、アクセスは受け取れません。

AWS Data Exchange は、削除または変更したIAMロールに対して責任を負いません。

- AWS Lake Formation データセットを含む AWS Lake Formation データ許可 AWS Data Exchange でに渡されたIAMロールから付与されたデータ許可は取り消さないことをお勧めします。このようなIAMロールから付与されたデータアクセス許可を取り消すと、次の問題が発生します。
 - AWS アカウント Lake Formation データアクセス許可にアクセスできる は、アクセスを無期限に保持する場合があります。
 - AWS アカウント が製品をサブスクライブしているが、Lake Formation データアクセス許可へのアクセスをまだ受け取っていない場合、アクセスは受信されません。
- AWS Lake Formation データセットを含むアクティブな AWS Lake Formation データ許可 AWS アカウント を使用して、 から付与されたデータ許可を取り消すことはお勧めしません。データ付与の受信者 AWS アカウント である付与されたデータアクセス許可を取り消すと、それらのアカウントはアクセスを失い、カスタマーエクスペリエンスが低下します。
- AWS Lake Formation データセットを含むデータ許可を作成するときは、 のクロスアカウントバージョン AWS Glue Data Catalog をバージョン 3 に設定することをお勧めします。データセットを含む AWS Lake Formation アクティブなデータ権限がある間に Data Lake Catalog のクロスアカウントバージョンをダウングレードすると、データ権限の受信者 AWS アカウント であるが、Lake Formation データ権限へのアクセスをまだ受けていない が、データにアクセスできない可能性があります。

AWS Data Exchange でのデータ許可の承諾とデータへのアクセス

次の手順では、AWS Data Exchange コンソールを使用して AWS Data Exchange でデータ許可を承諾するプロセスを示します。

データ許可の承諾

1. データ許可を承諾する前に、AWS アカウントにサインアップしてユーザーを作成する必要があります。詳細については、「[the section called “にサインアップする AWS アカウント”](#)」を参照してください。
2. AWS Data Exchange コンソールの左側のナビゲーションペインで、[交換されたデータ許可] の [受け取ったデータ許可] を選択します。
3. AWS アカウント がレシーバーであるすべてのデータ許可は、[データ許可を保留中] タブの下の表に表示され、保留中のデータ許可の詳細と [承諾を保留中] ステータスが示されます。
4. データ許可を承諾するには、承諾するデータ許可の横にあるチェックボックスをオンにして、[データ許可を承諾] を選択します。
5. データ許可の承諾処理が完了すると、データ許可が [承諾済みおよび期限切れのデータ許可] タブに表示され、データ許可の詳細と [承諾済み] ステータスが示されます。
6. データ許可を承諾したら、[権限を持つデータセット] テーブルからデータ許可名を選択してデータにアクセスします。[マイデータ] から [権限を持つデータ] ページに移動して、データ許可を確認し、アカウントで共有するすべてのデータセットを表示することもできます。
7. 次に、含まれているデータセットを使用します。アクセスできるデータセットの種類に応じて、以下のアクションのいずれかを実行できます。
 - a. 関連するファイルを Amazon Simple Storage Service (Amazon S3) にエクスポートする、または署名付き URL を通じてローカルにエクスポートする。
 - b. Amazon API Gateway API Gateway API を呼び出す。
 - c. Amazon Redshift データ共有をクエリする。
 - d. Amazon S3 データにアクセスする。
 - e. AWS Lake Formation データレイク (プレビュー) をクエリする。

Note

データ許可を承諾すると、基礎となるデータセットの使用には、AWS カスタマーアグリーメントや該当サービスの使用を規定する AWS との他の契約が引き続き適用されることに同意したものとみなされます。

関連トピック

- [データ許可を承諾した後の AWS Data Exchange データセットへのアクセス](#)
- [ファイルベースのデータを含むデータセットにアクセスする](#)
- [を含むデータセットにアクセスする APIs](#)
- [Amazon Redshift データセットを含むデータセットにアクセスする](#)
- [Amazon S3 データアクセスを含むデータセットにアクセスする](#)
- [AWS Lake Formation データセットを含むデータセットにアクセスする \(プレビュー\)](#)

データ許可を承諾した後の AWS Data Exchange データセットへのアクセス

以下のトピックでは、コンソール AWS Data Exchange を使用して AWS Data Exchange でデータセットにアクセスするプロセスについて説明します。

トピック

- [ファイルベースのデータを含むデータセットにアクセスする](#)
- [を含むデータセットにアクセスする APIs](#)
- [Amazon Redshift データセットを含むデータセットにアクセスする](#)
- [Amazon S3 データアクセスを含むデータセットにアクセスする](#)
- [AWS Lake Formation データセットを含むデータセットにアクセスする \(プレビュー\)](#)

ファイルベースのデータを含むデータセットにアクセスする

以下のトピックでは、にファイルとして保存されているファイルベースのデータを含むデータセットにアクセスするプロセスについて説明します AWS Data Exchange。プロセスを完了するには、AWS Data Exchange コンソールを使用します。

データ許可を正常に承諾すると、データ許可に含まれているデータセットにアクセスできるようになります。

データセット、リビジョン、アセットを表示するには

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインで、[マイデータ] の [権限を持つデータセット] を選択します。
3. データセットを選択します。
4. データセットの [データセットの概要]、[自動エクスポートの宛先] (Amazon S3 データセットのみ)、[リビジョン]、および [説明] を表示します。

(オプション) データのエクスポート

データ許可をアクティブにしたら、エクスポートしたアセットを受け取るように Amazon S3 バケットを設定できます。関連付けられたアセットを Amazon S3 にエクスポートすることも、署名付きでジョブを使用することもできます URL。

新しいリビジョンを取得するなど、後でデータをエクスポートまたはダウンロードする場合は、「[the section called “アセットのエクスポート”](#)」を参照してください。

Important

データを Amazon S3 にエクスポートするときは、Amazon S3 のセキュリティ機能を検討することをお勧めします。一般的なガイドラインとベストプラクティスの詳細については、Amazon Simple Storage Service ユーザーガイドの「[Amazon S3 のセキュリティのベストプラクティス](#)」を参照してください。

データのエクスポート方法に関する詳細については、「[the section called “アセットのエクスポート”](#)」と「[the section called “リビジョンのエクスポート”](#)」を参照してください。

を含むデータセットにアクセスする APIs

以下のトピックでは、AWS Data Exchange コンソールを使用して APIsを含む AWS Data Exchange データセットにアクセスするプロセスについて説明します。

API の表示

を表示するには API

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインで、[マイデータ] の [権限を持つデータセット] を選択します。
3. データセットを選択します。
4. [リビジョン] タブで、リビジョンを選択します。
5. API アセット で、 を選択しますAPI。
6. アセットの概要を表示します。
7. 統合ノートのガイダンスに従って を呼び出しますAPI。

API 仕様のダウンロード

API 仕様をダウンロードするには

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインで、[マイデータ] の [権限を持つデータセット] を選択します。
3. データセットを選択します。
4. [リビジョン] タブで、リビジョンを選択します。
5. API アセット で、 を選択しますAPI。
6. OpenAPI 3.0 仕様で、API仕様のダウンロード を選択します。

仕様がローカルコンピュータにダウンロードされます。その後、アセットをサードパーティーのツールにエクスポートしてSDK生成できます。

API 通話の発信 (コンソール)

AWS Data Exchange コンソールで 1 つのエンドポイントを呼び出すことができます。

コンソールからAPI電話をかけるには

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインで、[マイデータ] の [権限を持つデータセット] を選択します。
3. データセットを選択します。
4. [リビジョン] タブで、リビジョンを選択します。
5. API アセット で、 を選択しますAPI。
6. [統合に関する注意事項] で以下を実行します。
 - a. ベース URLを使用するには、コピーを選択します。
 - b. [コピー] を選択して [コード構造] を使用します。
 - c. 仕様ドキュメントに記載されている情報に従って を呼び出しますAPI。

API 電話をかける (AWS CLI)

API 電話をかけるには (AWS CLI)

- send-api-asset コマンドを使用して を呼び出しますAPI。

```
$ aws dataexchange send-api-asset \  
--asset-id $ASSET_ID \  
--data-set-id $DATA_SET_ID \  
--revision-id $REVISION_ID \  
--body "... " \  
{  
  "headers": {  
    ...  
  },  
  "body": "... "  
}
```

Amazon Redshift データセットを含むデータセットにアクセスする

受取人向けの概要

Amazon Redshift データセットは、Amazon Redshift AWS Data Exchange のデータ共有を含むデータセットです。データ共有は、データ所有者がデータ共有に追加するテーブル、ビュー、スキーマ、およびユーザー定義の関数に対する読み取り専用アクセス権を付与します。

受取人は、データ許可の承諾後に、データを抽出、変換、ロードすることなく Amazon Redshift 内のデータをクエリするためのアクセス権を取得します。データ許可が期限切れになると、データ共有にアクセスできなくなります。

Note

データ許可の承諾後にデータ共有にアクセスできるようになるまで数分かかる場合があります。

データ許可を承諾すると、以下の操作を実行できます。

- データを抽出、変換、ロードすることなく、データにクエリを実行する。
データ所有者が更新すると同時に、最新のデータにアクセスする。

詳細については、「Amazon Redshift データベースデベロッパーガイド」の「[AWS Data Exchange データ共有の管理](#)」を参照してください。

Amazon S3 データアクセスを含むデータセットにアクセスする

受取人向けの概要

AWS Data Exchange for Amazon S3 を使用すると、受信者はデータ所有者の Amazon S3 バケットから直接サードパーティーのデータファイルにアクセスできます。

受信者として、Amazon S3 データセット AWS Data Exchange のの権限を取得したら、Amazon Athena、SageMaker Feature Store、Amazon AWS のサービスなどのを使用して、Amazon S3 バケット内のデータ所有者のデータEMRを直接使用して、データ分析を開始できます。

以下の点を考慮します。

- データ所有者は、提供されたデータをホストする Amazon S3 バケットで、Amazon S3 の機能であるリクエスト支払いを有効にすることができます。有効にすると、受信者は theirAmazon S3 バケットへのデータの読み取り、使用、転送、エクスポート、またはコピーに対して料金を支払いません。詳細については、Amazon Simple Storage Service ユーザーガイドの「[ストレージ転送と使用量にリクエスト支払いバケットを使用する](#)」を参照してください。
- AWS Data Exchange for Amazon S3 データ製品に対するへのデータ許可を受け入れると、は Amazon S3 アクセスポイント AWS Data Exchange を自動的にプロビジョニングし、そのリソースポリシーを更新して読み取り専用アクセスを許可します。Amazon S3 Access Points

は、Amazon S3 バケットへのデータ共有を簡素化する Amazon S3 の機能です。詳細については、Amazon Simple Storage Service ユーザーガイドの「[Amazon S3 アクセスポイントを使用したデータアクセスの管理](#)」を参照してください。

- Amazon S3 アクセスポイントの Amazon リソースネーム (ARN) またはエイリアスを使用して共有データにアクセスする前に、IAMアクセス許可を更新する必要があります。現在のロールとそれに関連するポリシーで、プロバイダーの Amazon S3 バケットと が提供する Amazon S3 アクセスポイントへの ListBucket GetObject および 呼び出しが許可されていることを確認できます AWS Data Exchange。

以下のセクションでは、AWS Data Exchange コンソールを使用してデータ許可を承諾した後、AWS Data Exchange for Amazon S3 データセットにアクセスする完全なプロセスについて説明します。

独自の Amazon S3 バケットを設定したり、データファイルを Amazon S3 バケットにコピーしたり、関連するストレージ料金を支払ったりすることなく、クエリを実行してデータをインプレースで分析できます。データ所有者が管理しているのと同じ Amazon S3 オブジェクトにアクセスして、最新の利用可能なデータを使用できます。

データ許可では、次のことを実行できます。

- Amazon S3 バケットを個別に設定したり、ファイルをコピーしたり、ストレージ料金を支払ったりすることなく、データを分析する。
- データ所有者が更新すると同時に最新のプロバイダーデータにアクセスする。

データセット、リビジョン、アセットを表示するには

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインで、[マイデータ] の [権限を持つデータセット] を選択します。
3. [権限を持つデータセット] ページで、データセットを選択します。
4. データセットの概要を表示します。

Note

提供されたデータは、データ所有者の Amazon S3 バケットに保存されます。このデータにアクセスする場合、所有者が別途指定しない限り、リクエストの費用と所有者の Amazon S3 バケットからダウンロードしたデータの費用を負担する必要があります。

5. 開始する前に、ロールには、権限のある Amazon S3 データアクセスを使用する IAM ためのアクセス許可が必要です。データセットの概要ページの Amazon S3 データアクセスタブで、アクセス IAM 許可の検証を選択して、ロールにデータにアクセスするための正しいアクセス許可があるかどうかを確認します。
6. 必要な IAM アクセス許可がある場合は、表示される IAM ポリシープロンプトで次へを選択します。必要なアクセス許可がない場合は、プロンプトに従ってユーザーまたはロールに JSON ポリシーを埋め込みます。
7. 共有されている場所を参照し、Amazon S3 バケット、またはデータ所有者が共有しているプレフィックスとオブジェクトを確認します。Amazon S3 アクセスポイント情報のデータアクセス情報を参照し、データ所有者がリクエスト支払いを有効にしているかどうかを確認します。
8. [共有されている Amazon S3 の場所を参照] を選択し、データ所有者の Amazon S3 バケット、プレフィックス、共有されているオブジェクトを表示および確認します。
9. Amazon S3 バケット名を使用する場所ならどこでもアクセスポイント エイリアスを使用して、資格のあるデータにプログラムでアクセスできます。詳細については、Amazon Simple Storage Service ユーザーガイドの「[互換性のある Amazon S3 オペレーションでのアクセスポイントの使用](#)」を参照してください。
10. (オプション) データ所有者の で暗号化されたデータを含む Amazon S3 データアクセスデータセットのエンタイトルメントを取得すると AWS KMS key、コンソール ARN で KMS キーを表示できます。は、暗号化されたデータにアクセスできるように、キーに対する AWS KMS 許可 AWS Data Exchange を作成します。権限を取得した Amazon S3 アクセスポイントから暗号化されたデータを読み取る AWS KMS key には、に対する `kms:Decrypt` IAM アクセス許可を取得する必要があります。次の IAM ポリシーステートメントから選択できます。
 - a. IAM ポリシーにより、ユーザーは任意の KMS キーを使用してデータを復号または暗号化できます。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [{
    "Effect": "Allow",
    "Action": ["kms:Decrypt"],
    "Resource": ["*"]
  }]
}
```

- b. IAM ポリシーを使用すると、ユーザーは受信者コンソールARNsに表示される正確なKMS キーを指定できます。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [{
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
      "kms:Decrypt"
    ],
    "Resource": [
      "<KMS key Arn from recipient's console>"
    ]
  }
]
```

Note

AWS KMS 許可は、オペレーションが最終的な一貫性を達成するまで最大 5 分かかる場合があります。これが完了するまでは、Amazon S3 データアクセスデータセットにアクセスできない場合があります。詳細については、AWS KMS key 「Management Service デベロップャーガイド [AWS](#)」の「[のグラントKMS](#)」を参照してください。

AWS Lake Formation データセットを含むデータセットにアクセスする (プレビュー)

受取人向けの概要

AWS Lake Formation データセットは、AWS Lake Formation データアクセス許可アセットを含むデータセットです。

受信者は、AWS Lake Formation データセットを含むデータ許可を受け入れることができます。AWS Lake Formation データセット AWS Data Exchange の に対する権限が付与されたら、AWS アカウント を使用して 内のデータ、または を使用して AWS 組織全体のデータへのアクセスをクエリ、変換 AWS Lake Formation、共有できます AWS License Manager。

AWS Lake Formation データセットを含むデータ許可を承諾したら、Amazon Athena などの Lake Formation 互換クエリエンジンを使用してデータをクエリできます。

データ許可の承諾が完了したら、以下の操作を行う必要があります。

1. データグラントを受け入れてから 12 時間以内に AWS Resource Access Manager (AWS RAM) 共有を受け入れます。AWS Data Exchange コンソールで、AWS Lake Formation データアクセス許可データセットの権限のあるデータセットページから AWS RAM 共有を受け入れることができます。AWS RAM 共有を受け入れる必要があるのは、プロバイダーごとに 1 回のみです。からのリソース共有招待の受け入れの詳細については AWS RAM、[「からのリソース共有招待の受け入れ AWS RAM」](#)を参照してください。
2. 新しい共有リソースに移動 AWS Lake Formation し、リソースリンクを作成します。
3. Amazon Athena または他の AWS Lake Formation 互換性のあるクエリエンジンに移動して、データをクエリします。

組織内でのデータ許可ライセンスの共有

AWS Data Exchange データセットへのデータ付与を受け入れると、これらの製品を使用するためのライセンスを付与する契約が作成されます。AWS アカウントが組織のメンバーである場合は、その組織の他のアカウントと AWS Data Exchange データセットのライセンスを共有できます。

Note

の詳細については AWS Organizations、[AWS Organizations 「ユーザーガイド」](#)を参照してください。

以下のトピックで、アカウント間でライセンスを共有するプロセスの概要を説明します。

トピック

- [ライセンス共有の前提条件](#)
- [AWS Data Exchange ライセンスの表示](#)
- [AWS Data Exchange ライセンスの共有](#)

ライセンス共有の前提条件

ライセンスを共有する前に、まず組織のライセンス共有をセットアップする必要があります。以下のタスクを完了して、組織のライセンス共有をセットアップしてください。

- ライセンスを購入または共有するときに、関連するライセンス許可を作成できるように、ユーザーに代わってライセンスを管理する AWS Marketplace アクセス許可を付与します。詳細については、「AWS Marketplace 購入者ガイド」の「[AWS Marketplaceのサービスリンクロール](#)」を参照してください。
- AWS License Manager 初めて使用するために を設定します。詳細については、「AWS License Manager ユーザーガイド」の「[AWS License Managerの使用開始](#)」を参照してください。

AWS Data Exchange ライセンスの表示

以下のトピックでは、AWS Data Exchange ライセンスを表示するプロセスの概要を説明します。

トピック

- [すべてのライセンスの表示](#)
- [単一のライセンスの表示](#)

すべてのライセンスの表示

AWS License Manager コンソールを使用して、アクセスできる AWS Data Exchange データセットのすべてのライセンスを表示できます。

サブスクリプションした製品のすべてのライセンスを表示する

1. [AWS Management Console](#) にサインインします。
2. AWS License Manager コンソールを開きます。
3. 左側のナビゲーションペインで [付与されたライセンス] を選択します。
4. 承認したデータ許可のすべてのライセンスを表示します。

単一のライセンスの表示

AWS License Manager コンソールを使用して、AWS Data Exchange データセットの単一のライセンスを表示できます。

単一のサブスクリプションの単一のライセンスを表示するには

1. AWS Data Exchange コンソールにサインインします。
2. [マイデータ] で [受け取ったデータ許可] を選択します。
3. データ許可を選択します。
4. [License] (ライセンス) の下にあるリンクを選択します。
5. [License detail] (ライセンスの詳細) ページで詳細を確認します。

AWS Data Exchange ライセンスの共有

受取人向けの概要

を使用して、組織内の他のアカウントと AWS Data Exchange ライセンスを管理および共有できます AWS License Manager。

AWS マネージドライセンス AWS License Manager で 使用方法の詳細については、AWS License Manager 「ユーザーガイド」の [「付与されたライセンス」と「販売者が発行したライセンス」](#) を参照してください。

で AWS Data Exchange のデータ製品のサブスクライブ

AWS Data Exchange

大まかに言えば、を通じて利用可能な AWS Data Exchange データ製品をサブスクライブする方法は次のとおりです AWS Marketplace。

1. の作成 AWS アカウント – データ製品をサブスクライブする前に、にサインアップ AWS してユーザーを作成する必要があります。詳細については、「[設定](#)」を参照してください。
2. パブリックカタログを参照する – 製品は AWS Marketplace カタログに発行されます。製品を検索し、関連するパブリックまたはカスタムオファーと製品の詳細を確認することができます。プロバイダーが見込みサブスクライバーのアカウントにプライベートオファーを発行した場合、その製品は AWS Data Exchange コンソールの [My product offers] (製品オファー) ページから利用できます。
3. (オプション) サブスクリプションのリクエストを送信 – プロバイダーは、サブスクリプション検証を有効にすることを選択できます。有効になっている場合は、製品のサブスクリプションをリクエストする必要があります。詳細については、「[のサブスクライバーのサブスクリプション検証 AWS Data Exchange](#)」を参照してください。
4. サブスクライバーが製品をサブスクライブする – 有料製品をサブスクライブすると、AWS 請求額が請求されます。権限を持つデータセットにアクセスできます。
5. 含まれているデータセットを使用 – 製品のデータセットには、データサブスクリプション契約の条件に従ってアクセスできます。アクセスできるデータセットの種類に応じて、以下のアクションのいずれかを実行できます。
 - 署名付き を使用して、関連するファイルを Amazon Simple Storage Service (Amazon S3) またはローカルにエクスポートしますURL。
 - Amazon API Gateway を呼び出しますAPI。
 - Amazon Redshift データ共有をクエリする。
 - プロバイダーの Amazon S3 データにアクセスする。
 - プロバイダー AWS Lake Formation のデータレイクをクエリします (プレビュー)。

詳細については、「[のジョブ AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

6. データ製品のレコメンデーションをリクエストする – カタログで製品を見つけることができない場合は、AWS Data Exchange コンソールでデータ製品のリクエストページを使用して AWS Data Exchange、データ検出チームにパーソナライズされたレコメンデーションをリクエストで

きます。詳細については、[データ製品のレコメンデーションをリクエストする](#)を参照してください。

Note

米国外の販売者からのデータ製品をサブスクライブするときは、その販売者から税金請求書
が送信される場合もあります。詳細については、「[Tax Help - AWS Marketplace Sellers](#)」を
参照してください。

関連トピック

- [の製品サブスクリプション AWS Data Exchange](#)
- [でのサブスクライバーとしての開始方法 AWS Data Exchange](#)
- [AWS Data Exchange 製品のサブスクリプションとアクセス](#)
- [のサブスクライバーのサブスクリプション検証 AWS Data Exchange](#)
- [組織での AWS Data Exchange ライセンスサブスクリプションの共有](#)
- [での Bring Your Own Subscription \(BYOS\) オファターの承諾 AWS Data Exchange](#)
- [でのプライベート製品とオファターの受け入れ AWS Data Exchange](#)
- [AWS Data Exchange ハートビート](#)
- [AWS Data Exchange 用 APIs \(テスト製品\)](#)
- [でのワールドワイドイベント出席 \(テスト製品\) AWS Data Exchange](#)
- [AWS Data Exchange 用 AWS Lake Formation \(テスト製品\) \(プレビュー\)](#)
- [AWS Data Exchange for Amazon S3 \(テスト製品\)](#)
- [AWS Data Exchange プロバイダー生成通知 \(テスト製品\)](#)
- [のデータ AWS Data Exchange](#)

の製品サブスクリプション AWS Data Exchange

すべての AWS Data Exchange 製品はサブスクリプションベースです。製品をサブスクライブするときは、料金、期間、支払いスケジュール、データサブスクリプション契約、および返金ポリシーなどの製品のオファター規約に同意します。製品を購読するときは、サブスクライブした期間中、プロバイダーが選択した支払いスケジュールに従って料金を支払います。

⚠ Important

データサブスクリプション契約 (DSA) では、データ製品のプロバイダーの利用規約が規定されています。でにサブスクライブするデータ製品の使用は、お客様による の使用に適用される AWS 顧客契約またはその他の契約にも準拠 AWS Data Exchange している必要があります AWS のサービス。

ℹ Note

AWSの [Open Data](#) プログラムの一部であるデータ製品は、誰でも無料で使用でき、サブスクリプションも必要ありません。詳細については、「[での AWS データセットでの Open Data の使用 AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

各製品のパブリックオファー規約には、1つ、または複数の料金と期間の組み合わせを含めることができます。製品をサブスクライブするときは、サブスクリプションの期間を選択できます。プロバイダーが製品に対してサブスクリプションの自動更新を有効にしている場合は、それを有効にするかどうかを選択することもできます。

⚠ Important

データプロバイダーが、製品にモバイルなどの機密データや個人データのカテゴリが含まれていると示した場合IDs、製品の詳細とともに表示されます。機密データのカテゴリに関する詳細については、「[の機密情報のカテゴリ AWS Data Exchange](#)」を参照してください。データプロバイダーが、1996年の医療保険の相互運用性と説明責任に関する法律 (PHI) の対象となる保護対象医療情報 (HIPAA) を製品に含んでいると表示している場合、製品のデータセットを にエクスポートすることはできません。AWS アカウント ただし、そのデータセット AWS アカウント が HIPAAアカウントとして指定されている場合はこの限りではありません (「」の AWS 「ビジネスアソシエイト補遺」で定義されています [AWS Artifact](#))。

サブスクリプションが処理されてアクティブになると、AWS 料金の一部として支払いスケジュールに従って AWS Marketplace 請求書に表示されます。詳細については、「[AWS Marketplace 製品への支払い](#)」を参照してください。

サブスクリプションの期間中は、すべての製品のデータセットを表示し、アクセスすることができます。また、ジョブでデータセットのアセットをエクスポートすることもできます。詳細について

は、「[のジョブ AWS Data Exchange](#)」を参照してください。サブスクリプションの有効期限が切れると、データセットを表示したりエクスポートしたりすることができなくなります。

Note

サブスクリプションを使用して何にアクセスできるかに関する詳細を含めたデータセットとリビジョンに関する情報については、「[データセットとリビジョン](#)」を参照してください。

プロバイダーが製品の非公開化を決定した場合でも、サブスクリプションがアクティブである限り、データセットには引き続きアクセスできます。ただし、有効期限が切れたときにサブスクリプションを自動更新することはできません。

すべてのアクティブな製品サブスクリプションと自動更新ステータスは、AWS Data Exchange コンソールのサブスクリプションページで確認できます。詳細については、「[AWS Data Exchange サブスクリプションの管理](#)」を参照してください。

Important

自動更新を有効にし、更新時に製品のオファー条件が変更された場合、新しい製品オファー条件 (新しい料金と新しいを含むDSA) が適用されます。これは、オファー規約が変更されている可能性にかかわらず、データに対するアクセス権を保持できることを確実にします。

有効なサブスクリプションに基づいて、特定のエンタイトルメントを付与されたデータセットをすべて検索してアクセスするには AWS リージョン、エンタイトルメントを付与されたデータセットページにアクセスしてください。

データ製品を購読すると、お客様の連絡先情報をプロバイダーと共有する場合があります。詳細については、AWS Marketplace 購入者ガイドの「[AWS Marketplaceでのセキュリティ](#)」を参照してください。

事前コミットメント AWS Data Exchange がある のデータ製品を購入すると、Amazon Web Services (AWS) から請求書がすぐに届きます。各データ製品の料金は、請求書の詳細セクションに製品名別に記載されています。Amazon Simple Storage Service (Amazon S3) または Amazon Athena などの AWS のインフラストラクチャおよび分析サービスの使用については、個別の請求書を受け取ります。の詳細については AWS Billing and Cost Management、「[AWS Marketplace 購入者ガイド](#)」の「[製品の支払い](#)」を参照してください。

AWS Data Exchange Files データセットのサブスクリプションが終了しても、既にエクスポートしたファイルへのアクセスは保持されます。データサブスクリプション契約を確認して、サブスクリプションの終了時にエクスポートされたデータを削除することが契約で義務付けられているかどうかを確認してください。

データセットとリビジョン

のすべての製品は AWS Data Exchange 1 つ以上のデータセットで構成され、それぞれに 1 つ以上のリビジョンがあります。のデータセット AWS Data Exchange は通常異なるデータであり、リビジョンは同じデータの新しいバージョンまたは変更されたバージョンです。データセットとリビジョンに関する詳細については、「[のデータ AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

各リビジョンには、データセットのすべてのデータ (リビジョン用に更新されたもの) が含まれる場合と、前回のリビジョン以降の新しいデータのみが含まれる場合があります。各リビジョンにまったく異なるデータが含まれる可能性もあります。各リビジョンで提供するデータは、データプロバイダーが決定します。

製品をサブスクライブすると、その製品内のすべてのデータセットにアクセスできます。データプロバイダーがオファーを作成するときは、履歴リビジョン (0 個 ~ 全リビジョン) に対するアクセス権を提供します。プロバイダーは、サブスクリプション期間中に利用可能になる将来のリビジョンに対するアクセス権も提供できます。サブスクリプションの条件は、AWS Data Exchange コンソールの製品の詳細ページに表示されます。

ファイルが含まれる製品をサブスクライブすると、各リビジョンまたはアセットを手動で個別にエクスポートすることができます。または、プロバイダーが新しいリビジョンを発行するときに、それらを Amazon S3 バケット (最大 5 バケット) に自動的にエクスポートすることも選択できます。詳細については、「[ファイルベースのデータを含む AWS Data Exchange 製品のサブスクライブとアクセス](#)」を参照してください。リビジョンのエクスポート方法に関する詳細については、「[からリビジョンをエクスポートする AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

Amazon API Gateway を含む製品をサブスクライブすると API、データプロバイダーの を表示して呼び出すことができます API。詳細については、「[を含む AWS Data Exchange 製品のサブスクライブとアクセス APIs](#)」を参照してください。

Amazon Redshift データセットが含まれる製品をサブスクライブすると、Amazon Redshift 内のデータをクエリするためのアクセス権を取得します。詳細については、「[Amazon Redshift データセットを含む製品のサブスクリプションとアクセス AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

Amazon S3 データアクセスデータセットを購読すると、プロバイダの Amazon S3 オブジェクトを表示して直接使用することができます。詳細については、「[the section called “Amazon S3 データアクセスの抑制”](#)」を参照してください。

AWS Lake Formation データアクセス許可データセット (プレビュー) を含む製品をサブスクライブすると、でデータを管理し AWS Lake Formation、Amazon Athena などのダウンストリームサービスでクエリを実行できます。

データディクショナリ、サンプル

一部の製品には、データディクショナリとサンプルを含むデータセットがあります。製品を購読するかどうかを判断しやすくするため、購読する前にデータディクショナリとサンプルを表示してダウンロードできます。

データディクショナリはデータセットの内容を視覚的に表現したものです。含まれている列とその意味に関する詳細が含まれています。

サンプルは、製品を購読した後に受け取るデータを反映したデータです。サンプルは Amazon S3 でサポートされるどのファイル型でもかまいません。

データディクショナリとサンプルを含む製品を見つける方法の詳細については、「[カタログを参照](#)」を参照してください。

データディクショナリとサンプルを使用して製品を評価する方法の詳細については、「[データディクショナリとサンプルを含む製品の評価](#)」を参照してください。

でのサブスクライバーとしての開始方法 AWS Data Exchange

以下のトピックでは、AWS Data Exchange コンソール AWS Data Exchange を使用してでデータ製品サブスクライバーになるための完全なプロセスについて説明します。このプロセスには以下のステップがあります。

ステップ

- [ステップ 1: をセットアップする AWS Data Exchange](#)
- [ステップ 2: カタログを参照する](#)
- [ステップ 3 : \(オプション \) データ製品に関するレコメンデーションをリクエストする](#)
- [ステップ 4: \(オプション\) データディクショナリとサンプルを含む製品を評価する](#)

• [ステップ 2: 製品をサブスクライブおよびアクセスする](#)

ステップ 1: をセットアップする AWS Data Exchange

を使用する前に AWS Data Exchange、 にサインアップ AWS してユーザーを作成する必要があります。詳細については、「[セットアップ AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

を設定するには AWS Data Exchange

1. AWS アカウントにサインアップします。詳細については、「[にサインアップする AWS アカウント](#)」を参照してください。
2. ユーザーを作成します。詳細については、「[ユーザーの作成](#)」を参照してください。

ステップ 2: カタログを参照する

製品を検索し、関連するパブリックオファーまたはカスタムオファーと製品の詳細を AWS Marketplace と の両方で確認できます AWS Data Exchange。

プロバイダーがアカウントにプライベートオファーを発行した場合、製品は AWS Data Exchange コンソールの My product offers ページにあります。詳細については、「[で AWS Data Exchange のデータ製品のサブスクライブ AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

カタログを参照するには

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) を開いてサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データ製品の検出] で [カタログを参照] を選択します。
3. 検索バーに用語または語句を入力し、[検索] を選択します。
4. (オプション) [カタログを参照] で、単語またはフレーズを入力してから [検索] を選択して、クエリに一致する結果を表示します。
5. (オプション) [結果を絞り込む] で、特定のカテゴリから 1 つを選択して、特定のデータ製品を参照します。
6. (オプション) [結果を絞り込む] で [データセットタイプ] フィルターを使用し、以下のオプションから選択して製品を検索します。
 - ファイル (Amazon S3 オブジェクト) — ファイルベースのデータを含む製品
 - Amazon Redshift — Amazon Redshift データ共有を含む製品

- API – を含む製品 APIs
 - Amazon S3 へのアクセス — Amazon S3 データアクセスを含む製品
 - AWS Lake Formation – AWS Lake Formation データアクセス許可を含む製品 (プレビュー)
7. 返された結果のリストから製品を選択し、その製品詳細ページを確認します。

ステップ 3 : (オプション) データ製品に関するレコメンデーションをリクエストする

カタログで製品を見つけられない場合は、[AWS Data Exchange Data Discovery Team](#) からのパーソナライズされたレコメンデーションをリクエストできます。

データ製品レコメンデーションをリクエストする

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) を開いてサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データ製品の検出] で [データ製品をリクエスト] を選択します。
3. 「データのリクエスト」製品ページの「詳細」に、データの説明を入力します。
4. (オプション) [その他の詳細 (任意)] を展開し、指示に従ってフィールドに入力します。
 - a. 1 つ以上の製品カテゴリを選択します。
 - b. データ製品の例 URL を入力します。
 - c. データセットタイプでは、Files (Amazon S3 Objects)、Amazon API Gateway、API Amazon Redshift データ共有、AWS Lake Formation データアクセス許可 (プレビュー)、または Amazon S3 データアクセス から選択します。
 - d. 配信頻度、データ製品例 URL、サブスクリプション開始日、サブスクリプション期間、サブスクリプション予算 など、必要な製品に関する具体的な詳細を入力します。
 - e. 選択したデータセットタイプが Amazon API Gateway API の場合、サブスクリプション予算で、計測コストを含める を選択します。
5. データプロバイダーの場合は、既存のプロバイダーのリストから選択するか、その他のプロバイダーの名前を入力します。次に、プロバイダーと既存の関係があるかどうかを示してください。
6. [送信] を選択します。

AWS Data Exchange Data Discovery Team から 2 営業日以内にレスポンスを受け取る必要があります。

ステップ 4: (オプション) データディクショナリとサンプルを含む製品を評価する

プロバイダーは、データディクショナリとデータセットのサンプルを製品に組み込む場合があります。製品のデータセットがニーズに合っているかどうかを判断しやすくするため、登録する前にデータディクショナリとサンプルを表示してダウンロードできます。詳細については、「[データディクショナリ、サンプル](#)」を参照してください。

次のアクションを実行して、製品のデータセットの評価に役立てることができます。

- [データディクショナリを表示する](#)
- [データディクショナリをダウンロードする](#)
- [すべてのデータディクショナリを表示とダウンロード](#) (複数のデータセットを含む製品用)
- [サンプルをプレビューする](#)
- [サンプルをダウンロード](#)

データディクショナリを表示する

プロバイダーは、表示可能なデータセットごとに 1 つのデータディクショナリを追加できます。

データディクショナリを表示するには

1. 商品詳細ページで、「データディクショナリとサンプル」タブを選択します。
2. 次のいずれかの方法でデータディクショナリを参照します。
 - 製品概要セクションまでスクロールすると、「データディクショナリを表示」にデータディクショナリが表示されます。
 - 「データディクショナリとサンプル」タブを選択し、データセットの行を展開し、データディクショナリの横にあるオプションボタンを選択して、「すべてのデータディクショナリを表示」を選択します。
3. (オプション) 検索バーにキーワードまたは語句を入力して、すべてのデータセットとすべてのテーブルを検索します。
4. (オプション) 必要に応じて検索とフィルターを変更します。

データディクショナリをダウンロードする。

プロバイダーは、ダウンロードできるデータセットごとに1つのデータディクショナリを追加できます。

データディクショナリをダウンロードするには

1. 商品詳細ページで、「データディクショナリとサンプル」タブを選択します。
2. 展開アイコン (データセット名の左にあるプラスアイコン) を選択して、データセットの行を拡張します。
3. データディクショナリ名の隣にあるオプションボタンを選択します。
4. [ダウンロード] を選択します。

データディクショナリファイルがコンピュータにダウンロードされます。

すべてのデータディクショナリを表示とダウンロード

製品に複数のデータセットがある場合、プロバイダーは各データセットにデータディクショナリを追加することがあります。すべてのデータセットを評価するには、すべてのデータディクショナリを表示してダウンロードすることをお勧めします。

すべてのデータディクショナリを表示してダウンロードするには

1. 商品詳細ページで、「データディクショナリとサンプル」タブを選択します。
2. [すべてのデータディクショナリを表示] を選択します。
3. データディクショナリの表示ダイアログボックスで、ダウンロード (CSV) を選択して .csv ファイルをダウンロードします。

.csv ファイルがコンピュータにダウンロードされます。

4. [閉じる] を選択してダイアログボックスを閉じます。

サンプルをプレビューする

サンプルをプレビューするには

1. 商品詳細ページで、「データディクショナリとサンプル」タブを選択します。
2. 展開アイコン (データセット名の左にあるプラスアイコン) を選択してデータセットを拡張します。

3. サンプル名の横にあるオプションボタンを選択します。
4. サンプルプレビュー (CSV のみ) を選択して、サンプルをプレビューします。
 - a. (オプション) プレビューダイアログボックスで、「ダウンロード」を選択して.csv ファイルをダウンロードします。

.csv ファイルがコンピュータにダウンロードされます。
 - b. [閉じる] を選択してダイアログボックスを閉じます。

サンプルをダウンロードする。

サンプルをダウンロードするには

1. 商品詳細ページで、「データディクショナリとサンプル」タブを選択します。
2. 展開アイコン (データセット名の左にあるプラスアイコン) を選択してデータセットを拡張します。
3. サンプル名の横にあるオプションボタンを選択します。
4. [ダウンロード] を選択します。

サンプルがコンピュータにダウンロードされます。

ステップ 2: 製品をサブスクライブおよびアクセスする

AWS Data Exchange カタログ内の製品を見つけ、ニーズを満たしていることを確認したら、製品をサブスクライブして製品にアクセスできます。

有料製品をサブスクライブすると、AWS 請求額が請求されます。権限を持つデータセットにアクセスできます。詳細については、「[で AWS Data Exchange のデータ製品のサブスクライブ AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

さまざまなタイプのデータセットを含む製品をサブスクライブする方法の詳細については、以下を参照してください。

- [ファイルベースのデータを含む AWS Data Exchange 製品のサブスクライブとアクセス](#)
- [を含む AWS Data Exchange 製品のサブスクライブとアクセス APIs](#)
- [Amazon Redshift データセットを含む製品のサブスクリプションとアクセス AWS Data Exchange](#)
- [Amazon S3 データアクセスを含む AWS Data Exchange 製品のサブスクリプションとアクセス](#)

- [AWS Lake Formation データセットを含む製品のサブスクリプションとアクセス AWS Data Exchange \(プレビュー\)](#)

AWS Data Exchange 製品のサブスクリプションとアクセス

以下のトピックでは、AWS Data Exchange コンソールを使用して AWS Data Exchange 製品をサブスクライブおよびアクセスするプロセスについて説明します。

トピック

- [ファイルベースのデータを含む AWS Data Exchange 製品のサブスクライブとアクセス](#)
- [を含む AWS Data Exchange 製品のサブスクライブとアクセス APIs](#)
- [Amazon Redshift データセットを含む製品のサブスクリプションとアクセス AWS Data Exchange](#)
- [Amazon S3 データアクセスを含む AWS Data Exchange 製品のサブスクリプションとアクセス](#)
- [AWS Lake Formation データセットを含む製品のサブスクリプションとアクセス AWS Data Exchange \(プレビュー\)](#)
- [でのデータディクショナリの表示とダウンロード AWS Data Exchange](#)

Note

製品をサブスクライブすることで、お客様は、製品の使用に、料金情報やデータサブスクリプション契約 () を含むプロバイダーのオファー条件が適用されることに同意します DSA。また、プライバシー通知に従って、が取引に関する情報 (支払い条件と製品使用状況メトリクスを含む) を、必要に応じてそれぞれの販売者、再販業者、または基盤となるプロバイダーと共有 AWS できることに同意し、承認します。AWS は、を通じて、プロバイダーに代わって請求書を発行し、支払いを収集します AWS アカウント。 [AWS](#) お客様によるの使用 AWS のサービスには、お客様によるかかるサービスの使用 AWS を管理するための AWS カスタマーアグリーメントまたはその他の契約が適用されます。

ファイルベースのデータを含む AWS Data Exchange 製品のサブスクライブとアクセス

以下のトピックでは、にファイルとして保存されているファイルベースのデータを含む製品をサブスクライブおよびアクセスする完全なプロセスについて説明します AWS Data Exchange。このプロセスを完了するには、AWS Data Exchange コンソールを使用してください。

サブスクライブする前に製品を評価する方法については、「[データディクショナリとサンプルを含む製品を評価する](#)」を参照してください。

このプロセスには以下のステップがあります。

ステップ

- [フステップ 1: ファイルベースのデータが含まれる製品のサブスクライブ](#)
- [ステップ 2: ファイルベースのデータが含まれる製品にアクセスする](#)

ファイルベースのデータが含まれる製品のサブスクライブやアクセスについては、「[AWS Data Exchange ハートビート](#)」を参照してください。

フステップ 1: ファイルベースのデータが含まれる製品のサブスクライブ

有料製品をサブスクライブすると、AWS 請求額が請求されます。すべての権限を持つデータセットにアクセスできます。詳細については、「[で AWS Data Exchange のデータ製品のサブスクライブ AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

ファイルベースのデータが含まれる製品をサブスクライブするには

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) を開いてサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データ製品を検出] で [カタログを参照する] を選択します。
3. [結果の絞り込み] で [データセットタイプ] フィルタを使用して、[ファイル (Amazon S3 オブジェクト)] を選択し、ファイルベースのデータを含む製品を検索します。

詳細については、「[カタログを参照する](#)」を参照してください。

4. ファイル (Amazon S3 オブジェクト) を含むデータ製品を選択し、その製品の詳細ページを表示します。

製品詳細ページの情報には、製品の説明、プロバイダーの連絡先情報、および製品のパブリックオファーの詳細が含まれます。公開オファー情報には、料金と期間、データサブスクリプション契約 (DSA)、返金ポリシーが含まれます。製品に含まれるデータセットの名前と AWS リージョン、それらが利用可能な を表示できます。「類似製品」で製品を選択すると、引き続き他の製品詳細ページを閲覧できます。

プロバイダーがアカウントにカスタムオファーを発行した場合 ([プライベートオファー](#)や [Bring Your Own Subscription \(BYOS\) オファー](#)など)、これらの詳細も表示されます。

5. 右上隅にある [サブスクリプションを続行する] を選択します。
6. 希望する料金と期間の組み合わせを選択し、サブスクリプションの自動更新を有効にするかどうかを選択し、を含むオファーの詳細を確認します DSA。

Note

製品には、サブスクリプション検証が必要になるものもあります。詳細については、「[のサブスクライバーのサブスクリプション検証 AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

7. 料金情報を確認し、料金オファーを選択してから、[サブスクライブ] を選択します。

Note

有料製品をサブスクライブする場合は、サブスクライブする決定を確認するためのプロンプトが表示されます。

8. [サブスクリプションに含まれるデータセット] に、リストされているデータセットが表示されません。

サブスクリプションの処理が終了したら、データセットを選択して権限のあるデータにアクセスするか、[サブスクリプションを表示] を選択してサブスクリプションを表示できます。

9. (オプション) [エクスポートを設定] (オプション) では、エクスポートするリビジョンを含むデータセットのチェックボックスを選択します。データセットを選択すると、最近発行されたリビジョンがエクスポート用に準備されます。
 - a. [シンプル] オプションを選択して Amazon S3 バケットの場所を選択するか、[詳細] を選択して Amazon S3 キーの命名パターンを設定します。この選択で、リビジョンがエクスポートされる場所が決まります。キーパターンの使用に関する詳細については、「[リビジョンをエクスポートするときのキーパターン](#)」を参照してください。
 - b. [今後のリビジョンを自動エクスポート] では、リビジョンの自動エクスポートをオンにするかオフにするかを選択します。
 - オン — 今後のすべてのリビジョンがエクスポートされます。
 - オフ — 最新リビジョンが 1 回だけエクスポートされます。
 - c. [暗号化オプション] を選択して、[Amazon S3 の料金] を確認します。

Note

AWS Key Management Service (AWS KMS) 暗号化を使用してエクスポートする場合は、選択したで許可を作成および取り消すための正しい AWS Identity and Access Management (IAM) アクセス許可がアカウントにあることを確認してください AWS KMS key。これらの許可がない場合、自動エクスポートは失敗します。

- d. [エクスポート] を選択してデータを Amazon S3 にエクスポートします。後ほどエクスポートまたはダウンロードする場合は [スキップ] を選択します。サブスクライブ後にデータをエクスポートする方法の詳細については、「[\(オプション\) データのエクスポート](#)」を参照してください。

Note

[サブスクライブ] を選択してからサブスクリプションがアクティブになるまでは、数分かかる場合があります。サブスクリプションがアクティブになる前に [エクスポート] を選択すると、完了するまで待つように求められます。サブスクリプションがアクティブになると、エクスポートが開始されます。サブスクリプションがアクティブになる前にこのページから移動しても、サブスクリプションの処理は停止されませんが、データのエクスポートが行われなくなります。

ステップ 2: ファイルベースのデータが含まれる製品にアクセスする

製品を正常にサブスクライブすると、データサブスクリプション契約の条件 () に従って製品データセットにアクセスできます DSA。

次のトピックでは、ファイルベースのデータが含まれる製品にアクセスする方法について説明します。

データセット、リビジョン、アセットの表示

データセット、リビジョン、アセットを表示するには

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) を開いてサインインします。
2. 左側のナビゲーション ウィンドウで、[サブスクリプション] を選択し、製品を選択します。
3. [権限を持つデータセット] に、製品の一部であるデータセットが表示されます。

4. データセットを選択します。
5. データセットの概要、自動エクスポートジョブの宛先 (Amazon S3 製品のみ)、リビジョン、およびデータセットの説明を表示します。

詳細については、「[のデータ AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

6. リビジョンを選んでください。

リビジョンは、最新のものから古いものの順に一覧表示されます。

7. リビジョンの概要、アセット、実行されたジョブが表示されます。

ファイルベースのアセットのエクスポートに関する詳細については、「[サブスクライバーとしての S3 バケットへのアセットのエクスポート \(コンソール\)](#)」を参照してください。

(オプション) データのエクスポート

サブスクリプションがアクティブになった後は、エクスポートしたアセットを受け取るように Amazon S3 バケットを設定できます。

関連付けられたアセットを Amazon S3 にエクスポートすることも、署名付き でジョブを使用することもできますURL。

新しいリビジョンを取得するなど、後でデータをエクスポートまたはダウンロードする場合は、「[サブスクライバーとしての S3 バケットへのアセットのエクスポート \(コンソール\)](#)」を参照してください。

Important

データを Amazon S3 にエクスポートするときは、Amazon S3 のセキュリティ機能を検討することをお勧めします。一般的なガイドラインとベストプラクティスの詳細については、Amazon Simple Storage Service ユーザーガイドの「[Amazon S3 のセキュリティのベストプラクティス](#)」を参照してください。

データのエクスポート方法に関する詳細については、「[からのアセットのエクスポート AWS Data Exchange](#)」と「[からリビジョンをエクスポートする AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

を含む AWS Data Exchange 製品のサブスクライブとアクセス APIs

以下のトピックでは、AWS Data Exchange コンソール AWS Data Exchange を使用して APIs を含む製品をサブスクライブおよびアクセスする完全なプロセスについて説明します。

サブスクライブする前に製品を評価する方法については、「[データディクショナリとサンプルを含む製品を評価する](#)」を参照してください。

このプロセスには以下のステップがあります。

ステップ

- [ステップ 1: を含む製品のサブスクライブ APIs](#)
- [ステップ 2: API製品へのアクセス](#)

を含む製品のサブスクライブとアクセスを練習するには APIs、「」を参照してください [AWS Data Exchange 用 APIs \(テスト製品\)](#)。

ステップ 1: を含む製品のサブスクライブ APIs

有料製品をサブスクライブすると、AWS 請求額が請求されます。すべての権限を持つデータセットにアクセスできます。詳細については、「[で AWS Data Exchange のデータ製品のサブスクライブ AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

プロバイダーには、を含む製品の計測コストが含まれる場合があります APIs。プロバイダーが従量課金を引き下げると、その値下げは直ちに有効になります。プロバイダーが従量課金を引き上げる際にお客様が既存のサブスクライバーである場合は、値上げが提出されてから 90 日後、または更新時(どちらか早い方)に値上げが有効になります。価格変更が送信されると、既存のサブスクライバーにメールメッセージが送信されます。

Example

例えば、プロバイダーが 5 月 10 日に従量課金の値上げを提出したとします。既存のサブスクライバーには、価格変更に関する電子メールメッセージが届きます。値上げは 9 月 1 日に発効します。

を含む製品をサブスクライブするには APIs

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) を開いてサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データ製品を検出] で [カタログを参照する] を選択します。

詳細については、「[カタログを参照](#)」を参照してください。

- 「結果の絞り込み」で、データセットタイプフィルターを使用して API を選択して、を含む製品を検索します APIs。

詳細については、「[カタログを参照](#)」を参照してください。

- を含む製品を選択し APIs、その製品の詳細ページを表示します。

製品詳細ページの情報には、製品の説明、プロバイダーの連絡先情報、および製品のパブリックオファーの詳細が含まれます。公開オファー情報には、料金と期間、計測コスト (含まれている場合)、データサブスクリプション契約 (DSA)、返金ポリシーが含まれます。製品に含まれるデータセットの名前と AWS リージョン、それらが利用可能な を表示できます。「類似製品」で製品を選択すると、引き続き他の製品詳細ページを閲覧できます。

プロバイダーがアカウントにカスタムオファーを発行した場合 ([プライベートオファー](#)や [Bring Your Own Subscription \(BYOS\) オファー](#)など)、これらの詳細も表示されます。

- 「パブリックオファーAPI」で、計測コストを表示します (含まれている場合)。
 - (オプション) [従量課金計算ツール] で [従量課金の選択] を選択してユニット数を入力すると、費用の例が表示されます。
- 右上隅にある [サブスクリプションを続行する] を選択します。
 - 希望する料金と期間の組み合わせを選択し、サブスクリプションの自動更新を有効にするかどうかを選択し、を含むオファーの詳細を確認します DSA。

Note

製品には、サブスクリプション検証が必要になるものもあります。詳細については、「[のサブスクライバーのサブスクリプション検証 AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

- 料金情報を確認し、料金オファーを選択してから、[サブスクライブ] を選択します。

Note

有料製品をサブスクライブする場合は、サブスクライブする決定を確認するためのプロンプトが表示されます。

8. [サブスクリプションに含まれるデータセット] に、リストされているデータセットが表示されません。

サブスクリプションの処理が終了したら、データセットを選択して権限のあるデータにアクセスするか、[サブスクリプションを表示] を選択してサブスクリプションを表示できます。

ステップ 2: API製品へのアクセス

以下のトピックでは、APIデータセットを含む製品にアクセスする方法について詳しく説明します。

トピック

- [API の表示](#)
- [API 仕様のダウンロード](#)
- [API 通話の発信 \(コンソール\)](#)
- [API 電話をかける \(AWS CLI\)](#)

API の表示

を表示するには API

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) を開いてサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [マイサブスクリプション] で [権限を持つデータ] を選択します。
3. データセットを選択します。
4. [リビジョン] タブで、リビジョンを選択します。
5. API アセット で、 を選択しますAPI。
6. アセットの概要を表示します。
7. 統合ノートガイダンスに従って を呼び出しますAPI。

API 仕様のダウンロード

API 仕様をダウンロードするには

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) を開いてサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [マイサブスクリプション] で [権限を持つデータ] を選択します。

3. データセットを選択します。
4. [リビジョン] タブで、リビジョンを選択します。
5. API アセット で、 を選択しますAPI。
6. OpenAPI 3.0 仕様 で、API仕様のダウンロード を選択します。

お使いのローカルコンピュータに仕様ダウンロードされます。その後、アセットをサードパーティーのツールにエクスポートしてSDK生成できます。

API 通話の発信 (コンソール)

AWS Data Exchange コンソールで 1 つのエンドポイント呼び出すことができます。

コンソールからAPI電話をかけるには

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) を開いてサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [マイサブスクリプション] で [権限を持つデータ] を選択します。
3. データセットを選択します。
4. [リビジョン] タブで、リビジョンを選択します。
5. API アセット で、 を選択しますAPI。
6. [統合に関する注意事項] で以下を実行します。
 - a. ベース URLを使用するには、コピーを選択します。
 - b. [コピー] を選択して [コード構造] を使用します。
 - c. 仕様ドキュメントに記載されている情報に従って を呼び出しますAPI。

API 電話をかける (AWS CLI)

API 電話をかけるには (AWS CLI)

- send-api-asset コマンドを使用して を呼び出しますAPI。

```
$ aws dataexchange send-api-asset \  
  --asset-id $ASSET_ID \  
  --data-set-id $DATA_SET_ID \  
  --revision-id $REVISION_ID \  
  --body "... " \  
  --
```

```
{
  "headers": {
    ...
  },
  "body": "...
}
```

Amazon Redshift データセットを含む製品のサブスクリプションとアクセス AWS Data Exchange

サブスクライバーのための概要

Amazon Redshift データセットは、Amazon Redshift AWS Data Exchange のデータ共有を含むデータセットです。データ共有は、プロバイダーがデータ共有に追加するテーブル、ビュー、スキーマ、およびユーザー定義の関数に対する読み取り専用アクセス権を付与します。

データサブスクライバーは、Amazon Redshift データセットが含まれる製品を検索してサブスクライブできます。サブスクリプションが開始されると、データを抽出、変換、およびロードすることなく Amazon Redshift 内のデータをクエリするための読み取り専用アクセス権を取得します。サブスクリプションの有効期限が切れると、製品のデータ共有へのアクセス権を失います。

以下の点を考慮します。

- サブスクリプションを開始してからデータ共有にアクセスできるようになるまで数分かかる場合があります。

以下のセクションでは、AWS Data Exchange コンソール AWS Data Exchange を使用して Amazon Redshift データ共有製品サブスクライバーになるための完全なプロセスについて説明します。

サブスクライブする前に製品を評価する方法については、「[データディクショナリとサンプルを含む製品を評価する](#)」を参照してください。

このプロセスには以下のステップがあります。

ステップ

- [ステップ 1: Amazon Redshift データセットが含まれる製品をサブスクライブする](#)
- [ステップ 2: Amazon Redshift AWS Data Exchange のデータ共有へのアクセス](#)

Amazon Redshift データセットを含む製品のサブスクライブとアクセスについては、「[でのワールドワイドイベント出席 \(テスト製品\) AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

ステップ 1: Amazon Redshift データセットが含まれる製品をサブスクライブする

有料製品をサブスクライブすると、AWS 請求額が請求されます。製品に含まれるすべてのデータセットにアクセスできます。詳細については、「[で AWS Data Exchange のデータ製品のサブスクライブ AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

Amazon Redshift データセットが含まれる製品をサブスクライブする

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) を開いてサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データ製品を検出] で [カタログを参照する] を選択します。

詳細については、「[カタログを参照する](#)」を参照してください。

3. [結果の絞り込み] で [データセットタイプ] フィルターを使用し、[Amazon Redshift] を選択して Amazon Redshift データ共有を含む製品を検索します。

詳細については、「[カタログを参照する](#)」を参照してください。

4. 製品を選択し、その製品詳細ページを表示します。

製品詳細ページの情報には、製品の説明、プロバイダーの連絡先情報、および製品のパブリックオファーの詳細が含まれます。公開オファー情報には、料金と期間、データサブスクリプション契約 (DSA)、返金ポリシーが含まれます。製品に含まれるデータセットの名前と AWS リージョン、それらが利用可能な を表示できます。「類似製品」で製品を選択すると、引き続き他の製品詳細ページを閲覧できます。

プロバイダーがアカウントにカスタムオファーを発行した場合 ([プライベートオファー](#) や [Bring Your Own Subscription \(BYOS\) オファー](#) など)、その詳細も表示されます。

 Important

クラスターのメンテナンスウィンドウの日付、時刻、および継続時間を確認するようにしてください。メンテナンスウィンドウ中は、データ共有にアクセスできません。

5. 右上隅にある [サブスクリプションを続行する] を選択します。
6. [製品オファー]、[サブスクリプション条件]、オファーに含まれる [データセット]、および [サポート情報] を確認します。

7. サブスクリプションについて [オファアの自動更新] を有効にするかどうかを選択します。

Note

製品には、サブスクリプション検証が必要になるものもあります。詳細については、「[「のサブスクライバーのサブスクリプション検証 AWS Data Exchange」](#)」を参照してください。

8. [サブスクライブ] を選択します。

Note

有料製品をサブスクライブする場合は、サブスクライブする決定を確認するためのプロンプトが表示されます。

9. [サブスクリプションに含まれるデータセット] に、リストされているデータセットが表示されず。

サブスクリプションの処理が終了したら、データセットを選択して権限のあるデータにアクセスするか、[サブスクリプションを表示] を選択してサブスクリプションを表示できます。

ステップ 2: Amazon Redshift AWS Data Exchange のデータ共有へのアクセス

データサブスクリプション契約の条件 () に従って、製品のデータセットにアクセスできます DSA。サブスクライバーとして、Amazon Redshift AWS Data Exchange のデータ共有を含む製品のサブスクリプションにより、データ共有内のテーブル、ビュー、スキーマ、および関数への読み取り専用アクセスが可能になります。

サブスクリプションを使用すると、以下が可能になります。

- データを抽出、変換、またはロードすることなくクエリする。
- プロバイダーが更新すると同時に最新のプロバイダーデータにアクセスする。

詳細については、「[「Amazon Redshift データベースデベロッパーガイド」](#)」の [AWS Data Exchange 「データ共有の使用」](#) を参照してください。

Note

サブスクリプションの有効期限が切れると、製品のデータ共有へのアクセス権を失います。

Amazon Redshift データセットをサブスクライブする方法の詳細については、「[でのワールドワイドイベント出席 \(テスト製品\) AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

Amazon S3 データアクセスを含む AWS Data Exchange 製品のサブスクリプションとアクセス

AWS Data Exchange for Amazon S3 を使用すると、データサブスクライバーはデータプロバイダーの Amazon S3 バケットから直接サードパーティーのデータファイルにアクセスできます。

データサブスクライバーとして、Amazon S3 データセット AWS Data Exchange の の権限を取得したら、Amazon Athena、 SageMaker Feature Store、Amazon AWS のサービス などの を使用して、Amazon S3 バケット内のプロバイダーのデータEMRを直接使用してデータ分析を開始できます。

以下の点を考慮します。

- プロバイダーは、提供されたデータをホストする Amazon S3 バケットで Amazon S3 の機能であるリクエスト支払いを有効にすることができます。有効にすると、サブスクライバーは Amazon S3 バケットに対するデータの読み取り、使用、転送、エクスポート、またはコピーに対して料金を支払います。詳細については、「Amazon S3 ユーザーガイド」の「[ストレージ転送と使用量のリクエスト支払いバケットの使用](#)」を参照してください。
- AWS Data Exchange for Amazon S3 データ製品をサブスクライブすると、 は Amazon S3 アクセスポイント AWS Data Exchange を自動的にプロビジョニングし、そのリソースポリシーを更新して読み取り専用アクセスを許可します。Amazon S3 Access Points は、Amazon S3 バケットへのデータ共有を簡素化する Amazon S3 の機能です。詳細については、Amazon Simple Storage Service ユーザーガイドの「[Amazon S3 アクセスポイントを使用したデータアクセスの管理](#)」を参照してください。
- Amazon S3 アクセスポイントの Amazon リソースネーム (ARN) またはエイリアスを使用して共有データにアクセスする前に、IAMアクセス許可を更新する必要があります。現在のロールとその関連ポリシーで、プロバイダーの Amazon S3 バケットと AWS Data Exchangeが提供する Amazon S3 Access Points への GetObject および ListBucket 呼び出しが許可されていることを確認できます。

以下のセクションでは、AWS Data Exchange コンソールを使用して Amazon S3 サブスクライバー AWS Data Exchange の になるための完全なプロセスについて説明します。

このプロセスには以下のステップがあります。

ステップ

- [ステップ 1: Amazon S3 データアクセスを含む製品のサブスクリプション](#)
- [ステップ 2: Amazon S3 データアクセスを含む製品にアクセスする](#)

ステップ 1: Amazon S3 データアクセスを含む製品のサブスクリプション

有料製品をサブスクリプションすると、AWS 請求額が請求されます。製品に含まれるすべてのデータセットにアクセスできます。詳細については、「[で AWS Data Exchange のデータ製品のサブスクリプション AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

Amazon S3 へのアクセスが含まれる製品をサブスクリプションする

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) を開いてサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データ製品を検出] で [カタログを参照する] を選択します。

詳細については、「[カタログを参照する](#)」を参照してください。

3. [結果の絞り込み] で、[データセットタイプ] フィルタを使用して [Amazon S3 へのアクセス] を選択し、Amazon S3 データへのアクセスを含む製品を検索します。

詳細については、「[カタログを参照する](#)」を参照してください。

4. 製品を選択し、その製品詳細ページを表示します。

製品詳細ページの情報には、製品の説明、プロバイダーの連絡先情報、および製品のパブリックオファーの詳細が含まれます。公開オファー情報には、料金と期間、データサブスクリプション契約 (DSA)、返金ポリシーが含まれます。製品に含まれるデータセットの名前と AWS リージョン、それらが利用可能な を表示できます。「類似製品」で製品を選択すると、引き続き他の製品詳細ページを閲覧できます。

プロバイダーがアカウントにカスタムオファーを発行した場合 ([プライベートオファー](#)や [Bring Your Own Subscription \(BYOS\) オファー](#)など)、その詳細も表示されます。

5. 右上隅にある [サブスクリプションを続行する] を選択します。

6. [製品オファー]、[サブスクリプション条件]、オファーに含まれる [データセット]、および [サポート情報] を確認します。
7. サブスクリプションについて [オファーの自動更新] を有効にするかどうかを選択します。

Note

製品には、サブスクリプション検証が必要になるものもあります。詳細については、「[のサブスクライバーのサブスクリプション検証 AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

8. [サブスクライブ] を選択します。

Note

有料製品をサブスクライブする場合は、サブスクライブする決定を確認するためのプロンプトが表示されます。

9. [サブスクリプションに含まれるデータセット] に、リストされているデータセットが表示されません。

サブスクリプションの処理が終了したら、データセットを選択して権限のあるデータにアクセスするか、[サブスクリプション]を表示を選択してサブスクリプションを表示できます。

ステップ 2: Amazon S3 データアクセスを含む製品にアクセスする

独自の Amazon S3 バケットを設定したり、データファイルを Amazon S3 バケットにコピーしたり、関連するストレージ料金を支払ったりすることなく、クエリを実行してデータをインプレースで分析できます。データプロバイダーが管理しているのと同じ Amazon S3 オブジェクトにアクセスして、利用可能な最新のデータを使用できます。

サブスクリプションを使用すると、以下が可能になります。

- Amazon S3 バケットを個別に設定したり、ファイルをコピーしたり、ストレージ料金を支払ったりすることなく、データを分析できます。
- プロバイダーが更新すると同時に最新のプロバイダーデータにアクセスする。

データセット、リビジョン、アセットを表示するには

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) を開いてサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [マイサブスクリプション] で [権限を持つデータ] を選択します。
3. 「権利付与データ」ページで、製品を展開してデータセットを選択します。
4. データセットの概要を表示します。

Note

提供されたデータは、プロバイダーの Amazon S3 バケットに保存されます。このデータにアクセスする場合、プロバイダーが別途指定しない限り、リクエストの費用とプロバイダーの Amazon S3 バケットからダウンロードされたデータの費用を負担する必要があります。

5. 開始する前に、ロールには、権限のある Amazon S3 データアクセスを使用する IAM ためのアクセス許可が必要です。データセットの概要ページの Amazon S3 データアクセスタブで、アクセス IAM 許可の検証を選択して、ロールにデータにアクセスするための正しいアクセス許可があるかどうかを確認します。
6. 必要な IAM アクセス許可がある場合は、表示される IAM ポリシープロンプトで次へを選択します。必要なアクセス許可がない場合は、プロンプトに従ってユーザーまたはロールに JSON ポリシーを埋め込みます。
7. 共有ロケーションを確認して、Amazon S3 バケット、またはプロバイダーが共有するプレフィックスとオブジェクトを確認してください。Amazon S3 アクセスポイント情報のデータアクセス情報を確認して、プロバイダーがリクエスト支払いを有効にしているかどうかを判断します。
8. [共有 Amazon S3 ロケーションを参照] を選択すると、プロバイダーの Amazon S3 バケット、プレフィックス、共有オブジェクトを表示および確認できます。
9. Amazon S3 バケット名を使用する場所ならどこでも アクセスポイント エイリアスを使用して、資格のあるデータにプログラムでアクセスできます。詳細については、Amazon Simple Storage Service ユーザーガイドの「[互換性のある Amazon S3 オペレーションでのアクセスポイントの使用](#)」を参照してください。
10. (オプション) プロバイダーの で暗号化されたデータを含む Amazon S3 データアクセスデータセットのエンタイトルメントを取得すると AWS KMS key、サブスクライバーコンソール ARN で KMS キーを表示できます。は、暗号化されたデータにアクセスできるように、キーに対する AWS KMS 許可 AWS Data Exchange を作成します。権限を取得した Amazon S3 アクセスポイ

ントから暗号化されたデータを読み取るには、KMSキーに対するkms:DecryptIAMアクセス許可を取得する必要があります。次のIAMポリシーステートメントから選択できます。

- a. IAM ユーザーが任意のKMSキーを使用してデータを復号または暗号化できるようにするポリシー。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "kms:Decrypt"
      ],
      "Resource": [
        "*"
      ]
    }
  ]
}
```

- b. IAM ポリシーにより、ユーザーはサブスクライバーコンソールARNsに表示される正確なKMSキーを指定できます。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "kms:Decrypt"
      ],
      "Resource": [
        "<KMS key Arn from subscriber's console>"
      ]
    }
  ]
}
```

Note

AWS KMS 許可は、オペレーションが最終的な一貫性を達成するまでに最大 5 分かかる場合があります。これが完了するまでは、Amazon S3 データアクセスデータセットにアクセスできない場合があります。詳細については、「AWS Key Management Service デベロッパーガイド」の「[AWS KMSの許可](#)」を参照してください。

Amazon S3 データセットをサブスクライブする方法の詳細については、「[the section called “Amazon S3 データアクセスの抑制”](#)」を参照してください。

AWS Lake Formation データセットを含む製品のサブスクリプションとアクセス AWS Data Exchange (プレビュー)

AWS Lake Formation データセットは、AWS Lake Formation データアクセス許可アセットを含むデータセットです。

データサブスクライバーは、AWS Lake Formation データセットを含む製品を検索してサブスクライブできます。AWS Lake Formation データセット AWS Data Exchange に対する権限が付与されたら、AWS アカウント を使用して 内のデータ、または AWS を使用して組織全体のデータへのアクセスをクエリ、変換 AWS Lake Formation、共有できます AWS License Manager。

ステップ 1: AWS Lake Formation データセットを含む製品のサブスクライブ

有料製品をサブスクライブすると、AWS 請求額が請求されます。製品に含まれるすべてのデータセットにアクセスできます。詳細については、「[で AWS Data Exchange のデータ製品のサブスクライブ AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

AWS Lake Formation データセットを含む製品をサブスクライブするには

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) を開いてサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データ製品を検出] で [カタログを参照する] を選択します。

詳細については、「[カタログを参照](#)」を参照してください。

3. 「結果の絞り込み」で、データセットタイプフィルターを使用して を選択しAWS Lake Formation、AWS Lake Formation データセットを含む製品を検索します。
4. 製品を選択し、その製品詳細ページを表示します。

製品詳細ページの情報には、製品の説明、プロバイダーの連絡先情報、および製品のパブリックオファーの詳細が含まれます。公開オファー情報には、料金と期間、データサブスクリプション契約 (DSA)、返金ポリシーが含まれます。製品に含まれるデータセットの名前と、それらAWS リージョン が利用可能な を表示できます。[類似商品] で商品を選択することで、他の商品詳細ページを引き続き閲覧することもできます。

プロバイダーがアカウントにカスタムオファーを発行した場合 ([プライベートオファー](#)や [Bring Your Own Subscription \(BYOS\) オファー](#)など)、その詳細も表示されます。

5. 右上隅にある [サブスクリプションを続行する] を選択します。
6. [製品オファー]、[サブスクリプション条件]、オファーに含まれる [データセット]、および [サポート情報] を確認します。
7. サブスクリプションについて [オファーの自動更新] を有効にするかどうかを選択します。

Note

製品には、サブスクリプション検証が必要になるものもあります。詳細については、「[のサブスクライバーのサブスクリプション検証 AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

8. [サブスクライブ] を選択します。有料製品をサブスクライブする場合は、サブスクライブする決定を確認するためのプロンプトが表示されます。
9. [サブスクリプションに含まれるデータセット] に、リストされているデータセットが表示されます。

サブスクリプションの処理が終了したら、データセットを選択して権限のあるデータにアクセスするか、[サブスクリプションを表示] を選択してサブスクリプションを表示できます。

ステップ 2: のデータ AWS Data Exchange 共有へのアクセス AWS Lake Formation

AWS Lake Formation データセットを含む製品をサブスクライブした後、Amazon Athena などの Lake Formation 互換クエリエンジンを使用してデータをクエリできます。

サブスクライブが完了したら、以下を実行する必要があります。

1. 製品をサブスクライブしてから 12 時間以内に AWS Resource Access Manager (AWS RAM) 共有を受け入れます。AWS RAM 共有は、サブスクリプションページまたは AWS Data Exchange コンソールのデータアクセス許可データセットのエンタイトルメントを付与された AWS Lake Formation データページから承諾できます。AWS RAM 共有を受け入れる必要があるのは、プロバイダーごとに 1 回のみです。からリソース共有の招待を受け入れる方法の詳細については AWS RAM、[「からリソース共有の招待を受け入れる AWS RAM」](#) を参照してください。
2. 新しい共有リソースに移動 AWS Lake Formation し、リソースリンクを作成します。
3. Athena または他の AWS Lake Formation 互換性のあるクエリエンジンに移動して、データをクエリします。

でのデータディクショナリの表示とダウンロード AWS Data Exchange

プロバイダーは、すべての AWS Data Exchange 製品にデータディクショナリをアタッチできます。次の手順では、データディクショナリを表示しダウンロードする方法について説明します。

データディクショナリおよびサンプルの詳細については、[「データディクショナリ、サンプル」](#) を参照してください。

データディクショナリを表示してダウンロードするには

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) を開いてサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [マイサブスクリプション] で [権限を持つデータ] を選択します。
3. 「権限を持つデータ」ページで、製品を展開してデータセットを選択します。
4. データセットの詳細ページで、[データディクショナリ] タブを選択します。
 - データディクショナリは [データディクショナリ] タブに表示されます。
 - [ダウンロード] を選択してデータディクショナリをダウンロードし、ファイルをコンピューターに保存します。

のサブスクライバーのサブスクリプション検証 AWS Data Exchange

コンプライアンスや規制上の理由など、さまざまな理由で、一部のデータプロバイダーはサブスクリプション検証を使用して AWS Data Exchange 製品へのアクセスを制限することを選択する場合があります。これらのデータ製品をサブスクライブするときは、身元に関する追加情報と、想定されているユースケースに関する追加情報を提供する必要があります。プロバイダーは、この情報を確認してからサブスクリプションを承認します。一般提供されている製品で個人を特定できるデータが含まれているものには、サブスクリプション検証が必要になります。

トピック

- [でサブスクリプションリクエストを完了する AWS Data Exchange](#)
- [保留中の AWS Data Exchange サブスクリプションリクエストの確認](#)
- [でサブスクリプションを検証するための E メール通知 AWS Data Exchange](#)

でサブスクリプションリクエストを完了する AWS Data Exchange

サブスクリプションの検証が必要な AWS Data Exchange 製品の場合、製品ページでサブスクリプションの継続を選択すると、サブスクリプションリクエストの完了ページが表示されます。この製品をサブスクリプションする前に、リクエストを完了する必要があります。

サブスクリプションリクエストを完了する

1. 「サブスクリプションリクエストの完了」ページで、製品オファーを確認して選択します (複数のオファーがある場合)。
2. サブスクリプション条件、含まれているデータセット、サポート情報、返金ポリシーを確認してください。
3. オファーの有効期限が切れたときに自動的に更新するかどうかを選択します。
4. サブスクリプションリクエストフォーム に次の情報を入力します。
 - AWS アカウント ID (自動的に追加)
 - 会社名
 - 氏名
 - E メールアドレス

- データ製品に対して想定されているユースケースと、プロバイダーがサブスクリプションリクエストを審査する時に役立つと思われるその他コメント。

5. [サブスクリプションリクエストをプロバイダーに送信] を選択します。

リクエストを送信すると、プロバイダーが最長で 45 日以内にリクエストを承認または拒否します。

保留中の AWS Data Exchange サブスクリプションリクエストの確認

保留中の AWS Data Exchange サブスクリプションリクエストを確認するには

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) を開いてサインインします。
2. [サブスクリプション] を選択します。
3. [サブスクリプションリクエスト] を選択します。
4. 保留中のサブスクリプションリクエストのステータスを確認する

各サブスクリプションリクエストは、その ID で一意に識別されます。ID は、プロバイダーとサブスクライバーの両方に表示されます。サブスクリプションリクエスト ID は、プロバイダーとの通信でリクエストを特定するために使用できます。

プロバイダーがリクエストを承認すると、そのサブスクリプションが [サブスクリプション] ページに表示されます。

Note

保留中のサブスクリプションリクエストは、有効期限が切れている、または既に処理済みである場合を除き、いつでもキャンセルできます。

でサブスクリプションを検証するための E メール通知 AWS Data Exchange

リクエストが承認、拒否、または期限切れになると、AWS アカウント E メールアドレスに E メール通知が送信されます。サブスクリプションリクエストのステータス変更のほとんどは E メールで通知されますが、これらの Eメールの送信はベストエフォートベースで行われます。

Note

リクエスト者自身が開始したサブスクリプションリクエストのステータス変更 (サブスクリプションのキャンセルなど) に関する E メール通知は送信されません。

組織での AWS Data Exchange ライセンスサブスクリプションの共有

AWS Data Exchange 製品をサブスクライブすると、それらの製品を使用するためのライセンスを付与する契約が作成されます。AWS アカウント が組織のメンバーである場合は、製品のライセンスをその組織内の AWS Data Exchange 他のアカウントと共有できます。

Note

の詳細については AWS Organizations、[AWS Organizations 「ユーザーガイド」](#) を参照してください。

以下のトピックで、アカウント間でライセンスを共有するプロセスの概要を説明します。

トピック

- [ライセンス共有の前提条件](#)
- [ライセンスの表示](#)
- [ライセンスの共有](#)

ライセンス共有の前提条件

データ製品のライセンスを共有する前に、まず組織のライセンス共有をセットアップする必要があります。以下のタスクを完了して、組織のライセンス共有をセットアップしてください。

- ライセンスを購入または共有するときに、関連するライセンス許可を作成できるように、ユーザーに代わってライセンスを管理する AWS Marketplace アクセス許可を付与します。詳細については、「[購入者ガイド](#)」の [AWS 「Marketplace のサービスにリンクされたロール」](#) を参照してください。AWS Marketplace

- AWS License Manager 初めて使用するために を設定します。詳細については、「AWS License Manager ユーザーガイド」の「[AWS License Managerの使用開始](#)」を参照してください。

ライセンスの表示

以下のトピックで、ライセンスを表示するプロセスの概要を説明します。

トピック

- [すべてのライセンスの表示](#)
- [単一のライセンスの表示](#)

すべてのライセンスの表示

AWS License Manager コンソールを使用して、購入した AWS Data Exchange 製品のすべてのライセンスを表示できます。

サブスクリブした製品のすべてのライセンスを表示する

1. [AWS マネジメントコンソール](#)にサインインします。
2. [AWS License Manager コンソール](#)を開きます。
3. 左側のナビゲーションペインで [Granted licenses] (付与されたライセンス) を選択します。
4. サブスクリブした製品のすべてのライセンスを表示します。

単一のライセンスの表示

AWS Data Exchange コンソールを使用して、購入した AWS Data Exchange 製品の単一のライセンスを表示できます。

単一のサブスクリプションのライセンスを表示する

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. [My subscriptions] (マイサブスクリプション) で [Subscription] (サブスクリプション) を選択します。
3. サブスクリプションを選択します。
4. [License] (ライセンス) の下にあるリンクを選択します。

5. [License detail] (ライセンスの詳細) ページで詳細を確認します。

ライセンスの共有

AWS License Managerを使用することで、ライセンスを管理し、組織内の他のアカウントとライセンスを共有することができます。

AWS マネージドライセンスで License Manager を使用方法の詳細については、AWS License Manager 「ユーザーガイド」の [「付与されたライセンス」](#)と [「販売者が発行したライセンス」](#)を参照してください。

での Bring Your Own Subscription (BYOS) オファ어의承諾 AWS Data Exchange

サブスクリイバーには、既存のデータサブスクリプションを AWS Data Exchangeに移行することが推奨されます。独自のサブスクリプション (BYOS) 機能を使用すると、参加しているデータプロバイダーとの既存のサブスクリプションを追加料金なしで移行して実行できます。

BYOS オフア어では、プロバイダーとサブスクリイバー間の請求関係は継続されます。BYOS オフア어にはフルフィルメント料金は適用されません。サブスクリイバーは、フルフィルメント料金なしでサブスクリプションの AWS Marketplace 請求書を受け取ります。

サブスクリプションライフサイクルは の外部で開始されるため AWS Data Exchange、既存のサブスクリプションを AWS Data Exchange に移行するためのワークフローには、プロバイダーとサブスクリイバー間のコラボレーションBYOSが必要です。

Important

BYOS オフア어では、この製品が使用可能になる前のサブスクリプションを移行します AWS。既存のサブスクリプション契約でBYOSオフア어를検証する AWS 可能性があります。がBYOSオフア어를検証 AWS できない場合、オフア어とエンタイトルメントは予告なく取り消すことができます。

でBYOSオフア어를作成または承諾する前に AWS Data Exchange、プロバイダーとサブスクリイバーは一緒に次の手順を実行する必要があります。

前提条件

1. プロバイダーとサブスクリイバーは、BYOS AWS Data Exchange ソリューションの実装について相互に連絡します。
2. サブスクリイバーは、でデータ製品をサブスクライブするために使用する AWS アカウント ID を提供します AWS Data Exchange。

サブスクリイバーは、次のようにBYOSオファーを受け入れます。

BYOS オファーを受け入れるには

1. AWS Data Exchange コンソールにサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインの [データ製品の検出] で [製品オファー] を選択します。
3. サブスクライブするオファーを選択します。ページの上部にあるフィルターを使用して、[すべての製品]、[プライベート製品]、および [パブリック製品] のいずれかを選択できます。
4. [サブスクリプションを続行する] を選択します。
5. オファーの条件、データサブスクリプション契約、および含まれているデータセットを確認します。
6. オファーの条件に同意する場合は、確認内容を見直して同意し、[サブスクライブ] を選択します。

でのプライベート製品とオファーの受け入れ AWS Data Exchange

データプロバイダーは、一般公開 AWS Data Exchange されていない で製品を提供するか、公開されているオファー条件とは異なる条件で製品を提供することができます。プライベートオファーは、料金、期間、支払いスケジュール、データサブスクリプション契約、または払い戻しポリシーなどの面でパブリックオファーとは異なるものにすることができます。

Note

Bring Your Own Subscription (BYOS) オファーとは異なり、プライベートオファーは、での製品の可用性より前の既存のサブスクリプションに基づく必要はありません AWS Data Exchange。

プロバイダーは、オファーをターゲットにするために、AWS アカウント ID のカスタムオファーを作成する必要があります。プライベートオファーが提供されていない場合は、パブリックオファーの詳細ページにある連絡先情報を使用してプロバイダーに連絡することで、プライベートオファーをリクエストできます。

サブスクライバーは、以下のようにプライベートオファーを受諾できます。

プライベートオファーを受諾する

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインの [データ製品の検出] で [製品オファー] を選択します。
3. リスト内で、探している製品オファーを検索します。ページの上で [All products] (すべての製品)、[Private products] (プライベート製品)、および [Public products] (パブリック製品) のいずれかを選択して、フィルタリングできます。
4. サブスクライブするオファーを選択します。
 - a. カスタムオファー で、API計測コストを表示します (含まれている場合)。
 - b. (オプション) 従量制コスト計算ツールで [従量制コストを選択] を選択し、コストの例を表示するユニット数を入力します。
5. [サブスクリプションを続行する] を選択します。
6. オファーの条件、支払いスケジュール、データサブスクリプション契約、および含まれているデータセットを確認します。

 Note

複数支払いスケジュールが設定されたプライベートオファーを受諾するには、請求書払いを使用する必要があります。請求書払いに切り替えたい場合は、[サポートチケットを作成](#)できます。

複数支払いスケジュールが設定されたプライベートオファーは、自動更新の対象にはなりません。

7. オファーの条件に同意する場合は、確認内容を見直して同意し、[Subscribe] (サブスクライブ) を選択します。

Note

アカウントには、支払いスケジュールで指定された日付に従って自動的に請求が行われます。

AWS Data Exchange サブスクリプションの管理

以下のトピックでは、でサブスクリプションを管理する方法について説明します AWS Data Exchange。

トピック

- [AWS Data Exchange サブスクリプションの表示](#)
- [でサブスクリプションの自動更新をオンまたはオフにする AWS Data Exchange](#)
- [AWS Data Exchange 製品からのサブスクリプション解除](#)

AWS Data Exchange サブスクリプションの表示

AWS Data Exchange コンソールからサブスクリプションを表示します。

スクリプションを表示するには

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) を開いてサインインします。
2. 左のナビゲーションペインで、[サブスクリプション] を選択します。
3. サブスクリプションのリストを表示します。

でサブスクリプションの自動更新をオンまたはオフにする AWS Data Exchange

AWS Data Exchange コンソールを使用してサブスクリプションの自動更新を管理します。

サブスクリプションの自動更新をオンまたはオフにするには

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) を開いてサインインします。
2. 左側のナビゲーション ウィンドウで、[サブスクリプション] を選択し、製品を選択します。

- 商品詳細ページの [更新条件] で、[自動更新] をオンにするか、[自動更新] をオフにします。

更新設定を更新したことを確認する成功メッセージが表示されます。

AWS Data Exchange 製品からのサブスクリプション解除

AWS Data Exchange コンソールを使用して、データ製品のサブスクライブを解除します。

Note

サブスクリプションの即時削除が必要な場合は、を使用して AWS Data Exchange カスタマーサポートにお問い合わせください [AWS Support Center Console](#)。

製品のサブスクリプションを解除する

- [AWS Data Exchange コンソール](#) を開いてサインインします。
- 左側のナビゲーションペインにある [マイサブスクリプション] で [サブスクリプション] を選択します。
- 解除するサブスクリプションを選択します。
- [更新条件] で、[自動更新有効] オプションをオフにします。
- その後はデータをエクスポートせず、サブスクリプションの有効期限が切れるまでそのままにしておきます。

Note

有料製品については、プロバイダーの返金ポリシーを参照してください。例外については、プロバイダーにお問い合わせください。

とのやり取りについて学ぶための製品 AWS Data Exchange

AWS Data Exchange では、Data Exchange AWS データ製品をサブスクライバーがサブスクライブして操作する方法を理解するのに役立つ以下の製品を提供しています。

トピック

- [AWS Data Exchange ハートビート](#)

- [AWS Data Exchange 用 APIs \(テスト製品\)](#)
- [でのワールドワイドイベント出席 \(テスト製品\) AWS Data Exchange](#)
- [AWS Data Exchange 用 AWS Lake Formation \(テスト製品\) \(プレビュー\)](#)
- [AWS Data Exchange for Amazon S3 \(テスト製品\)](#)
- [AWS Data Exchange プロバイダー生成通知 \(テスト製品\)](#)

AWS Data Exchange ハートビート

AWS Data Exchange Heartbeat (テスト製品) は、サブスクライバーが製品サブスクリプションの操作方法を理解するために使用できる無料の AWS Data Exchange 製品です。テスト目的や、AWS Data Exchange API および の概念に慣れるために使用できます。

AWS Data Exchange Heartbeat には、Heartbeat という名前のデータセットが 1 つ含まれています。このデータセットには、約 15 分ごとに新しいリビジョンが発行されます。

リビジョンのコンテンツ例

新しいリビジョンにはそれぞれ 2 つのアセットが含まれています。

- エポックアセット
- マニフェストアセット

エポックアセット

各 AWS Data Exchange Heartbeat リビジョンには、単一の配列を含む Amazon Simple Storage Service (Amazon S3) オブジェクトの JSON ファイルが含まれています。配列の名前は `TimestampsSinceLastRevision`、その値は前回のリビジョンから経過した各 UNIX Epoch 秒のリストです。

アセットの名前の形態は `Epoch{start}-{end}.json` で、`{start}` と `{end}` はリビジョンが適用される期間に対応するエポック秒を表します。

マニフェストアセット

各 AWS Data Exchange Heartbeat リビジョンには、リビジョンと Epoch アセット JSON ファイルのスキーマに関するメタデータを含む JSON ファイル S3 オブジェクトが含まれています。アセットの名前の形態は `Manifest{start}-{end}.json` で、`{start}` と `{end}` はリビジョンが適用される期間に対応するエポック秒を表します。以下は、マニフェストファイルの内容の例です。

```
{
  "manifestSchemaVersion": "1.0",
  "schema": "{
    \"type\": \"object\",
    \"properties\": {
      \"TimestampsSinceLastRevision\": {
        \"type\": \"array\",
        \"description\": \"List of epoch timestamps in seconds.\",
        \"items\": {
          \"type\": \"number\",
          \"description\": \"Epoch timestamp in seconds.\"
        }
      }
    }
  }",
  "startTimestamp": 1554898111,
  "endTimestamp": 1554905311,
  "numberOfTimestamps": 7201
}
```

次のトピックでは、で AWS Data Exchange Heartbeat をサブスクライブする方法について説明します AWS Data Exchange。

トピック

- [での AWS Data Exchange Heartbeat へのサブスクライブ AWS Data Exchange](#)

での AWS Data Exchange Heartbeat へのサブスクライブ AWS Data Exchange

次の手順は、AWS Data Exchange カタログを参照して AWS Data Exchange Heartbeat を検索してサブスクライブする方法を示しています。

AWS Data Exchange Heartbeat を検索してサブスクライブするには

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) を開いてサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データ製品の検出] で [カタログを参照] を選択します。
3. 検索フィールドに **AWS Data Exchange Heartbeat** を入力して、[Enter] キーを押します。
4. AWS Data Exchange ハートビート 製品を選択して、その詳細ページを表示します。
 - a. (オプション) データディクショナリを表示するには、製品[概要]セクションまで下にスクロールして、[データディクショナリ]の下にあるデータディクショナリを確認します。

- b. (オプション) データディクショナリをダウンロードするには、[データディクショナリとサンプル] タブを選択し、[データディクショナリ] の横にあるオプションボタンを選択し、[ダウンロード] を選択します。
 - c. (オプション) サンプルをダウンロードするには、サンプル名 (Heartbeat manifest sample.json) の横にあるオプションボタンを選択し、[ダウンロード] を選択します。
5. 右上隅にある [サブスクリプションを続行する] を選択します。
 6. 希望する料金と期間の組み合わせを選択し、サブスクリプションの自動更新を有効にするかどうかを選択してから、データサブスクリプション契約を含むオファーの詳細を確認します。

Note

AWS Data Exchange Heartbeat はサブスクリプション検証を必要としませんが、一部の製品では検証が必要です。詳細については、「[のサブスクライバーのサブスクリプション検証 AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

7. 料金情報を確認し、料金オファーを選択してから、[サブスクライブ] を選択します。

Note

AWS Data Exchange Heartbeat は無料の製品です。有料製品をサブスクライブする場合は、サブスクライブする決定を確認するためのプロンプトが表示されます。

8. [最初のエクスポートを設定] ページで、エクスポートするリビジョンが含まれるデータセットのチェックボックスをオンにします。データセットを選択すると、最近発行されたリビジョンがエクスポート用に準備されます。
9. Amazon S3 バケットの場所を選択する、または Amazon S3 キーの命名パターンを設定します。これにより、リビジョンがエクスポートされる場所が決まります。キーパターンの使用に関する詳細については、「[リビジョンをエクスポートするときのキーパターン](#)」を参照してください。
10. [Export] (エクスポート) を選択してデータを Amazon S3 にエクスポートします。後ほどエクスポートまたはダウンロードする場合は [Skip] (スキップ) を選択します。

Note

[Subscribe] (サブスクライブ) を選択してからサブスクリプションがアクティブになるまでは、数分かかる場合があります。サブスクリプションがアクティブになる前に [エクスポート]

ト]を選択すると、完了するまで待つように求められます。サブスクリプションがアクティブになると、エクスポートが開始されます。
サブスクリプションがアクティブになる前にこのページから移動しても、サブスクリプションの処理は停止されませんが、データのエクスポートが行われなくなります。

AWS Data Exchange 用 APIs (テスト製品)

AWS Data Exchange for APIs (テスト製品) は、サブスクライバーがAPIデータセットを含む製品とやり取りする方法を理解するために利用できる無料の AWS Data Exchange 製品です。この製品は、テスト目的や、APIベースのデータを取得するためにプロバイダーをAPI呼び出す方法を学ぶために使用できます。

AWS Data Exchange for APIs (テスト製品) には、米国東部 AWS Data Exchange APIs (バージニア北部) リージョンにある (テスト製品) という名前のAPIデータセットが含まれています。

トピック

- [\(APIsテスト製品\) AWS Data Exchange の へのサブスクリプション AWS Data Exchange の表示 AWS Data Exchange API](#)
- [仕様のダウンロード AWS Data Exchange API](#)
- [通話の AWS Data Exchange API発信](#)

(APIsテスト製品) AWS Data Exchange の へのサブスクリプション AWS Data Exchange

次の手順は、AWS Data Exchange カタログを参照して AWS Data Exchange APIs (テスト製品) を検索してサブスクリプションする方法を示しています。

(APIsテスト製品) の を検索してサブスクリプション AWS Data Exchange するには

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) を開いてサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データ製品の検出] で [カタログを参照] を選択します。
3. 検索フィールドに **AWS Data Exchange for APIs** を入力して、[Enter] キーを押します。
4. AWS Data Exchange APIs (テスト製品) の を選択し、詳細ページを表示します。
 - (オプション) サンプルをダウンロードするには、データディクショナリとサンプルタブを選択し、サンプル名 (ADX APIs sample.json の場合) の横にあるオプションボタンを選択し、ダウンロード を選択します。

5. 右上隅にある [サブスクリプションを続行する] を選択します。
6. 製品オファーを選択します。

Note

AWS Data Exchange for APIs (テスト製品) は無料製品です。

7. サブスクリプション条件、データセット、サポート情報を確認してください。
8. サブスクリプションについて [オファーの自動更新] を有効にするかどうかを選択します。

Note

AWS Data Exchange for APIs (テスト製品) ではサブスクリプションの検証は必要ありませんが、一部の製品では検証が必要です。詳細については、「[のサブスクライバーのサブスクリプション検証 AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

9. [サブスクライブ] を選択します。

[サブスクライブ] を選択してからサブスクリプションがアクティブになるまでは、数分かかる場合があります。サブスクリプションがアクティブになる前にこのページから移動しても、サブスクリプションの処理は停止されませんが、

の表示 AWS Data Exchange API

次のステップを使用して、AWS Data Exchange for APIs (テスト製品) APIで を表示できます。

を表示するには API

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) を開いてサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [マイサブスクリプション] で [権限を持つデータ] を選択します。
3. AWS Data Exchange APIs (テスト製品) のタイトルが付いた製品を選択し、データセットAWS Data Exchange の APIs を選択します。
4. [リビジョン] タブで、リビジョンを選択します。
5. API アセット で、 を選択しますAPI。
6. アセットの概要を表示します。
7. 統合ノートガイダンスに従って を呼び出しますAPI。

仕様のダウンロード AWS Data Exchange API

for APIs (テスト製品) AWS Data Exchange を使用してAPI仕様をダウンロードするには、次の手順を実行します。

API 仕様をダウンロードするには

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) を開いてサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [マイサブスクリプション] で [権限を持つデータ] を選択します。
3. AWS Data Exchange APIs (テスト製品) のタイトルが付いた製品を選択し、データセットAWS Data Exchange の APIs を選択します。
4. [リビジョン] タブで、リビジョンを選択します。
5. API アセット で、 を選択しますAPI。
6. OpenAPI 3.0 仕様 で、API仕様 のダウンロード を選択します。

お使いのローカルコンピュータに仕様がダウンロードされます。その後、アセットをサードパーティーのツールにエクスポートしてSDK生成できます。

通話の AWS Data Exchange API発信

AWS Data Exchange コンソールで 1 つのエンドポイントを呼び出すことができます。

コンソールからAPI電話をかけるには

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) を開いてサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [マイサブスクリプション] で [権限を持つデータ] を選択します。
3. AWS Data Exchange APIs (テスト製品) のタイトルが付いた製品を選択し、データセットAWS Data Exchange の APIs を選択します。
4. [リビジョン] タブで、リビジョンを選択します。
5. API アセット で、 を選択しますAPI。

サンプル Code 構造と OpenApi 3.0 仕様が表示され、API で AWS Command Line Interface を呼び出すために使用できますAPI。

6. 「統合メモ」で、「コピー」を選択してコード構造をコピーし、AWS CLIに貼り付けます。

- 仕様書に記載されている情報を使用して、サンプル値を必要なパラメータのキーと値のペアに置き換えます。

以下は、AWS Data Exchange APIs (テスト製品) のサンプルAPIリクエストです。

```
aws dataexchange send-api-asset \  
  --data-set-id 8d494cba5e4720e5f6072e280daf70a8 \  
  --revision-id b655d5be3da04fcbdca21a5a2932d789 \  
  --asset-id 8550cfab16b444a794402f2c3f11eae1 \  
  --method POST \  
  --path "someresource" \  
  --query-string-parameters 'param1=value1,param2=value2' \  
  --request-headers 'header=header_value' \  
  --body "{\"body_param\":{\"body_param_value\"}}"
```

でのワールドワイドイベント出席 (テスト製品) AWS Data Exchange

Worldwide Event Attendance (テスト製品) は、Amazon Redshift データセットを含む製品をサブスクライブおよび操作する方法をサブスクライバーが理解するのに役立つ無料の AWS Data Exchange 製品です。この製品はテスト目的で使用でき、アプリケーションのクエリ、分析、構築の方法を数分で習得できます。

Worldwide Event Attendance (テスト製品) には、米国東部 (バージニア北部) AWS リージョンにある Worldwide Event Data (テストデータ) という名前の Amazon Redshift データセットが含まれています。

AWS Data Exchange コンソールを使用して、Worldwide Event Attendance (テスト製品) を検索してサブスクライブします。次に、Amazon Redshift コンソールまたはSQLコマンドを使用してデータ共有をクエリできます。

トピック

- [でのワールドワイドイベントアテンダンス \(テスト製品\) のサブスクライブ AWS Data Exchange](#)
- [Amazon Redshift クラスター \(コンソール\) によるWorldwide Event Attendance \(テスト製品\) データのクエリ](#)
- [Amazon Redshift での Worldwide Event Attendance \(テスト製品\) データのクエリ \(SQL \)](#)

でのワールドワイドイベントアテンダンス (テスト製品) のサブスクライブ AWS Data Exchange

次の手順は、AWS Data Exchange カタログを参照して Worldwide Event Attendance (テスト製品) を検索してサブスクライブする方法を示しています。

Worldwide Event Attendance (テスト製品) を検索してサブスクライブするには

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) を開いてサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データ製品の検出] で [カタログを参照] を選択します。
3. 検索フィールドに **Worldwide Event Attendance (Test Product)** を入力して、[Enter] キーを押します。
4. Worldwide Event Attendance (テスト製品) を選択すると、詳細ページが表示されます。
 - a. (オプション) データディクショナリを表示するには、製品 [概要] セクションまで下にスクロールして、[データディクショナリ] の下にあるデータディクショナリを確認します。
 - b. (オプション) データディクショナリをダウンロードするには、[データディクショナリとサンプル] タブを選択し、[データディクショナリ] の横にあるオプションボタンを選択し、[ダウンロード] を選択します。
 - c. (オプション) サンプルをプレビューするには、サンプル名 (Worldwide Event Attendance Sample.csv) の横にあるオプションボタンを選択し、サンプルプレビュー (CSV のみ) を選択します。
 - d. (オプション) サンプルをダウンロードするには、サンプル名の横にあるオプションボタン (Worldwide Event Attendance Sample.csv) を選択し、「ダウンロード」を選択します。

サンプルをプレビューする場合は、サンプルプレビューダイアログボックスの「ダウンロード」を選択することもできます。
5. 右上隅にある [サブスクライブを続行] を選択します。
6. 希望する料金と期間の組み合わせを選択し、サブスクリプションの自動更新を有効にするかどうかを選択してから、データサブスクリプション契約を含むオファーの詳細を確認します。

Note

Worldwide Event Attendance (テスト製品) にサブスクリプション検証は必要ありませんが、必要となる製品もあります。詳細については、「[のサブスクライバーのサブスクリプション検証 AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

7. 料金情報を確認し、料金オファーを選択してから、[サブスクリプション] を選択します。

 Note

Worldwide Event Attendance (テスト製品) は無料製品です。有料製品をサブスクリプションする場合は、サブスクリプションする決定を確認するためのプロンプトが表示されます。

[サブスクリプション] を選択してからサブスクリプションがアクティブになるまでは、数分かかる場合があります。

サブスクリプションがアクティブになる前にこのページから移動しても、サブスクリプションの処理は停止されませんが、

Amazon Redshift クラスター (コンソール) による Worldwide Event Attendance (テスト製品) データのクエリ

以下の手順では、Amazon Redshift コンソールを使用してデータ共有をセットアップし、クエリを実行する方法が説明されています。

Amazon Redshift (コンソール) で Worldwide Event Attendance (テスト製品) データをクエリするには

1. Amazon Redshift コンソールを開いてサインインします。
2. クラスター を選択し、既存のRA3クラスターを選択します。
3. データ共有タブを選択します。
4. データベースの作成元となるデータ共有を選択します。
5. AWS Data Exchange データ共有のサブスクリプション で、データ共有からデータベースを作成する を選択します。
6. [データ共有からデータベースを作成] に新しいデータベースの [データベース名] を入力し、[作成] を選択します。
7. ナビゲーションペインの Marketplace アイコンを選択し、クエリエディターを開きます。
8. 「リソース」で、データベースとスキーマを選択します。
9. 次の SQL クエリを実行します。

```
select * from database.schema.table
```

Amazon Redshift での Worldwide Event Attendance (テスト製品) データのクエリ (SQL)

次の手順は、SQL コマンドを使用してデータ共有を設定およびクエリする方法を示しています。

Amazon Redshift で Worldwide Event Attendance (テスト製品) データをクエリするには (SQL)

1. データ共有を見つけるには、以下のコマンドを実行します。

```
SHOW DATASHARES [ LIKE 'namepattern' ]
```

このコマンドは、プロバイダーのaccount_idおよびnamespaceに加えて、Worldwide Event Attendance (テスト製品) のデータ共有を含むすべてのデータ共有を一覧表示します。詳細については、「Amazon Redshift データベースデベロッパーガイド」の「[データベースを表示する](#)」を参照してください。

2. 次のコマンドを実行して、データ共有からデータベースを作成します。

```
CREATE DATABASE database_name  
  
FROM DATASHARE datashare_name OF ACCOUNT account_id NAMESPACE  
namespace_guid
```

詳細については、「Amazon Redshift データベースデベロッパーガイド」の「[データベースを作成する](#)」を参照してください。

3. 次の SQL クエリを実行します。

```
select * from database.schema.table
```

AWS Data Exchange 用 AWS Lake Formation (テスト製品) (プレビュー)

AWS Data Exchange for AWS Lake Formation (テスト製品) は、サブスクライバーが AWS Lake Formation データセットを含む製品をサブスクライブして操作する方法を理解するのに役立つ無料の AWS Data Exchange 製品です。この製品をテスト目的で使用して、データを社内で数分でクエリ、分析、共有する方法を学ぶことができます。

トピック

- ([AWS Data Exchange プレビュー](#)) での [AWS Lake Formation \(テスト製品\) AWS Data Exchange の へのサブスクライブ](#)
- [AWS Data Exchange Lake Formation \(テスト製品\) のセットアップとクエリ \(プレビュー\)](#)

(AWS Data Exchange プレビュー) での AWS Lake Formation (テスト製品) AWS Data Exchange の へのサブスクライブ

次の手順は、 AWS Data Exchange カタログを参照して Lake Formation (テスト製品) AWS Data Exchange を検索してサブスクライブする方法を示しています。(プレビュー)

Lake Formation AWS Data Exchange の をサブスクライブするには (プレビュー)

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) を開いてサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データ製品の検出] で [カタログを参照] を選択します。
3. 検索フィールドに **AWS Data Exchange for Lake Formation (Test product)** を入力して、[Enter] キーを押します。
4. [Lake Formation のAWS Data Exchange (テスト製品)] を選択すると、詳細ページが表示されます。
 - a. (オプション) データディクショナリを表示するには、製品[概要] セクションまで下にスクロールして、[データディクショナリ] の下にあるデータディクショナリを確認します。
 - b. (オプション) データディクショナリをダウンロードするには、[データディクショナリとサンプル] タブを選択し、[データディクショナリ] の横にあるオプションボタンを選択し、[ダウンロード] を選択します。
 - c. (オプション) サンプルをプレビューするには、サンプル名の横にあるオプションボタン (AWS Data Exchange Lake Formation (テスト製品) の場合) を選択し、サンプルプレビュー (CSV のみ) を選択します。
 - d. (オプション) サンプルをダウンロードするには、サンプル名の横にあるオプションボタン (AWS Data Exchange Lake Formation (テスト製品) 用) を選択し、 のダウンロード を選択します。
5. サンプルをプレビューする場合は、サンプルプレビューダイアログボックスの[ダウンロード]を選択することもできます。
6. 右上隅にある [サブスクリプションを続行] を選択します。
7. 希望の価格と期間の組み合わせを選択し、データサブスクリプション契約を含むオファーの詳細を確認します。

Note

AWS Data Exchange Lake Formation (テスト製品) の場合、サブスクリプションの検証は必要ありませんが、一部の製品では検証が必要です。詳細については、「[のサブスクライバーのサブスクリプション検証 AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

8. 料金情報を確認し、料金オファーを選択してから、[サブスクライブ] を選択します。

Note

AWS Data Exchange for Lake Formation (テスト製品) は無料製品です。有料製品をサブスクライブする場合は、サブスクライブする決定を確認するためのプロンプトが表示されます。

[サブスクライブ] を選択してからサブスクリプションがアクティブになるまでは、数分かかる場合があります。

サブスクリプションがアクティブになる前にこのページから移動しても、サブスクリプションの処理は停止されませんが、

AWS Data Exchange Lake Formation (テスト製品) のセットアップとクエリ (プレビュー)

以下は、AWS Management Consoleを使用して Lake Formation データ権限セット (プレビュー) を設定してクエリする方法を説明する手順です。

Lake Formation (テスト製品) データセット AWS Data Exchange のでのクエリを有効にするには (プレビュー)

1. AWS Data Exchange コンソールを開いてサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [マイサブスクリプション] で [権限を持つデータ] を選択します。
3. 製品一覧から、[Lake Formation のAWS Data Exchange (テスト製品) (プレビュー)]を選択します。
4. Accept を選択して AWS RAM 共有を受け入れます。

Note

データ製品をサブスクライブしてから 12 時間以内に AWS RAM 共有を受け入れる必要があります。AWS RAM 共有招待の有効期限が切れた場合は、招待のリクエストを選択し、新しい共有の送信に数営業日かかります。AWS RAM 共有を受け入れる必要があるのは、Lake Formation データ セットのライセンスを取得するプロバイダーごとに 1 回だけです。

5. [Lake Formation コンソール](#) を開く
6. Lake Formation CREATE_TABLE または CREATE_DATABASE アクセス許可、および glue:CreateTable または glue:CreateDatabase AWS Identity and Access Management (IAM) アクセス許可を持つプリンシパルとしてサインインします。
7. ナビゲーションペインで [テーブル] を選択してから、[テーブルを作成] を選択します。
8. [テーブルを作成] ページで [リソースリンク] を選択し、以下の情報を入力します。
 - リソースリンク名 - テーブル名と同じルールに従う名前を入力します。名前は、ターゲット共有テーブルの名前と同じにすることができます。
 - データベース - ローカル データ カタログ内のデータベースにはリソース リンクが含まれている必要があります。
 - 共有テーブル — Lake Formation (テスト製品) の AWS Data Exchange を通じて共有されるテーブルの 1 つを選択します。その製品を通じて共有されるテーブル名はすべて adxlf_test で始まるか、ローカル (所有) テーブル名または共有テーブル名を入力します。

このリストには、アカウントと共有されているすべてのテーブルが含まれています。データベースと所有者のアカウント ID が各テーブルにリストされます。アカウントと共有されていることが分かっているテーブルが表示されない場合は、以下を確認してください。

 - データ レイク管理者ではない場合は、テーブルに対する Lake Formation 権限が付与されていることを管理者に確認してください。
 - あなたがデータ レイク管理者で、アカウントが付与アカウントと同じ AWS 組織ではない場合は、テーブルの AWS Resource Access Manager (AWS RAM) リソース共有の招待を承諾したことを確認してください。詳細については、「[からのリソース共有招待の承諾 AWS RAM](#)」を参照してください。
 - 共有テーブルのデータベース - リストから共有テーブルを選択した場合、このフィールドには外部アカウントにある共有テーブルのデータベースが入力されます。共有テーブルを選択し

なかった場合は、ローカル テーブルへのリソース リンクのローカル データベースを入力するか、外部アカウントの共有テーブルのデータベースを入力します。

- 共有テーブル所有者 - リストから共有テーブルを選択した場合、このフィールドには共有テーブルの所有者アカウント ID が入力されます。共有テーブルを選択しない場合は、ローカル テーブルへのリソースリンクの AWS アカウント ID、またはテーブルを共有 AWS アカウントした の ID を入力します。

Amazon Athena (コンソール) を使用して Lake Formation (テスト製品) データセット (プレビュー) AWS Data Exchange の をクエリするには

- Amazon Athena のアクセス権限を持つロールを使用して [Amazon Athena コンソール](#) にサインインします。
- Amazon Athena クエリエディタで、以前に作成したリソースリンクを選択します。
- source_data の横にある追加のメニューオプションアイコンを選択し、テーブルをプレビュー) を選択します。
- [クエリを実行] を選択します。

Lake Formation (テスト製品) データセット (プレビュー) (AWS CLI) AWS Data Exchange の のクエリを許可するには

- で使用できるすべての招待のリストを取得するには AWS アカウント、次のコマンドを入力します。AWS CLI query パラメータを使用すると、 から共有された招待のみに出力を制限できません AWS Data Exchange。

```
$ aws ram get-resource-share-invitations
```

```
--region us-east-1
```

```
--query 'resourceShareInvitations[?
```

```
senderAccountId==147854383891]'
```

- Lake Formation データセット AWS Data Exchange の の招待を検索します。次に、次のコマンドで承諾できるように出力内の resourceShareInvitationArn を書き留めます。

```
$ aws ram accept-resource-share-invitation --region us-east-1 --  
resource-share-invitation-arn [resourceShareInvitationArn]
```

成功すると、レスポンスはステータスが から PENDINGに変更されたことを示しますACCEPTED。

3. 次のコマンドを使用して、AWS Data Exchange for Lake Formation データセットを通じて共有されるテーブルの1つへのリソースリンクを作成します。

```
aws glue create-table --database-name
[local_database_to_store_resource_link] --table-
input '{"Name":"resource_link_name","TargetTable":
{"CatalogId":"[account_owning_original_table]","DatabaseName":"[shared_db_in_
```

Note

リソースリンクを作成するには、Lake Formation CREATE_TABLEまたは CREATE_DATABASE アクセス許可と、 glue:CreateTableまたは アクセ スglue:CreateDatabaseIAM許可を使用します。

AWS Data Exchange for Amazon S3 (テスト製品)

AWS Data Exchange for Amazon S3 (テスト製品) は、サブスクライバーが製品をサブスクライブして操作する方法を理解するのに役立つ AWS Data Exchange 製品です。このチュートリアルでは、製品に Amazon Simple Storage Service (Amazon S3) のデータアクセスデータセットが含まれています。この製品をテスト目的で使用したり、データプロバイダーの Amazon S3 バケットから直接データをクエリして分析する方法を学習したりできます。

独自の Amazon S3 バケットを設定したり、データファイルを Amazon S3 バケットにコピーしたり、関連するストレージ料金を支払ったりすることなく、クエリを実行してデータをインプレースで分析できます。

トピック

- [AWS Data Exchange for Amazon S3 \(テスト製品\) の へのサブスクライブ](#)
- [AWS Data Exchange Amazon S3 \(テスト製品\) のセットアップとクエリ](#)

AWS Data Exchange for Amazon S3 (テスト製品) の へのサブスクライブ

次の手順は、AWS Data Exchange カタログを参照して AWS Data Exchange Amazon S3 (テスト製品) を検索してサブスクライブする方法を示しています。

Amazon S3 (テスト製品) AWS Data Exchange の を検索してサブスクライブするには

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) を開いてサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データ製品の検出] で [カタログを参照] を選択します。
3. 検索フィールドに **AWS Data Exchange for Amazon S3 (Test Product)** を入力して、[Enter] キーを押します。
4. Amazon S3 のAWS Data Exchange (テスト製品)を選択すると、詳細ページが表示されます。
 - a. (オプション) データディクショナリを表示するには、製品[概要] セクションまで下にスクロールして、[データディクショナリ] の下にあるデータディクショナリを確認します。
 - b. (オプション) データディクショナリをダウンロードするには、[データディクショナリとサンプル] タブを選択し、[データディクショナリ] の横にあるオプションボタンを選択し、[ダウンロード] を選択します。
 - c. (オプション) サンプルをプレビューするには、ブロックチェーントランザクション (テストデータ) のサンプル名の横にあるオプションボタンを選択し、サンプルプレビュー (CSVのみ) を選択します。
 - d. (オプション) サンプルをダウンロードするには、「ブロックチェーントランザクション (テストデータ)」のサンプル名の横にあるオプションボタンを選択し、「ダウンロード」を選択します。

サンプルをプレビューする場合は、サンプルプレビューダイアログボックスの「ダウンロード」を選択することもできます。

5. 右上隅にある [サブスクライブを続行] を選択します。
6. 希望する価格と期間の組み合わせを選択してください。サブスクリプションの自動更新を有効にするかどうかを選択し、データサブスクリプション契約を含むオファーの詳細を確認します。

Note

AWS Data Exchange for Amazon S3 (テスト製品) ではサブスクリプションの検証は必要ありませんが、一部の製品では検証が必要です。詳細については、「[のサブスクライバーのサブスクリプション検証 AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

7. 料金情報を確認し、料金オファーを選択してから、[サブスクライブ] を選択します。

Note

AWS Data Exchange for Amazon S3 (テスト製品) は無料製品です。有料製品をサブスクライブする場合は、サブスクライブする決定を確認するためのプロンプトが表示されます。

[サブスクライブ] を選択してからサブスクリプションがアクティブになるまでは、数分かかる場合があります。

サブスクリプションがアクティブになる前にこのページから移動しても、サブスクリプションの処理は停止されませんが、

AWS Data Exchange Amazon S3 (テスト製品) のセットアップとクエリ

次の手順は、AWS Command Line Interface () を使用して Amazon S3 データアクセスデータセットを設定およびクエリする方法を示していますAWS CLI。クエリを実行する前に、ユーザーにポリシーをアタッチするための適切な AWS Identity and Access Management (IAM) アクセス許可を取得する必要があります。Amazon S3 配信メソッドを介してプロバイダーのバケット内のデータに直接アクセスするには、次のJSONポリシーをユーザーまたはロールに埋め込みます。

Amazon S3 (テスト製品) AWS Data Exchange を設定するには

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) を開いてサインインします。
2. 「マイサブスクリプション」の左側のナビゲーションペインから、データセットをホスト AWS リージョンする「」の「エンタイトルメント付きデータ」を選択します。このチュートリアルでは、リージョンは us-east-1 です。
3. 製品のリストから Amazon S3 のAWS Data Exchange (テスト製品) を選択し、次にブロックチェーンランザクション (テストデータ) データセットを選択します。
4. アクセスIAM許可の確認 を選択します。

Note

正しいアクセス許可がない場合は、IAMポリシーを作成してユーザーまたはロールにアタッチする方法を説明した通知が届きます。次の例では、*user input placeholder* 独自の情報。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": "s3:ListBucket",
      "Resource": [
        "arn:aws:s3:us-east-1:111122223333:accesspoint/my-access-point",
        "arn:aws:s3::aws-data-exchange-s3-data-access-btc-demo-us-east-1"
      ]
    },
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": "s3:GetObject",
      "Resource": [
        "arn:aws:s3:us-east-1:111122223333:accesspoint/my-access-point/object/*",
        "arn:aws:s3::aws-data-exchange-s3-data-access-btc-demo-us-east-1/*"
      ]
    }
  ]
}
```

を使用して AWS Data Exchange for Amazon S3 (テスト製品) データアクセスデータセットの のクエリを許可するには AWS CLI

1. us-east-1 でAWS CloudShell を開きます。
2. アクセスポイントのエイリアスの横にあるコピーボタンを選択し、コードをコピーして内部に貼り付けます。コマンドが適切なアクセスポイントエイリアスAWS CloudShell で追加されると、この製品に含まれる Amazon S3 オブジェクトのリストが表示されます。

⚠ Important

プロバイダーがリクエスト支払いを有効にすると、サブスクライバーはデータ転送とリクエストの代金を支払います。プロバイダーはデータストレージの費用を支払います。詳細については、Amazon Simple Storage Service ユーザーガイドの「[ストレージ転送と使用量にリクエスト支払いバケットを使用する](#)」を参照してください。

3. (オプション) 次のコマンドを実行して、オブジェクトをローカルシステムにコピーすることもできます。

```
aws s3api get-object --bucket <Access point alias> --key 'v1.0/btc/transactions/date=2022-11-27/part-00000-03a88dba-27dd-4f59-a890-70a3d2c7ad26-c000.snappy.parquet' aws_btc.snappy.parquet --request-payer requester
```

AWS Data Exchange プロバイダー生成通知 (テスト製品)

AWS Data Exchange Provider-Generated Notifications (テスト製品) は、プロバイダーが生成した通知を使用して製品をサブスクライブして操作する方法をサブスクライバーが理解するのに役立つ無料の AWS Data Exchange 製品です。

プロバイダーはこの機能を使用して、自社のデータセットに関連する重要なイベントを通知します。これらのイベントは、Amazon を使用して一貫性のある構造化された形式で受信され EventBridge、自動ワークフローを構築するために使用できます。プロバイダーが生成した通知は、[AWSユーザー通知](#) を使用して E メールやチャットプログラムに人間が読み取れる通知の配信もサポートします。

トピック

- [プロバイダー生成通知 AWS Data Exchange の へのサブスクライブ \(テスト製品\)](#)
- [Amazon を使用したプロバイダー生成通知の設定 EventBridge](#)

プロバイダー生成通知 AWS Data Exchange の へのサブスクライブ (テスト製品)

次の手順は、AWS Data Exchange プロバイダー生成通知 (テスト製品) をサブスクライブする方法を示しています。

プロバイダー生成通知 (テスト製品) AWS Data Exchange の を検索してサブスクライブするには

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) を開いてサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データ製品の検出] で [カタログを参照] を選択します。
3. 検索フィールドに **AWS Data Exchange Provider-Generated Notifications (Test Product)** を入力して、[Enter] キーを押します。
4. 「プロバイダー生成通知 (テスト製品) のAWS Data Exchange」を選択すると、詳細ページが表示されます。
5. 右上隅にある [サブスクリプションを続行] を選択します。

- 希望する価格と期間の組み合わせを選択してください。サブスクリプションの自動更新を有効にするかどうかを選択し、データサブスクリプション契約を含むオファーの詳細を確認します。

Note

AWS Data Exchange for Provider-Generated Notifications (テスト製品) ではサブスクリプションの検証は必要ありませんが、一部の製品では検証が必要です。詳細については、「[のサブスクライバーのサブスクリプション検証 AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

- 料金情報を確認し、料金オファーを選択してから、[サブスクライブ] を選択します。

Note

AWS Data Exchange for Provider-Generated Notifications (テスト製品) は無料製品です。有料製品をサブスクライブする場合は、サブスクライブする決定を確認するためのプロンプトが表示されます。

[サブスクライブ] を選択してからサブスクリプションがアクティブになるまでは、数分かかる場合があります。

サブスクリプションがアクティブになる前にこのページから移動しても、サブスクリプションの処理は停止されませんが、

Amazon を使用したプロバイダー生成通知の設定 EventBridge

AWS Data Exchange は、Amazon を使用してプロバイダー生成の通知を配信します EventBridge。ルールは Amazon EventBridge ルール、ターゲットを作成でき、データ製品をサブスクライブできる必要があります。

AWS Data Exchange イベントは、データセットがある場所 AWS リージョン と同じ でデフォルトの Amazon EventBridge イベントバスに発行されます。プロバイダーが生成した通知の Amazon EventBridge ルールを作成するには、次の手順に従います。

プロバイダーが生成した通知の Amazon EventBridge ルールを作成するには

- Amazon EventBridge ルールのターゲットを作成します。Python でシンプルな Lambda 関数を作成するには、次のようにします。

- a. AWS Lambda コンソールに移動します。
- b. [関数を作成]、[一から作成] の順に選択します。
- c. この関数に名前を付け、ランタイムとして Python 3.10 を選択します。[関数を作成]を選択します。
- d. lambda_function.py に次のコードを入力します。

```
import json

def lambda_handler(event, context):
    print(" ".join(["Event of type", event["detail-type"], "received!"]))
    print(" ".join(["Details", json.dumps(event["detail"])]))

    return {"statusCode": 200, "body": json.dumps("Hello from Lambda!")
    }
```

2. EventBridge コンソールに移動します。
3. ルールに移動し、デフォルトのイベントバスを選択します。
4. [ルールを作成] を選択し、名前とオプションの説明を入力します。ルール タイプが [イベントパターン付きのルール] であることを確認します。
5. [Next (次へ)] を選択します。
 - イベントソースがAWSイベントまたはEventBridge パートナーイベント であることを確認します。作成メソッドで、カスタムパターン (JSON エディタ) を選択します。イベントパターン で、次のコマンドを入力しますJSON。

```
{
  "source": ["aws.dataexchange"],
  "detail-type": ["Data Set Update Delayed", "Data Updated in Data Set",
  "Deprecation Planned for Data Set", "Schema Change Planned for Data Set"]
}
```

6. [Next (次へ)] を選択します。
 - a. [ターゲット 1]では、AWS のサービス と[Lambda 関数] を選択します。
 - b. [関数]で、ステップ 1 で作成した 関数を選択します。[ルールを作成]を完了します。

この Lambda 関数は、プロバイダーが生成した通知が配信されるたびにトリガーされます。Lambda コンソールの [モニター] タブから、関数の最近の呼び出しを確認できます。

で AWS Data Exchange のデータ製品の提供 AWS Marketplace

大まかに言うと、でデータ製品を一覧表示する方法は次のとおりです AWS Marketplace。

1. 潜在的なプロバイダー登録はプロバイダー – 登録することで、で製品を一覧表示 AWS Data Exchange し、で利用可能にすることができます AWS Marketplace。詳細については、「[ステップ 2: プロバイダーになるための登録を行う](#)」を参照してください。
2. データはで公開される資格があります AWS Data Exchange。販売 AWS Marketplace 者の利用規約に規定された法的資格要件を満たすデータセットの配布に限定されます。許可されるデータのタイプに関する詳細については、「[の公開ガイドライン AWS Data Exchange](#)」を参照してください。
3. プロバイダーは、データセット、リビジョンを作成し、アセットをインポートします – AWS Data Exchange コンソールまたはを使用してデータセットを作成できますAPI。データセットの作成後、データセットでリビジョンを作成し、そのリビジョンにアセットを追加できます。詳細については、「[のデータ AWS Data Exchange](#)」を参照してください。
4. プロバイダーが製品とそのオファーを作成する – 製品を作成するには、製品の詳細を提供し、1 つ、または複数のデータセットを含め、オプションでパブリックオファーの詳細を提供する必要があります。詳細については、「[で新製品を公開する AWS Data Exchange](#)」を参照してください。
 - ファイルを含む製品 (Amazon S3 オブジェクト) – Amazon S3 オブジェクトを含む所有データセットが製品に発行されると、はデータセットのコピー AWS Data Exchange を作成します。サブスクライバーは、権限を持つデータセットとしてデータセットのコピーにアクセスすることができます。
 - Amazon API Gateway を含む製品 APIs – Amazon API Gateway を含む所有データセットAPIs が製品に公開されると、AWS Data Exchange は AWS Data Exchange エンドポイントへのリクエストを Amazon API Gateway にプロキシスルーすることを許可しますAPI。サブスクライバーは、を表示APIし、権限のあるデータセットとしてAPI仕様をダウンロードできます。サブスクライバーは、AWS Data Exchange コンソールAPIから を呼び出すこともできます。
 - Amazon Redshift データセットを含む製品 – Amazon Redshift データセットを含む所有データセットが製品に公開されると、AWS Data Exchange は AWS Data Exchange エンドポイントへのリクエストを Amazon Redshift データ共有にプロキシスルーすることを許可します。サブスクライバーは、プロバイダーがデータ共有に追加したテーブル、ビュー、スキーマ、およびユーザー定義の関数に対する読み取り専用アクセス権を持つことができます。

- Amazon S3 データアクセスを含む製品 – Amazon S3 データアクセスを含む所有データセットが製品に発行されると、は、データプロバイダーが保持するのと同じ Amazon S3 オブジェクトをサブスクライバーに AWS Data Exchange 許可します。この方法では、入手可能な最新のデータが得られます。プロバイダーは Amazon S3 バケットまたは特定のプレフィックスと Amazon S3 オブジェクトへの直接アクセスを共有し、サブスクリプション、エンタイトルメント、請求、支払いの管理 AWS Data Exchange に使用します。
 - AWS Lake Formation データセットを含む製品 (プレビュー) – Lake Formation データアクセス許可データセットを含む所有データセットが製品に公開されると、データセットに含まれる LF タグに関連付けられたデータへの読み取り専用アクセス AWS Data Exchange が付与されます。サブスクライバーは、Amazon Athena や Redshift Spectrum などの Lake Formation と統合されたダウンストリームクエリサービスを使用して、共有しているデータベース、テーブル、または列をサブスクライブできます。
5. (オプション) プロバイダーがサブスクリプション検証を有効にする – サブスクリプション検証を有効にする場合、サブスクライバーは製品のサブスクリプションをリクエストする必要があります。これは、データセットへのアクセス前にサブスクライブ希望者を審査する機会を提供します。詳細については、「[のプロバイダーのサブスクリプション検証 AWS Data Exchange](#)」を参照してください。
 6. (オプション) プロバイダーは、製品のカスタムオファーを作成します。パブリックオファーに加えて、一部のお客様向けにプライベートオファーや Bring Your Own Subscription (BYOS) オファーなどのカスタムオファーを作成できます。詳細については、「[AWS Data Exchange 製品のオファーの作成](#)」を参照してください。
 7. (オプション) プロバイダーは新しいリビジョンを発行します。または コンソールを使用して新しいリビジョンを作成することで、動的データセットを AWS Data Exchange API 経時的に更新できます。その後、これらのリビジョンを発行できます。詳細については、[リビジョン](#) または [での製品の更新 AWS Data Exchange](#) を参照してください。
 8. プロバイダーは を通じてレポートを確認します AWS Marketplace 管理ポータル – レポートは登録済みのすべての AWS Marketplace 販売者が利用でき、定期的な頻度 (毎日、毎週、または毎月) でリリースされます。詳細については、「[AWS Data Exchange のプロバイダー財務 AWS Marketplace](#)」を参照してください。
 9. プロバイダーは によって配布された資金を受け取ります AWS Marketplace。詳細については、「」を参照してください [AWS Data Exchange のプロバイダー財務 AWS Marketplace](#)。

拡張プロバイダープログラム (EPP)

拡張プロバイダープログラム (EPP) は、資格のあるデータプロバイダーが、機密性の高いカテゴリの個人情報および/または公開されていない個人情報を含むデータ製品を公開するためのプログラムです。

への参加を希望するプロバイダーは、AWS Data Exchange チームによる追加のレビュープロセスを完了EPPする必要があります。Extended Provider Program への登録資格に関する詳細については、[AWS Support](#) にお問い合わせください。

に登録されているデータプロバイダーの公開ガイドラインの詳細についてはEPP、「」を参照してくださいの[公開ガイドライン AWS Data Exchange](#)。

プログラムのアクセス

AWS Data Exchange プログラムで を使用している場合、2つの異なる を持つ2つの異なるリソースセットがありますAPIs。

- AWS Data Exchange API – これらのAPIオペレーションを使用して、データセットとリビジョンを作成、表示、更新、削除します。これらのAPIオペレーションを使用して、これらのリビジョンとの間でアセットをインポートおよびエクスポートすることもできます。詳細については、「[AWS Data Exchange APIリファレンス](#)」を参照してください。
- AWS Marketplace Catalog API – プロバイダーが AWS Data Exchange および で製品を表示および更新するために使用します AWS Marketplace。詳細については、[AWS Marketplace カタログAPIリファレンス](#) を参照してください。

でデータ製品プロバイダーになる前に AWS Data Exchange、次のトピックを確認してください。

- [セットアップ AWS Data Exchange](#)

このトピックの確認後、手順を開始する準備が整います。

関連トピック

- [の公開ガイドライン AWS Data Exchange](#)
- [の製品詳細のベストプラクティス AWS Data Exchange](#)
- [でのプロバイダーとしての開始方法 AWS Data Exchange](#)

- [で新製品を公開する AWS Data Exchange](#)
- [の製品説明テンプレート AWS Data Exchange](#)
- [での製品の更新 AWS Data Exchange](#)
- [AWS Data Exchange 製品のオファターの作成](#)
- [でのプロバイダー生成通知 AWS Data Exchange](#)
- [のデータ AWS Data Exchange](#)

でのプロバイダーとしての開始方法 AWS Data Exchange

以下のトピックでは、AWS Data Exchange コンソール [AWS Data Exchange](#) を使用して [でデータ製品プロバイダーになるための完全なプロセス](#)について説明します。このプロセスには以下のステップがあります。

ステップ

- [ステップ 1: 登録資格を確認する](#)
- [ステップ 2: プロバイダーになるための登録を行う](#)
- [ステップ 3: データの適格性を確認する](#)

ステップ 1: 登録資格を確認する

登録する前に、以下の要件を満たして登録資格を確認する必要があります。

データ製品を公開するための要件

AWS Data Exchange データ製品の料金を請求するかどうかにかかわらず、その製品を [で販売](#)しています AWS Marketplace。データ製品を作成して提供するには、以下の要件を満たす必要があります。

- 明確なカスタマーサポートプロセスおよびサポート組織があること。
- 定期的に更新され、脆弱性がない状態にデータを維持する手段を提供すること。
- 製品のマーケティングにおけるベストプラクティスとガイドラインに従うこと。
- 優良な AWS 顧客となり、AWS Marketplace 販売者および AWS Data Exchange プロバイダーの利用規約の要件を満たします。
- [対象管轄区域](#) 内の永住者もしくは市民である、またはこれらの区域のいずれかで組織化もしくは法人化された事業体であること。

- データ製品を提供するには、の[ケース作成](#)ウィザードを使用してオンボーディングをリクエストする必要があります AWS Support。AWS Data Exchange チームは、認定と登録プロセスを完了するために連絡します。

さらに、製品を提供してそれらの料金を請求する場合は、以下の情報を提供する必要があります。

- 税金および銀行口座の情報を提供する必要があります。米国を拠点とする企業の場合は、W-9 フォームと、米国を拠点とする銀行からの銀行口座が必要です。
- 米国以外の販売者は、W-8 フォーム、付加価値税 (VAT) または物品サービス税 (GST) 登録番号、および米国の銀行情報を提供する必要があります。米国銀行口座がない場合は、[Hyperwallet](#) から仮想米国銀行口座を登録できます。

AWS Data Exchange 製品の対象管轄区域

でデータ製品を提供するには AWS Data Exchange、次のいずれかの国または の永住者または市民であるか SARs、その中に組織または法人である必要があります。

- オーストラリア¹
- バーレーン¹²
- 欧州連合 (EU) 加盟国¹
- 香港 SAR
- イスラエル¹²
- 日本²³
- ニュージーランド¹
- ノルウェー¹²
- カタール
- スイス¹²
- アラブ首長国連邦 (UAE)¹²
- 英国 (UK)¹
- 米国 (US)

1 これらの国の有料製品のプロバイダーは、設立国の VAT 登録情報を提供する必要があります。

² プロバイダーであるお客様が加入者と同じ国に居住している場合、税金の請求、徴収、送金の責任を負う場合があります。税務顧問にお問い合わせください。

3 日本を拠点とするプロバイダーには、日本消費税 (JCT) の出品料を自己計上する義務があります。

VAT、請求、プロバイダーとしての納税義務の詳細については、[Amazon Web Service Tax Help](#) の [AWS Marketplace Sellers](#) を参照してください。

ステップ 2: プロバイダーになるための登録を行う

プロバイダー AWS Data Exchange としてを使用するには、に登録された販売者であり AWS Marketplace、AWS Data Exchange チームによって認定されている必要があります。アカウントを AWS Marketplace 販売者として登録すると、そのアカウントは製品の登録販売者となり、報告と支払いに使用されます。すべての製品とそのパブリックオファーは、AWS Data Exchange およびで検出できます AWS Marketplace。

AWS Data Exchange 認定と登録プロセスが完了し、無料製品の公開から有料製品にアップグレードする場合は、[AWS Marketplace 販売者オペレーション](#) チームにお問い合わせください。

Important

で製品を一覧表示 AWS アカウント するために使用する を変更することはできません AWS Marketplace。そのアカウントによって公開された製品に含めることができるのは、そのアカウントが所有するデータセットのみです。でデータ製品を提供するために登録されている AWS Marketplace と のみが AWS アカウント 製品を公開 AWS Data Exchange できます。

AWS Data Exchange および のプロバイダーとして登録するには AWS Marketplace

1. ウェブブラウザから [AWS Marketplace 管理ポータル](#) を開きます。
2. [今すぐ登録] を選択して登録ウィザードを開きます。
3. 会社名または氏名を確認し、利用規約を読みます。利用規約に同意する場合は、[I have read and agree to these terms] (利用規約を読み、これらに同意します) をオンにします。
4. [Account Settings] (アカウント設定) ページで、[Add (追加)] を選択してパブリックプロファイルを追加します。
5. (オプション) 有料製品を AWS Marketplace または に送信する場合は AWS Data Exchange、税金と銀行情報を提供する必要があります。[Account Settings] (アカウント設定) ページの [Provide tax and banking information] (税金と銀行情報の提供) タブで [Start] (開始) を選択し

て、税金と銀行ウィザードを完了します。これにより、税金と銀行情報が に送信されます AWS Marketplace 管理ポータル。

Note

税務申告書は、電子的に署名して送信することを強くお勧めします。それ以外の方法を使用する場合、フォームを印刷し、署名セクションに署名して、税務情報インタビューで提供された住所に税務申告書のハードコピーを郵送する必要があります。これは、登録プロセスの遅れにつながります。

6. 登録販売 AWS Marketplace 者であることに加えて、認定リクエストを送信 AWS Data Exchange する必要があります。 [AWS サポートダッシュボード](#) にアクセスし、 でケースを作成します AWS Management Console。 AWS Data Exchange チームは、認定と登録プロセスを完了するために連絡します。

ステップ 3: データの適格性を確認する

データの適格性を確認するには、「[の公開ガイドライン AWS Data Exchange](#)」をお読みください。

データセットの適格性について質問がある場合は、[AWS Marketplace 販売者オペレーションチーム](#) にお問い合わせください。

でデータ製品の公開ガイドラインを確認し AWS Data Exchange、データセットを一覧表示できることを確認したら、製品を作成できます。

の公開ガイドライン AWS Data Exchange

以下のガイドラインでは、 で製品を一覧表示する際の制限の概要を示します AWS Data Exchange。プロバイダーは、これらのガイドライン、[販売者向け AWS Marketplace 利用規約](#)、[AWS および顧客契約](#) を遵守する責任があります。AWS は、これらのガイドラインに違反する製品を随時更新する場合があります。は、これらのガイドラインに違反する製品 AWS を削除し、プロバイダーによるサービスの将来の使用を停止する可能性があります。

プロバイダーは、AWS Marketplace 販売者向けの利用規約に基づくガイドラインを承諾し、それらに従うことに加えて、データ製品に関する以下の公開ガイドラインに従う必要もあります。

AWS Data Exchange データ製品の公開ガイドライン

1. データ製品に、違法なコンテンツ、ウイルス、マルウェア、または他者にとって有害なその他素材を含めることはできません。
2. データ製品に、デバイスまたは特定可能な個人を特定するために使用できる情報を含めることはできません。また、センシティブロケーションと特定するために使用できる情報を含めることはできません。機密の場所には、以下が含まれます。がん治療を提供する場所 HIV/AIDS, の処理 受胎能または中絶クリニック メンタルヘルス治療施設、 および緊急治療室のトラウマセンター 宗教的な礼拝の場所 修正施設 依存関係または依存治療センター 国内虐待またはレイプの危機センター LGBTQ+ ID またはその他の性的指向を推測するために使用できる場所 軍事基地 政治集会などの一時的な集会の場所 行進、または抗議、 そのような集会のとき、 行進または抗議が行われている 主に 16 歳未満の子供が占有することを意図した場所。 明示的な性的コンテンツへの関与を推測するために使用できる場所 マテリアル、 または の行為 難民または移民ステータスを推測するために使用できる場所 難民や移民センター、 移民サービスなど 福祉またはホームレスシェルター 中途半端な家、 クレジット修復、 デットサービス 破産サービス、 または Payday レンディング機関。

さらに、お客様が AWS Data Exchange の で認定されたデータプロバイダーでない限り [the section called “拡張プロバイダープログラム \(EPP\)”](#)、お客様のデータ製品には、その情報が公開情報でない限り、個人を特定するために使用できる情報が含まれない場合があります。一般公開情報とは、(1) 連邦、州、地方自治体の記録、公開法廷記録、または公開企業への提出書類を通じて合法的に公開された情報、または (2) データ主体が合法的に一般に公開している情報を指します。

3. 生体情報データもしくは遺伝子データ、医療、人種もしくは民族的出身、政治的見解、宗教的もしくは哲学的信念、性別もしくは性的指向、労働組合への加入、個人支払もしくは財務情報 (信用履歴など)、センシティブロケーションの各カテゴリ、またはその他類似する機密情報のカテゴリに当てはまる情報は、データ製品内の個人を特定できないように集約または匿名化される必要があります。
 - 含めることができるデータセットの例 AWS Data Exchange – 公開会社の過去の株価、裁判官の名前とその裁判所の意見、医薬品研究からの集計または匿名化された研究結果。
 - HCLS ユースケースの場合、非特定化ガイドラインに従って、Expert Determination または Safe Harbor メソッドによってHIPAA非特定化されたデータ。
 - 禁止されているデータセットの例 AWS Data Exchange – 人種別に整理された名前のリスト、個人の特定に使用できる地理的位置データ、および 1996 年医療保険の相互運用性と説明責任に関する法律 (HIPAA) に基づく保護対象医療情報。
4. サブスクリバラーがデータ製品を使用する方法と使用しない方法をよく検討し、この情報をデータサブスクリプション契約 () に明確に含めてください DSA。

5. 製品の出品説明は、正確で、有効な連絡先情報が含まれており、集約または匿名化されたデータがある場合はその旨が記載されている必要があります。
6. にリストされていない他の製品やソリューションを宣伝 AWS Data Exchange するために を使用することはできません。ただし AWS Marketplace、 と互換性のない製品やソリューションを除きます AWS Marketplace。
7. お客様は、AWS Marketplace 販売者の利用規約に規定された法的資格要件を満たすデータセットを配布することに限定されます。何らかの方法でこれらの条件に違反した場合、禁止されている製品は から削除 AWS Data Exchange され、サービスが停止される可能性があります。
8. 製品内のAPIデータセットを一覧表示する場合：
 - まず、APIを Amazon API Gateway と統合する必要があります。 を API Gateway RESTAPIと統合する方法の詳細については、APIGateway デベロッパーガイド [RESTの「の使用APIs」](#) を参照してください。
 - データ製品に関するサブスクライバーからのサポート関連の質問には、1 営業日で回答する必要があります。このガイドラインに従わない場合、製品が から削除される可能性があります AWS Data Exchange。
9. 製品に追加されたロゴDSAs、およびその他のアタッチメントは、実際のデータ製品が置かれている場所とは別に保存される場合があります。

Note

延長プロバイダープログラムに登録されているプロバイダーは、上記のガイドライン 2 および 3 を補足するプロバイダーの利用規約の拡張 AWS Marketplace プロバイダープログラム補遺に規定された制限の対象となります。詳細については、「[拡張プロバイダープログラム \(EPP\)](#)」を参照してください。

データセットの適格性に関する質問がある場合は、以下を実行してください。

- [AWS Marketplace Seller Operations](#) チームまでお問い合わせください。

でデータ製品の公開ガイドラインを確認し AWS Data Exchange、データセットを一覧表示できることを確認したら、製品を作成できます。

で新製品を公開する AWS Data Exchange

以下のトピックでは、AWS Data Exchange コンソール [AWS Data Exchange](#) を使用して [で新製品を発行するプロセス](#)について説明します。

トピック

- [ファイルベースのデータ AWS Data Exchange を含む での製品の公開](#)
- [AWS Data Exchange を含む での製品の公開 APIs](#)
- [Amazon Redshift データセット AWS Data Exchange を含む での製品の公開](#)
- [Amazon S3 データアクセスを含む での AWS Data Exchange 製品の公開](#)
- [AWS Lake Formation データアクセス許可データセット AWS Data Exchange を含む での製品の公開 \(プレビュー\)](#)

次のビデオでは、AWS Data Exchangeで新しいデータプロダクトを公開する方法について詳しく説明しています。

ファイルベースのデータ AWS Data Exchange を含む での製品の公開

以下のトピックでは、AWS Data Exchange コンソール [AWS Data Exchange](#) を使用してデータセットを作成し、[にファイルベースのデータ AWS Data Exchange を含む での新しい製品を公開するプロセス](#)について説明します。このプロセスには以下のステップがあります。

ステップ

- [ステップ 1: アセットを作成する](#)
- [ステップ 2: データセットを作成する](#)
- [ステップ 3: リビジョンを作成する](#)
- [ステップ 4: リビジョンにアセットをインポートする](#)
- [ステップ 5: 新しい製品を公開する](#)
- [ステップ 6: \(オプション\) 製品をコピーする](#)

ステップ 1: アセットを作成する

アセットは [のデータ](#)です [AWS Data Exchange](#)。詳細については、「[アセット](#)」を参照してください。

新しいファイルベースのデータ製品を作成して公開する前に、以下を実行する必要があります。

1. ファイルを作成します。

AWS Data Exchange はすべてのファイルタイプをサポートしています。

2. ファイルをオブジェクトとして Amazon Simple Storage Service (Amazon S3) またはローカルコンピュータに保存します。

Amazon S3 でのファイルの保存に関する詳細については、「[Amazon S3 ユーザーガイド](#)」を参照してください。

ステップ 2: データセットを作成する

のデータセット AWS Data Exchange は動的で、リビジョンを使用してバージョン管理され、リビジョンごとに少なくとも 1 つのアセットが含まれます。詳細については、「[のデータ AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

データセットを作成する

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [所有データセット] を選択します。
3. [所有データセット] で [データセットを作成] を選択し、[データセット作成のステップ] ウィザードを開きます。
4. [データセットタイプを選択] で [ファイル] を選択します。
5. [データセットを定義] で、データセットの [名前] と [説明] を入力します。詳細については、「[データセットのベストプラクティス](#)」を参照してください。
6. (オプション) [タグを追加 - オプション] でタグを追加します。
7. [データセットを作成] を選択します。

ステップ 3: リビジョンを作成する

次の手順では、AWS Data Exchange コンソールでデータセットを作成した後にリビジョンを作成します。詳細については、「[リビジョン](#)」を参照してください。

リビジョンを作成する

1. データセットの詳細ページの [データセットの概要] セクションで以下を実行します。

- a. (オプション) [名前を編集] を選択してデータセットに関する情報を編集します。
- b. (オプション) [削除] を選択してデータセットを削除します。
2. [リビジョン] セクションで [リビジョンを作成] を選択します。
3. [リビジョンを定義] で、リビジョンの目的を説明するリビジョンのオプションのコメントを入力します。
4. (オプション) [タグを追加 – オプション] で、リソースに関連付けられているタグを追加します。
5. [リビジョンを作成] を選択します。
6. 前のステップからの変更を確認、編集、または削除します。

ステップ 4: リビジョンにアセットをインポートする

次の手順では、データアセットをインポートし、AWS Data Exchange コンソールでリビジョンを確定します。詳細については、「[アセット](#)」を参照してください。

リビジョンにアセットをインポートする

1. データセットの詳細ページの [インポートされたアセット] で、データセットのデータアセットが現在保存されている場所に基づいて [Amazon S3 からインポート] または [アップロード] (コンピュータからアップロードするため) を選択します。
2. 選択内容に応じて、プロンプトに従います。アセットをデータセットにインポートするジョブが開始されます。
3. ジョブが終了したら、[ジョブ] セクションの [状態] フィールドが [完了] に更新されます。
4. 追加するデータがある場合は、ステップ 1 を繰り返します。
5. [リビジョンの概要] で、リビジョンとそのアセットを確認します。
6. [リビジョンの最終処理] を選択します。

データセットのリビジョンが正常に確定されました。

リビジョンは、製品に追加する前に編集または削除できます。

トピック

- [リビジョンを編集する](#)
- [リビジョンを削除する](#)

リビジョンを編集する

確定後にリビジョンを編集する

1. [リビジョンの概要] で [確定解除] を選択します。

このリビジョンは確定済み状態ではなくなりましたというメッセージが表示されます。

2. リビジョンを編集するには、[リビジョンの概要] で、[アクション]、[編集] の順に選択します。
3. 変更を行ってから、[更新] を選択します。
4. 変更内容を確認してから、[確定] を選択します。

リビジョンを削除する

確定後にリビジョンを削除する

1. [リビジョンの概要] で [削除] を選択します。
2. [リビジョンを削除しますか?] ダイアログボックスに **Delete** を入力してから、[削除] を選択します。

Warning

これで、リビジョンとそのアセットのすべてが削除されます。このアクションを元に戻すことはできません。

ステップ 5: 新しい製品を公開する

少なくとも1つのデータセットを作成し、アセットが含まれるリビジョンを確定したら、そのデータセットを製品の一部として公開する準備が整います。詳細については、「[の製品詳細のベストプラクティス AWS Data Exchange](#)」を参照してください。製品とオファーに関する必要な詳細情報のすべてが揃っていることを確認してください。

新しい製品を公開する

1. [AWS Data Exchange コンソール](#)の左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [製品] を選択します。
2. [製品] で [新しい製品を発行] を選択して [新しい製品を発行] ウィザードを開きます。

3. [製品の可視性] セクションで、製品の [製品の可視性オプション] と [機密情報] 設定を選択してから、[次へ] を選択します。詳細については、「[での製品の可視性 AWS Data Exchange](#)」および「[の機密情報のカテゴリ AWS Data Exchange](#)」を参照してください。
4. [データの追加] セクションの [所有データセット] で、追加するデータセットの横にあるチェックボックスを選択し、[選択項目を追加] を選択します。

 Note

選択するデータセットには、確定済みのリビジョンが必要です。確定済みのリビジョンがないデータセットは追加されません。

- a. [選択したデータセット] に移動して、選択内容を確認します。

データセットの名前、データセットのタイプ、データセットの最終更新時のタイムスタンプを確認できます。
- b. [リビジョンアクセスルールを選択] に進み、この製品に含まれるデータセットに設定するリビジョンアクセスルールを選択し、[次へ] を選択します。詳細については、「[でのアクセスルールの改訂 AWS Data Exchange](#)」を参照してください。
5. [製品を定義] セクションの [製品概要] で、製品名、製品ロゴ、お問い合わせ先情報、製品カテゴリなど、製品に関する情報を入力します。

詳細については、「[の製品詳細のベストプラクティス AWS Data Exchange](#)」を参照してください。
6. (オプション) [製品を定義] セクションの [データディクショナリとサンプル — オプション] で、データセット名の横にあるオプションボタンを選択してデータセットを選択し、[編集] を選択します。
 - a. [編集] ダイアログボックスの [データディクショナリをアップロード] で、[ファイルを追加] を選択して新しいデータディクショナリをアップロードします。

.csv 形式の最大サイズが 1 MB のデータディクショナリを 1 つ選択できます。
 - b. コンピューターから保存されているデータディクショナリを選択し、[開く] を選択します。

データディクショナリの.csv ファイルが [編集] ダイアログボックスに表示されます。

Note

データディクショナリは、AWS Data Exchange データディクショナリテンプレートに準拠している必要があります。アップロードする保存済みデータディクショナリがない場合は、AWS Data Exchange コンソールで空のデータディクショナリテンプレートリンクまたはサンプルデータディクショナリリンクを選択できます。

- c. [データディクショナリのプレビュー] を選択してプレビューします。
- d. 「サンプル-オプション」で「サンプルをアップロード」を選択し、コンピューターからサンプルを選択して、[開く]を選択します。

サンプルは「編集」ダイアログボックスに表示されます。

Note

最大 10 個のサンプルをアップロードできます。最大サイズは 50 MB です。.csv 形式のサンプルはプレビューできます。

- e. 商品詳細ページに表示される各サンプルの説明を入力します。
 - f. [保存] を選択します。
7. [商品定義] に、商品の [簡単な説明] と [詳細な説明] を入力します。

詳細説明にテンプレートを使用する場合は、[テンプレートを適用] を選択し、テンプレートの種類を選択してから、テンプレートに特定の商品情報を入力します。

8. [次へ] をクリックします。
9. オファーを設定します。

• パブリックオファーを作成する場合は、[パブリックオファーを追加] セクションで、オファーを設定します。パブリックオファーは、可視性がパブリック に設定されているすべての AWS Data Exchange 製品に必須です。

1. サブスクリプションの [料金とアクセス期間] オプションを選択します。
2. 米国の売上税設定、データサブスクリプション契約 (DSA)、返金ポリシーを選択します。
3. (オプション) [サブスクリプション検証] を設定します。これは、誰がこの製品をサブスクライブできるかを制御できるようにします。詳細については、「[のプロバイダーのサブスクリプション検証 AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

4. [オファーの自動更新] オプションを選択します。詳細については、「[AWS Data Exchange 製品のオファーの作成](#)」を参照してください。
 5. [次へ] を選択します。
- プライベートオファーを作成している場合は、[カスタムオファーを追加] セクションでオファーの詳細を設定します。
 1. [サブスクライバーアカウント情報] セクションで、オファーを提示するサブスクライバーアカウントを少なくとも 1 つ追加します。
 2. サブスクリプションの [料金とアクセス期間] オプションを選択します。
 3. [Offer expiration date] (オファーの有効期限) を選択します。サブスクライバーはこの日までにオファーを受諾する必要があります。
 4. 米国の売上税設定、データサブスクリプション契約 (DSA)、返金ポリシーを選択します。
 5. [オファーの自動更新] オプションを選択します。詳細については、「[AWS Data Exchange 製品のオファーの作成](#)」を参照してください。
 6. [次へ] を選択します。
10. [レビューと公開] セクションで製品情報を確認し、[製品ページのプレビュー] を展開してページが公開後にどのように見えるかを確認します。
 11. 製品とパブリックオファーをユーザー全員に表示し、利用可能にしてもよい場合は、[公開] を選択します。

これで、公開オファーを使用してデータ製品を公開する手動部分が完了しました。は、製品を AWS Data Exchange 準備して公開します。[製品の概要] ページの製品のステータスが[承認待ち]になり、公開されると [公開済み] に変更されます。

ステップ 6: (オプション) 製品をコピーする

最初の製品を作成したら、その詳細とパブリックオファーをコピーして新しい製品を作成することができます。

Note

パブリック、プライベート、公開済み、または未公開の製品をコピーできます。製品に関連付けられているカスタムオファーはコピーされませんが、パブリックオファーがコピーされます。

製品をコピーする

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [製品] を選択します。
3. [製品] で、コピーする製品の横にあるボタンをオンにします。
4. [アクション] ドロップダウンから [コピーを作成] を選択します。
5. [新しい製品を公開] ワークフローを続行します。ワークフローの詳細情報は、ステップ 3 で選択した製品に基づいて既に入力されています。詳細については、「[ステップ 5: 新しい製品を公開する](#)」を参照してください。

AWS Data Exchange を含む での製品の公開 APIs

次のトピックでは、REST API データセットを作成し、APIsに を含む新製品を発行するプロセスについて説明します AWS Data Exchange。AWS Data Exchange コンソールまたは を使用してプロセスを完了できます AWS Command Line Interface。

Amazon API Gateway REST をセットアップしたらAPI、 で新しいAPIデータセットを作成できます AWS Data Exchange。その後、リビジョンを作成し、APIアセットを追加できます。

API アセットを作成して公開すると、エンドポイントへのサブスクライバーリクエストが AWS Data Exchange APIゲートウェイ にプロキシされますAPI。次に、このデータセットを製品に追加し、料金を追加できます。その後、サブスクライバーは製品を表示し、AWS Marketplace カタログと AWS Data Exchange カタログでサブスクライブできます。

AWS Data Exchange リビジョンアクセスルール、プライベート製品、プライベートオファー、サブスクリプション検証などの機能を利用できます。

契約ベースの価格設定、従量制の原価価格 (契約価格は 0 ドル)、または従量制価格と契約価格の組み合わせのみを選択できます。

標準の従量制コストを選択することも、カスタムの従量制コストを指定することもできます。標準の従量制料金には、次の 3 つのタイプがあります。

- API リクエストごと
- 成功したAPIリクエストごと
- 転送されたデータ単位 (バイト)

Note

計測コストは、製品内のすべてのAPIデータセットに適用されます。したがって、異なるAPIデータセットに対して同じディメンションに対して異なる料金を請求する場合は、異なる製品でこれらのデータセットを作成することをお勧めします。

このプロセスには以下のステップがあります。

ステップ

- [前提条件](#)
- [ステップ 1: APIリソースポリシーを更新する](#)
- [ステップ 2: APIデータセットを作成する](#)
- [ステップ 3: リビジョンを作成する](#)
- [ステップ 4: リビジョンにAPIアセットを追加する](#)
- [ステップ 5: を含む新製品を公開する APIs](#)
- [ステップ 6: \(オプション\) 製品をコピーする](#)

前提条件

を含む製品を公開する前にAPIs、次の前提条件を満たす必要があります。

- AWS のサービスを含む を使用する前に AWS Data Exchange、 にサインアップ AWS して管理ユーザーを作成する必要があります。詳細については、AWS IAM Identity Center ユーザーガイドの「[使用開始](#)」を参照してください。
- で製品を作成するには AWS Data Exchange、 を AWS アカウント AWS Marketplace 販売者として登録する必要があります。データセットの作成にはこのアカウントを使用します。API Gateway リソースを持つアカウントは、データセットを作成するのと同じアカウントに存在する必要はありません。
- は、Amazon DynamoDB や などのデータにアクセスするための適切なリクエストとレスポンスモデルを使用する統合で Amazon API Gateway 上にあるRESTAPI必要があります AWS Lambda。詳細については、「[Amazon Gateway デベロッパーガイド](#)」の「[APIGateway RESTAPIでの の開発](#)」と「[の使用RESTAPIs](#)」を参照してください。 API

Note

パブリックAPIゲートウェイのみがサポートAPIsされています。

- Gateway は、AWS Data Exchange サービスプリンシパルからの呼び出しを認証および承認できるAPI REST API があります。から AWS Data Exchange へのすべてのリクエストAPI は、Credentials. AWS Data Exchange works で AWS Data Exchange 署名された Signature Version 4 (SigV4) プロトコルを使用し、カスタムドメインとドメインキーマッピングを使用します。

Note

AWS Data Exchange は、Amazon Cognito、No-Auth、および AWS Lambda オーソライザーをサポートしていません。

- Gateway が認証と認可にカスタム ID システムAPI REST API を使用している場合は、IAM 認証を使用して を記述する OpenAPI スキーマをインポートするように設定しますAPI。AWS Data Exchange は独自のサービス認証情報REST API を使用して API Gateway を呼び出し、アカウント ID などのサブスクライバー情報を含めます。
- API Gateway REST API は、バックエンドとの統合を担当します。これを行うには、次のいずれかを実行します。
 - バックエンドが検証できる API Gateway 経由のすべてのリクエストに、長寿命認証トークン REST API をアタッチします。
 - API Gateway を使用して、認証情報を生成して を呼び出すことができる Lambda 関数を呼び出しますAPI。

API は、[API統合リクエスト仕様](#) に従って呼び出されます。

詳細については、以下の各トピックを参照してください。

トピック

- [API データセットのセキュリティ](#)
- [API 統合リクエストの仕様](#)
- [ヘッダー転送](#)

API データセットのセキュリティ

AWS Data Exchange Transport Layer Security (TLS) 1.2 を使用してトラフィックをエンドツーエンドで暗号化します。すべてのメタデータは保管時に暗号化されます。AWS Data Exchange は、サブスクライバーリクエストやバックエンドからのレスポンスを保存しません。抽出されるのは、料金の請求に必要な計測メタデータのみです。

API 統合リクエストの仕様

on は、すべてのヘッダー (にリストされているヘッダーを除く [ヘッダー転送](#))、本文、http メソッド、パス、およびクエリ文字列をそのままカスタマーリクエストから API AWS Data Exchange パススルーし、次のヘッダーを追加します。

```
// These headers help prevent Confused Deputy attacks. They enable the SourceAccount
// and SourceArn variables in IAM policies.
'x-amz-source-account': ACCOUNT_ID,
'x-amz-source-arn': `arn:aws:dataexchange:${REGION}:${OWNER_ACCOUNT_ID}:data-sets/
${DATA_SET_ID}/revisions/${REVISION_ID}/assets/${ASSET_ID}`,

// These headers identify the API Asset in Data Exchange.
'x-amzn-dataexchange-asset-id': ASSET_ID,
'x-amzn-dataexchange-data-set-id': DATA_SET_ID,
'x-amzn-dataexchange-revision-id': REVISION_ID,

// This header identifies the Data Exchange Product.
'x-amzn-dataexchange-product-id': PRODUCT_ID,

// This header identifies the caller of Data Exchange. It will contain subscriber
// information.
'x-amzn-dataexchange-requester-account-id': REQUESTER_ACCOUNT_ID,

// Providers can attach custom metadata in the form of key/value pairs
// to a particular subscription. We will send these key/value pairs as stringified
// JSON.
'x-amz-dataexchange-subscription-metadata': STRINGIFIED_METADATA,
```

ヘッダー転送

AWS Data Exchange は、プロバイダーバックエンドに転送する前に、Amazon に認証または名前空間化されたヘッダーを削除します。具体的に、AWS Data Exchange は以下のヘッダーを削除します。

- Authentication ヘッダー
- x-amz で始まるヘッダー

host ヘッダーは、プロキシの結果として上書きされます。

ステップ 1: APIリソースポリシーを更新する

前提条件 RESTAPIを満たす Amazon API Gateway がある場合は、APIリソースポリシーを更新して、サブスクライバーが APIのスキーマを取得するリクエストを行ったAPIときに を呼び出す AWS Data Exchange 機能を付与する必要があります。

API リソースポリシーを更新するには

1. APIのリソースポリシーに次のポリシーを追加します。

```
{
  "Effect": "Allow",
  "Principal": {"Service": "dataexchange.amazonaws.com"},
  "Action": "execute-api:Invoke",
  "Resource": "*",
  "Condition": {"StringEquals": {"aws:SourceAccount": "<account-id>"}}
}
```

2. を、APIデータセットを作成するアカウントaccount-idに置き換えます。

API Gateway リソースを持つアカウントは、データセットを作成しているアカウントと同じアカウントに存在する必要はありません。

このポリシーは、これらのアクセス許可を AWS Data Exchange サービスプリンシパルによって行われた呼び出しに制限し、アカウントのみが との統合 AWS Data Exchange を許可できることを要求しますAPI。

Note

この呼び出しの実行 AWS Data Exchange を明示的に拒否するリソースポリシーがある場合は、この拒否を削除または制限する必要があります。

これで、[APIデータセットを作成する](#)準備が整いました。

ステップ 2: APIデータセットを作成する

のデータセット AWS Data Exchange は動的で、リビジョンを使用してバージョン管理され、リビジョンごとに少なくとも 1 つのアセットが含まれます。詳細については、「[のデータ AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

AWS Data Exchange コンソールまたは AWS Command Line Interface を使用して API データセットを作成します。

- [API データセットの作成 \(コンソール\)](#)
- [API データセットの作成 \(AWS CLI\)](#)

API データセットの作成 (コンソール)

API データセットを作成するには (コンソール)

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインで、[マイデータ] の [所有データセット] を選択します。
3. [所有データセット] で [データセットを作成] を選択し、[データセット作成のステップ] ウィザードを開きます。
4. データセットタイプを選択で、Amazon API Gateway API を選択します。
5. [データセットを定義] で、データセットの [名前] と [説明] を入力します。詳細については、「[データセットのベストプラクティス](#)」を参照してください。
6. (オプション) [タグを追加 - オプション] でタグを追加します。
7. [作成] を選択します。

これで、リビジョンを作成する準備が整いました。

API データセットの作成 (AWS CLI)

API データセットを作成するには (CLI)

1. create-data-set コマンドを使用して API データセットを作成します。

```
$ aws dataexchange create-data-set \  
--asset-type API_GATEWAY_API \  
--description 'Data Set Description' \  
--name 'Data Set Name'
```

```
{
  "Arn": "arn:aws:dataexchange:us-east-1:123456789012:data-sets/$DATA_SET_ID",
  "AssetType": "API_GATEWAY_API",
  "CreatedAt": "2021-09-11T00:16:46.349000+00:00",
  "Description": "Data Set Description",
  "Id": "$DATA_SET_ID",
  "Name": "Data Set Name",
  "Origin": "OWNED",
  "UpdatedAt": "2021-09-11T00:16:46.349000+00:00"
}
```

2. 新しいアセットタイプの API_GATEWAY_API に注目してください。

これで、リビジョンを作成する準備が整いました。

ステップ 3: リビジョンを作成する

以下の手順では、データセットの作成後にリビジョンを作成します。詳細については、「[リビジョン](#)」を参照してください。

AWS Data Exchange コンソールまたは AWS Command Line Interface を使用してリビジョンを作成します。

- [リビジョンの作成 \(コンソール\)](#)
- [リビジョンの作成 \(AWS CLI\)](#)

リビジョンの作成 (コンソール)

リビジョンを作成する (コンソール)

1. データセットの詳細ページの [データセットの概要] セクションで以下を実行します。
 - a. (オプション) [名前を編集] を選択してデータセットに関する情報を編集します。
 - b. (オプション) [削除] を選択してデータセットを削除します。
2. [リビジョン] セクションで [リビジョンを作成] を選択します。
3. [リビジョンを定義] で、リビジョンの目的を説明するリビジョンのオプションのコメントを入力します。
4. (オプション) [タグを追加 – オプション] で、リソースに関連付けられているタグを追加します。

5. [リビジョンを作成] を選択します。
6. 前のステップからの変更を確認、編集、または削除します。

これで、[リビジョンにAPIアセットを追加する準備が整いました](#)。

リビジョンの作成 (AWS CLI)

リビジョンを作成する (AWS CLI)

1. create-revision コマンドを使用して、リビジョンを作成します。

```
$ aws dataexchange create-revision \  
--data-set-id $DATA_SET_ID \  
--comment 'First Atlas Revision' \  
{ \  
  "Arn": "arn:aws:dataexchange:us-east-1:123456789012:data-sets/$DATA_SET_ID/  
revisions/$REVISION_ID", \  
  "Comment": "First Atlas Revision", \  
  "CreatedAt": "2021-09-11T00:18:49.160000+00:00", \  
  "DataSetId": "$DATA_SET_ID", \  
  "Finalized": false, \  
  "Id": "$REVISION_ID", \  
  "UpdatedAt": "2021-09-11T00:18:49.160000+00:00" \  
}
```

2. [リビジョンにAPIアセットを追加します](#)。

Note

インポートRESTAPIするAPIゲートウェイの ID とステージを知る必要があります。

ステップ 4: リビジョンにAPIアセットを追加する

API アセットには、サブスクライバーが を呼び出すために必要な情報が含まれていますAPI。詳細については、「[アセット](#)」を参照してください。

以下の手順では、データアセットをインポートし、その後リビジョンを確定します。

AWS Data Exchange コンソールまたは を使用して AWS CLI、リビジョンにアセットを追加します。

- [リビジョンへのAPIアセットの追加 \(コンソール\)](#)
- [リビジョンへのAPIアセットの追加 \(AWS CLI\)](#)

リビジョンへのAPIアセットの追加 (コンソール)

リビジョンにアセットを追加する (コンソール)

1. データセットの詳細ページのAPIアセットセクションで、APIステージの追加 を選択します。
2. Amazon API Gateway APIの場合は、APIステージ を選択 でAPI入力ボックスに を入力するか、ドロップダウンリストから次のいずれかを選択します。
 - API 別の AWS アカウント- これは、アクセス許可が付与APIされたクロスアカウントです。
 - これ AWS アカウント — これは APIの です AWS アカウント。
 - a. API 別の で AWS アカウントを選択した場合は、入力ボックスに API ID API とステージ名を入力します。
 - b. この AWS アカウントで を選択した場合は、ドロップダウンリストからAPIステージ名を選択します。

Note

Amazon Gateway モーダルで新規作成を選択し、新規作成のステップに従って、新しいAPIステージを作成できます。API API 新しいステージが作成されたら、ステップ 2 を繰り返します。

3. 詳細設定 – オプション で、既存の Amazon API Gateway 使用プランを接続して、既存の使用プランで定義されているスロットリングとクォータの制限を使用し、APIキー を入力できます。
4. サブスクライバーAPIのドキュメント で、サブスクライバーAPIが製品をサブスクライブした後に表示される の詳細を指定します。
 - a. API 名前 には、サブスクライバーがAPIアセットの識別に使用できる名前を入力します。

Note

これで AWS アカウント を選択した場合、API名前は自動的に入力され、必要に応じて変更できます。

API 別の AWS アカウント を選択した場合、API 名前にはデフォルト名が入力されます。サブスクライバーがそれが何であるかを簡単に理解できるように、に変更する必要があります。

- b. OpenAPI 3.0 仕様 の場合、次のいずれかを実行します。
 - i. OpenAPI 3.0 仕様ファイルを入力またはコピーして貼り付けます。
 - ii. .JSON ファイル からインポート を選択し、ローカルコンピュータから .json ファイル を選択してインポートします。

インポートされた仕様がボックスに表示されます。
 - iii. Amazon API Gateway からインポート を選択し、インポートする仕様を選択します。

インポートされた仕様がボックスに表示されます。
- c. 追加ドキュメント - オプション については、サブスクライバーが について知るのに役立つ追加情報を入力しますAPI。Markdown がサポートされています。

Note

このアセットをリビジョンに追加した後は、OpenAPI 仕様と追加のドキュメントを編集することはできません。

リビジョンが確定されていないときにこの情報を更新する場合は、アセットを置き換えることができます。

リビジョンが確定されているときにこの情報を更新する場合は、更新されたアセットで新しいリビジョンを作成できます。

5. API ステージの追加 を選択します。

ジョブが開始され、アセット (この場合は API) がデータセットにインポートされます。

Note

Amazon API Gateway APIに がない場合は、作成するよう求められます。

6. ジョブが終了したら、[ジョブ] セクションの [状態] フィールドが [完了] に更新されます。
7. 追加APIsする項目がある場合は、ステップ 2 を繰り返します。
8. [リビジョンの概要] で、リビジョンとそのアセットを確認します。

9. [確定] を選択します。

データセットのリビジョンが正常に確定されました。

リビジョンを製品に追加する前に、[リビジョンを編集する](#)、または [リビジョンを削除する](#) ことができます。

これで、[新しいAPIデータ製品を発行](#)する準備が整いました。

リビジョンへのAPIアセットの追加 (AWS CLI)

IMPORT_ASSET_FROM_API_GATEWAY_API ジョブを実行してAPIアセットを追加できます。

リビジョンにAPIアセットを追加するには (AWS CLI):

1. create-job コマンドを使用して、リビジョンにAPIアセットを追加します。

```
$ aws dataexchange create-job \  
  --type IMPORT_ASSET_FROM_API_GATEWAY_API \  
  --details '{"ImportAssetFromApiGatewayApi":  
{  
  "DataSetId": "$DATA_SET_ID", "RevisionId": "$REVISION_ID", "ApiId": "$API_ID", "Stage": "$API_STAGE"  
  }  
  "Arn": "arn:aws:dataexchange:us-east-1:123456789012:jobs/$JOB_ID",  
  "CreatedAt": "2021-09-11T00:38:19.875000+00:00",  
  "Details": {  
    "ImportAssetFromApiGatewayApi": {  
      "ApiId": "$API_ID",  
      "DataSetId": "$DATA_SET_ID",  
      "ProtocolType": "REST",  
      "RevisionId": "$REVISION_ID",  
      "Stage": "$API_STAGE"  
    }  
  },  
  "Id": "$JOB_ID",  
  "State": "WAITING",  
  "Type": "IMPORT_ASSET_FROM_API_GATEWAY_API",  
  "UpdatedAt": "2021-09-11T00:38:19.875000+00:00"  
}'  
  
$ aws dataexchange start-job --job-id $JOB_ID  
$ aws dataexchange get-job --job-id $JOB_ID  
{  
  "Arn": "arn:aws:dataexchange:us-east-1:0123456789012:jobs/$JOB_ID",
```

```

"CreatedAt": "2021-09-11T00:38:19.875000+00:00",
"Details": {
  "ImportAssetFromApiGatewayApi": {
    "ApiId": "$API_ID",
    "DataSetId": "$DATA_SET_ID",
    "ProtocolType": "REST",
    "RevisionId": "$REVISION_ID",
    "Stage": "$API_STAGE"
    "ApiEndpoint": "string",
    "ApiKey": "string",
    "ApiName": "string",
    "ApiDescription": "string",
    "ApiSpecificationDownloadUrl": "string",
    "ApiSpecificationDownloadUrlExpiresAt": "string"
  }
},
"Id": "$JOB_ID",
"State": "COMPLETED",
"Type": "IMPORT_ASSET_FROM_API_GATEWAY_API",
"UpdatedAt": "2021-09-11T00:38:52.538000+00:00"
}

```

2. `list-revision-assets` コマンドを使用して、新しいアセットが適切に作成されたことを確認します。

```

$ aws dataexchange list-revision-assets \
  --data-set-id $DATA_SET_ID \
  --revision-id $REVISION_ID
{
  "Assets": [
    {
      "Arn": "arn:aws:dataexchange:us-east-1:123456789012:data-sets/$DATA_SET_ID/
revisions/$REVISION_ID/assets/$ASSET_ID",
      "AssetDetails": {
        "ApiGatewayApiAsset": {
          "ApiEndpoint": "https://$API_ID.execute-api.us-
east-1.amazonaws.com/$API_STAGE",
          "ApiId": "$API_ID",
          "ProtocolType": "REST",
          "Stage": "$API_STAGE"
        }
      },
      "AssetType": "API_GATEWAY_API",

```

```
"CreatedAt": "2021-09-11T00:38:52.457000+00:00",
"DataSetId": "$DATA_SET_ID",
"Id": "$ASSET_ID",
"Name": "$ASSET_ID/$API_STAGE",
"RevisionId": "$REVISION_ID",
"UpdatedAt": "2021-09-11T00:38:52.457000+00:00"
}
]
}
```

これで、[APIデータ製品を発行](#)する準備が整いました。

リビジョンを編集する

確定後にリビジョンを編集する

1. [リビジョンの概要] で [確定解除] を選択します。

このリビジョンは確定済み状態ではなくなりましたというメッセージが表示されます。

2. リビジョンを編集するには、[リビジョンの概要] で、[アクション]、[編集] の順に選択します。
3. 変更を行ってから、[Update] (アップデート) を選択します。
4. 変更内容を確認してから、[確定] を選択します。

リビジョンを削除する

確定後にリビジョンを削除する

1. [リビジョンの概要] で [削除] を選択します。
2. [リビジョンを削除しますか?] ダイアログボックスに **Delete** を入力してから、[削除] を選択します。

Warning

これで、リビジョンとそのアセットのすべてが削除されます。このアクションを元に戻すことはできません。

ステップ 5: を含む新製品を公開する APIs

少なくとも 1 つのデータセットを作成し、アセットが含まれるリビジョンを確定したら、そのデータセットを製品の一部として公開する準備が整います。詳細については、「[の製品詳細のベストプラクティス AWS Data Exchange](#)」を参照してください。製品とオファーに関する必要な詳細情報のすべてが揃っていることを確認してください。

AWS Data Exchange コンソールまたは AWS Marketplace カタログを使用して API、を含む新しい製品を公開します APIs。AWS Marketplace カタログ を使用して新製品を発行する方法の詳細については API、「」を参照してください [AWS Marketplace カタログ AWS Data Exchange での の使用 API](#)。

• [APIs \(コンソール\) を含む新製品の公開](#)

APIs (コンソール) を含む新製品の公開

を含む新しい製品を公開するには APIs

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) の左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [製品] を選択します。
2. [製品] で [新しい製品を発行] を選択して [新しい製品を発行] ウィザードを開きます。
3. 製品の可視性で
 - a. 商品の商品表示オプションを [公開] または [非公開] から選択します。

可視性が Public に設定されているすべての AWS Data Exchange 製品には、パブリックオファーが必要です。

詳細については、「[での製品の可視性 AWS Data Exchange](#)」を参照してください。
 - b. 製品の機密情報設定を選択します。

詳細については、「[の機密情報のカテゴリ AWS Data Exchange](#)」を参照してください。
 - c. [次へ] を選択します。
4. [データを追加] で:
 - a. [所有データセット] で、追加するデータセットの横にあるチェックボックスを選択し、[選択項目を追加] を選択します。

Note

選択するデータセットには、確定済みのリビジョンが必要です。確定済みのリビジョンがないデータセットは追加されません。

- b. [選択したデータセット] に移動して、選択内容を確認します。

データセットの名前、データセットのタイプ、データセットの最終更新時のタイムスタンプを確認できます。

- c. [リビジョンアクセスルールを選択] にスクロールして、この製品に含まれるデータセットに設定するリビジョンアクセスルールを選択し、[次へ] を選択します。

詳細については、「[でのアクセスルールの改訂 AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

- d. [次へ] を選択します。

5. [製品を定義] では:

- a. [製品概要] に、製品名、製品ロゴ、お問い合わせ先情報、製品カテゴリなど、製品に関する情報を入力します。

詳細については、「[の製品詳細のベストプラクティス AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

- b. (オプション) [データディクショナリとサンプル — オプション] で、データセット名の横にあるオプションボタンを選択してデータセットを選択し、[編集] を選択します。

- i. [編集] ダイアログボックスで [アップロード] を選択し、新しいデータディクショナリをアップロードします。

.csv 形式の最大サイズが 1 MB のデータディクショナリを 1 つ選択できます。

- ii. コンピューターから保存されているデータディクショナリを選択し、[開く] を選択します。

データディクショナリの.csv ファイルが [編集] ダイアログボックスに表示されます。

Note

AWS Data Exchange データディクショナリはデータディクショナリテンプレートに準拠している必要があります。アップロードするデータディクショナ

リが保存されていない場合は、AWS Data Exchange コンソールで 空のデータディクショナリテンプレート リンクまたは サンプルデータディクショナリ リンクを選択できます。

- iii. [データディクショナリのプレビュー] を選択してデータディクショナリをプレビューします。
- iv. 「サンプル-オプション」で「サンプルをアップロード」を選択し、コンピューターからサンプルを選択して、「開く」を選択します。

サンプルは「編集」ダイアログボックスに表示されます。

 Note

最大 10 個のサンプルをアップロードできます。最大サイズは 50 MB です。 .csv 形式のサンプルはプレビューできます。

- v. 商品詳細ページに表示される各サンプルの説明を入力します。
 - vi. [保存] を選択します。
6. [商品定義] に、商品の [簡単な説明] と [詳細な説明] を入力します。

詳細説明にテンプレートを使用する場合は、[テンプレートを適用] を選択し、テンプレートの種類を選択してから、テンプレートに特定の商品情報を入力します。

7. [次へ] をクリックします。
8. 「公開オファーを追加」(公開オファー用) または 「カスタムオファーを追加」(非公開オファー用) でオファーを設定します。

可視性が Public に設定されているすべての AWS Data Exchange 製品には、パブリックオファーが必要です。

- a. プライベートオファーのみ:
 - i. リストされているオファータイプのいずれかを選択します。プライベートオファー、更新済みプライベートオファー、または Bring Your Own Subscription (BYOS)。
 - ii. [サブスクライバーアカウント情報] セクションで、オファーを提示するサブスクライバーアカウントを少なくとも 1 つ追加します。
- b. サブスクリプションの [料金とアクセス期間] オプションを選択します。
- c. 従量制料金 (オプション) の場合は、[追加] を選択します。

- i. 計測コストを追加する場合、タイプリストからAPI呼び出しのコストのタイプを選択します。
 - APIリクエストごと
 - 成功したAPIリクエストごと
 - 転送されたデータ単位 (バイト)
 - 新しいカスタム従量制コスト
- ii. 購読者の請求書に記載されているコスト表示名を入力または更新します。
- iii. 事前に定義された従量制料金を使用している場合、キーは自動的に生成され、編集できないため、レスポンスヘッダーに送り返す必要もありません。
- iv. 新しいカスタム計測コストを作成する場合は、APIレスポンスヘッダーに計測コストの識別子であるキーを入力します (最大 15 文字)。

このキーは `x-amz-dataexchange-metering` レスポンスヘッダーの一部として送り返す必要があります。

Example カスタムキー

という名前のカスタムキー **VertexCount** と という名前の別のカスタムキーがある場合 **EdgeCount**、`x-amz-dataexchange-metering` 「」レスポンスヘッダーの値は `VertexCount=3,EdgeCount=10` であるが、2 つの個別のヘッダー行を返すことができます。

```
x-amz-dataexchange-metering: VertexCount=3
```

```
x-amz-dataexchange-metering: EdgeCount=10
```

- v. サブスクライバーがユニットごとに請求する価格を [価格/ユニット] に入力します。
- vi. (オプション) 単位数を入力すると、従量制料金計算ツールに費用の例が表示されます。
- vii. (オプション) 商品詳細ページに表示される従量制コストの簡単な説明を入力します。
- viii. [追加] を選択します。
- ix. (オプション) 同じ手順を繰り返して、その他の従量制料金を追加します。

従量制費用の順序は商品詳細ページに表示されます。並べ替えることはできません。

Note

オファーの作成後、従量制料金の価格と説明を編集できます。詳細については、「[で製品とオファーの詳細を更新する AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

- d. [オファーの有効期限] を選択します。サブスクライバーはこの日までにオファーを受諾する必要があります。
 - e. 税金設定、データサブスクリプション契約 (DSA)、および返金ポリシー を選択します。
 - f. (オプション) パブリック オファーの場合のみ、サブスクリプション検証 を設定します。これにより、この製品をサブスクライブできるユーザーを制御できるようになります。詳細については、「[のプロバイダーのサブスクリプション検証 AWS Data Exchange](#)」を参照してください。
 - g. [オファーの自動更新] オプションを選択します。詳細については、「[AWS Data Exchange 製品のオファーの作成](#)」を参照してください。
 - h. [次へ] を選択します。
9. 「レビューと公開」セクションで、商品情報を確認します。
- a. 商品ページのプレビューを展開して、公開後に商品ページがどのように表示されるかを確認してください。
 - b. (オプション) 任意のセクションの [編集] ボタンを選択して、そのセクションを編集します。
10. 製品とパブリックオファーをユーザー全員に表示し、利用可能にしてもよい場合は、[公開] を選択します。

これで、公開オファーを使用してデータ製品を公開する手動部分が完了しました。は、製品を AWS Data Exchange 準備して公開します。

[製品の概要] ページの製品のステータスが[承認待ち]になり、公開されると [公開済み] に変更されます。

ステップ 6: (オプション) 製品をコピーする

最初の製品を作成したら、その詳細とパブリックオファーをコピーして新しい製品を作成することができます。

Note

パブリック、プライベート、公開済み、または未公開の製品をコピーできます。製品に関連付けられているカスタムオファーはコピーされませんが、パブリックオファーがコピーされます。

製品をコピーする

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [製品] を選択します。
3. [製品] で、コピーする製品の横にあるボタンをオンにします。
4. [アクション] ドロップダウンから [コピーを作成] を選択します。
5. [新しい製品を公開] ワークフローを続行します。ワークフローの詳細情報は、ステップ 3 で選択した製品に基づいて既に入力されています。詳細については、「[ステップ 5: 新しい製品を公開する](#)」を参照してください。

Amazon Redshift データセット AWS Data Exchange を含む での製品の公開

Amazon Redshift データセットには、Amazon Redshift AWS Data Exchange のデータ共有が含まれています。データ共有が含まれる製品を顧客がサブスクライブすると、データプロバイダーがデータ共有に追加するテーブル、ビュー、スキーマ、およびユーザー定義の関数に対する読み取り専用アクセス権が付与されます。

データプロバイダーとして、クラスターに for Amazon Redshift データ共有 AWS Data Exchange 用の を作成します。次に、サブスクライバーがアクセスするスキーマ、テーブル、ビュー、およびユーザー定義の関数をデータ共有に追加します。次に、データ共有を にインポートし AWS Data Exchange、データセットを作成して製品に追加し、製品を公開します。サブスクライバーには、サブスクリプション時にデータ共有へのアクセス権が付与されます。

Amazon Redshift で Amazon Redshift のデータ共有を設定したら、AWS Data Exchange で新しい Amazon Redshift データセットを作成できます。その後、リビジョンを作成し、Amazon Redshift のデータ共有アセットを追加できます。これにより、AWS Data Exchange エンドポイントへのリクエストを Amazon Redshift データ共有にプロキシできます。次に、このデータセットを製品に追加し、料金を追加できます。その後、見込みサブスクライバーは製品を表示し、AWS Data Exchange カタログでサブスクライブできます。

以下のトピックでは、AWS Data Exchange コンソールを使用して Amazon Redshift データセットを作成し、Amazon Redshift データセットを使用して新製品を発行するプロセスについて説明します。このプロセスには以下のステップがあります。

ステップ

- [ステップ 1: Amazon Redshift のデータ共有アセットを作成する](#)
- [ステップ 2: Amazon Redshift データセットを作成する](#)
- [ステップ 3: リビジョンを作成する](#)
- [ステップ 4: リビジョンに Amazon Redshift のデータ共有アセットを追加する](#)
- [ステップ 5: Amazon Redshift のデータセットが含まれる新しい製品を公開する](#)
- [ステップ 6: \(オプション\) 製品をコピーする](#)

ステップ 1: Amazon Redshift のデータ共有アセットを作成する

アセットは のデータです AWS Data Exchange。詳細については、「[アセット](#)」を参照してください。

Amazon Redshift のデータ共有アセットを作成する

1. Amazon Redshift クラスター内にデータ共有を作成します。

データ共有の作成方法の詳細については、「[Amazon Redshift データベースデベロッパーガイド](#)」の「プロデューサーとして AWS Data Exchange のデータ共有の操作」を参照してください。

Note

データ共有はパブリックアクセス可能に設定することをお勧めします。そうしなければ、パブリックアクセス可能なクラスターを持つ顧客がデータを消費できなくなります。

2. [ステップ 2: Amazon Redshift データセットを作成する](#).

ステップ 2: Amazon Redshift データセットを作成する

Amazon Redshift データセットには、Amazon Redshift AWS Data Exchange のデータ共有が含まれます。詳細については、「[Amazon Redshift のデータセット](#)」を参照してください。

Amazon Redshift データセットを作成する

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [所有データセット] を選択します。
3. [所有データセット] で [データセットを作成] を選択し、[データセット作成のステップ] ウィザードを開きます。
4. [データセットタイプを選択] で、[Amazon Redshift のデータ共有] を選択します。
5. [データセットの定義] で、データセットの [名前] と [説明] を入力します。詳細については、「[データセットのベストプラクティス](#)」を参照してください。
6. [タグを追加 – オプション] でタグを追加します。
7. [作成] を選択します。

ステップ 3: リビジョンを作成する

次の手順では、AWS Data Exchange コンソールでデータセットを作成した後にリビジョンを作成します。詳細については、「[リビジョン](#)」を参照してください。

リビジョンを作成する

1. データセットの詳細ページの [データセットの概要] セクションで以下を実行します。
 - a. (オプション) [名前を編集] を選択してデータセットに関する情報を編集します。
 - b. (オプション) [削除] を選択してデータセットを削除します。
2. [リビジョン] セクションで [リビジョンを作成] を選択します。
3. [リビジョンを定義] で、リビジョンの目的を説明するリビジョンのオプションのコメントを入力します。
4. [タグを追加 – オプション] で、リソースに関連付けられているタグを追加します。
5. [作成] を選択します。
6. 前のステップからの変更を確認、編集、または削除します。

ステップ 4: リビジョンに Amazon Redshift のデータ共有アセットを追加する

次の手順では、Amazon Redshift データ共有アセットをリビジョンに追加し、AWS Data Exchange コンソールでリビジョンを確定します。詳細については、「[アセット](#)」を参照してください。

リビジョンにアセットを追加する

1. データセットの詳細ページの AWS Data Exchange [Amazon Redshift のデータ共有] セクションで [データ共有を追加] を選択します。
2. [AWS Data Exchange Amazon Redshift のデータ共有] でデータ共有を選択し、[データ共有を追加] を選択します。

Note

リビジョンには、最大 20 個のデータ共有を追加できます。

アセットをリビジョンにインポートするジョブが開始されます。

3. ジョブが終了したら、[ジョブ] セクションの [状態] フィールドが [完了] に更新されます。
4. 追加するデータがある場合は、ステップ 1 を繰り返します。
5. [リビジョンの概要] で、リビジョンとそのアセットを確認します。
6. [確定] を選択します。

データセットのリビジョンが正常に確定されました。

リビジョンは、製品に追加する前に [編集](#) または [削除](#) できます。

ステップ 5: Amazon Redshift のデータセットが含まれる新しい製品を公開する

少なくとも 1 つのデータセットを作成し、アセットが含まれるリビジョンを確定したら、Amazon Redshift のデータセットが含まれる製品を公開する準備が整います。詳細については、「[の製品詳細のベストプラクティス AWS Data Exchange](#)」を参照してください。製品とオファーに関する必要な詳細情報のすべてが揃っていることを確認してください。

Amazon Redshift のデータセットが含まれる製品を公開する

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) の左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [製品] を選択します。
2. [製品] で [新しい製品を発行] を選択して [新しい製品を発行] ウィザードを開きます。
3. [製品の可視性] セクションで、製品の [製品の可視性オプション] と [機密情報] 設定を選択してから、[次へ] を選択します。詳細については、「[での製品の可視性 AWS Data Exchange](#)」および「[の機密情報のカテゴリ AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

4. [データを追加] セクションの [所有データセット] で、追加するデータセットの横にあるチェックボックスを選択し、[選択項目を追加] を選択します。

 Note

選択するデータセットには、確定済みのリビジョンが必要です。確定済みのリビジョンがないデータセットは追加されません。

- a. [選択したデータセット] に移動して、選択内容を確認します。

データセットの名前、データセットのタイプ、データセットの最終更新時のタイムスタンプを確認できます。

- b. [リビジョンアクセスルールを選択] に進み、この製品に含まれるデータセットに設定するリビジョンアクセスルールを選択し、[次へ] を選択します。

詳細については、「[でのアクセスルールの改訂 AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

5. [製品を定義] セクションの [製品概要] で、製品名、製品ロゴ、お問い合わせ先情報、製品カテゴリなど、製品に関する情報を入力します。

詳細については、「[の製品詳細のベストプラクティス AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

6. (オプション) [製品を定義] セクションの [データディクショナリとサンプル — オプション] で、データセット名の横にあるオプションボタンを選択してデータセットを選択し、[編集] を選択します。

詳細については、「[のデータディクショナリ AWS Data Exchange](#)」および「[のサンプルデータ AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

- a. 編集 ダイアログボックスの「データディクショナリをアップロード」で、「ファイルを追加」を選択して新しいデータディクショナリをアップロードします。

.csv 形式の最大サイズが 1 MB のデータディクショナリを 1 つ選択できます。

- b. コンピューターから保存されているデータディクショナリを選択し、[開く] を選択します。

データディクショナリの.csv ファイルが [編集] ダイアログボックスに表示されます。

Note

データディクショナリは、AWS Data Exchange データディクショナリテンプレートに準拠している必要があります。アップロードするデータディクショナリが保存されていない場合は、AWS Data Exchange コンソールで空のデータディクショナリテンプレートリンクまたはサンプルデータディクショナリリンクを選択できません。

- c. [データディクショナリのプレビュー] を選択してプレビューします。
- d. 「サンプル-オプション」で「サンプルをアップロード」を選択し、コンピューターからサンプルを選択して、[開く]を選択します。

サンプルは「編集」ダイアログボックスに表示されます。

Note

最大 10 個のサンプルをアップロードできます。最大サイズは 50 MB です。.csv 形式のサンプルはプレビューできます。

- e. 商品詳細ページに表示される各サンプルの説明を入力します。
 - f. [保存] を選択します。
7. [商品定義] に、商品の [簡単な説明] と [詳細な説明] を入力します。

詳細説明にテンプレートを使用する場合は、[テンプレートを適用] を選択し、テンプレートの種類を選択してから、テンプレートに特定の商品情報を入力します。

8. [次へ] をクリックします。
9. オファーを設定します。

• パブリックオファーを作成する場合は、[パブリックオファーを追加] セクションで、オファーを設定します。パブリックオファーは、可視性がパブリックに設定されているすべての AWS Data Exchange 製品に必須です。

1. サブスクリプションの [料金とアクセス期間] オプションを選択します。
2. 米国の売上税設定、データサブスクリプション契約 (DSA)、返金ポリシーを選択します。
3. (オプション) [サブスクリプション検証] を設定します。これは、誰がこの製品をサブスクライブできるかを制御できるようにします。詳細については、「[のプロバイダーのサブスクリプション検証 AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

4. [オフターの自動更新] オプションを選択します。詳細については、「[AWS Data Exchange 製品のオフターの作成](#)」を参照してください。
 5. [次へ] を選択します。
- プライベートオフターを作成している場合は、[カスタムオフターを追加] セクションでオフターの詳細を設定します。
 1. [サブスクライバーアカウント情報] セクションで、オフターを提示するサブスクライバーアカウントを少なくとも 1 つ追加します。
 2. サブスクリプションの [料金とアクセス期間] オプションを選択します。
 3. [Offer expiration date] (オフターの有効期限) を選択します。サブスクライバーはこの日までにオフターを受諾する必要があります。
 4. 米国の売上税設定、データサブスクリプション契約 (DSA)、返金ポリシーを選択します。
 5. [オフターの自動更新] オプションを選択します。詳細については、「[AWS Data Exchange 製品のオフターの作成](#)」を参照してください。
 6. [次へ] を選択します。
10. [レビューと公開] セクションで製品情報を確認し、[製品ページのプレビュー] を展開してページが公開後にどのように見えるかを確認します。
 11. 製品とパブリックオフターをユーザー全員に表示し、利用可能にしてもよい場合は、[公開] を選択します。

これで、公開オフターを使用してデータ製品を公開する手動部分が完了しました。は、製品を AWS Data Exchange 準備して公開します。[製品の概要] ページの製品のステータスが[承認待ち]になり、公開されると [公開済み] に変更されます。

ステップ 6: (オプション) 製品をコピーする

最初の製品を作成したら、その詳細とパブリックオフターをコピーして新しい製品を作成することができます。

Note

パブリック、プライベート、公開済み、または未公開の製品をコピーできます。製品に関連付けられているカスタムオフターはコピーされませんが、パブリックオフターがコピーされます。

製品をコピーする

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [製品] を選択します。
3. [製品] で、コピーする製品の横にあるボタンをオンにします。
4. [アクション] ドロップダウンから [コピーを作成] を選択します。
5. [製品を公開] ワークフローを続行します。ワークフローの詳細情報は、ステップ 3 で選択した製品に基づいて既に入力されています。詳細については、「[ステップ 5: 新しい製品を公開する](#)」を参照してください。

Amazon S3 データアクセスを含むでの AWS Data Exchange 製品の公開

AWS Data Exchange for Amazon S3 を使用すると、プロバイダーは Amazon S3 バケットまたは特定のプレフィックスと Amazon S3 オブジェクトへの直接アクセスを共有できます。プロバイダーは、サブスクリプション、エンタイトルメント、請求、支払いを自動的に管理 AWS Data Exchange するためにも使用します。

データプロバイダーは、コピーを作成または管理しなくても、Amazon S3 バケット全体、または特定のプレフィックスと Amazon S3 オブジェクトへの直接アクセスを共有できます。これらの共有 Amazon S3 オブジェクトは、(AWS KMS) または AWS Key Management Service (AWS マネージドキー SSE-S3) に保存されているカスタマー管理キーを使用してサーバー側で暗号化できます。KMS キーのモニタリングと暗号化コンテキストの理解の詳細については、「」を参照してください [the section called “Amazon S3 データアクセスのキー管理”](#)。お客様がデータ製品をサブスクライブすると、は Amazon S3 アクセスポイント AWS Data Exchange を自動的にプロビジョニングし、ユーザーに代わってそのリソースポリシーを更新して、サブスクライバーに読み取り専用アクセスを許可します。サブスクライバーは、Amazon S3 のデータにアクセスするために Amazon S3 バケット名を使用する任意の場所で、Amazon S3 アクセスポイントのエイリアスを使用できます。

サブスクリプションが終了すると、サブスクライバーの権限は取り消されます。サブスクライバーとの契約を早期に終了することを選択した場合は、[AWS Support](#) にお問い合わせください。データサブスクリプション契約 () でサブスクリプションの条件を追加できます DSA。

Amazon S3 データアクセスが含まれる製品を発行するには、以下の前提条件を満たす必要があります。

前提条件

- データをホストする Amazon S3 バケットが、Amazon S3 バケット所有者の強制設定がACLs無効な に設定されていることを確認します。詳細については、[「Amazon Simple Storage Service ユーザーガイド」の「オブジェクトの所有権の制御」と「バケットACLsの無効化」](#)を参照してください。
- 共有オブジェクトにサブスクライバーが正常にアクセスするには、共有オブジェクトが Amazon S3 標準ストレージクラスに含まれるか、S3 インテリジェント階層化を使用して管理されている必要があります。他のストレージクラスに属している場合、またはディープアーカイブでインテリジェント階層化を有効にしている場合、サブスクライバーには RestoreObject の権限がないためエラーが表示されます。
- データをホストする Amazon S3 バケットで暗号化が無効になっているか、Amazon S3 マネージドキー (SSE-S3) またはカスターマネージドキーが (AWS) に保存 AWS Key Management Service されていることを確認しますKMS。
- カスタマー管理キーを使用している場合は、次のものがが必要です。
 1. IAM KMSキーkms:CreateGrantに対する のアクセス許可。これらのアクセス許可には、キーポリシー、IAM認証情報、またはKMSキーの AWS KMS 許可を使用してアクセスできます。キー管理と がAWSKMSgrantを使用する方法 AWS Data Exchange の詳細については、「」を参照してください[AWS KMS 許可の作成](#)。

アクセス権限を付与するには、ユーザー、グループ、またはロールにアクセス許可を追加します。

- のユーザーとグループ AWS IAM Identity Center :

アクセス許可セットを作成します。「AWS IAM Identity Center ユーザーガイド」の[「権限設定を作成する」](#)の手順に従ってください。

- ID プロバイダーIAMを介して で管理されるユーザー :

ID フェデレーションのロールを作成します。IAM ユーザーガイドの[「サードパーティー ID プロバイダーのロールの作成 \(フェデレーション\)」](#)の指示に従います。

- IAM ユーザー :

- ユーザーが担当できるロールを作成します。[「ユーザーガイド」のIAM「ユーザーのロールを作成する」](#)の手順に従います。IAM
- (お奨めできない方法) ポリシーをユーザーに直接アタッチするか、ユーザーをユーザーグループに追加する。IAM ユーザーガイドの[「ユーザー \(コンソール\) へのアクセス許可を追加する」](#)の手順に従います。

ユーザーが の AWS 外部とやり取りする場合は、プログラムによるアクセスが必要です AWS Management Console。プログラムによるアクセスを許可する方法は、 にアクセスするユーザーのタイプによって異なります AWS。

ユーザーにプログラマチックアクセス権を付与するには、以下のいずれかのオプションを選択します。

プログラマチックアクセス権を必要とするユーザー	目的	方法
<p>ワークフォースアイデンティティ</p> <p>(IAMアイデンティティセンターで管理されるユーザー)</p>	<p>一時的な認証情報を使用して AWS CLI、AWS SDKs、または へのプログラムによるリクエストに署名します AWS APIs。</p>	<p>使用するインターフェイス用の手引きに従ってください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • については AWS CLI、AWS Command Line Interface ユーザーガイドの「 を使用する AWS CLI ようにを設定する AWS IAM Identity Center」を参照してください。 • AWS SDKs、ツール、および については AWS APIs、「 および ツール リファレンスガイド」の IAM「 アイデンティティセンター認証」を参照してください。 AWS SDKs
IAM	<p>一時的な認証情報を使用して AWS CLI、AWS SDKs、または へのプログラムによるリクエストに署名します AWS APIs。</p>	<p>IAM 「 ユーザーガイド」の「 AWS リソースで一時的な認証情報を使用する」の手順に従います。</p>

プログラマチックアクセス権を必要とするユーザー	目的	方法
IAM	<p>(非推奨)</p> <p>長期認証情報を使用して、AWS CLI、AWS SDKs、または他のプログラムによるリクエストに署名します。AWS APIs。</p>	<p>使用するインターフェイス用の手引きに従ってください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • については AWS CLI、AWS Command Line Interface 「ユーザーガイド」のIAM「ユーザー認証情報を使用した認証」を参照してください。 • および ツールについては AWS SDKs、AWS SDKs 「ツールリファレンスガイド」の「長期認証情報を使用した認証」を参照してください。 • については AWS APIs、「ユーザーガイド」のIAM「ユーザーのアクセスキーの管理」を参照してください。IAM

KMS キーのキーJSONポリシーに を追加する方法を示すポリシーの例を次に示します。

```
{
  "Sid": "AllowCreateGrantPermission",
  "Effect": "Allow",
  "Principal": {
    "AWS": "<IAM identity who will call Dataexchange API>"
  },
  "Action": "kms:CreateGrant",
  "Resource": "*"
}
```

次のポリシーは、使用される IAM ID のポリシー追加の例を示しています。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Sid": "AllowCreateGrantPermission",
      "Action": [
        "kms:CreateGrant"
      ],
      "Resource": [
        <Enter KMS Key ARNs in your account>
      ]
    }
  ]
}
```

Note

クロスアカウントKMSキーは、KMSキーに対するkms:CreateGrantアクセス許可が前のステップで取得された場合にも許可されます。別のアカウントがキーを所有している場合は、上記の例で詳しく説明されているように、キーポリシーとIAM認証情報に対するアクセス許可が必要です。

2. KMS キーを使用して、Amazon S3 バケットキー機能を使用して Amazon S3 バケット内の既存および新しいオブジェクトを暗号化してください。詳細については、Amazon Simple Storage Service ユーザーガイドの「[S3 バケットキーの設定](#)」を参照してください。

- Amazon S3 バケットに追加された新しいオブジェクトについては、デフォルトで Amazon S3 バケットキー暗号化を設定できます。Amazon S3Bucket キー機能を使用せずに既存のオブジェクトを暗号化した場合、これらのオブジェクトは Amazon S3 バケットキーを使用して暗号化するように移行する必要があります。

既存のオブジェクトの Amazon S3 バケットキーを有効にするには、copy オペレーションを使用します。詳細については、「[バッチオペレーションを使用してオブジェクトレベルで Amazon S3 バケットキーを設定する](#)」を参照してください。

- AWS マネージドKMSキー または AWS 所有のキー はサポートされていません。サポートされていない暗号化スキームから現在サポートされている暗号化スキームに移行できます。詳細については、AWS ストレージブログの「[Amazon S3 暗号化の変更](#)」を参照してください。
3. データをホストする Amazon S3 バケットを信頼 AWS Data Exchange 所有アクセスポイントに設定します。これらの Amazon S3 バケットポリシーを更新して、Amazon S3 アクセスポイントを作成する AWS Data Exchange 権限を付与し、ユーザーに代わってサブスクライバーのアクセスを許可または削除する必要があります。ポリシーステートメントがない場合は、バケットポリシーを編集して Amazon S3 ロケーションをデータセットに追加する必要があります。

次にポリシーの例を示します。<Bucket ARN> を適切な値に置き換えてください。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Principal": {
        "AWS": "*"
      },
      "Action": [
        "s3:GetObject",
        "s3:ListBucket"
      ],
      "Resource": [
        "<Bucket ARN>",
        "<Bucket ARN>/*"
      ],
      "Condition": {
        "StringEquals": {
          "s3:DataAccessPointAccount": [
            "337040091392",
            "504002150500",
            "366362662752",
            "330489627928",
            "291973504423",
            "461002523379",
            "036905324694",
            "540564263739",
            "675969394711",
            "108584782536",
```

```
        "844053218156"
      ]
    }
  }
]
```

を通じて Amazon S3 バケット全体にデータ共有 AWS Data Exchange を委任できます。ただし、データセット内で共有したいバケットの特定のプレフィックスとオブジェクトに委任の範囲を委任することができます。以下に、スコープ付きポリシーの例を示します。<Bucket ARN> と "mybucket/folder1/*" を自分の情報で置き換えます。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Sid": "DelegateToAdxGetObjectsInFolder1",
      "Effect": "Allow",
      "Principal": {
        "AWS": "*"
      },
      "Action": [
        "s3:GetObject"
      ],
      "Resource": [
        "arn:aws:s3:::mybucket/folder1/*"
      ],
      "Condition": {
        "StringEquals": {
          "s3:DataAccessPointAccount": [
            "337040091392",
            "504002150500",
            "366362662752",
            "330489627928",
            "291973504423",
            "461002523379",
            "036905324694",
            "540564263739",
            "675969394711",
            "108584782536",
            "844053218156"
          ]
        }
      }
    }
  ]
}
```

```
    ]
  }
}
},
{
  "Sid": "DelegateToAdxListObjectsInFolder1",
  "Effect": "Allow",
  "Principal": {
    "AWS": "*"
  },
  "Action": "s3:ListBucket",
  "Resource": "arn:aws:s3:::mybucket",
  "Condition": {
    "StringLike": {
      "s3:prefix": [
        "folder1/*"
      ]
    }
  },
  "StringEquals": {
    "s3:DataAccessPointAccount": [
      "337040091392",
      "504002150500",
      "366362662752",
      "330489627928",
      "291973504423",
      "461002523379",
      "036905324694",
      "540564263739",
      "675969394711",
      "108584782536",
      "844053218156"
    ]
  }
}
}
]
```

同様に、アクセス範囲を1つのファイルのみに限定するには、プロバイダーは次のポリシーを使用できます。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
```

```
"Statement": [
  {
    "Sid": "DelegateToAdxGetMyFile",
    "Effect": "Allow",
    "Principal": {
      "AWS": "*"
    },
    "Action": [
      "s3:GetObject"
    ],
    "Resource": [
      "arn:aws:s3:::mybucket/folder1/myfile"
    ],
    "Condition": {
      "StringEquals": {
        "s3:DataAccessPointAccount": [
          "337040091392",
          "504002150500",
          "366362662752",
          "330489627928",
          "291973504423",
          "461002523379",
          "036905324694",
          "540564263739",
          "675969394711",
          "108584782536",
          "844053218156"
        ]
      }
    }
  }
]
```

以下のトピックでは、AWS Data Exchange コンソールを使用して Amazon S3 データセットを作成し、Amazon S3 データセットを使用して新製品を発行するプロセスについて説明します。このプロセスには以下のステップがあります。

ステップ

- [ステップ 1: Amazon S3 データセットを作成する](#)
- [ステップ 2: Amazon S3 データアクセスを設定する](#)
- [ステップ 3: データセットを確認して完成する](#)

- [ステップ 4: Amazon S3 データセットを AWS Data Exchange 製品に追加する](#)
- [ステップ 5: Amazon S3 へのアクセスを含む新しい製品を公開する](#)
- [ステップ 6: \(オプション\) 製品をコピーする](#)

ステップ 1: Amazon S3 データセットを作成する

Amazon S3 データセットを作成するには

1. 左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [所有データセット] を選択します。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [所有データセット] を選択します。
3. [所有データセット] で [データセットを作成] を選択し、[データセット作成のステップ] ウィザードを開きます。
4. [データセットタイプを選択] で [Amazon S3 オブジェクト] を選択します。
5. [データセットを定義] で、データセットの [名前] と [説明] を入力します。詳細については、「[データセットのベストプラクティス](#)」を参照してください。
6. (オプション) [タグを追加 – オプション] でタグを追加します。
7. [データセットを作成] を選択して、続行します。

ステップ 2: Amazon S3 データアクセスを設定する

サブスクライバーに提供する Amazon S3 バケットまたは Amazon S3 バケットロケーションを選択します。Amazon S3 バケット全体を選択することも、Amazon S3 バケット内で最大 5 つのプレフィックスまたはオブジェクトを指定することもできます。Amazon S3 バケットをさらに追加するには、別の Amazon S3 データ共有を作成する必要があります。

Amazon S3 データ共有アクセスを設定する

1. 「Amazon S3 データアクセスの設定」ページで、「Amazon S3 ロケーションの選択」を選択します。
2. [Amazon S3 ロケーションの選択] で、検索バーに Amazon S3 バケット名を入力するか、Amazon S3 バケット、プレフィックス、または Amazon S3 ファイルを選択して [選択項目を追加] を選択します。次に、[アプリケーションを追加] を選択します。

Note

プロバイダーが共有するプレフィックスやオブジェクトを再設定する必要がないように、オブジェクトとプレフィックスの大半が保存されている最上位のフォルダを選択することをお勧めします。

3. 「設定の詳細」で、リクエスト支払い設定を選択します。2つのオプションがあります。
 - リクエスト支払いを有効にする (推奨) — リクエストは Amazon S3 バケット内のすべてのリクエストと転送に対して支払いを行います。このオプションをお勧めするのは、サブスクライバーのリクエストや送金による意図しないコストを防ぐのに役立つからです。
 - リクエスト支払いを無効にする — Amazon S3 バケット内のサブスクライバーのリクエストと転送に対して支払いを行います。

リクエスト支払いの詳細については、「Amazon Simple Storage Service デベロッパーガイド」の「[リクエスト支払いバケットのオブジェクト](#)」を参照してください。
4. ニーズに最適なバケットポリシーを選択してください。Amazon S3 バケット全体に1つのバケットポリシーを使用するには、[一般]を選択します。これは1回限りの設定で、future プレフィックスやオブジェクトを共有するために追加の設定を行う必要はありません。選択した Amazon S3 ロケーションに固有のバケットポリシーを使用するには、[特定]を選択します。共有 Amazon S3 バケットには、Amazon S3 データアクセスデータセットを正常に作成するためのバケットポリシーが必要であり、ACLs有効にすることはできません。
 - a. を無効にするにはACLs、バケットのアクセス許可に移動し、オブジェクトの所有権をバケット所有者強制に設定します。
 - b. バケットポリシーを追加するには、バケットステートメントをクリップボードにコピーします。Amazon S3 コンソールの Amazon S3 権限タブのバケットポリシーセクションで、[編集]を選択し、バケットポリシーをステートメントに貼り付けて、変更を保存します。
5. Amazon S3 バケットに AWS KMS カスタマーマネージドキーを使用して暗号化されたオブジェクトが含まれている場合は、そのようなすべてのKMSキーをと共有する必要があります AWS Data Exchange。KMS キーを使用して Amazon S3 バケット内のオブジェクトを暗号化するときに必要な前提条件については、「」を参照してください[the section called “Amazon S3 データアクセスを含む”](#)。これらのKMSキーをと共有するには AWS Data Exchange、以下を実行します。

- Amazon S3 データアクセスの設定ページ、カスターマネージドKMSキーで、から選択 AWS KMS keys または Enter AWS KMS key ARN を選択し、Amazon S3 共有口ケーションの暗号化にAWS KMS keys現在使用されているすべての を選択します。これらのKMSキー AWS Data Exchange を使用して、サブスクライバーが共有口ケーションにアクセスするための権限を作成します。詳細については、「[AWS KMSの許可](#)」を参照してください。

Note

AWS KMS には、既存のグラントを含め、KMSキーごとに 50,000 個のグラントの制限があります。

6. Amazon S3 の場所、選択したKMSキー、設定の詳細を確認し、保存して続行を選択します。

ステップ 3: データセットを確認して完成する

新しく作成したデータセットを確認して完成させます。別の Amazon S3 データアクセスを作成して追加し、追加の Amazon S3 バケット、プレフィックス、オブジェクトへのアクセスを共有する場合は、[別の Amazon S3 データアクセスを追加] を選択します。

Note

これは、最初の Amazon S3 データアクセスで選択した Amazon S3 バケットとは別の Amazon S3 バケットでホストされているデータへのアクセスを共有する必要がある場合にお勧めします。

公開前に変更を加える場合は、[下書きを保存] を選択してデータセットをドラフトとして保存できます。次に、[データセットを確定] を選択して製品に追加します。

ステップ 4: Amazon S3 データセットを AWS Data Exchange 製品に追加する

以下の手順では、データセットを新しい製品または既存の AWS Data Exchange 製品に追加します。

新規または既存の AWS Data Exchange 製品にデータセットを追加するには

1. [所有データセット] ページの [データセットの概要] で、[データセットの名前を編集]、[削除]、または [データセットから製品を作成] を行うことができます。

2. 製品の説明、ユースケース、メタデータ、価格、契約条件を指定して、製品の作成を完了します。
3. 完成したら、製品を確認して公開します。

 Note

顧客があなたの製品を購読すると、顧客はあなたに代わって作成された Amazon S3 アクセスポイントを使用してデータを読み取り、使用するアクセス権を受け取ります。

ステップ 5: Amazon S3 へのアクセスを含む新しい製品を公開する

少なくとも 1 つのデータセットを作成し、アセットを含むリビジョンを確定させた後、Amazon S3 データ アクセスを使用して製品を公開できます。詳細については、「[の製品詳細のベストプラクティス AWS Data Exchange](#)」を参照してください。製品とオファーに関する必要な詳細情報のすべてが揃っていることを確認してください。

 Note

Amazon S3 のロケーションが変更され、サブスクライバーがこれらのオブジェクトにアクセスできない場合を除いて、共有 Amazon S3 オブジェクトを更新するときに新しいリビジョンを作成する必要はありません。

Amazon S3 へのアクセス権が含まれる新しい製品を公開する

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) の左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [製品] を選択します。
2. [製品] で [新しい製品を発行] を選択して [新しい製品を発行] ウィザードを開きます。
3. [製品の可視性] セクションで、製品の [製品の可視性オプション] と [機密情報] 設定を選択してから、[次へ] を選択します。詳細については、「[での製品の可視性 AWS Data Exchange](#)」および「[の機密情報のカテゴリ AWS Data Exchange](#)」を参照してください。
4. [データを追加] セクションの [所有データセット] で、追加するデータセットの横にあるチェックボックスを選択し、[選択項目を追加] を選択します。

Note

選択するデータセットには、確定済みのリビジョンが必要です。確定済みのリビジョンがないデータセットは追加されません。

- a. [選択したデータセット] に移動して、選択内容を確認します。

データセットの名前、データセットのタイプ、データセットの最終更新時のタイムスタンプを確認できます。

- b. [リビジョンアクセスルールを選択] に進み、この製品に含まれるデータセットに設定するリビジョンアクセスルールを選択し、[次へ] を選択します。

詳細については、「[でのアクセスルールの改訂 AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

5. [製品を定義] セクションの [製品概要] で、製品名、製品ロゴ、お問い合わせ先情報、製品カテゴリなど、製品に関する情報を入力します。

詳細については、「[の製品詳細のベストプラクティス AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

6. (オプション) [製品を定義] セクションの [データディクショナリとサンプル — オプション] で、データセット名の横にあるオプションボタンを選択してデータセットを選択し、[編集] を選択します。

詳細については、「[のデータディクショナリ AWS Data Exchange](#)」および「[のサンプルデータ AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

- a. 編集ダイアログボックスの「データディクショナリをアップロード」で、「ファイルを追加」を選択して新しいデータディクショナリをアップロードします。

.csv 形式の最大サイズが 1 MB のデータディクショナリを 1 つ選択できます。

- b. コンピューターから保存されているデータディクショナリを選択し、[開く] を選択します。

データディクショナリの.csv ファイルが [編集] ダイアログボックスに表示されます。

Note

データディクショナリは、AWS Data Exchange データディクショナリテンプレートに準拠している必要があります。アップロードする保存済みデータディクショナリがない場合は、AWS Data Exchange コンソールで空のデータディクショナリテンプレートリンクまたはサンプルデータディクショナリリンクを選択できます。

- c. [データディクショナリのプレビュー] を選択してデータディクショナリをプレビューします。
- d. 「サンプル-オプション」で「サンプルをアップロード」を選択し、コンピューターからサンプルを選択して、「開く」を選択します。

サンプルは「編集」ダイアログボックスに表示されます。

Note

最大 10 個のサンプルをアップロードできます。最大サイズは 50 MB です。 .csv 形式のサンプルはプレビューできます。

- e. 商品詳細ページに表示される各サンプルの説明を入力します。
 - f. [保存] を選択します。
7. [商品定義] に、商品の [簡単な説明] と [詳細な説明] を入力します。

詳細説明にテンプレートを使用する場合は、[テンプレートを適用] を選択し、テンプレートの種類を選択して、テンプレートに特定の商品の詳細を入力します。

8. [次へ] をクリックします。
9. オファーを設定します。

• パブリックオファーを作成する場合は、[パブリックオファーを追加] セクションで、オファーを設定します。パブリックオファーは、可視性がパブリックに設定されているすべての AWS Data Exchange 製品に必須です。

1. サブスクリプションの [料金とアクセス期間] オプションを選択します。
2. 米国の売上税設定、データサブスクリプション契約 (DSA)、返金ポリシーを選択します。
3. (オプション) [サブスクリプション検証] を設定して、誰がこの製品をサブスクライブできるかを制御できるようにします。詳細については、「[のプロバイダーのサブスクリプション検証 AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

4. [オフターの自動更新] オプションを選択します。詳細については、「[AWS Data Exchange 製品のオフターの作成](#)」を参照してください。
 5. [次へ] を選択します。
- プライベートオフターを作成している場合は、[カスタムオフターを追加] セクションでオフターの詳細を設定します。
 1. [サブスクライバーアカウント情報] セクションで、オフターを提示するサブスクライバーアカウントを少なくとも 1 つ追加します。
 2. サブスクリプションの [料金とアクセス期間] オプションを選択します。
 3. [Offer expiration date] (オフターの有効期限) を選択します。サブスクライバーはこの日までにオフターを受諾する必要があります。
 4. 米国の売上税設定、データサブスクリプション契約 (DSA)、返金ポリシーを選択します。
 5. [オフターの自動更新] オプションを選択します。詳細については、「[AWS Data Exchange 製品のオフターの作成](#)」を参照してください。
 6. [次へ] を選択します。
10. [レビューと公開] セクションで製品情報を確認し、[製品ページのプレビュー] を展開してページが公開後にどのように見えるかを確認します。
 11. 製品とパブリックオフターをユーザー全員に表示し、利用可能にしてもよい場合は、[公開] を選択します。

これで、公開オフターを使用してデータ製品を公開する手動部分が完了しました。は、製品を AWS Data Exchange 準備して公開します。製品概要ページでは、製品のステータスが「承認待ち」になっています。製品が公開されると、ステータスは「公開済み」に変わります。

ステップ 6: (オプション) 製品をコピーする

最初の製品を作成したら、その詳細とパブリックオフターをコピーして新しい製品を作成することができます。

Note

パブリック、プライベート、公開済み、または未公開の製品をコピーできます。製品に関連付けられているカスタムオフターはコピーできませんが、パブリックオフターがコピーできます。

製品をコピーする

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [製品] を選択します。
3. [製品] で、コピーする製品の横にあるオプションをオンにします。
4. [アクション] ドロップダウンリストから [コピーを作成] を選択します。
5. [製品を公開] ワークフローを続行します。ワークフローの詳細情報は、ステップ 3 で選択した製品に基づいて既に入力されています。詳細については、「[ステップ 5: 新しい製品を公開する](#)」を参照してください。

AWS Lake Formation データアクセス許可データセット AWS Data Exchange を含む での製品の公開 (プレビュー)

このプレビュー中に AWS Lake Formation データアクセス許可データセットを含む製品の公開に関心がある場合は、[お問い合わせ](#) ください [AWS Support](#)。

AWS Lake Formation データアクセス許可データセットには、[によって管理されるデータの LF タグとアクセス許可のセットが含まれています](#) AWS Lake Formation。Lake Formation データ権限が含まれる製品を顧客がサブスクライブすると、データセットに追加された LF タグに関連するデータベース、テーブル、および列に対する読み取り専用アクセス権が付与されます。

データプロバイダーとして、まず LF タグを作成し AWS Lake Formation、それらのタグをサブスクライバーが利用できるようにするデータと関連付けます。Lake Formation でのリソースのタグ付けについては詳しくは、「[AWS Lake Formation デベロッパーガイド](#)」の「[Lake Formation タグベースのアクセス制御](#)」を参照してください。次に、これらの LF タグと一連のデータアクセス許可をアセット AWS Data Exchange としてインポートします。サブスクライバーには、サブスクライブ時にそれらの LF タグに関連するデータへのアクセス権が付与されます。

以下のトピックで、AWS Lake Formation データアクセス権が含まれる製品を公開するプロセスを説明します。このプロセスには以下のステップがあります。

ステップ

- [ステップ 1: AWS Lake Formation データセットを作成する \(プレビュー\)](#)
- [ステップ 2: AWS Lake Formation データアクセス許可を作成する \(プレビュー\)](#)
- [ステップ 3: 確認して確定する](#)
- [ステップ 5: \(オプション \) リビジョンを作成する](#)

- [ステップ 6: AWS Lake Formation データセットが含まれる新しい製品を公開する \(プレビュー\)](#)
- [AWS Lake Formation データアクセス許可データセットを発行する際の考慮事項 \(プレビュー\)](#)

ステップ 1: AWS Lake Formation データセットを作成する (プレビュー)

AWS Lake Formation データセットを作成するには

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [製品] を選択します。
3. [所有データセット] で [データセットを作成] を選択し、[データセット作成のステップ] ウィザードを開きます。
4. 「データセットタイプを選択」 で、AWS Lake Formation データ権限を選択します。
5. [データセットを定義] で、データセットの [名前] と [説明] を定義します。詳細については、「[the section called “データセットのベストプラクティス”](#)」を参照してください。
6. [タグを追加 — オプション] で [新しいタグを追加] を選択します。
7. [データセットを作成]を選択して続行します。

ステップ 2: AWS Lake Formation データアクセス許可を作成する (プレビュー)

AWS Data Exchange は LF タグを使用してデータアクセス許可を付与します。共有するデータに関連付けられている LF タグを選択して、データに対するサブスクライバー権限を付与します。

AWS Lake Formation データアクセス許可を作成するには

1. 「Lake Formation のデータ許可を作成」 ページで、「LF タグを追加」を選択します。
2. キーを入力し、LF タグ値を選択します。
3. 「リソースをプレビュー」を選択すると、LF タグがどのように解釈されるかを確認できます。
 - 「リソースのプレビュー」から、関連するデータカタログリソースを選択します。

Note

以下のリソースの IAMAllowedPrincipals グループを必ず取り消してください。詳細については、IAM「ユーザーガイド」の[IAM「ロールの一時的なセキュリティ認証情報の取り消し」](#)を参照してください。

4. 下のダイアログボックスの LF タグ表現の解釈と、データセットに関連する権限を確認してください。
5. サービスアクセスでは、がユーザーに代わって Lake Formation データアクセス許可に対するロールとアクセス、付与、および取り消しの権限を引き受け AWS Data Exchange することができる既存のサービスロールを選択します。次に、「Lake Formation のデータ許可を作成を選択します。のロールの作成の詳細については AWS のサービス、[「へのアクセス許可を委任するロールの作成 AWS のサービス」](#)を参照してください。
6. [製品を定義] セクションの [製品概要] で、製品名、製品ロゴ、お問い合わせ先 情報、製品カテゴリ など、製品に関する情報を入力します。

詳細については、「[の製品詳細のベストプラクティス AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

7. (オプション) [製品を定義] セクションの [データディクショナリとサンプル — オプション] で、データセット名の横にあるオプションボタンを選択してデータセットを選択し、[編集] を選択します。

詳細については、「[のデータディクショナリ AWS Data Exchange](#)」および「[のサンプルデータ AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

- a. 編集 ダイアログボックスの「データディクショナリをアップロード」で、「ファイルを追加」を選択して新しいデータディクショナリをアップロードします。

.csv 形式の最大サイズが 1 MB のデータディクショナリを 1 つ選択できます。

- b. コンピューターから保存されているデータディクショナリを選択し、[開く] を選択します。

データディクショナリの.csv ファイルが [編集] ダイアログボックスに表示されます。

Note

データディクショナリは、AWS Data Exchange データディクショナリテンプレートに準拠している必要があります。アップロードする保存済みデータディクショナリがない場合は、AWS Data Exchange コンソールで空のデータディクショナリテンプレートリンクまたはサンプルデータディクショナリリンクを選択できます。

- c. [データディクショナリのプレビュー] を選択してデータディクショナリをプレビューします。
- d. 「サンプル-オプション」で「サンプルをアップロード」を選択し、コンピューターからサンプルを選択して、「開く」を選択します。

サンプルは「編集」ダイアログボックスに表示されます。

 Note

最大 10 個のサンプルをアップロードできます。最大サイズは 50 MB です。.csv 形式のサンプルはプレビューできます。

- e. 商品詳細ページに表示される各サンプルの説明を入力します。
 - f. [保存] を選択します。
8. [商品定義] に、商品の [簡単な説明] と [詳細な説明] を入力します。

詳細説明にテンプレートを使用する場合は、[テンプレートを適用] を選択し、テンプレートの種類を選択して、テンプレートに特定の商品の詳細を入力します。

- 9. [次へ] をクリックします。
- 10. オファーを設定します。

• パブリックオファーを作成する場合は、[パブリックオファーを追加] セクションで、オファーを設定します。パブリックオファーは、可視性がパブリックに設定されているすべての AWS Data Exchange 製品に必須です。

- 1. サブスクリプションの [料金とアクセス期間] オプションを選択します。
- 2. 米国の売上税設定、データサブスクリプション契約 (DSA)、返金ポリシーを選択します。
- 3. (オプション) [サブスクリプション検証] を設定して、誰がこの製品をサブスクライブできるかを制御できるようにします。詳細については、「[のプロバイダーのサブスクリプション検証 AWS Data Exchange](#)」を参照してください。
- 4. [オファーの自動更新] オプションを選択します。詳細については、「[AWS Data Exchange 製品のオファーの作成](#)」を参照してください。
- 5. [次へ] を選択します。

• プライベートオファーを作成している場合は、[カスタムオファーを追加] セクションでオファーの詳細を設定します。

- 1. [サブスクライバーアカウント情報] セクションで、オファーを提示するサブスクライバーアカウントを少なくとも 1 つ追加します。
- 2. サブスクリプションの [料金とアクセス期間] オプションを選択します。

3. [Offer expiration date] (オファーの有効期限) を選択します。サブスクライバーはこの日までにオファーを受諾する必要があります。
 4. 米国の売上税設定、データサブスクリプション契約 (DSA)、返金ポリシーを選択します。
 5. [オファーの自動更新] オプションを選択します。詳細については、「[AWS Data Exchange 製品のオファーの作成](#)」を参照してください。
 6. [次へ] を選択します。
11. [レビューと公開] セクションで製品情報を確認し、[製品ページのプレビュー] を展開してページが公開後にどのように見えるかを確認します。
 12. 製品とパブリックオファーをユーザー全員に表示し、利用可能にしてもよい場合は、[公開] を選択します。

これで、公開オファーを使用してデータ製品を公開する手動部分が完了しました。は、製品を AWS Data Exchange 準備して公開します。製品概要ページでは、製品のステータスが「承認待ち」になっています。製品が公開されると、ステータスは「公開済み」に変わります。

ステップ 3: 確認して確定する

AWS Lake Formation データアクセス許可 (プレビュー) を作成したら、データセットを確認して確定できます。

確認して確定するには

1. ステップ 1 のデータセットの詳細とタグが正しいかどうかを確認してください。
2. LF タグ表現を確認し、別の Lake Formation データ権限 (オプション)、関連するデータカタログリソース、ジョブの詳細を追加します。

Note

ジョブは、作成されてから 90 日後に削除されます。

3. [確定] を選択します。

ステップ 5: (オプション) リビジョンを作成する

リビジョンを作成する

1. 「所有データセット」セクションから、リビジョンを追加したいデータセットを選択します。

2. [リビジョン] タブを選択します。
3. [リビジョン] セクションで [リビジョンを作成] を選択します。
4. 「Lake Formation データ権限を変更」 ページで、「LF タグを追加」を選択します。
5. 「データベース」と「テーブル」の権限を確認してください。
6. 「サービスアクセス」から、既存のサービスロールを選択し、「Lake Formation データ権限を作成」を選択します。

ステップ 6: AWS Lake Formation データセットが含まれる新しい製品を公開する (プレビュー)

少なくとも 1 つのデータセットを作成し、アセットを使用してリビジョンを確定したら、AWS Lake Formation データセットを使用して製品を公開する準備が整います。詳細については、「[the section called “製品の詳細”](#)」を参照してください。製品に関する必要な詳細情報のすべてが揃っていることを確認してください。

AWS Lake Formation データセットを含む新しい製品を公開するには (プレビュー)

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [製品] を選択します。
3. [製品] で [新しい製品を発行] を選択して [新しい製品を発行] ウィザードを開きます。
4. [製品の可視性] セクションで、製品の [製品の可視性オプション] と [機密情報] 設定を選択してから、[次へ] を選択します。詳細については、「[the section called “製品の可視性”](#)」および「[the section called “機密カテゴリの情報”](#)」を参照してください。
5. [データを追加] セクションの [所有データセット] で、追加するデータセットの横にあるチェックボックスを選択し、[選択項目を追加] を選択します。

Note

選択するデータセットには、確定済みのリビジョンが必要です。確定済みのリビジョンがないデータセットは追加されません。

- a. [選択したデータセット] に移動して、選択内容を確認します。

データセットの名前、データセットのタイプ、データセットの最終更新時のタイムスタンプを確認できます。

- b. [リビジョンアクセスルールを選択]に進み、この製品に含まれるデータセットに設定するリビジョンアクセスルールを選択し、[次へ]を選択します。

詳細については、「[でのアクセスルールの改訂 AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

AWS Lake Formation データアクセス許可データセットを発行する際の考慮事項 (プレビュー)

最適なサブスクライバーエクスペリエンスを確保するために、製品にアクティブなサブスクライバーを持つ Lake Formation データセット (プレビュー) AWS Data Exchange に対して、製品に含まれるアクセス許可に以下の変更を加えることは強くお勧めします。

- AWS Lake Formation データセットを含む公開済み製品 AWS Data Exchange でに渡されたIAM ロールを削除または変更しないことをお勧めします。このようなIAMロールを削除または変更すると、次の問題が発生します。
 - AWS アカウント Lake Formation データアクセス許可にアクセスできる は、アクセスを無期限に保持する場合があります。
 - AWS アカウント が製品をサブスクライブしているが、Lake Formation データアクセス許可へのアクセスをまだ受け取っていない場合、アクセスは受信されません。

AWS Data Exchange は、削除または変更したIAMロールに対して責任を負いません。

- AWS Lake Formation データセットを含む公開済み製品 AWS Data Exchange でに渡されたIAM ロールから付与された AWS Lake Formation データアクセス許可は取り消さないことをお勧めします。このようなIAMロールから付与されたデータアクセス許可を取り消すと、次の問題が発生します。
 - AWS アカウント Lake Formation データアクセス許可にアクセスできる は、アクセスを無期限に保持する場合があります。
 - AWS アカウント が製品をサブスクライブしているが、Lake Formation データアクセス許可へのアクセスをまだ受け取っていない場合、アクセスは受信されません。
- AWS Lake Formation データセットを含む公開済み製品へのアクティブなサブスクリプション AWS アカウント から付与された AWS Lake Formation データアクセス許可を取り消すことはお勧めしません。製品への AWS アカウント サブスクライブから付与されたデータアクセス許可を取り消すと、これらのアカウントはアクセスを失い、カスタマーエクスペリエンスが低下します。

- AWS Lake Formation データセットを含む製品を公開する場合は、 のクロスアカウントバージョン AWS Glue Data Catalog をバージョン 3 に設定することをお勧めします。AWS Lake Formation データセットを含む製品を公開しているときに Data Lake Catalog のクロスアカウントバージョンをダウングレードすると、製品をサブスクライブ AWS アカウントしているが Lake Formation データアクセス許可へのアクセスをまだ受けていない が、データにアクセスできない可能性があります。

の製品詳細のベストプラクティス AWS Data Exchange

AWS Data Exchange コンソールで製品を公開するときは、製品の詳細を指定する必要があります。このセクションでは、製品の詳細を準備するときに考慮するベストプラクティスについて説明します。

トピック

- [での製品の可視性 AWS Data Exchange](#)
- [の機密情報のカテゴリ AWS Data Exchange](#)
- [の製品名 AWS Data Exchange](#)
- [の製品ロゴ AWS Data Exchange](#)
- [で問い合わせをサポートする AWS Data Exchange](#)
- [の製品カテゴリ AWS Data Exchange](#)
- [での製品の簡単な説明 AWS Data Exchange](#)
- [での製品の長い説明 AWS Data Exchange](#)
- [でのアクセスルールの改訂 AWS Data Exchange](#)
- [のデータディクショナリ AWS Data Exchange](#)
- [のサンプルデータ AWS Data Exchange](#)

での製品の可視性 AWS Data Exchange

で製品を作成するときは AWS Data Exchange、その可視性を選択します。[製品の可視性] は、[パブリック] または [プライベート] のどちらかにすることができます。

- パブリック – 製品は、AWS Data Exchange コンソールと のパブリックカタログに表示されます AWS Marketplace。パブリック製品にはパブリックオファーが関連付けられている必要があります。カスタムオファーを設定することも可能です。

- プライベート – 製品は AWS Data Exchange または のパブリックカタログには公開されておらず AWS Marketplace、カスタムオファーのみを作成できます。カスタムオファーを作成した特定のアカウントのみがこの製品を表示してサブスクリプションができます。サブスクライバーは、AWS Data Exchangeの [製品オファー] タブで、サブスクライバー向けに作成されたカスタムオファーを確認できます。

Note

製品の作成後にその可視性を変更することはできません。

製品 (可視性がパブリックまたはプライベートに設定されたもの) の作成に関する詳細については、「[ステップ 5: 新しい製品を公開する](#)」を参照してください。

の機密情報のカテゴリ AWS Data Exchange

で製品を作成するときは AWS Data Exchange、製品に個人データまたは機密カテゴリの情報が含まれているかどうかを指定する必要があります。

機密カテゴリの情報には、生体情報データもしくは遺伝子データ、医療データ、人種もしくは民族的出身、政治的見解、宗教的もしくは哲学的信念、性別もしくは性的指向、労働組合への加入、個人支払もしくは財務情報 (信用履歴など) などのカテゴリの情報、またはその他類似するカテゴリの情報が含まれます。

個人データとは、個人を特定するために使用できるデータです。

非公開のオファーを受け入れる前に、見込み購読者には、商品詳細ページに、他の方法では公開されていない機密性の高い個人情報や個人情報が含まれているという警告が商品詳細ページに表示されません。

で説明するプロセスの一環として[ステップ 5: 新しい製品を公開する](#)、製品の機密情報設定のオプションを選択します。以下のオプションのいずれかを選択します。

- オプション 1 - 他の方法で一般公開されていない個人データが含まれず、機密カテゴリの情報も含まれない

このオプションは、他の方法で一般公開されていない個人データと、機密カテゴリの情報のどちらも製品に含まれない場合に選択します。

例としては、金融市場データ、気象パターン、上場企業への提出書類などがあります。

- オプション - 個人データは含まれないが、機密カテゴリの情報が含まれる

このオプションは、個人情報ではない機密情報が製品に含まれる場合に選択します。

例としては、集約された多様性データや匿名化された財務データなどがあります。

- オプション 3 – 個人データ (i) 機密カテゴリの情報、および/または (ii) その他の方法では公開されておらず、1996 年の医療保険の相互運用性と説明責任に関する法律 (PHI) に基づく保護対象医療情報 (HIPAA) は含まれていません。

このオプションは、他の方法で一般公開されていない個人データが製品に含まれる場合に選択します。製品には、の対象となる保護された医療情報 (PHI) を含めることはできませんHIPAA。

例としては、E メールアドレス、社会保障番号、生体認証、モバイル PIIなどがありますIDs。

Note

このオプションは、プロバイダーの利用規約の拡張プロバイダープログラム補遺に同意した、拡張プロバイダープログラムに登録された適格な AWS Marketplace プロバイダーのみが利用できます。詳細については、「[拡張プロバイダープログラム \(EPP\)](#)」を参照してください。

- オプション 4 – 1996 年の医療保険の相互運用性と説明責任に関する法律の対象となる保護対象医療情報 (PHI) (HIPAA)

製品に の対象となる保護医療情報 (PHI) が含まれている場合は、このオプションを選択しますHIPAA。

例としては、対象エンティティによって開示される患者情報PHIなどがあります。

Important

4 番目のオプションは、プライベート製品のみで使用できます。パブリック製品にこのようなデータを含めることはできません。

Note

オプション4は、以下の適格プロバイダーのみが利用できます。

- 3 番目と 4 番目のオプションは、AWS Marketplace プロバイダー向けの利用規約の拡張プロバイダープログラム付則に同意した、拡張プロバイダープログラムに登録済みの対象プロバイダーのみが使用できます。詳細については、「[拡張プロバイダープログラム \(EPP\)](#)」を参照してください。
- AWS ビジネスアソシエイト補遺、および AWS ビジネスアソシエイト補遺の AWS Data Exchange 補遺に同意した適格プロバイダー。

Warning

延長プロバイダープログラムに登録していない場合、オプション 3 およびオプション 4 で説明されているデータまたは情報を含む製品を一覧表示することは、これらのガイドラインに違反するすべての製品を [の公開ガイドライン AWS Data Exchange](#) AWS から削除し、プロバイダーによるサービスの将来の使用を停止する可能性があります。

製品の作成とデータの機密性ステータスの設定に関する詳細については、「[ステップ 5: 新しい製品を公開する](#)」を参照してください。

の製品名 AWS Data Exchange

サブスクライバーは で製品名を検索するため AWS Data Exchange、製品名を意味のあるものにします。

の製品ロゴ AWS Data Exchange

製品ロゴは、コンソールと AWS Data Exchange の製品カタログに表示されます AWS Marketplace。サポートされているロゴの形式は、.png、.jpg、および .jpeg です。

で問い合わせをサポートする AWS Data Exchange

プロバイダーとして、有効な連絡先情報を に含める必要があります AWS Data Exchange。これは、製品に関する質問がある顧客がサポートを受けるために使用する、マネージド E メールエイリアス、またはケース管理システムのリンクにすることができます。アドレスは公表されるため、個人用の E メールアドレスは使用しないことを強くお勧めします。

の製品カテゴリ AWS Data Exchange

すべての製品は、の 1 つ以上のカテゴリに分類されます AWS Data Exchange。製品に最大 2 つのカテゴリを指定することで、サブスクライバーは AWS Data Exchange と で製品をフィルタリングして検索できます AWS Marketplace。

での製品の簡単な説明 AWS Data Exchange

製品概要テキストは、AWS Data Exchange コンソールの製品カタログ部分のタイルに表示されます。このフィールドには、製品の簡潔な説明を入力することをお勧めします。

での製品の長い説明 AWS Data Exchange

サブスクライバーは、製品が で公開された後、製品の詳細ページに製品の長い説明を表示します AWS Data Exchange。これには、製品の機能、利点、使用方法、および製品に固有のその他情報をリストすることをお勧めします。

説明内の製品情報は、サブスクライバーに提供されるデータを正確に表現している必要があります。これには、データの対象範囲 (30,000 個の金融商品、または 10,000 個の位置座標など) と、データセットの更新頻度 (毎日更新または毎週更新など) が含まれます。

Note

数多くの一般的な製品タイプの詳しい説明を作成する開始点として、Markdown テンプレートを使用することができます。詳細については、「[の製品説明テンプレート AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

製品の説明への追加情報

製品の説明を見込みサブスクライバーにとって魅力的なものにするため、製品の説明に以下の情報を追加することをお勧めします。

- データデューデリジェンスアンケート (DDQ) – 通常、データセットを販売する会社に関する質問への回答が含まれます。内の情報の例としては、プロバイダーがデータを収集するために実行するプロセス、品質管理手順、規制コンプライアンスに関する質問DDQなどがあります。
- データセットスキーマ – 見込みユーザーに、データセットの構造と形式に関する詳しい説明を提供します。データセットスキーマの情報の例には、プライマリキーの識別情報、フィールド名、

フィールドの定義、各フィールドに期待される出力タイプ (文字列、整数など)、および各フィールドに許容される列挙体 (例えば 0 ~ 100%) などがあります。

- **トライアル製品の出品** – 多くの見込みサブスクライバーは、サブスクリプションを購入する前に、データセットのトライアルをリクエストします。トライアル製品は、サブスクライバー AWS Data Exchange が通常の有料製品と同様にサブスクライブできるように、で公開できます。
- **サンプルファイル** – サンプルファイルは通常、本番稼働用データセット全体のより小さいバージョンまたは古い out-of-date バージョンです。これらのサンプルファイルは、見込みユーザーがサブスクリプションを購入する前に、期待できる出力に関する洞察を提供します。
- **製品ファクトシート** – これらは、ドキュメント、ウェブリンク、またはそれら両方にすることができ、データセットの対象範囲、データセットの典型的なユースケース、およびデータセットを差別化するその他要素に関する詳細な統計情報をサブスクライバーに提供します。

説明にリンクを追加する方法については、「[製品の説明にリンクを含める](#)」を参照してください。

製品の説明にリンクを含める

AWS Data Exchange 製品の長い説明は Markdown をサポートしているため、製品の詳細ページにリンクを含めることができます。次の手順では、AWS Data Exchange 製品説明にウェブサイトへのリンクを追加する方法を示します。

製品の出品ページに埋め込みリンクを含める

1. AWS コンソールにログインし、AWS Data Exchange ユーザーがアクセスできる [Amazon S3 バケット](#) に移動します。このバケットの内容はパブリック読み取り可能です。
2. 製品リストに含めるファイル (PDF ファイルや Microsoft Excel ファイルなどのドキュメント) を Amazon Simple Storage Service (Amazon S3) バケットにアップロードします。アップロードが完了したら、ファイル (1 つ、または複数) にパブリック読み取りアクセス許可を設定するようにしてください。
3. アップロードしたファイルのいずれかを選択します。概要タブには、URL ファイルの が表示されます。URL をクリップボードにコピーします。
4. [AWS Data Exchange コンソール](#) を開きます。
5. 更新する製品を選択してから、[編集] を選択します。
6. 製品説明 から、次の Markdown 形式を使用して、関連するファイル (以前にコピーした URL リンクを使用) URL またはウェブサイトなどの別の にリンクします。
 - S3 バケットに保存されているファイルにリンクする:

[File name](Object URL from Amazon S3)

Description of the object.

- の治験製品リストにリンクするには AWS Data Exchange :

[Website Title](URL)

Description of the website.

7. [Save Changes] を選択します。数分後、AWS Data Exchange 製品リストページが新しいリンクで更新されるはずですが。

でのアクセスルールの改訂 AWS Data Exchange

リビジョンアクセスルールは、サブスクライバーが製品をサブスクライブするときにアクセスできるリビジョンを指定します AWS Data Exchange。サブスクライバーが履歴リビジョンと将来のリビジョンを取得するためのオプションを選択します。

- 履歴リビジョンのオプション – 履歴リビジョンとは、サブスクリプションの開始日より前に発行されたリビジョンです。履歴リビジョンには 3 つのオプションがあります。
 - [All pre-existing revisions published prior to subscription] (サブスクリプションより前に発行されたすべての既存リビジョン) – サブスクライバーは、すべての履歴リビジョンにアクセスできます。
 - [A fixed number of trailing revisions published prior to subscription] (サブスクリプションより前に発行された、固定数の 2 番目以降のリビジョン) – サブスクライバーがアクセスできる履歴リビジョンの数 (1 ~ 100 個) を選択します。
 - [No historical revisions] (履歴リビジョンなし) – サブスクライバーは、履歴リビジョンにアクセスできません。このオプションを選択すると、サブスクリプション開始当初から次のリビジョンが発行されるまでの間、サブスクライバーには利用できるリビジョンがありません。
- 将来のリビジョンのオプション – 将来のリビジョンとは、サブスクリプションの開始後に発行されるリビジョンです。将来のリビジョンには 2 つのオプションがあります。
 - [All future revisions published during subscription duration] (サブスクリプション期間中に発行されるすべての将来のリビジョン) – サブスクライバーは、サブスクリプションの有効期限が切れるまで、発行されるすべてのリビジョンにアクセスできます。
 - [No future revisions] (将来のリビジョンなし) – サブスクライバーは、将来のリビジョンにアクセスできません。

Note

[No historical revisions] (履歴リビジョンなし) と [No future revisions] (将来のリビジョンなし) の両方を選択することはできません。両方を選択すると、リビジョンもデータもない製品が作成されます。

のデータディクショナリ AWS Data Exchange

データディクショナリは、 のデータセットの内容の視覚的表現です AWS Data Exchange。

サブスクライバーは、製品をサブスクライブする前にデータディクショナリを表示およびダウンロードして、製品がニーズを満たしているかどうかを評価できます。

各データセットには、最大サイズ 1 MB のサイズで 1 つのデータディクショナリを追加できます。データディクショナリで使用できるファイルタイプは.csv です。

データディクショナリを作成するときは、データセットに含まれる列とその意味に関する詳細を含めます。データディクショナリは、AWS Data Exchange データディクショナリテンプレートに準拠している必要があります。AWS Data Exchange コンソールから空のデータディクショナリテンプレートをダウンロードできます。には、例として表示できるデータディクショナリの例 AWS Data Exchange も用意されています。

Note

データディクショナリは製品に添付され、データセットに関連付けられます。潜在的な利用者が評価できるように複数のデータディクショナリを用意したい場合は、同じデータセットを使用して同じ製品の 2 つ以上のバージョンを作成できます。次に、製品ごとに異なるデータディクショナリを追加します。

データディクショナリを製品に追加する方法の詳細については、[で新製品を公開する AWS Data Exchange](#)を参照してください。

のサンプルデータ AWS Data Exchange

サンプルは、 の製品内のデータのごく一部 AWS Data Exchange であり、データセット全体がどのようなものかを示すことを目的としています。

サブスクライバーは、製品を購読する前にサンプルを閲覧およびダウンロードして、製品がニーズを満たしているかどうかを評価できます。

各データセットには、最大 50 MB のサンプルを 10 個までアップロードできます。サンプルに使用できるファイル形式は、Amazon S3 で受け入れられているすべてのファイルタイプです。.csv 形式のサンプルはプレビューできます。

Note

サンプルは製品に添付され、データセットに関連付けられます。潜在的な購読者が評価できるように 10 個以上のサンプルを用意したい場合は、同じデータセットを使用して同じ製品の 2 つ以上のバージョンを作成できます。次に、各製品に最大 10 個のサンプルを追加します。

ストリームにデータを追加する方法の詳細については、[で新製品を公開する AWS Data Exchange](#) を参照してください。

の製品説明テンプレート AWS Data Exchange

に製品を一覧表示する場合は AWS Data Exchange、サブスクライバーが製品が提供する内容を理解するために必要なすべての情報を含む長い説明を含める必要があります。製品の詳しい説明に関する詳細については、「[での製品の長い説明 AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

このセクションには、数多くの一般的な製品タイプの詳しい説明を作成する開始点として使用できる Markdown テンプレートが記載されています。

詳しい説明に以下のコンテンツをコピーして貼り付け、データ製品に該当するセクションを使用することができます。

トピック

- [製品の一般的な説明テンプレート AWS Data Exchange](#)
- [AWS Data Exchange 製品の金融サービスのロングディスクリプションテンプレート](#)
- [AWS Data Exchange 製品のヘルスケアとライフサイエンスのロングディスクリプションテンプレート](#)
- [のマーケティングと広告のロング説明テンプレート AWS Data Exchange](#)
- [AWS Data Exchange 製品のメディアとエンターテインメントのロングディスクリプションテンプレート](#)

- [AWS Data Exchange 製品のパブリックセクターのロングディスクリプションテンプレート](#)
- [AWS Data Exchange 製品の小売およびロケーションのロングディスクリプションテンプレート](#)

製品の一般的な説明テンプレート AWS Data Exchange

に製品を一覧表示する場合は AWS Data Exchange、サブスクライバーが製品が提供する内容を理解するために必要なすべての情報を含む長い説明を含める必要があります。以下は、長い説明のための汎用テンプレートです。

```
---  
## PRODUCT TITLE Data Product Overview  
Instructions: Provide a description of the data product and what it contains in this section.  
  
---  
## Use Cases  
Instructions: Provide a handful of use-cases or guidance of best ways to utilize the data product.  
  
---  
## Metadata  
Instructions: Provide metadata of your data using a table. Examples include but are not limited to:  
  
Description | Value  
----|-----  
Update Frequency | ADD INFO HERE  
Data Source(s) | ADD INFO HERE  
Original Publisher of data | ADD INFO HERE  
Data Creation Date | ADD INFO HERE  
Data Modification Date | ADD INFO HERE  
Geographic coverage | ADD INFO HERE  
Time period coverage | ADD INFO HERE  
Is historical data "point-in-time" | YES OR NO  
Data Set(s) Format(s) | ADD INFO HERE  
Raw or scraped data | ADD INFO HERE  
Key Fields | ADD INFO HERE  
Key Words | ADD INFO HERE  
Number of companies/brands covered | ADD INFO HERE  
  
---  
## Key Data Points
```

Key data points include:

** Key Data Point:*

** Key Data Point:*

Additional Information

** [Data Source] (ADD LINK HERE)*

** [Data Due Diligence Questionnaire] (ADD LINK HERE)*

** [Link to Corresponding ADX Trial Product/ Link to Corresponding ADX Paid Product] (ADD LINK HERE)*

Pricing Information

If you would like to tell your subscribers that you would like them to inquire for custom pricing

(ie you price based on other variables), you can explain here.

Regulatory and Compliance Information

If this section is applicable, provide an overview of the regulatory guidance and compliance

for use of this product. Are there exemptions that need to be linked in order for the data product to be published?

Subscription Verification Request Information

If you are enabling subscription verification for your products, you may elect to indicate the information

that you will require from the prospective subscriber i.e., EIN number, # of applications, # of users, # of Regions, etc.

Need Help?

** If you have questions about our products, contact us using the support information below.*

About Your Company

Provide a description and/or link about your company

** [Company Fact Sheet] (ADD LINK HERE)*

AWS Data Exchange 製品の金融サービスのロングディスクリプションテンプレート

に製品を一覧表示する場合は AWS Data Exchange、サブスクライバーが製品が提供する内容を理解するために必要なすべての情報を含む長い説明を含める必要があります。以下は、金融サービス製品の詳細な説明のテンプレートです。

```

---
## PRODUCT TITLE Data Product Overview
Instructions: Provide a description of the data product and what it contains in this section.

---
## Use Cases
Instructions: Provide a handful of use-cases or guidance of best ways to utilize the data product.

---
## Metadata
Instructions: Provide metadata of your data using a table. Examples include but are not limited to:

Description | Value
----|-----
Update Frequency | YOUR INFO HERE
Data Source(s) | YOUR INFO HERE
Original Publisher of data | YOUR INFO HERE
Data Creation Date | YOUR INFO HERE
Data Modification Date | YOUR INFO HERE
Geographic coverage | YOUR INFO HERE
Time period coverage | YOUR INFO HERE
Is historical data "point-in-time" | YES OR NO
Data Set(s) Format(s) | YOUR INFO HERE
Raw or scraped data | YOUR INFO HERE
Key Fields | YOUR INFO HERE
Key Words | YOUR INFO HERE
Number of companies/brands covered | YOUR INFO HERE
Standard entity identifiers | YOUR INFO HERE, EXAMPLE BELOW

examples include(include your identifier above then delete this section)
* CUSIP Number: A unique identification number assigned to all stocks and registered bonds in the US & Canada

```

- * *ISIN: An International Securities Identification Number that uniquely identifies a specific securities issue (a series of stocks/bonds offered to raise funds from investors)*
- * *RIC: The Reuters Instrument Code is used to identify financial instruments/indices used in Refinitiv financial information networks*
- * *Bloomberg ID: 12-digit alpha-numeric ID used to identify securities*
- * *D-U-N-S Number: 9-digit identifier assigned to businesses by Dun & Bradstreet*

Tables

If this section is applicable, you can make a table and include information such as:

Description | Identifier | Format | Frequency

----|-----

FX FWD | FIGI | .CSV | Intraday

USD Deposits | CUSIP | .txt | End of Day

Interest Rate Swaps | ISIN | .json | Daily

Basis Swaps | CUSIP | .xml | Intraday

Key Data Points

Examples of key data points include:

- * *Symbol: Ticker symbol for the security*
- * *Exchange: Exchange MIC identifier*
- * *Currency: Trading currency code*
- * *Open: Opening price for the day*
- * *High: High price for the day*
- * *Low: Low price for the day*
- * *Last: Last price for the day*
- * *Volume: Trading volume for the day*
- * *Split Ratio: Ratio of new number of shares to old on the effective date*
- * *Cash Dividend: Cash dividend amount on the ex-dividend date*
- * *Dividend amount:*
- * *Extra dividends:*
- * *Total dividends paid this year:*
- * *Effective dates:*
- * *Textual descriptions of special dividends:*
- * *Dividend Currency: Currency for the cash dividend*

Additional Information

* [Data Source] (*ADD LINK HERE*)

* [Data Due Diligence Questionnaire] (*ADD LINK HERE*)

* [Link to Corresponding ADX Trial Product/ Link to Corresponding ADX Paid Product]
(*ADD LINK HERE*)

Pricing Information

If you would like to tell your subscribers that you would like them to inquire for custom pricing (ie you price based on other variables), you can explain here.

Regulatory and Compliance Information

If this section is applicable, provide an overview of the regulatory guidance and compliance for use of this product. Are there exemptions that need to be linked in order for the data product to be published?

Subscription Verification Request Information

If you are enabling subscription verification for your products, you may elect to indicate the information that you will require from the prospective subscriber i.e., EIN number, # of applications, # of users, # of Regions, etc.

Need Help?

** If you have questions about our products, contact us using the support information below.*

About Your Company

Provide a description and/or link about your company

* [Company Fact Sheet] (*ADD LINK HERE*)

AWS Data Exchange 製品のヘルスケアとライフサイエンスのロングディスクリプションテンプレート

に製品を一覧表示する場合は AWS Data Exchange、サブスクライバーが製品が提供する内容を理解するために必要なすべての情報を含む長い説明を含める必要があります。以下は、ヘルスケアおよびライフサイエンス製品の長い説明のためのテンプレートです。

```
---
## PRODUCT TITLE Data Product Overview
Instructions: Provide a description of the data product and what it contains in this section.

---
## Use Cases
Instructions: Provide a handful of use-cases or guidance of best ways to utilize the data product.

---
## Metadata
Instructions: Provide metadata of your data using a table. Examples include but are not limited to:

Description | Value
----|-----
Update Frequency | YOUR INFO HERE
Data Source(s) | YOUR INFO HERE
Original Publisher of data | YOUR INFO HERE
Data Creation Date | YOUR INFO HERE
Data Modification Date | YOUR INFO HERE
Geographic coverage | YOUR INFO HERE
Time period coverage | YOUR INFO HERE
Is historical data “point-in-time” | YES OR NO
Data Set(s) Format(s) | YOUR INFO HERE
Raw or scraped data | YOUR INFO HERE
Key Fields | YOUR INFO HERE
Key Words | YOUR INFO HERE
Number of companies/brands covered | YOUR INFO HERE

---
## Key Data Points
Key data points include:
```

* *Key Data Point:*

* *Key Data Point:*

Use Cases for the Data Set

Provide a handful of use-cases or guidance of best ways to utilize the data product.

Target Therapeutic Area / Disease Focus

Provide an overview of which therapeutic areas, diagnoses, procedures, medications, and more can be analyzed in the data listing, and can other data for different therapeutic areas be sourced.

Data Engineering Overview

Provide an overview of how the raw data was engineered. Questions to answer:

* *What data models were applied?*

* *What standards / terminologies applied?*

* *Was NLP post-processing used in the curation of the data?*

Additional Information

* [Data Source] (*ADD LINK HERE*)

* [Data Due Diligence Questionnaire] (*ADD LINK HERE*)

* [Link to Corresponding ADX Trial Product/ Link to Corresponding ADX Paid Product]
(*ADD LINK HERE*)

Pricing Information

If you would like to tell your subscribers that you would like them to inquire for custom pricing (ie you price based on other variables), you can explain here.

Regulatory and Compliance Information

If this section is applicable, provide an overview of the regulatory guidance and compliance for use of this product. Are there exemptions that need to be linked in order for the data product to be published?

Subscription Verification Request Information

If you are enabling subscription verification for your products, you may elect to

indicate the information that you will require from the prospective subscriber i.e., EIN number, # of applications, # of users, # of Regions, etc.

Need Help?

** If you have questions about our products, contact us using the support information below.*

About Your Company

Provide a description and/or link about your company

** [Company Fact Sheet] (ADD LINK HERE)*

のマーケティングと広告のロング説明テンプレート AWS Data Exchange

に製品を一覧表示する場合は AWS Data Exchange、サブスクライバーが製品が提供する内容を理解するために必要なすべての情報を含む長い説明を含める必要があります。以下は、マーケティングおよび広告製品の長い説明のためのテンプレートです。

PRODUCT TITLE Data Product Overview

Instructions: Provide a description of the data product and what it contains in this section.

Use Cases

Instructions: Provide a handful of use-cases or guidance of best ways to utilize the data product.

Metadata

Instructions: Provide metadata of your data using a table. Examples include but are not limited to:

Description | Value

----|-----

Update Frequency | *YOUR INFO HERE*

Data Source(s) | *YOUR INFO HERE*

Original Publisher of data | *YOUR INFO HERE*

Data Creation Date | *YOUR INFO HERE*

Data Modification Date | *YOUR INFO HERE*

Geographic coverage | *YOUR INFO HERE*

Time period coverage | *YOUR INFO HERE*

Is historical data “point-in-time” | *YES OR NO*

Data Set(s) Format(s) | *YOUR INFO HERE*

Raw or scraped data | *YOUR INFO HERE*

Key Fields | *YOUR INFO HERE*

Key Words | *YOUR INFO HERE*

Number of companies/brands covered | *YOUR INFO HERE*

Data Channels | *Examples include web devices, mobile devices, CTV devices, offline purchases, household data, B2B data*

Data Set Specification

The following are examples of data set specifications that you may include if applicable:

The data sets are updated at midnight EST daily.

Custom data cuts are available if desired.

Additional Information

* [Data Source] (*ADD LINK HERE*)

* [Data Due Diligence Questionnaire] (*ADD LINK HERE*)

* [Link to Corresponding ADX Trial Product/ Link to Corresponding ADX Paid Product] (*ADD LINK HERE*)

Pricing Information

If you would like to tell your subscribers that you would like them to inquire for custom pricing

(ie you price based on other variables), you can explain here.

Regulatory and Compliance Information

If this section is applicable, provide an overview of the regulatory guidance and compliance for use of this product.

Are there exemptions that need to be linked in order for the data product to be published?

Subscription Verification Request Information

If you are enabling subscription verification for your products, you may elect to indicate the information

that you will require from the prospective subscriber i.e., EIN number, # of applications, # of users, # of Regions, etc.

Need Help?

** If you have questions about our products, contact us using the support information below.*

About Your Company

Provide a description and/or link about your company

** [Company Fact Sheet] (ADD LINK HERE)*

AWS Data Exchange 製品のメディアとエンターテインメントのロングディスクリプションテンプレート

に製品を一覧表示する場合は AWS Data Exchange、サブスクライバーが製品が提供する内容を理解するために必要なすべての情報を含む長い説明を含める必要があります。以下は、メディアおよびエンターテインメント製品の長い説明のテンプレートです。

PRODUCT TITLE Data Product Overview

Instructions: Provide a description of the data product and what it contains in this section.

Use Cases

Instructions: Provide a handful of use-cases or guidance of best ways to utilize the data product.

Metadata

Instructions: Provide metadata of your data using a table. Examples include but are not limited to:

Description | Value

----|-----

Update Frequency | *ADD INFO HERE*

Data Source(s) | *ADD INFO HERE*

Original Publisher of data | *ADD INFO HERE*

Data Creation Date | *ADD INFO HERE*

Data Modification Date | *ADD INFO HERE*

Geographic coverage | *ADD INFO HERE*
Time period coverage | *ADD INFO HERE*
Is historical data “point-in-time” | *YES OR NO*
Data Set(s) Format(s) | *ADD INFO HERE*
Raw or scraped data | *ADD INFO HERE*
Key Fields | *ADD INFO HERE*
Key Words | *ADD INFO HERE*
Number of companies/brands covered | *ADD INFO HERE*

Table format examples

Data Set(s) Inventory

File Description | Format | Initial Size | Revision Frequency | Revision Type
----|-----

New Text Archives | .CSV | 100 GB | Hourly | Incremental
Image Library | .JSON | 1.5 TB | Weekly | Incremental
Ratings | .JSON | 50 MB | Every 5 Min | Republish

Key Data Points

Examples of key data points include:

- * Publisher or Studio*
- * Title*
- * Artist Name*
- * Producer Name*
- * Director Name*
- * Distributor*
- * Distribution Channel*
- * Release Date*
- * Publish Date*
- * Format*
- * Operating System*
- * Sale Price*
- * Number of Transactions*
- * Number of Streams*
- * Average rating*
- * Designated Market Area (DMA)*
- * Zip or Postal Code*

Additional Information

* [Data Source] (*ADD LINK HERE*)

* [Data Due Diligence Questionnaire] (*ADD LINK HERE*)

* [Link to Corresponding ADX Trial Product/ Link to Corresponding ADX Paid Product]
(*ADD LINK HERE*)

Pricing Information

If you would like to tell your subscribers that you would like them to inquire for custom pricing

(i.e., you price based on other variables), you can explain here.

Regulatory and Compliance Information

If this section is applicable, provide an overview of the regulatory guidance and compliance for use of this product.

Are there exemptions that need to be linked in order for the data product to be published?

Subscription Verification Request Information

If you are enabling subscription verification for your products, you may elect to indicate the information

that you will require from the prospective subscriber i.e., EIN number, # of applications, # of users, # of Regions, etc.

Need Help?

** If you have questions about our products, contact us using the support information below.*

About Your Company

Provide a description and/or link about your company

* [Company Fact Sheet] (*ADD LINK HERE*)

AWS Data Exchange 製品のパブリックセクターのロングディスクリプションテンプレート

に製品を一覧表示する場合は AWS Data Exchange、サブスクライバーが製品が提供する内容を理解するために必要なすべての情報を含む長い説明を含める必要があります。以下は、パブリックセクター製品の長い説明のテンプレートです。

```
---
## PRODUCT TITLE Data Product Overview
Instructions: Provide a description of the data product and what it contains in this section.

---
## Applicable Industries for Data Product Usage
Provide a list of industries that this data product is applicable to.

---
## Use Cases
Instructions: Provide a handful of use-cases or guidance of best ways to utilize the data product.

---
## Metadata
Instructions: Provide metadata of your data using a table. Examples include but are not limited to:

Description | Value
----|-----
Update Frequency | YOUR INFO HERE
Data Source(s) | YOUR INFO HERE
Original Publisher of data | YOUR INFO HERE
Data Creation Date | YOUR INFO HERE
Data Modification Date | YOUR INFO HERE
Geographic coverage | YOUR INFO HERE
Time period coverage | YOUR INFO HERE
Is historical data “point-in-time” | YES OR NO
Data Set(s) Format(s) | YOUR INFO HERE
Raw or scraped data | YOUR INFO HERE
Key Fields | YOUR INFO HERE
Key Words | YOUR INFO HERE
Number of companies/brands covered | YOUR INFO HERE
```

Additional Information

* [Data Source] (*ADD LINK HERE*)

* [Data Due Diligence Questionnaire] (*ADD LINK HERE*)

* [Link to Corresponding ADX Trial Product/ Link to Corresponding ADX Paid Product]
(*ADD LINK HERE*)

Pricing Information

If you would like to tell your subscribers that you would like them to inquire for custom pricing (ie you price based on other variables), you can explain here.

Regulatory and Compliance Information

If this section is applicable, provide an overview of the regulatory guidance and compliance for use of this product. Are there exemptions that need to be linked in order for the data product to be published?

Subscription Verification Request Information

If you are enabling subscription verification for your products, you may elect to indicate the information that you will require from the prospective subscriber i.e., EIN number, # of applications, # of users, # of Regions, etc.

Need Help?

** If you have questions about our products, contact us using the support information below.*

About Your Company

Provide a description and/or link about your company

** [Company Fact Sheet] ADD LINK HERE*

AWS Data Exchange 製品の小売およびロケーションのロングディスクリプションテンプレート

に製品を一覧表示する場合は AWS Data Exchange、サブスクライバーが製品が提供する内容を理解するために必要なすべての情報を含む長い説明を含める必要があります。以下は、小売およびロケーション製品の長い説明のテンプレートです。

```
---  
## PRODUCT TITLE Data Product Overview  
Instructions: Provide a description of the data product and what it contains in this section.  
  
---  
## Use Cases  
Instructions: Provide a handful of use-cases or guidance of best ways to utilize the data product.  
  
---  
## Metadata  
Instructions: Provide metadata of your data using a table. Examples include but are not limited to:  
  
Description | Value  
----|-----  
Update Frequency | YOUR INFO HERE  
Data Source(s) | YOUR INFO HERE  
Original Publisher of data | YOUR INFO HERE  
Data Creation Date | YOUR INFO HERE  
Data Modification Date | YOUR INFO HERE  
Geographic coverage | YOUR INFO HERE  
Time period coverage | YOUR INFO HERE  
Is historical data “point-in-time” | YES OR NO  
Data Set(s) Format(s) | YOUR INFO HERE  
Raw or scraped data | YOUR INFO HERE  
Key Fields | YOUR INFO HERE  
Key Words | YOUR INFO HERE  
Number of companies/brands covered | YOUR INFO HERE  
Data Channels | Examples include web devices, mobile devices, CTV devices, offline purchases, household data, B2B data
```

Data Set Specification

The following are examples of data set specifications that you can include if applicable:

The data sets are updated at midnight EST daily.

The data sets are tied to a home address, and attributes correspond to the household level.

Provider processes opt-outs on a daily basis and remove records from future files. Custom data cuts are available if desired.

Additional Information

* [Data Source] (*ADD LINK HERE*)

* [Data Due Diligence Questionnaire] (*ADD LINK HERE*)

* [Link to Corresponding ADX Trial Product/ Link to Corresponding ADX Paid Product] (*ADD LINK HERE*)

Pricing Information

If you would like to tell your subscribers that you would like them to inquire for custom pricing

(i.e., you price based on other variables), you can explain here.

Regulatory and Compliance Information

If this section is applicable, provide an overview of the regulatory guidance and compliance

for use of this product. Are there exemptions that need to be linked in order for the data product to be published?

Subscription Verification Request Information

If you are enabling subscription verification for your products, you may elect to indicate

the information that you will require from the prospective subscriber i.e., EIN number, # of applications, # of users, # of Regions, etc.

Need Help?

** If you have questions about our products, contact us using the support information below.*

About Your Company

Provide a description and/or link about your company

* [Company Fact Sheet] (*ADD LINK HERE*)

AWS Data Exchange 製品のオファ어의作成

製品を使用可能にするには、AWS Data Exchange コンソールでオファ어を作成する必要があります。オファ어は、製品をサブスクライブするときにサブスクライバーが同意する条件を定義します。可視性が [パブリック] に設定されている製品には、すべてのサブスクライバーが利用できるパブリックオファ어が必要です。特定のサブスクライバーに対するカスタムオファ어を作成することも可能です。製品のオファ어を作成するときは、以下を定義します。

- データサブスクリプション契約。これは、見込みサブスクライバーが製品のサブスクリプションを購入する前に同意する必要がある条件を定義します。
- 利用可能な料金と期間の組み合わせ。
- 米国売上税が徴収されるかどうか。
- 返金ポリシーの諸条件 (ポリシーを設定する場合)。
- サブスクライバーがサブスクリプション検証を使用して、サブスクリプションをリクエストするためのアンケートに記入する必要があるかどうか。
- オファ어의自動更新を利用可能にするかどうか。

特定の AWS アカウントに提示するカスタムオファ어を作成することもできます。カスタムオファ어は、製品に特定の条件と料金を設定することを可能にします。以下のトピックでは、すべてのオファ어의作成について詳しく説明します。

トピック

- [オファ어의料金](#)
- [米国の消費税と使用税](#)
- [データサブスクリプション契約](#)
- [返金ポリシー](#)
- [サブスクリプション検証](#)

- [オファ어의自動更新](#)
- [でのプライベートオファ어의作成 AWS Data Exchange](#)
- [での Bring Your Own サブスクリプションオファ어의作成 AWS Data Exchange](#)
- [AWS Data Exchange サブスクリプションの表示](#)

オファ어의料金

料金情報を定義するときは、サブスクリプションの合計料金と期間を定義します。期間は 1~36 か月です。パブリックオファ어의場合、単一のオファ어で最大 5 つの異なる期間を指定できます。

長期的にサポートしようと考えている期間を選択することをお勧めします。期間を中止すると、は、自動更新ポリシーにオプトインした影響を受けるサブスクライバーのサブスクリプション更新 AWS をキャンセルします。

料金でサポートされている通貨は米ドル (\$) のみです USD。料金は期間ごとに指定する必要があります。例えば、単一のオファ어内の 1 か月、6 か月、12 か月、24 か月、および 36 か月の期間には、異なる料金を指定できます。見込みサブスクライバーは、すべてのオプションを利用できます。見込みサブスクライバーがオファ어를サブスクライブするときには、単一の料金と期間を選択する必要があります。また、オファ어規約に同意して、購入料金を前払いする必要もあります。

米国の消費税と使用税

オファ어に対する米国売上税の徴収は、税金のネクサスの設定に基づいて有効にできます。詳細については、「[米国の消費税と使用税](#)」を参照してください。

データサブスクリプション契約

データサブスクリプション契約 (DSA) は、を AWS Data Exchange デフォルトとして提供する標準契約テンプレートです。では、データ製品の利用規約 DSA について説明します。プロバイダーは、法的条件と使用権を管理します。これらの条件は、製品用に作成する各オファ어의一部です。

AWS Data Exchange コンソールでデフォルトの DSA テンプレートをダウンロードし、編集して独自の利用規約を追加できます。または、DSA 任意のをアップロードして独自のカスタム用語を指定できます。は、製品のオファ어に DSA 指定したを、それ以上の変更を加えることなく AWS Data Exchange 関連付けます。

DSA は、サブスクライバーおよびプロバイダーコミュニティと協力して開発され、両方の関係者のニーズに対処します。は、使用、保証、補償、準拠法など、主要な契約条項に共通する根拠を DSA

事前に定義します。AWS Data Exchange プロバイダーは、 をセルフサービストランザクションまたはプライベートオファ―EULAの DSAとして提供できます。サブスクライバーは、 を提供するプロバイダーからデータを検索、サブスクライブ、使用できDSA、プライベートオファ―DSAの標準をリクエストできます。プライベートオファ―の場合、サブスクライバーはプロバイダーにDSAテンプレートをリクエストできます。DSA 条件は、当事者間で合意されたカスタムランザクション要件に対応するために修正できます。

返金ポリシー

プロバイダーは、製品のサブスクライバーに対する返金ポリシーを管理します。AWS Data Exchange は返金の提供を必須としていませんが、オファ―の詳細に返金ポリシーを明記する必要があります。サブスクライバーが質問やリクエストがある場合に連絡できるように、これらの詳細は明確かつ簡潔な方法で提供することをお勧めします。AWS は、プロバイダーが認可する返金をプロバイダーに代わって処理できますが、プロバイダーとして返金を認可する必要があります。

で承認された返金を処理する AWS には、AWS Support を通じて [返金承認フォームを送信します](#) AWS Marketplace 管理ポータル。返金リクエストが処理され、サブスクライバーへの返金が行われます。AWS がプロバイダーに代わって処理したすべての返金は、毎月の請求済み収益レポートで確認できます。

サブスクリプション検証

プロバイダーには、AWS Data Exchangeのデータ製品に対してサブスクリプション検証を有効にするオプションがあります。詳細については、「[のプロバイダーのサブスクリプション検証 AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

オファ―の自動更新

自動更新の利用可能性はプロバイダーが管理します。自動更新は、オファ―の作成当初に有効化することを選択できます。これにより、自動更新が設定された製品をサブスクライブするオプションがサブスクライバーに提供されます。オファ―が作成された後でこのパラメータを変更することはできません。

Note

カスタムプライベートオファ―に柔軟な支払いスケジュールをセットアップする場合、オファ―を自動更新に設定することはできません。

でのプライベートオファアの作成 AWS Data Exchange

AWS Data Exchange は、プライベートオファアなどのカスタムオファアを作成するオプションをプロバイダーに提供します。

データプロバイダーは、データ製品を、一般向けに提供されているオファア規約とは異なる条件でサブスクライバーに提供できます。一般公開されていない製品の場合、プライベートオファアは顧客が利用できる唯一の条件であり、その製品はプライベートオファアを作成する顧客のみに表示されません。プライベートオファアでは、1つ、または複数の AWS アカウント向けにカスタムオファアを作成できます。プライベートオファアは、料金、期間、支払いスケジュール、データサブスクリプション契約、または払い戻しポリシーなどの面で他のオファアとは異なるものにすることができます。

プロバイダーは、製品を作成した後でプライベートオファアを作成し、選択したサブスクライバーのグループにそのオファアを提示することができます。一般公開されている製品の場合は、プライベートオファアを作成する前にパブリックオファアを作成する必要があります。

プライベートオファアを作成する

1. にサインイン AWS Management Console し、[AWS Data Exchange コンソール](#) を開きます。
2. [コンソール](#) の左側にあるナビゲーションペインで [製品] を選択してから、プライベートオファアを作成する製品を選択します。
3. [プライベートオファア] タブで、[作成] を選択します。
4. [オファアタイプの選択] ページで、[プライベートオファア]、または [更新されたプライベートオファア] を選択してから、[次へ] を選択します。

Note

これが有効期限切れのプライベートオファアの更新、または AWS Data Exchange でアップグレードされている既存のサブスクリプションである場合は、[更新されたプライベートオファア] を選択します。このオプションを選択した場合は、オファアが更新またはアップグレードであることを AWS 監査して検証できます。AWS がこれを実行できない場合、サブスクライバーへのオファアと権限を取り消すことがあります。

5. サブスクライバー AWS アカウント ID で、プライベートオファアを作成するアカウントの 12 桁のアカウント番号を入力します。複数のアカウントに単一のプライベートオファアを提示できるため、複数のアカウントを追加できます。
6. [説明] で、アカウントの簡単な説明 (アカウントの会社名など) を入力します。
7. [料金と期間] で、期間と料金の情報などのオファアの詳細を入力します。

- サブスクリイバーに対する [合計料金] を複数の支払いに分配する場合は、[支払いスケジュールを指定する] チェックボックスをオンにします。サブスクリプション時に請求される [前払い] を追加できます。次に、サブスクリイバーが追加の月次支払い、またはカスタム支払いを行うように選択できます。[月次] オプションを選択すると、日付が自動的に入力されます。[カスタム] オプションを選択する場合は、請求日 (最大 36 回払い) を入力する必要があります。

Note

[オファーの有効期限] は、サブスクリイバーがオファーを受諾する必要がある期限日です。この日付までにプライベートオファーが受諾されない場合、サブスクリイブにプライベートオファーを利用できなくなります。

有効期限は、2 回目の支払い日より前にする必要があります。

既に作成済みのオファーを有効期限より前に期限切れにする必要がある場合は、オファーページに戻って [期限切れにする] を選択します。そうすることで、すべての見込みサブスクリイバーに対するオファーの有効期限が切れれます。

- 米国の売上税と使用税の設定、データサブスクリプション契約、自動更新設定、サポート情報を入力します。
- [次へ] をクリックします。[更新されたプライベートオファー] を選択した場合は、更新されたプライベートオファーの条件に同意することを示すチェックボックスをオンにする必要があります。
- 情報が正しいことを確認してから、[発行] を選択します。

Note

プライベートオファーの作成後は、料金と請求日以外のすべてのフィールドを編集できません。

での Bring Your Own サブスクリプションオファーの作成 AWS Data Exchange

AWS Data Exchange は、Bring Your Own Subscription (BYOS) オファーなど、カスタムオファーを作成するオプションをプロバイダーに提供します。

データプロバイダーには、データ製品のサブスクリイバーが既に存在する場合があります。BYOS のを使用すると、追加料金なしで、既存のサブスクリプションを AWS 移行して顧客に提供できます。

BYOS オファーでは、お客様とサブスクリイバー間の請求関係は継続されます。BYOS オファーにはフルフィルメント料金は適用されません。サブスクリイバーは、サブスクリプションに対する AWS Marketplace 請求書を受け取りますが、料金は請求されません。BYOS オファーを作成したら、そのオファーを確認し、問題や質問があれば連絡します。

サブスクリプションのライフサイクルは の外部から始まるため AWS Data Exchange、既存のサブスクリプションを AWS Data Exchange に移行するためのワークフローでは、ユーザーとサブスクリイバー間のコラボレーションBYOSが必要です。

Important

BYOS オファーでは、この製品の可用性より前のサブスクリプションを移行します AWS。既存のサブスクリプション契約でBYOSオファーを検証する AWS 可能性があります。がBYOSオファーを検証 AWS できない場合、オファーとエンタイトルメントは予告なく取り消される可能性があります。

でBYOSオファーを作成または承諾する前に AWS Data Exchange、プロバイダーとサブスクリイバーは一緒に次の手順を実行する必要があります。

前提条件

1. プロバイダーとサブスクリイバーは、BYOS AWS Data Exchange ソリューションの実装について相互に連絡します。
2. サブスクリイバーは、でデータ製品をサブスクライブするために使用する AWS アカウント ID を提供します AWS Data Exchange。

プロバイダーの場合は、以下の手順に従ってBYOSオファーを作成します。

BYOS オファーを作成するには

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [製品] を選択します。
3. 製品リストの製品名の横にあるオプションボタンを選択して、BYOSオファーを作成する製品を選択します。
4. 「アクション」から「カスタムオファーを作成」を選択します。
5. オファータイプの選択ページで、オファータイプ で、Bring Your Own Subscription (BYOS) オプションを選択し、Next を選択します。

- 「既存のサブスクリプションの詳細を入力」ページの「既存の契約」で、「ファイルを追加」を選択して既存のサブスクリプションをアップロードし、契約が AWS で製品を作成したときよりも前の日付であることを確認します。
- 「既存のサブスクリプション開始日」では、カレンダーアイコンを選択し、開始日を選択します。
- [期間] には、該当する月数を入力します。
- 「自動更新条件」で、「はい」または「いいえ」を選択して、既存の契約に現在のサブスクリプションの有効期限が切れたときの自動更新が含まれるかどうかを指定します。
- [返金ポリシー] に、既存のサブスクリプション契約に記載されている返金ポリシーに関する情報を入力し、[次へ] を選択します。
- サブスクライバーの詳細を入力ページで、サブスクライバーの詳細 に、サブスクライバーの 12 桁の AWS アカウント ID と説明を入力し、次へ を選択します。
- [確認と公開] ページで、すべての情報を確認します。セクションを変更するには、[編集] をクリックします。
- [承認] セクションでチェック ボックスをオンにして、AWS でこの製品が利用可能になる以前の既存のサブスクリプションを移行することを承認します。
- [発行] を選択します。

Note

BYOS オファターの作成後に自動更新設定を変更することはできません。に追加 AWS アカウント できるのは 1 つだけです BYOS。複数のアカウントが必要な場合は、追加の BYOS オファターを作成します。

AWS Data Exchange サブスクリプションの表示

[製品の概要] ページを使用して、任意の製品のすべてのサブスクリプションを表示することができます。各オファターのサブスクリプションを表示することもできます。

製品のサブスクリプションの表示

製品のサブスクリプションを表示する

- ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。

2. 左側のナビゲーションペインで [データを発行] を展開し、[製品] を選択します。
3. [製品] で、オファーを表示する製品を選択します。
4. [サブスクリプション] タブを選択します。このタブで、製品のすべてのサブスクリプションを表示することができます。

[サブスクリプション] タブの左上にあるドロップダウンから、現在アクティブなサブスクリプション、またはアーカイブされた (期限が切れて終了した) サブスクリプションをフィルタリングするように選択できます。

オファーのサブスクリプションの表示

特定のオファーのサブスクリプションを表示する

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインで [データを発行] を展開し、[製品] を選択します。
3. [製品] で、オファーを表示する製品を選択します。
4. [パブリックオファー] タブ、または [カスタムオファー] タブを選択します。このタブから、オファーのすべてのサブスクリプションを表示することができます。

[サブスクリプション] セクションの左上にあるドロップダウンから、現在アクティブなサブスクリプション、またはアーカイブされた (期限が切れて終了した) サブスクリプションをフィルタリングするように選択できます。

での製品の更新 AWS Data Exchange

以下のセクションでは、AWS Data Exchange 製品を更新する方法について説明します。この手順は、ユーザーが [のデータ AWS Data Exchange](#) に精通しているプロバイダであることを前提としています。製品の公開後は、製品の詳細とパブリックオファーを編集できます。新しいリビジョンをサブスクライバーに発行することで、基盤となるデータセットを更新することもできます。詳細については、「[リビジョン](#)」を参照してください。

トピック

- [で製品とオファーの詳細を更新する AWS Data Exchange](#)
- [でのデータディクショナリの更新 AWS Data Exchange](#)

- [でのサンプルの更新 AWS Data Exchange](#)
- [でのカスタムメタデータの更新 AWS Data Exchange](#)
- [で新しいデータセットリビジョンを公開する AWS Data Exchange](#)
- [で製品の公開を解除する AWS Data Exchange](#)
- [でのリビジョンの削除 AWS Data Exchange](#)
- [でのリビジョンの取り消し AWS Data Exchange](#)

で製品とオファ어의詳細を更新する AWS Data Exchange

製品を公開したら、AWS Data Exchange コンソールを使用して製品の詳細を編集できます。また、製品のパブリックまたはカスタムオファーを編集して、オファー規約を変更することも可能です。製品のオファー規約を更新する場合、アクティブなサブスクリプションを持つサブスクライバーは、サブスクリプションがアクティブである限り、既存のオファー規約を保持します。自動更新を選択したサブスクライバーは、新しいオファー規約を使用します。

製品を更新するときは、以下の点に留意してください。

- オファ어의サブスクリプション期間を削除または編集することはできません。これは、既存のサブスクライバーが引き続き更新機能を使用できることを確実にします。特定のサブスクリプション期間を提供する必要がなくなった場合は、既存の製品を発行解除してから、新しい製品を公開することができます。詳細については、「[で製品の公開を解除する AWS Data Exchange](#)」を参照してください。
- 製品の公開後は、その製品をサブスクライブしているサブスクライバーの人数にかかわらず、製品からデータセットを削除することはできません。
- を含む製品の計測コストを更新する場合APIs :
 - 従量制料金の値下げは、新規サブスクライバーの商品詳細ページにすぐに表示されます。

Warning

従量制費用の値下げを取り消すと、従量制費用の価格が上昇することになります。従量制費用の値上げについて詳しくは、次の点を参照してください。

- 従量制料金の値上げは、既存の利用者の場合は値上げが提出されてから 90 日後、または更新時(どちらか早い方)にその月の初日に有効になります。価格変更が送信されると、メールは既存のサブスクライバーに送信されます。新しいサブスクライバーの場合、値上げはすぐに商品詳細ページに表示されます。

Example 例

5月10日に従量制コストの値上げを提出します。既存のサブスクライバーには、価格変更に関するメールが届きます。値上げは9月1日に発効します。

Warning

既存のサブスクライバーに値上げが有効になる前に値上げを取り消すことはできません（そのアクションにより価格が下がるため）。

製品、データセット、またはオファーの詳細を更新する

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [製品] を選択します。
3. [製品] で、更新する製品を選択します。ステータスが [発行済み] であることを確認してください。
4. 製品の詳細から：
 - パブリック オファーを編集している場合は、[パブリックオファー] タブを選択し、[編集] を選択して、指示に従って製品を編集します。
 - プライベートオファーを編集する場合は、「カスタムオファー」タブを選択し、編集したいプライベートオファーの横にあるオプションボタンを選択し、「編集」を選択してから、指示に従って商品を編集します。
 - a. 計測コストAPIsを含む製品の場合、計測コスト - オプション で、編集する計測コストのタイプの横にあるオプションボタンを選択し、編集 を選択します。
 - b. 「従量制費用の編集」ダイアログボックスで、「価格/単位」または「説明」を更新します。
 - c. [Update] (更新) を選択します。

更新された従量制費用は [従量制費用 - オプション] に表示されます。

5. [データセット] の [機密情報] で [編集] を選択し、指示に従って情報を編集します。
6. 「データ評価」から、データディクショナリまたはサンプル名の横にあるオプションボタンを選択し、「アクション」を選択して、データディクショナリまたはサンプルを更新します。詳細に

については、「[でのデータディクショナリの更新 AWS Data Exchange](#)」および「[でのサンプルの更新 AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

7. オファータイプに応じてオファーを設定します。
 - 製品がパブリックオファーである場合は、[パブリックオファー] で [編集] を選択し、指示に従ってパブリックオファーを編集します。
 - 製品がカスタムオファーである場合は、[カスタムオファー] で [編集] を選択し、指示に従ってカスタムオファーを編集します。
 - 製品がプライベートオファーである場合は、[プライベートオファー] で [編集] を選択し、指示に従ってプライベートオファーを編集します。
8. [Update] (更新) を選択します。

でのデータディクショナリの更新 AWS Data Exchange

データディクショナリを更新するには、まず既存のデータディクショナリを削除してから新しいデータディクショナリをアップロードします。

データディクショナリを更新するには

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [製品] を選択します。
3. 「製品」から、更新する製品を選択し、そのステータスが「発行済み」であることを確認します。
4. [データ評価] タブを選択します。
5. 「データディクショナリとサンプル」で、プラスアイコンを選択してデータセットを展開し、データディクショナリ名の横にあるオプションボタンを選択してデータディクショナリを選択します。
 - a. [アクション] を選択し、[データディクショナリを削除] を選択します。

データディクショナリが削除されます。
 - b. データセットの横にあるオプションボタンを選択し、[アクション] を選択してから [データディクショナリをアップロード] を選択します。
 - c. [ファイルを追加] を選択します。
 - d. 新しいデータディクショナリを選択し、「開く」をクリックします。
 - e. [アップロード] を選択します。

6. (オプション) データディクショナリ名の横にあるオプションボタンを選択し、アクションを選択し、データディクショナリのダウンロード (CSV) を選択してデータディクショナリをコンピュータにダウンロードします。

でのサンプルの更新 AWS Data Exchange

サンプルを更新するには

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [製品] を選択します。
3. 「製品」から、更新する製品を選択し、そのステータスが「発行済み」であることを確認します。
4. [データ評価] タブを選択します。
5. [データディクショナリとサンプル] で、データセットの横にあるオプションボタンを選択します。
6. [アクション]、[メンバーを追加] の順に選択します。
 - a. [サンプルをアップロード] を選択します。
 - b. コンピューターから新しいサンプルを選択し、[開く] を選択します。
 - c. オプションの説明を入力し、[追加] を選択します。
7. (オプション) サンプル名の横にあるオプションボタンを選択し、「アクション」を選択してから、次のアクションのいずれかを選択します。
 - 選択したサンプルをダウンロードする
 - サンプルプレビュー (CSV のみ)
 - 選択したサンプルを削除する

でのカスタムメタデータの更新 AWS Data Exchange

製品を公開したら、AWS Data Exchange コンソールを使用して製品のカスタムメタデータを編集できます。

カスタムメタデータを更新するには

1. ウェブブラウザを開き、AWS Data Exchange コンソールにサインインします。

2. 左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [製品] を選択します。
3. [製品] で、更新する製品を選択します。ステータスが [発行済み] であることを確認してください。
4. (オプション) [サブスクリプション] で [カスタムメタデータを表示] を選択してメタデータを表示し、[閉じる] を選択します。
5. [サブスクリプション] で [カスタムメタデータを編集] を選択し、指示に従ってメタデータを編集します。
6. [Save] を選択します。

で新しいデータセットリビジョンを公開する AWS Data Exchange

AWS Data Exchange は動的に更新された製品をサポートします。サブスクライバーは製品を特定の期間サブスクライブし、サブスクリプションがアクティブである限り、すべての発行済みデータセットにアクセスします。例えば、プロバイダーが米国株式の日次終値が含まれた製品を提供したいとすると、この製品はその日の終値で毎日更新されることになります。プロバイダーは、製品のデータセットで利用できる新しいリビジョンを作成して確定するか、新しいデータセットを製品に追加することができます。

製品には、サブスクリプションの一環として、すべて、または一部の履歴リビジョンと将来のリビジョンが含まれます。詳細については、「[でのアクセスルールの改訂 AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

次の手順では、AWS Data Exchange コンソールを使用して既に公開されているデータセットの新しいリビジョンを作成して確定します。その後、データセットのリビジョンはデータセットが属するすべての製品に自動発行されます。詳細については、「[リビジョン](#)」を参照してください。

Important

プロバイダーは、コンソールまたは [API](#) を使用して、リビジョンへのサブスクライバーアクセスを取り消し、リビジョンのアセットを削除できます AWS Data Exchange API。詳細については、「[でのリビジョンの取り消し AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

データセットの新しいリビジョンを製品に発行する

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。

2. 左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [所有データセット] を選択します。
3. [所有データセット] で、更新するデータセットを選択します。
4. [製品] タブに移動して、データセットが発行済みの製品に関連付けられていることを確認します。
5. [リビジョン] タブで [リビジョンを作成] を選択し、[リビジョンを作成] ページを開きます。
 - a. (オプション) [リビジョンの設定] で、リビジョンの目的を説明するリビジョンのオプションのコメントを入力します。
 - b. (オプション) [タグを追加 – オプション] で、リソースに関連付けられているタグを追加します。
 - c. [リビジョンを作成] を選択します。新しいリビジョンが作成されます。
6. 含めるアセットが所有する Amazon S3 バケットがローカルコンピュータのどちらに保存されているかに応じて、[ジョブ] セクションで [Amazon S3 からインポート] または [アップロード] (コンピュータからアップロードするため) を選択します。
 - a. 選択内容に応じて、プロンプトに従います。アセットをデータセットにインポートするジョブが開始されます。
 - b. ジョブが終了したら、[ジョブ] セクションの [状態] フィールドが [完了] に更新されます。
7. [リビジョンの概要] でリビジョンとそのアセットを確認してから、[確定] を選択します。

リビジョンが製品に発行され、サブスクライバーによる利用が可能になります。

ファイル配信タイプで発行された履歴データに対する推奨アプローチ

動的製品には、サブスクライバーがアクセスできる履歴的なコンテンツが含まれているものがあります。例えば、毎日の米国株式終値の 30 年分の履歴が製品に含まれている場合、サブスクライバーは毎日の動的更新に加えて、このデータにアクセスできることになります。

データの履歴的なレコードが含まれるこれらの種類の製品では、データセットの単一のリビジョンですべての履歴データを発行することがベストプラクティスです。リビジョン用のオプションのコメントを使用して、このリビジョンが特定の日付からのすべてのデータ履歴の単一アップロードであることを説明できます。

単一の履歴リビジョンに複数のオブジェクトの時系列が含まれている場合は、オブジェクト名にラベルを付けて、基盤となるデータの周期性を説明することを検討してください。例えば、それぞれに

1 週間分の履歴データが含まれる 200 個のファイルが単一の履歴リビジョンに含まれている場合、データ履歴が始まる週の日付で各ファイルを命名することができます。

アップデートに対する推奨アプローチ

データセットは多数の方法で動的に更新できます。以下は 3 つのアプローチ例です。これらはすべて更新ごとに新しいリビジョンを作成しますが、新しいリビジョンの内容が異なります。

- 更新ごとに最後のリビジョン以降に変更された項目のみが含まれる新しいリビジョンを使用する – 変更された項目だけが更新されるため、リビジョンのサイズが小さくなります。このアプローチは、更新の影響を受けるのがデータの小さなサブセットのみで、サブスクライバーが変更された項目にのみ着目するというデータセットに適しています。
- 更新ごとに更新されたデータが含まれる新しいリビジョンを使用する – 新しいリビジョンには、完全な更新済みファイルが含まれます。新しいリビジョンにはすべての項目が含まれており、これには最後のリビジョン以降変更されていないものも含まれます。このアプローチは、データの 1 つの up-to-date ファイルを維持したいサブスクライバーにとって便利です。サブスクライバーは、最新リビジョンのアセット (1 つ、または複数) を同じ宛先にエクスポートし、以前のファイル (1 つ、または複数) を上書きします。
- 更新ごとに完全な履歴と更新されたデータが含まれる新しいリビジョンを使用する – 新しいリビジョンにはデータの完全な履歴が含まれており、これにはデータの最新状態と以前のリビジョンの履歴が含まれます。このアプローチは、ストレージ負荷が高くなります。これは、サブスクライバーが、存在する可能性がある過去の修正や調整を含めたデータの履歴の最新の全体像に関心を持っているというデータセットに適しています。このアプローチでは、各リビジョンが自立しており、以前のリビジョンとの依存関係がないデータセット履歴の全貌を提供します。

で製品の公開を解除する AWS Data Exchange

製品の公開後は、その製品の可視性設定に基づいて、すべてのユーザーが製品を検索してサブスクライブすることができます。製品は、以下の結果を達成したい場合に発行解除することができます。

- [で新製品を公開する AWS Data Exchange](#) 演習で作成した製品を削除する。
- リソースをクリーンアップする。
- で公開されている製品から製品を削除します AWS Data Exchange。
- サブスクライバーが製品を自動更新しないようにする。

製品を発行解除するときは、以下の点に留意してください。

- 製品はいつでも発行解除できます。
- 製品の公開を解除すると、AWS Data Exchange カタログやに表示されなくなります AWS Marketplace。
- アクティブなサブスクリプションを持つサブスクライバーは、そのサブスクリプションの期限が切れるまでデータ製品へのアクセス権を保持します。
- 製品を未公開にした後で期限が切れたアクティブなサブスクリプションは、サブスクライバーが自動更新を有効にしても更新されません。
- 既存のサブスクライバーは、サブスクリプションの有効期限が切れるまで引き続き製品の詳細を表示できます。

製品を発行解除する

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [製品] を選択します。
3. [製品] で、削除する製品を選択します。ステータスが [発行済み] であることを確認してください。
4. [製品の概要] で [発行解除] を選択し、製品を発行解除する手順を実行します。

Important

この操作は元に戻すことができません。

これらのステップが完了すると、製品のステータスが [発行解除済み] になります。発行解除した製品を再度発行することはできませんが、同じデータセット、製品の詳細、およびオファーの詳細が設定された新しい製品 (新しい製品 ID を使用) を作成できます。

でのリビジョンの削除 AWS Data Exchange

プロバイダーは、コンソールまたはを使用して、リビジョンへのサブスクライバーアクセスを取り消し、リビジョンのアセットを削除できます AWS Data Exchange API。詳細については、「[でのリビジョンの取り消し AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

リビジョンは、確定後、製品に追加する前に編集または削除できます。詳細については、以下の各トピックを参照してください。

- [リビジョンを編集する](#)

- [リビジョンを削除する](#)

でのリビジョンの取り消し AWS Data Exchange

プロバイダーは、特定のリビジョンへのサブスクライバーのアクセスをいつでも取り消すことができます。通常、このアクションはコンプライアンス上の理由からプロバイダーが行います。リビジョンを取り消しても、原資産は削除されません。リビジョンを取り消すと、すべてのサブスクライバーは、リビジョンが取り消されたことを知らせる Amazon EventBridge (以前の CloudWatch イベント) 通知を受け取ります。その後、サブスクライバーは AWS Data Exchange コンソールでリビジョンが取り消された理由を表示できます。利用者は取り消されたリビジョン内のデータをエクスポートしたりクエリしたりすることはできません。

リビジョンを取り消すには、独自のIAMポリシーを管理するプロバイダーが新しいアクション `dataexchange:RevokeRevision` としてを追加する必要があります。[AWS Data Exchange 管理ポリシー](#) を使用するプロバイダーは、変更を加える必要はありません。

リビジョンが取り消されたら、コンソールまたは AWS Data Exchange DeleteAsset API オペレーションを使用してリビジョンのアセットを削除できます。

トピック

- [リビジョンの取り消し \(AWS CLI\)](#)
- [プロバイダーとしての1つのリビジョンを取り消す \(コンソール\)](#)
- [プロバイダーとしての複数のリビジョンを取り消す \(コンソール\)](#)
- [プロバイダーとしての取り消しの理由の編集 \(コンソール\)](#)
- [サブスクライバーとして取り消し済みリビジョンを表示する \(コンソール\)](#)

リビジョンの取り消し (AWS CLI)

リビジョンを取り消すには (AWS CLI)

1. `revoke-revision` コマンドを使用して、リビジョンを取り消す。

```
$ aws dataexchange revoke-revision \  
--data-set-id $DATA_SET_ID \  
--revision-id $REVISION_ID \  
--comment 'Revoking Revision Example'
```

```
{
  "Id": "ab7859881EXAMPLEdd3e8a4b88fc6a8d",
  "Arn": "arn:aws:dataexchange:us-east-1:427362365172:data-sets/$DATA_SET_ID/
revisions/$REVISION_ID",
  "Comment": "Revoking Revision Example",
  "CreatedAt": "2022-03-08T18:54:20.746Z",
  "UpdatedAt": "2022-03-09T20:28:53.105Z",
  "DataSetId": "24d30f8446a878237c35d011e7b22d0b",
  "Finalized": true,
  "Revoked": true,
  "RevokedAt": "2022-03-09T20:28:53.105Z",
  "RevocationComment": "revoking revision example"
}
```

2. リビジョンが取り消されたら、AWS Data Exchange DeleteAssetAPIオペレーションを使用してリビジョンのアセットを削除できます。

プロバイダーとしての1つのリビジョンを取り消す (コンソール)

プロバイダーとしてのリビジョンを取り消す (コンソール)

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [所有データセット] を選択します。
3. [所有データセット] で、取り消すリビジョンがあるデータセットを選択します。
4. [リビジョン] タブの [リビジョン] でリビジョンを選択します。
5. リビジョンページの [リビジョン概要] の [アクション] で、[取り消す] を選択します。
6. 「リビジョンを取り消す」ダイアログボックスに、リビジョンを取り消す理由の簡単な説明を入力します。サブスクライバーにはこの説明が表示されます。
7. [取り消す] を選択します。

リビジョンのステータスは [取り消し済み] に設定されます。

Warning

これで、リビジョンとそのアセットのすべてが取り消されます。利用者は取り消しの理由を確認できますが、アセットにアクセスしたりエクスポートしたりすることはできません。この操作は元に戻すことができません。

8. リビジョンが取り消されたら、リビジョンページに移動し、「インポートされたアセット」テーブルで削除するアセットを選択し、「削除」を選択することで、リビジョンのアセットを削除できます。

リビジョンが取り消された理由を編集するには、[プロバイダーとしての取り消しの理由の編集 \(コンソール\)](#) を参照してください。

プロバイダーとしての複数のリビジョンを取り消す (コンソール)

プロバイダーとしての複数のリビジョンを取り消すには (コンソール)

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [所有データセット] を選択します。
3. [所有データセット] で、取り消すリビジョンがあるデータセットを選択します。
4. [リビジョン] タブで、10 個までリビジョンを選択します。
5. [取り消す] を選択します。
6. 「{x} 件のリビジョンを取り消す」ダイアログボックスに、リビジョンを取り消す理由の簡単な説明を入力します。サブスクライバーにはこの説明が表示されます。次に、[取り消す] を選択します。

リビジョンのステータスは [取り消し済み] に設定されます。

Warning

これにより、リビジョンとすべてのアセットが取り消されます。利用者は取り消しの理由を確認できますが、アセットにアクセスしたりエクスポートしたりすることはできません。この操作は元に戻すことができません。

7. リビジョンが取り消されたら、リビジョンページに移動し、「インポートされたアセット」テーブルで削除するアセットを選択し、「削除」を選択することで、リビジョンのアセットを削除できます。

リビジョンが取り消された理由を編集するには、[プロバイダーとしての取り消しの理由の編集 \(コンソール\)](#) を参照してください。

プロバイダーとしての取り消しの理由の編集 (コンソール)

プロバイダーは、リビジョンが取り消された後に取り消しの理由を編集できます。

プロバイダーとして取り消しリビジョンを編集する (コンソール)

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データ製品を発行] で [所有データセット] を選択します。
3. [所有データセット] で、取り消したリビジョンがあるデータセットを選択します。
4. [リビジョン] タブで、取り消したリビジョンを選択します。
5. リビジョンページで [取り消しの理由を編集] を選択します。
6. 「取り消しリビジョンを編集」ダイアログボックスに、リビジョンを取り消す理由の簡単な説明を入力します。
7. [保存] を選択します。

リビジョンのステータスが [取り消し済み] に設定されます。

更新された取り消しの理由はリビジョンページに表示されます。

サブスクライバーとして取り消し済みリビジョンを表示する (コンソール)

サブスクライバーとして取り消し済みリビジョンを表示する (コンソール)

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [マイサブスクリプション] で [権限を持つデータ] を選択します。
3. 「製品」で製品を選択し、その製品の下にあるデータセットを展開すると、リビジョンのリストが表示されます。
4. データセットページの「リビジョン」タブに、リビジョンのステータス (発行済みまたは取り消し済み) が表示されます。
5. リビジョンを選んでください。
6. リビジョンの詳細ページの上部にリビジョンの理由が表示されます。

のプロバイダーのサブスクリプション検証 AWS Data Exchange

プロバイダーとして、新しい公開製品を作成するときに、「新しい製品を発行」ページの「パブリックオファーを追加」セクションでサブスクリプション検証を有効にするオプションがあります。

サブスクリプション認証では、潜在的なサブスクライバーの身元を確認し、そのサブスクライバーに製品の使用を承認することができます。製品に対するサブスクリプションリクエストの承認は、制限や規制の対象となる製品がある場合や、アクセスを制限したい製品がある場合に役立ちます。

確認オプションが有効になっていない場合、サブスクリプション者の ID にアクセスすることはできません。

検証オプションをオンにすると、見込みサブスクライバーは、サブスクライブする前に、自分が誰であるか、データをどのように扱うつもりかについてフォームに記入する必要があります。

フォームでは、以下の情報が必要になります。

- 見込みサブスクライバーの連絡先詳細 (連絡先名、会社名、E メールアドレスなど)
- 見込みサブスクライバーが想定しているユースケース
- 見込みサブスクライバーの AWS アカウント ID

Important

サブスクライバーは各フィールドに情報を入力する必要がありますが、情報を確認または検証 AWS Data Exchange しません。サブスクライバーが提供する情報のレビューと検証については、プロバイダーが単独で責任を負います。

製品のサブスクリプション検証を有効にする方法の詳細については、[で新製品を公開する AWS Data Exchange](#) を参照してください。

製品のサブスクリプション検証を有効にすると、すべての製品のサブスクリプション検証リクエストをすべて表示、承認、または拒否できます。AWS Data Exchange コンソールでデータを発行するの「サブスクリプション検証」ページを使用します。詳細については、「[でサブスクリプション検証のリクエストを承認または拒否する AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

Note

サブスクリプション検証は、非公開の個人情報を含む拡張プロバイダープログラム (EPP) プロバイダーのすべてのパブリック製品に対して自動的に有効になります。各サブスクリプションリクエストは、その ID を使用して一意に識別されます。ID は、プロバイダーとサブスクライバーの両方に表示されます。サブスクリプションリクエスト ID は、サブスクライバーとの通信で使用できます。

サブスクライバーがリクエストを行った後で製品のオファー規約が変更された場合、そのサブスクライバーの条件には、更新された条件ではなく、リクエストを行った時点での条件が反映されます。条件に対する変更の例には、料金、返金ポリシー、またはデータサブスクリプション契約などがあります。リクエストの送信後に製品オファー条件を変更した場合、AWS Data Exchange コンソールの承認ペインにメッセージが表示され、現在の条件と、リクエストが行われた時点の条件に違いがあることを示します。

AWS Data Exchange コンソールはリクエストの履歴を保持します。サブスクライバーの連絡先情報と個人を特定できる情報 () を削除するタイミングは、ユーザーが制御します PII。リクエスト履歴の表示方法の詳細については、[でのサブスクリプション検証リクエストの表示 AWS Data Exchange](#) を参照してください。

製品の公開後にサブスクリプション検証オプションを編集することもできます。詳細については、「[でのサブスクリプション検証リクエストの編集 AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

以下のトピックでは、プロバイダーのサブスクリプション検証に関する詳細について説明します。

トピック

- [でのサブスクリプション検証に関する E メール通知 AWS Data Exchange](#)
- [でのサブスクリプション検証リクエストの表示 AWS Data Exchange](#)
- [でのサブスクリプション検証リクエストの編集 AWS Data Exchange](#)
- [でサブスクリプション検証のリクエストを承認または拒否する AWS Data Exchange](#)

でのサブスクリプション検証に関する E メール通知 AWS Data Exchange

AWS Data Exchange サブスクリプションリクエストを受け取ったとき、またはステータスがキャンセルまたは期限切れになったときに通知する E AWS アカウント メールメッセージが E メールアド

レスに送信されます。サブスクリプションリクエストのステータス変更のほとんどは E メールで通知されますが、これらの E メールメッセージの送信はベストエフォートベースで行われます。

Note

プロバイダー自身が開始したサブスクリプションリクエストのステータス変更 (サブスクリプションの承認時など) に関する E メール通知は送信されません。

でのサブスクリプション検証リクエストの表示 AWS Data Exchange

サブスクリプション検証を含むパブリックオファーを に公開すると AWS Data Exchange、サブスクリプション検証リクエストを表示できます。

サブスクリプション検証リクエストを表示するには

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [サブスクリプション検証] を選択します。
3. サブスクリプション検証から：
 - a. 保留中のリクエストをすべて表示するには、[保留中のリクエストを表示] を選択します。
 - b. [履歴を表示] を選択すると、他のすべてのリクエストが表示されます。

でのサブスクリプション検証リクエストの編集 AWS Data Exchange

公開後に、AWS Data Exchange 製品のパブリックオファーのサブスクリプション検証を要求できます。

サブスクリプション検証リクエストを編集するには

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [製品] を選択します。
3. 「パブリックオファー」から「編集」を選択します。
4. 「サブスクリプション検証」まで下にスクロールし、「この製品のパブリックオファーでサブスクリプション検証を必須にしますか？」という質問が表示されます。[はい] または [いいえ] を選択します。

5. [Update] (更新) を選択します。

⚠ Important

リクエスト、特に個人用/無料のメールアドレスからのリクエストの信憑性と正当性を検証する責任はお客様にあります。各ユースケースが の条件に準拠していることを検証して確認する必要がありますDSA。

でサブスクリプション検証のリクエストを承認または拒否する AWS Data Exchange

のサブスクリプションリクエストを受け取ったら AWS Data Exchange、承認または拒否するまでに 45 日間かかります。その期間内にリクエストを承認しないと、リクエストの有効期限が切れます。見込みサブスクライバーは、拒否されたリクエストをいつでも、何度でも再送信できます。

⚠ Important

サブスクリプション検証を通じて収集するサブスクライバー情報は、AWS Marketplace 利用規約に従って使用する必要があります。

リクエストの承認

サブスクリプションリクエストを承認する

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [サブスクリプション検証] を選択します。
3. [サブスクリプション検証] で [保留中のリクエストを表示する] を選択します。
4. [承認] を選択します。

を含む製品のリクエストの承認 APIs

を含む製品のサブスクリプションリクエストを承認できますAPIs。特定のサブスクリプションの各 AWS Data Exchange リクエストのヘッダーに送信される APIs を含む製品にカスタムメタデータを追加することもできます。カスタムメタデータはサブスクライバーには表示されません。

を含む製品のサブスクリプションリクエストを承認するには APIs

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [サブスクリプション検証] を選択します。
3. [サブスクリプション検証] で [保留中のリクエストを表示] を選択します。
4. 承認 を選択し、カスタムAPIメタデータを追加します。
5. モーダルで、キーと値のペアを入力し、承認を選択してカスタムAPIメタデータを追加します。

 Note

必要に応じて、[追加] を選択してから追加のキーバリューペアを入力することで、キーバリューペアを追加できます。

6. [サブスクリプション検証] ページが再度表示されます。サブスクリプションリクエストを正常に承認したことを知らせるメッセージが表示されます。
7. カスタムメタデータを表示するには、製品 に移動APIsし、 を使用して製品を選択し、サブスクリプションタブを選択します。
8. [Public and custom subscriptions] (パブリックサブスクリプションとカスタムサブスクリプション) では、以下を実行できます。
 - a. サブスクリプションを選択し、[View custom metadata] (カスタムメタデータを表示) を選択して、追加したキーバリューペアを確認する。
 - b. サブスクリプションを選択し、[(カスタムメタデータを編集] を選択して、このサブスクリプションのキーバリューペアを編集、追加、または削除する。

 Note

3 つ以上のキーと値のペアを追加すると、パブリックサブスクリプションとカスタムサブスクリプションテーブルの列のカスタムメタデータAPIsに最初のキーと値のペアが表示され、最初のキーと値のペアの下にキーと値のペアの数が表示されます。例えば、**[keyExample-valueExample + 2 個]** などです。

リクエストの拒否

サブスクリプションリクエストを拒否する

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [サブスクリプション検証] を選択します。
3. [サブスクリプション検証] で [保留中のリクエストを表示] を選択します。
4. [拒否] を選択します。

でのプロバイダー生成通知 AWS Data Exchange

のプロバイダーとして AWS Data Exchange、プロバイダーが生成した通知を送信して、データセットに関連する重要なイベントをサブスクライバーに通知できます。購読者に体系的に連絡を取り、利用資格のあるデータ関連のイベントをプロバイダー間で一貫した方法で処理できるように支援できます。

プロバイダーが生成する通知を使用して、購読者を支援するために次のことを行います。

- AWS Data Exchange コンソールまたは [AWS SDK](#) を使用して、データの更新、遅延、スキーマの変更、廃止の通知を送信します。
- 購読者がフォローすべきコメントや期待されるアクションを含めてください。

プロバイダーが生成した通知を購読者に送信するには、次の手順に従います。

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) を開いてサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインで、[通知] を選択します。
3. ドロップダウンメニューから [通知のタイプ] を選択します。通知のタイプには以下が含まれます。
 - データ更新 — データソースが更新されました。
 - データ遅延 — データソースが期待どおりに更新されていません。
 - スキーマの変更 — データソースに構造的な変更が含まれる。
 - 非推奨 — データソースは更新されません。

- ドロップダウンメニューから影響を受けるデータセットを選択し、サブスクライバーアクションの日付、時刻、およびリストの通知の詳細を表示します。また、このイベントの影響を受ける対象を特定するためのロケーションメタデータも提供できます。
- [通知をプレビュー] を選択し、通知を公開します。

AWS Data Exchange のプロバイダー財務 AWS Marketplace

以下のトピックでは、を介したデータの提供に関する財務情報について説明します AWS Data Exchange。

AWS Data Exchange は と統合されています AWS Marketplace。AWS Data Exchange プロバイダーとして登録する場合は、まず AWS Marketplace 販売者として登録する必要があります。詳細については、「[ステップ 2: プロバイダーになるための登録を行う](#)」を参照してください。

AWS Data Exchange プロバイダーとして、販売者レポートや AWS Marketplace Commerce Analytics サービスなどの AWS Marketplace 機能を利用できます。詳細については、「[セラーレポートとデータフィード](#)」を参照してください。

支払い

AWS は、販売者として AWS アカウント 登録された に関連付けられた銀行口座に直接、AWS Marketplace サービス料金を差し引いた金額を毎月支払います。支払いは、毎月の月初ではなく、アカウントが作成されたときに基づいて、毎月随時払い込まれます。資金が払い込まれるのは、サブスクライバーからの集金後のみです。詳細については、「AWS Marketplace 販売者ガイド」の「[支払い](#)」を参照してください。

米国の消費税と使用税

AWS Marketplace Tax Calculation Service を使用すると、米国の売上を計算して収集し、既存製品と新製品の税金を使用できます。一部の州では、これらの州に拠点を置くサブスクライバーに対して、お客様の製品の課税対象売上に起因する適用される売上税を徴収および納付することが法律で AWS Marketplace 義務付けられているため、税金計算サービスの対象となりません。サービスを使用するには、プロバイダープロファイルの税金ネクサスを設定して、製品税コードを製品に割り当ててください。

税金ネクサスを設定する

- [AWS Marketplace 管理ポータル](#) を開きます。[設定] タブで、該当する税金ネクサスを設定します。

詳細については、「AWS Marketplace 販売者ガイド」の「[販売者登録プロセス](#)」を参照してください。

AWS Marketplace 販売者レポート

AWS Data Exchange プロバイダーとして、製品のサブスクリプションアクティビティの詳細を記したレポートを受け取ります。毎日および毎月のデータを追跡するために、複数のレポートを利用できます。これらのレポートには、オファーに関するサブスクリプションアクティビティ、サブスクライバーから受け取った支払い、およびプロバイダーに払い込まれる金額に関する情報が含まれています。支払いは、AWS 顧客から支払いを受け取るまで行われません。詳細については、「AWS Marketplace 販売者ガイド」の「[販売者レポート](#)」を参照してください。

AWS Data Exchange プライベートオファーに支払いスケジューラを使用するプロバイダーは、このデータを月次レポートで確認できます。詳細については、「AWS Marketplace 販売者ガイド」の「[月別請求済み収益レポート](#)」を参照してください。

サブスクライバーの返金リクエスト

プロバイダーは、製品の返金ポリシーを管理します。このポリシーは、製品の作成時に指定する必要があります。返金を提供する AWS Data Exchange 必要はありません。返金のリクエストはすべて、お客様に代わって AWS 処理する前に承認する必要があります。

[返金承認フォーム](#)を に送信します AWS Support。彼らはあなたのリクエストを処理し、サブスクライバーに返金を行います。お客様に代わって AWS 処理されたすべての返金は、毎月請求される収益レポートで確認できます。

のジョブ AWS Data Exchange

AWS Data Exchange ジョブは非同期のインポートまたはエクスポートオペレーションです。

プロバイダーは、製品に発行するデータセットを作成して管理できます。Amazon Simple Storage Service (Amazon S3) または署名付き にアセットまたはリビジョンをダウンロード (エクスポート) またはコピーできますURL。さらに、プロバイダーは Amazon API Gateway からアセットをインポートAPIすることも、Amazon Redshift データセットからアセットをインポートすることもできます。

サブスクライバーは、サブスクリプションを通じて権限を持っているデータセットを表示し、それらにアクセスすることができます。API オペレーションを使用して、権限のあるデータセットをダウンロード (エクスポート) または Amazon S3 にコピーし、さまざまな AWS 分析および機械学習サービスで使用できます。

アセットを作成またはコピーしたり、ジョブを通じてリビジョンをコピーしたりするには、AWS Command Line Interface (AWS CLI) AWS Management Console、独自のRESTアプリケーション、または のいずれかを使用できます AWS SDKs。

ジョブは、作成されてから 90 日後に削除されます。

トピック

- [ジョブプロパティ](#)
- [AWS リージョン および ジョブ](#)
- [へのアセットのインポート AWS Data Exchange](#)
- [からのアセットのエクスポート AWS Data Exchange](#)
- [からリビジョンをエクスポートする AWS Data Exchange](#)

ジョブプロパティ

ジョブには以下のプロパティがあります。

- ジョブ ID – ジョブの作成時に生成された ID で、ジョブを一意に識別します。
- ジョブタイプ – 以下のジョブタイプがサポートされています。
 - Amazon S3 からのインポート

- AWS Lake Formation データ権限のインポート (プレビュー)
- 署名付き からインポートする URL
- Amazon API Gateway からのインポート API
- Amazon Redshift AWS Data Exchange のデータ共有からのインポート
- Amazon S3 データアクセスのインポート
- Amazon S3 へのエクスポート
- 署名付き にエクスポートする URL
- Amazon リソースネーム (ARN) – AWS リソースの一意の識別子。
- ジョブの状態 – ジョブの状態は、WAITING、IN_PROGRESS、COMPLETED、CANCELLED、ERROR、または TIMED_OUT です。ジョブが作成されると、そのジョブは開始されるまで WAITING 状態になります。
- ジョブの詳細 – エクスポート先の詳細やインポートソースの詳細など、ジョブが実行する操作の詳細です。

Example ジョブリソース

```
{
  "Arn": "arn:aws:dataexchange:us-east-1:123456789012:jobs/6cEXAMPLE818f7c7a23b3d0EXAMPLE1c",
  "Id": "6cEXAMPLE818f7c7a23b3d0EXAMPLE1c",
  "State": "COMPLETED",
  "Type": "IMPORT_ASSETS_FROM_S3",
  "CreatedAt": "2019-10-11T14:12:24.640Z",
  "UpdatedAt": "2019-10-11T14:13:00.804Z",
  "Details": {
    "ImportAssetsFromS3": {
      "AssetSources": [
        {
          "Bucket": "amzn-s3-demo-bucket",
          "Key": "MyKey"
        }
      ],
      "DataSetId": "14EXAMPLE4460dc9b005a0dEXAMPLE2f",
      "RevisionId": "e5EXAMPLE224f879066f999EXAMPLE42"
    }
  }
}
```

AWS リージョン および ジョブ

データセットのリージョン AWS リージョン とは異なる にある Amazon S3 バケットとの間でアセットをインポートまたはエクスポートする場合、Amazon S3 データ転送料金ポリシーに従って、データ転送コストが に請求 AWS アカウント されます。

署名付き にアセットをエクスポートする場合URL、Amazon S3 [の料金ポリシー に従ってAmazon S3](#) からインターネットへのデータ転送コストが に課金 AWS アカウント されます。

AWS Data Exchange for Files データセットのサブスクリプションが終了しても、既にエクスポートしたファイルへのアクセスは保持されます。データサブスクリプション契約を確認して、サブスクリプションの終了時にエクスポートされたデータを削除することが契約で義務付けられているかどうかを確認してください。

へのアセットのインポート AWS Data Exchange

アセットは、以下の方法でリージョンにインポートできます。

トピック

- [S3 バケットからのアセットのインポート](#)
- [署名付き からのアセットのインポート URL](#)
- [Amazon API Gateway からのアセットのインポート API](#)
- [Amazon Redshift AWS Data Exchange のデータ共有からのアセットのインポート](#)
- [からのアセットのインポート AWS Lake Formation \(プレビュー\)](#)

S3 バケットからのアセットのインポート

Amazon S3 から にアセットをインポートする場合 AWS Data Exchange、使用する AWS Identity and Access Management (IAM) アクセス許可には、AWS Data Exchange サービス S3 バケットに書き込み、アセットが保存されている S3 バケットから読み取る機能が含まれている必要があります。所有権にかかわらず、アクセス許可を持っている S3 バケットなら、どのバケットからでもインポートを実行できます。詳細については、「[Amazon S3 許可](#)」を参照してください。

単一のジョブで最大 100 個のアセットをインポートできます。

トピック

- [S3 バケットからのアセットのインポート \(AWS SDKs \)](#)
- [S3 バケットからのアセットのインポート \(コンソール\)](#)

S3 バケットからのアセットのインポート (AWS SDKs)

Amazon S3 バケットからアセットをインポートするには (AWS SDKs)

1. IMPORT_ASSETS_FROM_S3 タイプの CreateJob リクエストを作成します。
2. リクエストには以下を含めます。
 - AssetSources
 - Bucket
 - Key
 - DataSetID
 - RevisionID
3. ステップ 1 で返された JobId を必要とする StartJob 操作で CreateJob リクエストを開始します。
4. (オプション) アセットの作成後にアセットの name プロパティを更新します。

S3 バケットからのアセットのインポート (コンソール)

S3 バケットからアセットをインポートする (コンソール)

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [所有データセット] を選択します。
3. [所有データセット] で、更新するリビジョンがあるデータセットを選択します。
4. [リビジョン] タブで [リビジョンを作成] を選択し、[リビジョンを作成] ページを開きます。
 - a. [リビジョンの設定] で、リビジョンの目的を説明するリビジョンのオプションのコメントを入力します。
 - b. [タグを追加 – オプション] で、リソースに関連付けられているタグを追加します。
 - c. [作成] を選択します。

新しいリビジョンが作成されます。

5. [ジョブ] セクションで [Amazon S3 からインポート] を選択します。

6. [Amazon S3 からインポート] ウィンドウのプロンプトに従ってから、[アセットをインポート] を選択します。

アセットをデータセットにインポートするジョブが開始されます。ジョブが終了したら、[ジョブ] セクションの [状態] フィールドが [完了] に更新されます。

署名付き からのアセットのインポート URL

署名付きを使用してURLs、Amazon S3 に保存されていないアセットをインポートできます。

トピック

- [署名付き URL \(AWS SDKs\) からのアセットのインポート](#)
- [署名付き URL \(コンソール\) からのアセットのインポート](#)

署名付き URL (AWS SDKs) からのアセットのインポート

署名付き URL (AWS SDKs) からアセットをインポートするには

1. IMPORT_ASSET_FROM_SIGNED_URL タイプの CreateJob リクエストを作成します。
2. リクエストには以下を含めます。
 - AssetName
 - DataSetID
 - Md5Hash
 - RevisionID
3. ステップ 1 で返された JobId を必要とする StartJob 操作で CreateJob リクエストを開始します。
4. (オプション) アセットの作成後にアセットの name プロパティを更新します。
5. レスポンスの詳細には、ファイルをインポートするために使用できる SignedUrl が含まれています。

Note

署名は、作成から 1 分後にURL期限切れになります。

署名付き URL (コンソール) からのアセットのインポート

署名付き URL (コンソール) からアセットをインポートするには

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [所有データセット] を選択します。
3. [所有データセット] で、更新するアセットがあるデータセットを選択します。
4. [リビジョン] タブで [リビジョンを作成] を選択し、[リビジョンを作成] ページを開きます。
 - a. [リビジョンの設定] で、リビジョンの目的を説明するリビジョンのオプションのコメントを入力します。
 - b. [タグを追加 - オプション] で、リソースに関連付けられているタグを追加します。
 - c. [作成] を選択します。

新しいリビジョンが作成されます。

5. [ジョブ] セクションで [アップロード] を選択します。
6. アップロードウィンドウのプロンプトに従ってから、[開く] を選択します。

アセットをデータセットにインポートするジョブが開始されます。ジョブが終了したら、[ジョブ] セクションの [状態] フィールドが [完了] に更新されます。

Amazon API Gateway からのアセットのインポート API

AWS Data Exchange サブスクライバーは、IAM認証情報と AWS SDKs を使用して、データプロバイダーAPIsから を呼び出すことができます。は、認証とサブスクリプションのエンタイトルメントを処理するAPIsことで、へのアクセス AWS Data Exchange を管理します。

Amazon API Gateway からのAPIアセットのインポート API (AWS SDKs)

Note

現在、SendApiAssetオペレーションは、次の ではサポートされていませんSDKs。

- AWS SDK for .NET
- AWS SDK for C++
- AWS SDK for Java 2.x

Amazon API Gateway からアセットをインポートするには API (AWS SDKs)

1. IMPORT_ASSET_FROM_API_GATEWAY_API タイプの CreateJob リクエストを作成します。
2. リクエストには以下を含めます。
 - ApiID
 - DataSetID
 - ProtocolType
 - RevisionID
 - Stage
3. ステップ 1 で返された JobId を必要とする StartJob 操作で CreateJob リクエストを開始します。
4. (オプション) GetJob 操作をポーリングして、ジョブが完了するのを待ちます。
5. (オプション) アセットの作成後にアセットの name プロパティを更新します。

Amazon API Gateway からのAPIアセットのインポート API (コンソール)

Amazon API Gateway からアセットをインポートするには API (コンソール)

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [所有データセット] を選択します。
3. [所有データセット] で、更新するアセットがあるデータセットを選択します。
4. [リビジョン] タブで [リビジョンを作成] を選択し、[リビジョンを作成] ページを開きます。
 - a. [リビジョンの設定] で、リビジョンの目的を説明するリビジョンのオプションのコメントを入力します。
 - b. [タグを追加 - オプション] で、リソースに関連付けられているタグを追加します。
 - c. [作成] を選択します。

新しいリビジョンが作成されます。

5. API アセットセクションで、APIステージの追加 を選択します。
6. API ステージの追加ページで、Amazon API Gateway API と、AWS アカウント または別のアカウントからステージ名を選択します。
7. サブスクライバーAPIのドキュメントの場合 :

- a. サブスクライバーが理解できる明確で簡潔な名前にAPI名前を更新します。
 - b. Open API3.0 仕様を文書化するには、フィールドに仕様を入力するか、.JSON ファイル からインポート を選択して仕様をインポートするか、Amazon API Gateway からインポート を選択します。
8. API ステージの追加 を選択します。

ジョブが開始され、APIアセットがデータセットにインポートされます。ジョブが終了したら、[ジョブ] セクションの [状態] フィールドが [完了] に更新されます。

Amazon Redshift AWS Data Exchange のデータ共有からのアセットのインポート

Amazon Redshift AWS Data Exchange のデータ共有を使用してアセットをインポートすると、サブスクライブ後にサードパーティーの Amazon Redshift テーブルのクエリ、分析、運用を開始できます。

Amazon Redshift AWS Data Exchange のデータ共有からのアセットのインポート (AWS SDKs)

Amazon Redshift AWS Data Exchange のデータ共有からアセットをインポートするには (AWS SDKs)

1. `IMPORT_ASSETS_FROM_REDSHIFT_DATA_SHARES` タイプの `CreateJob` リクエストを作成します。
2. リクエストには以下を含めます。
 - `AssetSources`
 - `DataShareArn`
 - `DataSetID`
 - `RevisionID`
3. ステップ 1 で返された `JobId` を必要とする `StartJob` 操作で `CreateJob` リクエストを開始します。
4. (オプション) `GetJob` 操作をポーリングして、ジョブが完了するのを待ちます。
5. (オプション) アセットの作成後にアセットの `name` プロパティを更新します。

Amazon Redshift AWS Data Exchange のデータ共有からのアセットのインポート (コンソール)

ADE データ共有からアセットをインポートするには (Amazon Redshift コンソールの場合)

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [所有データセット] を選択します。
3. [所有データセット] で、更新するアセットがあるデータセットを選択します。
4. [リビジョン] タブで [リビジョンを作成] を選択し、[リビジョンを作成] ページを開きます。
 - a. [リビジョンの設定] で、リビジョンの目的を説明するリビジョンのオプションのコメントを入力します。
 - b. [タグを追加 - オプション] で、リソースに関連付けられているタグを追加します。
 - c. [作成] を選択します。

新しいリビジョンが作成されます。

5. [AWS Data Exchange datashares for Amazon Redshift] (Amazon Redshift のデータ共有) で、[Add datashares] (データ共有を追加) を選択します。
6. リビジョンに AWS Data Exchange データ共有を追加するページで、追加するデータ共有を選択します。
7. [Add datashare(s)] (データ共有を追加) を選択します。

アセットをデータセットにインポートするジョブが開始されます。ジョブが終了したら、[ジョブ] セクションの [状態] フィールドが [完了] に更新されます。

からのアセットのインポート AWS Lake Formation (プレビュー)

から AWS Lake Formation にアセットをインポートする場合 AWS Data Exchange、使用する IAM アクセス許可には次の機能が含まれている必要があります。

- Lake Formation の権限への書き込み、付与、取り消し
- テーブル、データベース、およびカタログのリソース共有の作成
- Lake Formation 以降のリソース共有のリソース共有の更新、削除、関連付け、関連付けの解除

必須および推奨される IAM アクセス許可の詳細については、「」を参照してください [the section called “アイデンティティとアクセス権の管理”](#)。

(プレビュー) AWS Lake Formation からのアセットのインポート (AWS SDKs)

(プレビュー) AWS Lake Formation AWS (SDKs) からアセットをインポートするには

1. Import_Assets_From_Lake_Formation_Tag_Policy タイプの CreateJob リクエストを作成します。
2. リクエストには以下を含めます。
 - AssetSources
 - CatalogId
 - Database
 - Expression
 - TagKey
 - TagValues
 - Permissions
 - Table
 - Expression
 - TagKey
 - TagValues
 - Permissions
 - RoleArn
 - DataSetId
 - RevisionId
3. JobId を必要とする StartJob 操作で CreateJob リクエストを開始します。
4. (オプション)GetJob 操作をポーリングして、ジョブが完了するのを待ちます。
5. (オプション) アセットの作成後にアセットの name プロパティを更新します。

(プレビュー) AWS Lake Formation からのアセットのインポート (コンソール)

(プレビュー) AWS Lake Formation (コンソール) からアセットをインポートするには

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. ~~左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [所有データセット] を選択します。~~

3. [所有データセット] で、更新するリビジョンがあるデータセットを選択します。
4. [リビジョン] タブで [リビジョンを作成] を選択し、[リビジョンを作成] ページを開きます。
 - a. [リビジョンの設定] で、リビジョンの目的を説明するリビジョンのオプションのコメントを入力します。
 - b. [タグを追加 – オプション] で、リソースに関連付けられているタグを追加します。
 - c. [作成] を選択します。

新しいリビジョンが作成されます。

5. LLake Formation データ権限セクションでは、「LFタグを追加」を選択します。
6. 追加するキーと値を選択し、「LF タグを追加」を選択します。
 - (オプション) 「リソースをプレビュー」を選択すると、権限を付与している関連データカタログリソースが表示されます。
7. サービスアクセスで、ロールを選択してリソースを AWS Lake Formation にインポートします AWS Data Exchange。
8. 「Lake Formation データの作成」権限を選択します。

アセットをデータセットにインポートするジョブが開始されます。ジョブが終了したら、[ジョブ] セクションの [状態] フィールドが [完了] に更新されます。

からのアセットのエクスポート AWS Data Exchange

プロバイダーとサブスクライバーの両方が、製品の発行済みリビジョンからアセットをエクスポートできます。アセットをエクスポートする方法は2つあります。

トピック

- [S3 バケットへのアセットのエクスポート](#)
- [署名付きへのアセットのエクスポート URL](#)

S3 バケットへのアセットのエクスポート

アセットを Amazon S3 にエクスポートする場合、使用する IAM アクセス許可には、AWS Data Exchange サービス S3 バケットから読み取り、アセットが保存されている S3 バケットに書き込む機能が含まれている必要があります。所有権にかかわらず、アクセス許可を持っている S3 バケット

なら、どのバケットでもエクスポートを実行できます。詳細については、「[Amazon S3 許可](#)」を参照してください。

AWS Data Exchange は、データセットを Amazon S3 にエクスポートするときに設定可能な暗号化パラメータをサポートします。エクスポートされたオブジェクトに適用する Amazon S3 のサーバー側の暗号化設定は、エクスポートジョブの詳細で指定できます。Amazon S3-Managedキー (SSE-S3) でサーバー側の暗号化を使用するか、AWS Key Management Service (SSE-) に保存されている AWS KMS keys サーバー側の暗号化を使用するかを選択できます。詳細については、「Amazon Simple Storage Service ユーザーガイド」の「[サーバー側の暗号化を使用したデータの保護](#)」を参照してください。

Important

データを Amazon S3 にエクスポートするときは、Amazon S3 のセキュリティ機能を検討することをお勧めします。一般的なガイドラインとベストプラクティスの詳細については、Amazon Storage Service ユーザーガイドの [Amazon S3 のセキュリティのベストプラクティス](#) を参照してください。

Important

プロバイダーが 1996 年医療保険の相互運用性と説明責任に関する法律 (PHI) の対象となる保護対象医療情報 (HIPAA) を含む製品としてマークしている場合、HIPAA アカウントとして指定 AWS アカウント されていない限り AWS アカウント、製品のデータセットを にエクスポートすることはできません (にある AWS ビジネスアソシエイト補遺で定義) [AWS Artifact](#)。

単一のジョブで最大 100 個のアセットをエクスポートできます。

トピック

- [S3 バケットへのアセットのエクスポート \(AWS SDKs \)](#)
- [サブスクリイバーとしての S3 バケットへのアセットのエクスポート \(コンソール\)](#)
- [プロバイダーとしての S3 バケットへのアセットのエクスポート \(コンソール\)](#)

次の動画では、からアセットをエクスポートする方法について詳しく説明しています AWS Data Exchange。

S3 バケットへのアセットのエクスポート (AWS SDKs)

S3 バケットにアセットをエクスポートするには (AWS SDKs)

1. EXPORT_ASSETS_TO_S3 タイプの CreateJob リクエストを作成します。
2. リクエストには以下を含めます。
 - AssetDestinations
 - AssetID
 - Bucket
 - Key
 - DataSetID
 - Encryption
 - KmsKeyArn
 - Type
 - RevisionID
3. ステップ 1 で返された JobId を必要とする StartJob 操作で CreateJob リクエストを開始します。
4. (オプション) アセットの作成後にそれらの name プロパティを更新します。

Note

リビジョン全体の単一のジョブとしてのエクスポートについては、「[からリビジョンをエクスポートする AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

サブスクライバーとしての S3 バケットへのアセットのエクスポート (コンソール)

サブスクライバーとして S3 バケットにアセットをエクスポートする (コンソール)

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [マイサブスクリプション] で [権限を持つデータ] を選択します。
3. [権限を持つデータ] で、エクスポートするリビジョンがある製品を選択します。
4. [権限を持つデータセット] で、データセットを選択します。

5. [リビジョン] タブで、リビジョンを選択します。
6. [アセット] タブで、エクスポートするアセットの横にあるチェックボックスをオンにします。
7. [アクションをエクスポート] を選択してから、[選択したアセットを Amazon S3 にエクスポート] を選択します。
8. [Amazon S3 にエクスポート] ウィンドウのプロンプトに従ってから、[エクスポート] を選択します。

アセットをエクスポートするジョブが開始されます。ジョブが終了したら、[ジョブ] セクションの [状態] フィールドが [完了] に更新されます。

プロバイダーとしての S3 バケットへのアセットのエクスポート (コンソール)

プロバイダーとして S3 バケットにアセットをエクスポートする (コンソール)

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [所有データセット] を選択します。
3. [所有データセット] で、エクスポートするアセットがあるデータセットを選択します。
4. [製品] タブに移動して、データセットが公開済みの製品に関連付けられていることを確認します。
5. [リビジョン] タブで、リビジョンを選択します。
6. [インポートされたアセット] セクションで、アセット名の横にあるチェックボックスをオンにします。
7. [アクションをエクスポート] を選択してから、[選択したアセットを Amazon S3 にエクスポート] を選択します。
8. [Amazon S3 にエクスポート] ウィンドウのプロンプトに従ってから、[エクスポート] を選択します。

アセットをエクスポートするジョブが開始されます。ジョブが終了したら、[ジョブ] セクションの [状態] フィールドが [完了] に更新されます。

署名付き へのアセットのエクスポート URL

署名付きを使用してURLs、Amazon S3 に保存されていないアセットをエクスポートできます。

トピック

- [署名付き URL \(AWS SDKs\) へのアセットのエクスポート](#)
- [サブスクライバーURLとして署名された へのアセットのエクスポート \(コンソール\)](#)
- [プロバイダーURLとして署名された へのアセットのエクスポート \(コンソール\)](#)

署名付き URL (AWS SDKs) へのアセットのエクスポート

署名付きを使用してURLs、S3 バケット以外の宛先にアセットをエクスポートできます。

署名付き URL (AWS SDKs) にアセットをエクスポートするには

1. EXPORT_ASSET_TO_SIGNED_URL タイプの CreateJob リクエストを作成します。
2. リクエストには以下を含めます。
 - AssetID
 - DataSetID
 - RevisionID
3. ステップ 1 で返された JobId を必要とする StartJob 操作で CreateJob リクエストを開始します。
4. (オプション) アセットの作成後にアセットの name プロパティを更新します。
5. レスポンスの詳細には、ファイルをインポートするために使用できる SignedUrl が含まれています。

Note

署名は、作成から 1 分後にURL期限切れになります。

サブスクライバーURLとして署名された へのアセットのエクスポート (コンソール)

サブスクライバーURLとして署名された にアセットをエクスポートするには (コンソール)

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [マイサブスクリプション] で [権限を持つデータ] を選択します。
3. [権限を持つデータ] で、エクスポートするリビジョンがある製品を選択します。

4. [権限を持つデータセット] で、データセットを選択します。
5. [リビジョン] タブで、リビジョンを選択します。
6. [アセット] タブで、エクスポートするアセットの横にあるチェックボックスをオンにします。
7. [アクションをエクスポート] を選択してから、[選択したアセットをダウンロード] を選択します。

アセットをエクスポートするジョブが開始されます。ジョブが終了したら、[ジョブ] セクションの [状態] フィールドが [完了] に更新されます。

プロバイダーURLとして署名された へのアセットのエクスポート (コンソール)

プロバイダーURLとして署名された にアセットをエクスポートするには (コンソール)

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [所有データセット] を選択します。
3. [所有データセット] で、エクスポートするリビジョンがある製品を選択します。
4. [製品] タブに移動して、データセットが公開済みの製品に関連付けられていることを確認します。
5. [リビジョン] タブで、リビジョンを選択します。
6. [インポートされたアセット] セクションで、アセット名の横にあるチェックボックスをオンにします。
7. [アクションをエクスポート] を選択してから、[選択したアセットをダウンロード] を選択します。

アセットをエクスポートするジョブが開始されます。ジョブが終了したら、[ジョブ] セクションの [状態] フィールドが [完了] に更新されます。

からリビジョンをエクスポートする AWS Data Exchange

プロバイダーとサブスクライバーの両方が、アクセス許可を持つ S3 バケットにデータセットのリビジョンをエクスポートできます。

AWS Data Exchange はAmazon S3 にリビジョンをエクスポートするときに設定可能な暗号化パラメータをサポートします。エクスポートされたオブジェクトに適用する Amazon S3 のサーバー側の暗号化設定は、エクスポートジョブの詳細で指定できます。Amazon S3-Managedキー (SSE-S3) でサーバー側の暗号化を使用するか、(SSE-) に保存 AWS Key Management Service されているKMS

キーでサーバー側の暗号化を使用するかを選択できますKMS。詳細については、「Amazon Simple Storage Service デベロッパーガイド」の「[サーバー側の暗号化を使用したデータの保護](#)」を参照してください。

Important

プロバイダーが 1996 年医療保険の相互運用性と説明責任に関する法律 (PHI) の対象となる保護対象医療情報 (HIPAA) を含む製品としてマークしている場合、HIPAA アカウントとして AWS アカウント 指定 AWS アカウント されていない限り、製品のデータセットをにエクスポートすることはできません (にある AWS ビジネスアソシエイト補遺で定義) [AWS Artifact](#)。

トピック

- [S3 バケットへのリビジョンのエクスポート \(AWS SDKs \)](#)
- [プロバイダーとしての S3 バケットへのリビジョンのエクスポート \(コンソール\)](#)
- [サブスクライバーとしての S3 バケットへのリビジョンのエクスポート \(コンソール\)](#)
- [サブスクライバーとしての S3 バケットへのリビジョンの自動エクスポート](#)
- [リビジョンをエクスポートするときのキーパターン](#)

次の動画では、AWS Data Exchange (2:18 から) からアセットをエクスポートする方法について詳しく説明しています。

S3 バケットへのリビジョンのエクスポート (AWS SDKs)

S3 バケットにリビジョンをエクスポートするには (AWS SDKs)

1. EXPORT_REVISIONS_TO_S3 タイプの CreateJob リクエストを作成します。
2. リクエストには以下を含めます。
 - DataSetId
 - Encryption
 - KmsKeyArn
 - Type
 - RevisionDestinations
 - Bucket

- KeyPattern
 - RevisionId
3. ステップ 1 で返された JobId を必要とする StartJob 操作で CreateJob リクエストを開始します。
 4. 新しく作成されたアセットには、元の S3 オブジェクトのキーと同一の name プロパティがあります。Amazon S3 オブジェクトキーは、デフォルトでキーパターン `${Asset.Name}` に設定されます。

アセットの name プロパティは、それらの作成後に更新できます。

キーパターンの詳細については、「[リビジョンをエクスポートするときのキーパターン](#)」を参照してください。

Note

動的リファレンス `DataSet.Name` としてを使用している場合は、アクセス IAM 許可が必要です `dataexchange:GetDataSet`。詳細については、「[AWS Data Exchange API アクセス許可: アクションとリソースリファレンス](#)」を参照してください。

プロバイダーとしての S3 バケットへのリビジョンのエクスポート (コンソール)

プロバイダーとして S3 バケットにリビジョンをエクスポートする (コンソール)

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [所有データセット] を選択します。
3. [所有データセット] で、エクスポートするリビジョンがある製品を選択します。
4. [製品] タブに移動して、データセットが公開済みの製品に関連付けられていることを確認します。
5. [リビジョン] タブで、リビジョンを選択します。
6. [インポートされたアセット] セクションで、アセット名の横にあるチェックボックスをオンにします。
7. [アクションをエクスポート] を選択してから、[選択したアセットを Amazon S3 にエクスポート] を選択します。

8. [Amazon S3 にエクスポート] ウィンドウのプロンプトに従ってから、[エクスポート] を選択します。

アセットをエクスポートするジョブが開始されます。ジョブが終了したら、[ジョブ] セクションの [状態] フィールドが [完了] に更新されます。

サブスクライバーとしての S3 バケットへのリビジョンのエクスポート (コンソール)

サブスクライバーとして S3 バケットにリビジョンをエクスポートする (コンソール)

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [マイサブスクリプション] で [権限を持つデータ] を選択します。
3. [権限を持つデータ] で、エクスポートするリビジョンがある製品を選択します。
4. [権限を持つデータセット] で、データセットを選択します。
5. [リビジョン] タブでリビジョンを選択してから、[Amazon S3 にエクスポート] を選択します。
6. [Export revision to Amazon S3] (リビジョンを Amazon S3 にエクスポート) で、宛先のオプションと Amazon S3 バケットフォルダの宛先を選択し、暗号化オプションを設定して、[エクスポート] を選択します。

リビジョンをエクスポートするジョブが開始されます。ジョブが終了したら、[ジョブ] セクションの [状態] フィールドが [完了] に更新されます。

サブスクライバーとしての S3 バケットへのリビジョンの自動エクスポート

プロバイダーが新しいリビジョンを発行するときに、新しいリビジョンを Amazon S3 バケットに自動的にエクスポートすることを選択できます。新しいリビジョンは、最大 5 つの S3 バケットにエクスポートできます。選択した S3 バケットに、新しいリビジョンが自動的に表示されます。

トピック

- [S3 バケットポリシー許可の前提条件](#)
- [サブスクライバーとしての S3 バケットへのリビジョンの自動エクスポート \(コンソール\)](#)
- [サブスクライバーとして S3 バケットにリビジョンを自動的にエクスポートする \(AWS SDKs\)](#)

Note

選択した S3 バケットにリビジョンを自動的にエクスポートするには、S3 バケット AWS Data Exchange にデータをエクスポートするためのアクセス許可が設定されているバケットポリシーが必要です。詳細については、「[S3 バケットポリシー許可の前提条件](#)」を参照してください。

S3 バケットポリシー許可の前提条件

S3 バケットにリビジョンを自動的にエクスポートする前に、リクエスト支払いを無効にする必要があります。また、S3 バケットには、データの AWS Data Exchange エクスポートを許可するアクセス許可が設定されているバケットポリシーが必要です。以下の手順では、これらの許可で既存の S3 バケットポリシーを編集する、またはこれらの許可を使用して S3 バケットポリシーを作成する方法に関する情報を提供します。

S3 バケットが SSE-KMS 暗号化用に設定されている場合、自動エクスポートジョブを設定するユーザーは、KMS AWS Data Exchange のキーに対して、オブジェクトを S3 バケットにコピーする CreateGrant アクセス許可を持っている必要があります。

Important

S3 バケットポリシー権限の前提条件が満たされていることを確認するために、自動エクスポートプロセス中に命名形式 `_ADX-TEST-ACCOUNTID#` のオブジェクトが S3 バケットに追加されます。

トピック

- [既存の S3 バケットポリシーの編集](#)
- [S3 バケットポリシーの作成](#)

既存の S3 バケットポリシーの編集

S3 バケットにバケットポリシーがある場合は、次の手順を実行して、AWS Data Exchange がバケットにデータをエクスポートできるようにします。

既存の S3 バケットポリシーを編集する

1. リビジョンをエクスポートするバケットにサインインします。
2. [アクセス許可] タブを選択し、バケットポリシーセクションで [編集] を選択します。
3. 以下のステートメントをコピーし、それをステートメントリストの末尾に貼り付けます。

```
{
  "Effect": "Allow",
  "Principal": {
    "Service": "dataexchange.amazonaws.com"
  },
  "Action": [
    "s3:PutObject",
    "s3:PutObjectAcl"
  ],
  "Resource": "arn:aws:s3:::<BUCKET-NAME>/*",
  "Condition": {
    "StringEquals": {
      "aws:SourceAccount": "<AWS ID>"
    }
  }
}
```

4. <BUCKET-NAME> を S3 バケットの名前に置き換え、 を AWS ID <AWS ID>に置き換えます。
5. [Save changes] (変更の保存) をクリックします。
6. 自動エクスポートジョブの宛先としてのバケットをさらに追加する場合は、この手順をステップ 1 から繰り返します。

S3 バケットポリシーの作成

S3 バケットにバケットポリシーがない場合は、次の手順を実行して AWS Data Exchange がデータをエクスポートできるように S3 バケットポリシーを作成します。

S3 バケットポリシーを作成する

1. リビジョンをエクスポートするバケットにサインインします。
2. [アクセス許可] タブを選択し、バケットポリシーセクションで [編集] を選択します。
3. 以下のバケットポリシーのすべてをコピーし、バケットポリシーエディタに貼り付けます。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Principal": {
        "Service": "dataexchange.amazonaws.com"
      },
      "Action": [
        "s3:PutObject",
        "s3:PutObjectAcl"
      ],
      "Resource": "arn:aws:s3:::<BUCKET-NAME>/*",
      "Condition": {
        "StringEquals": {
          "aws:SourceAccount": "<AWS ID>"
        }
      }
    }
  ]
}
```

4. <BUCKET-NAME> を S3 バケットの名前に置き換え、 を AWS ID <AWS ID>に置き換えます。
5. [Save changes] (変更の保存) をクリックします。
6. 自動エクスポートジョブの宛先としてのバケットをさらに追加する場合は、この手順をステップ 1 から繰り返します。

サブスクライバーとしての S3 バケットへのリビジョンの自動エクスポート (コンソール)

Note

選択した S3 バケットにリビジョンを自動的にエクスポートするには、S3 バケット AWS Data Exchange にデータをエクスポートするためのアクセス許可が設定されているバケットポリシーが必要です。詳細については、「[S3 バケットポリシー許可の前提条件](#)」を参照してください。

サブスクライバーとして S3 バケットにリビジョンを自動的にエクスポートする (コンソール)

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [マイサブスクリプション] で [権限を持つデータ] を選択します。
3. [権限を持つデータ] で、エクスポートするリビジョンがある製品を選択します。
4. [権限を持つデータセット] で、データセットを選択します。
5. [リビジョン] タブの [自動エクスポートジョブの宛先] で、[アクション] を選択してから [自動エクスポートジョブの宛先を追加] を選択します。
6. [自動エクスポートジョブの宛先を追加] で、[シンプル] または [アドバンスト] の宛先オプションを選択します。
 - a. [シンプル] オプションを選択する場合は、ドロップダウンリストから Amazon S3 バケットフォルダの宛先を選択し、暗号化オプションを選択して、[バケットの宛先を追加] を選択します。
 - b. [アドバンスト] オプションを選択する場合は、ドロップダウンリストから Amazon S3 バケットフォルダの宛先を選択し、[\[キー命名パターン\]](#) を選択して、それをパスに付加します。
7. [出力] を確認します。
8. [暗号化オプション] を設定し、[Amazon S3 の料金] を確認してから、[バケットの宛先を追加] を選択します。

Amazon S3 バケットの宛先が、[リビジョン] タブの [自動エクスポートジョブの宛先] に表示されます。

リビジョンを自動的にエクスポートするジョブが開始されます。

S3 バケットポリシー権限の前提条件が満たされていることを確認するために、命名形式 `_ADX-TEST-ACCOUNTID#` のオブジェクトが S3 バケットに追加されます。

ジョブが終了したら、[ジョブ] セクションの [状態] フィールドが [完了] に更新されます。

別の宛先を追加するには、[アクション] を選択してから [自動エクスポートジョブの宛先を追加] を選択します。

編集するには、編集する宛先を選択し、[アクション] を選択してから [宛先設定の編集] を選択します。

削除するには、[アクション] を選択してから [自動エクスポートジョブの宛先の削除] を選択します。

サブスクライバーとして S3 バケットにリビジョンを自動的にエクスポートする (AWS SDKs)

Note

選択した S3 バケットにリビジョンを自動的にエクスポートするには、S3 バケット AWS Data Exchange にデータをエクスポートするためのアクセス許可が設定されているバケットポリシーが必要です。詳細については、「[S3 バケットポリシー許可の前提条件](#)」を参照してください。

S3 バケットにリビジョンを自動的にエクスポートするには (AWS SDKs)

1. Create_Event_Action リクエストを作成します。
2. リクエストには以下を含めます。
 - Action
 - ExportRevisionToS3
 - Encryption
 - KmsKeyArn
 - Type
 - RevisionDestination
 - Bucket
 - KeyPattern
 - Event
 - RevisionPublished
 - DataSetId
3. 必要に応じてキーパターンを変更します。Amazon S3 オブジェクトキーは、デフォルトでキーパターン {Revision.CreatedAt}/{Asset.Name} に設定されます。

キーパターンの詳細については、「[リビジョンをエクスポートするときのキーパターン](#)」を参照してください。

S3 バケットポリシー権限の前提条件が満たされていることを確認するために、命名形式 `_ADX-TEST-ACCOUNTID#` のオブジェクトが S3 バケットに追加されます。

リビジョンをエクスポートするときのキーパターン

リビジョンをエクスポートすると、各アセットが S3 バケット内のオブジェクトになります。オブジェクトの名前は、ユーザー指定のキーパターンに基づきます。アセット属性を表す動的な参照を使用して、エクスポート中に自動生成される名前のパターンを作成できます。以下の表に記載されている動的な参照を使用します。

動的な参照	説明
<code>\${Asset.Id}</code>	アセットの ID。
<code>\${Asset.Name}</code>	アセットの名前。
<code>\${DataSet.Id}</code>	エクスポートされているデータセットの ID。
<code>\${DataSet.Name}</code>	エクスポートされるセットの名前。
<code>\${Revision.CreatedAt}</code>	リビジョンが作成された UTC 日時。形式は YYYY-MM-DDTHH:MM SSZ です。例: 2021-10-08T16:33:19.787Z
<code>\${Revision.CreatedAt.Day}</code>	リビジョンが作成された日。
<code>\${Revision.CreatedAt.Month}</code>	リビジョンが作成された月。
<code>\${Revision.CreatedAt.Year}</code>	リビジョンが作成された年。
<code>\${Revision.Id}</code>	エクスポートされているリビジョンの ID。

これらの動的な参照を使用して、アセット名のキーパターンを作成できます。2つの Asset 動的参照 (`${Asset.Name}` と `${Asset.Id}`) の少なくとも一方を含める必要があります。

例えば、`${Revision.Id}/${Asset.Name}` をキーパターンとして使用すると、オブジェクト名としてスラッシュで区切られたリビジョン ID とアセット名を使用する Amazon S3 オブジェクトができます。

`asset1` と `asset2` という名前の 2 つのアセットを持つ ID が `testRevisionId` のリビジョンをエクスポートすると、アセットは以下の Amazon S3 ロケーションにエクスポートされます。

- `<bucket>/testRevisionId/asset1`
- `<bucket>/testRevisionId/asset2`

Note

結果として得られるオブジェクトには、一意の名前が必要です。それらに S3 バケット内の既存のオブジェクトと同じ名前が付けられている場合、エクスポートによって既存のオブジェクトが上書きされます。エクスポートしているリビジョンに一意でない名前がある場合 (同じ名前が付けられた 2 つのアセットなど)、エクスポートは失敗します。一意の動的参照は `${Asset.Id}` のみです。

AWS Data Exchange クォータ

以下のセクションでは、のサービスクォータ、エンドポイント、全体のエクスポートジョブとインポートジョブのガイドライン AWS リージョン、および AWS Data Exchange ののリソースフィールドに関連する制約について説明します AWS アカウント。

Service Quotas

サービスクォータの詳細については、「AWS全般のリファレンス」の[AWS Data Exchange 「エンドポイントとクォータ」](#)を参照してください。

サービスエンドポイント

サービスエンドポイントの詳細については、「AWS全般のリファレンス[AWS Data Exchange](#)」の「[エンドポイントとクォータ](#)」を参照してください。

エクスポートとインポートジョブのガイドライン

以下の表には、エクスポートジョブとインポートジョブのガイドラインが提供されています。詳細については、「[AWS リージョン および データセット](#)」を参照してください。

リソース、記述子、または操作	最大値	説明
署名付き からインポートされたアセットのファイルサイズ URL	5 GB	IMPORT_ASSET_FROM_SIGNED_URL を使用してインポートできるアセットの最大サイズ (GB 単位)。
Amazon Simple Storage Service (Amazon S3) へのリビジョンのクロスリージョンエクスポートのファイルサイズ	1,000 GB	ExportRevision ジョブを使用して、プロバイダデータセットから別のリージョンにエクスポートできるリビジョンの最大サイズ (GB 単位) です。

リソース、記述子、または操作	最大値	説明
1つのジョブURLで署名されたからインポートできるアセットの数	1	単一の IMPORT_ASSET_FROM_SIGNED_URL ジョブを使用してインポートできるアセットの数です。
単一のクロスリージョン ExportRevision ジョブで Amazon S3 にエクスポートできるアセットの数	10,000	ExportRevision ジョブを使用して、1つのリージョンから別のリージョンにプロバイダーデータセットからエクスポートできるアセットの数です。
単一の ExportRevision ジョブで Amazon S3 にエクスポートできるアセットの数	10,000	ExportRevision ジョブを使用して Amazon S3 にエクスポートできるアセットの数です。
単一の ExportRevision ジョブで Amazon S3 にエクスポートできるリビジョンの数	1	ExportRevision ジョブを使用して Amazon S3 にエクスポートできるリビジョンの数です。
リソースあたりのイベントアクション	5	リソースあたりのイベントアクションの最大数です。
アカウントあたりのイベントアクション	50	アカウントあたりのイベントアクションの最大数です。
API Gateway から APIs インポートされた のペイロードサイズ	10 MB	Amazon API Gateway からインポートAPIsされたの最大ペイロードサイズ。Amazon API Gateway のクォータの詳細についてはAPIs、 「Amazon API Gateway デベロッパーガイド」 の 「Amazon Gateway のクォータと重要な注意事項」 を参照してください。 API API
SendApiAsset	1秒あたり 10トラン ザクション (TPS)	リージョンごとの顧客SendApiAsset に対するへの1秒あたりのデフォルトのリクエスト数。

リソースフィールドに対する制約

次の表は、データセット、リビジョン、製品、製品オファ어의作成時にプロバイダーが AWS Data Exchange コンソールで遭遇するリソースフィールドに関連する制約を示しています。この表には、サブスクリプションリクエストを実行するときサブスクライバーが受けるリソースフィールドに関連する制約も記載されています。

[リソース]	フィールド	最大長またはサイズ
データセット	名前	256 文字
データセット	説明	16,384 文字
リビジョン	コメント	128 文字
製品の詳細	名前	72 文字
製品の詳細	簡単な説明	500 文字
製品の詳細	詳しい説明	30,000 文字
製品の詳細	ロゴ	100 KB
製品オファー	DSA	10 MB
製品オファー	返金ポリシー	200 文字
サブスクリプションリクエスト	会社名	40 文字
サブスクリプションリクエスト	name	40 文字
サブスクリプションリクエスト	E メールアドレス	100 文字
サブスクリプションリクエスト	想定されるユースケース	500 文字

でのログ記録とモニタリング AWS Data Exchange

モニタリングは、AWS Data Exchangeの優れたアーキテクチャの性質の重要な部分です。マルチポイント障害が発生した場合に簡単にデバッグできるように、AWS ソリューションの各部分からモニタリングデータを収集する必要があります。は、でリソースとアクティビティをモニタリングするための複数のツール AWS を提供し AWS Data Exchange、潜在的なインシデントの計画と対応を行います。

でのアクションとイベントのログ記録 AWS Data Exchange は、Amazon との統合を通じて行われます CloudWatch。

以下のセクションでは、のモニタリングとログ記録について説明します AWS Data Exchange。

トピック

- [モニタリング AWS Data Exchange](#)
- [の Amazon EventBridge イベント AWS Data Exchange](#)
- [AWSAWS Data Exchange イベントのユーザー通知](#)
- [を使用した通話のログ記録 AWS Data Exchange API AWS CloudTrail](#)
- [今後のログ記録の変更 AWS Data Exchange CloudTrail点](#)

モニタリング AWS Data Exchange

モニタリングは、およびその他の AWS Data Exchange AWS ソリューションの信頼性、可用性、パフォーマンスを維持する上で重要な部分です。AWS には、をモニタリングし AWS Data Exchange、問題が発生したときに報告し、必要に応じて自動アクションを実行するための以下のモニタリングツールが用意されています。

- Amazon CloudWatch Events は、リソースの変更 AWS を記述するシステムイベントの near-real-time ストリームを提供します。CloudWatch イベントは、自動イベント駆動型コンピューティングを有効にします。特定のイベントを監視し、これらのイベントが発生したときに他の AWS サービスで自動アクションで応答するルールを記述できます。詳細については、[「Amazon CloudWatch Events ユーザーガイド」](#)を参照してください。
- Amazon CloudWatch Logs を使用すると、Amazon Elastic Compute Cloud (Amazon EC2) インスタンスやその他のソースからログファイルをモニタリング、保存 AWS CloudTrail、およびアクセスできます。CloudWatch ログはログファイル内の情報をモニタリングし、特定のしきい値に達し

たときに通知できます。高い耐久性を備えたストレージにログデータをアーカイブすることもできます。詳細については、「[Amazon CloudWatch Logs ユーザーガイド](#)」を参照してください。

- CloudTrail は、によって、またはに代わって行われたAPI呼び出しや関連イベントをキャプチャ AWS アカウントし、指定した Amazon Simple Storage Service (Amazon S3) バケットにログファイルを配信します。と呼ばれるユーザーとアカウント AWS、呼び出し元の送信元 IP アドレス、呼び出しが発生した日時を特定できます。

の Amazon EventBridge イベント AWS Data Exchange

AWS Data Exchange は EventBridge、以前は Amazon CloudWatch Events と呼ばれていた Amazon と統合されています。EventBridge は、アプリケーションをさまざまなソースからのデータに接続するために使用できるイベントバスサービスです。詳細については、「[Amazon EventBridge ユーザーガイド](#)」を参照してください。

製品へのアクティブなサブスクリプションのサブスクライバーとして、プロバイダーが新しいリビジョンを発行したり、既存の製品に新しいデータセットを追加したりする AWS Data Exchange たびに、からイベントを受け取ります。イベントには、発行された DataSetId と RevisionIds のリストが含まれています。

プロバイダーは、データ更新、データ遅延、スキーマ変更、廃止に関する通知を送信できます。プロバイダーは、購読者がフォローすべきコメントや期待されるアクションを含めることができます。サブスクライバーは、これらの通知を Amazon のイベントとして受け取り EventBridge ます。イベントを使用して、自動ワークフローを構築したり、[AWSユーザー通知](#) を使用して E メールやチャットプログラムに人間が読み取れる通知を配信したりできます。

データ製品関連のイベントは、プロバイダーがデータセットを発行 AWS リージョンしたで出力されます。これらのイベントを使用する EventBridge ルールを同じで設定するか AWS リージョン、その他のオプションについては「[間の Amazon EventBridge イベントの送受信 AWS リージョン](#)」を参照してください。

このトピックでは、次の表に示す各イベントに関する詳細情報を提供します。この表には、プロバイダーが製品にデータセットを追加したり、製品にリビジョンを追加したり、製品へのリビジョンを取り消したり、製品へのアクセスを削除したりしたときに、サブスクライバーが受信するイベントが含まれています。

アクション	サブスクライバーが受信したイベント	関連トピック
ファイルベースのデータセットを製品に追加し、発行する	Data Sets Published To Product	the section called “ファイルベースのデータセットを追加するイベント”
Amazon S3 データアクセスデータセットを製品に追加し、発行する	Amazon S3 Data Access Data Sets Published To Product	the section called “Amazon S3 データアクセスデータセットの追加に関するイベント”
AWS Lake Formation データアクセス許可データセットを追加して公開します	AWS Lake Formation Data Permission Data Set Published To Product	the section called “AWS Lake Formation データアクセス許可データセットを追加するためのイベント (プレビュー)”
Amazon Redshift データセットを製品に追加し、発行する	Redshift Data Shares Data Sets Published To Product	Amazon Redshift データ共有データセットを追加するためのイベント
Amazon API Gateway データセットを製品に追加して公開します	API Gateway API Data Sets Published To Product	the section called “Amazon API Gateway APIデータセットを追加するためのイベント”
ファイルベースのデータセットのリビジョンを製品に追加し、発行する	Revision Published To Data Set	リビジョンの追加に関するイベント
Amazon S3 データアクセスデータセットのリビジョンを製品に追加し、発行する	Revision Published to Amazon S3 Data Access Data Set	the section called “Amazon S3 データアクセスデータセットのリビジョンを追加する”
AWS Lake Formation データアクセス許可データセットリビジョンを製品に追加して公開します	Revision Published To Lake Formation Data Permission Data Set	the section called “AWS Lake Formation データ許可データセットリビジョンを追加するためのイベント (プレビュー)”

アクション	サブスクライバーが受信したイベント	関連トピック
Amazon Redshift データ共有データセットのリビジョンを製品に追加し、発行する	Revision Published To Redshift Data Shares Data Set	Amazon Redshift データ共有データセットのリビジョンを追加する
Amazon API Gateway データセットリビジョンを製品に追加して公開します	Revision Published To API Gateway API Data Set	the section called “Amazon API Gateway APIデータセットリビジョンを追加するためのイベント”
製品へのリビジョンを取り消します。	Revision Revoked	リビジョンを取り消すためのイベント
Amazon Redshift リソースに対して、サブスクライバーからのアクセスを削除する可能性のあるアクションを実行する	Action Performed On Redshift Data Share By Provider	Amazon Redshift リソースで実行されるアクションのイベント
Amazon Redshift リソースに対してサブスクライバーからのアクセスを削除するアクションを実行します	Redshift Data Share Access Lost	Amazon Redshift データ共有にアクセスできなくなった場合のイベント
データ更新の通知を送信します。	Data Updated in Data Set	プロバイダーが生成するデータ更新通知のイベント
スキーマ変更の通知を送信します。	Schema Change Planned for Data Set	プロバイダーが生成するスキーマ変更通知のイベント
データ遅延の通知を送信します。	Data Set Update Delayed	プロバイダーが生成するデータ遅延通知のイベント
データ廃止の通知を送信します。	Deprecation Planned for Data Set	プロバイダーが生成するデータ廃止通知のイベント

アクション	サブスクライバーが受信したイベント	関連トピック
完了済みジョブを自動エクスポートする	Auto-export Job Completed	自動エクスポートジョブのイベントが完了しました
自動エクスポートジョブ失敗	Auto-export Job Failed	自動エクスポートジョブのイベントが失敗しました

Note

AWS Data Exchange は、ベストエフォートベースでイベントを出力します。イベント配信の詳細については、[「からのイベント AWS のサービス」](#)を参照してください。

ファイルベースのデータセットを追加するイベント

プロバイダーがファイルベースのデータセットを製品に追加して公開すると、サブスクライバーは、詳細タイプ: Data Sets Published To Product のイベントを受け取ります。

以下は、追加されたファイルベースのデータセットに関する、追加されたイベント本文の例です。

```
{
  "version": "0",
  "id": "dc529cb6-2e23-4c5f-d020-EXAMPLE92231",
  "detail-type": "Data Sets Published To Product",
  "source": "aws.dataexchange",
  "account": "123456789012",
  "time": "2020-07-29T18:24:04Z",
  "region": "us-east-1",
  "resources": [
    "prod-uEXAMPLEabc1d"
  ],
  "detail": {
    "DataSetIds": [
      "4afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEe8",
      "5bgd734EXAMPLE100f7gdd9EXAMPLEe9"
    ],
    "DataSets": [
      {
```

```
        "Id" : "4afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEe8",
        "Name": "Data_Set_Hello_World_One"
    },
    {
        "Id" : "5bgd734EXAMPLE100f7gdd9EXAMPLEe9",
        "Name": "Data_Set_Hello_World_Two"
    }
],
"Product":
{
    "Id" : "prod-uEXAMPLEabc1d",
    "Name": "Product_Hello_World"
}
}
```

Amazon S3 データアクセスデータセットの追加に関するイベント

プロバイダーが Amazon S3 データアクセスデータセットを製品に追加して公開すると、サブスクライバーは、詳細タイプ: Amazon S3 Data Access Data Sets Published To Product のイベントを受け取ります。

以下は、追加された Amazon S3 データアクセスデータセットのイベント本文の例です。

```
{
  "version": "0",
  "id": "dc529cb6-2e23-4c5f-d020-EXAMPLE92231",
  "detail-type": "S3 Data Access Data Set(s) Published to Product",
  "source": "aws.dataexchange",
  "account": "123456789012",
  "time": "2020-07-29T18:24:04Z",
  "region": "us-east-1",
  "resources": [
    "prod-uEXAMPLEabc1d"
  ],
  "detail": {
    "DataSetIds": [
      "4afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEe8",
      "5bgd734EXAMPLE100f7gdd9EXAMPLEe9"
    ],
    "DataSets": [{
      "Id": "4afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEe8",
      "Name": "Data_Set_Hello_World_One"
    }
  ]
}
```

```
  },
  {
    "Id": "5bgd734EXAMPLE100f7gdd9EXAMPLEe9",
    "Name": "Data_Set_Hello_World_Two"
  }
],
"Product": {
  "Id": "prod-uEXAMPLEabc1d",
  "Name": "Product_Hello_World"
}
}
}
```

AWS Lake Formation データアクセス許可データセットを追加するためのイベント (プレビュー)

プロバイダーが AWS Lake Formation データアクセス許可データセットを製品に追加して公開すると、サブスクライバーは詳細タイプのイベントを受け取ります Lake Formation Data Permission Data Sets Published To Product。(プレビュー)

データ AWS Lake Formation アクセス許可データセットを追加するためのイベント本文の例を次に示します。(プレビュー)

```
{
  "version": "0",
  "id": "dc529cb6-2e23-4c5f-d020-EXAMPLE92231",
  "detail-type": "Lake Formation Data Permission Data Sets Published To Product",
  "source": "aws.dataexchange",
  "account": "123456789012",
  "time": "2021-12-15T18:24:04Z",
  "region": "us-east-1",
  "resources": [
    "prod-uEXAMPLEabc1d"
  ],
  "detail": {
    "DataSetIds": [
      "4afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEe8",
      "5bgd734EXAMPLE100f7gdd9EXAMPLEe9"
    ],
    "DataSets": [
      {
        "Id": "4afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEe8",
```

```
        "Name": "Data_Set_Hello_World_One"
      },
      {
        "Id": "5bgd734EXAMPLE100f7gdd9EXAMPLEe9",
        "Name": "Data_Set_Hello_World_Two"
      }
    ],
    "Product": {
      "Id": "prod-uEXAMPLEabc1d",
      "Name": "Product_Hello_World"
    }
  }
}
```

Amazon Redshift データ共有データセットを追加するためのイベント

プロバイダーが Amazon Redshift データ共有データセットを製品に追加して公開すると、サブスクライバーは詳細タイプ: Redshift Data Shares Data Sets Published To Product のイベントを受け取ります。

以下は、追加された Amazon Redshift データ共有データセットのイベント本文の例です。

```
{
  "version": "0",
  "id": "dc529cb6-2e23-4c5f-d020-EXAMPLE92231",
  "detail-type": "Redshift Data Shares Data Sets Published To Product",
  "source": "aws.dataexchange",
  "account": "123456789012",
  "time": "2021-12-15T18:24:04Z",
  "region": "us-east-1",
  "resources": [
    "prod-uEXAMPLEabc1d"
  ],
  "detail": {
    "DataSetIds": [
      "4afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEe8",
      "5bgd734EXAMPLE100f7gdd9EXAMPLEe9"
    ],
    "DataSets": [
      {
        "Id" : "4afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEe8",
        "Name": "Data_Set_Hello_World_One"
      },

```

```
    {
      "Id" : "5bgd734EXAMPLE100f7gdd9EXAMPLEe9",
      "Name": "Data_Set_Hello_World_Two"
    }
  ],
  "Product":
  {
    "Id" : "prod-uEXAMPLEabc1d",
    "Name": "Product_Hello_World"
  }
}
```

Amazon API Gateway APIデータセットを追加するためのイベント

プロバイダーが Amazon API Gateway APIデータセットを製品に追加して公開すると、サブスクライバーは詳細タイプのイベントを受け取ります Amazon API Gateway Data Sets Published To Product。

以下は、追加された Amazon API Gateway APIデータセットのイベント本文の例です。

```
{
  "version": "0",
  "id": "dc529cb6-2e23-4c5f-d020-EXAMPLE92231",
  "detail-type": "API Gateway API Data Sets Published To Product",
  "source": "aws.dataexchange",
  "account": "123456789012",
  "time": "2021-12-15T18:24:04Z",
  "region": "us-east-1",
  "resources": [
    "prod-uEXAMPLEabc1d"
  ],
  "detail": {
    "DataSetIds": [
      "4afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEe8",
      "5bgd734EXAMPLE100f7gdd9EXAMPLEe9"
    ],
    "DataSets": [
      {
        "Id" : "4afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEe8",
        "Name": "Data_Set_Hello_World_One"
      }
    ]
  }
}
```

```
    },
    {
      "Id" : "5bgd734EXAMPLE100f7gdd9EXAMPLEe9",
      "Name": "Data_Set_Hello_World_Two"
    }
  ],
  "Product": {
    "Id" : "prod-uEXAMPLEabc1d",
    "Name": "Product_Hello_World"
  }
}
```

リビジョンの追加に関するイベント

プロバイダーがデータセットを製品に追加して公開すると、サブスクライバーは詳細タイプ: Revision Published To Data Setのイベントを受け取ります。

以下は、追加されたリビジョンのイベント本文の例です。

```
{
  "version": "0",
  "id": "dc529cb6-2e23-4c5f-d020-EXAMPLE92231",
  "detail-type": "Revision Published To Data Set",
  "source": "aws.dataexchange",
  "account": "123456789012",
  "time": "2020-07-29T04:16:28Z",
  "region": "us-east-1",
  "resources": [
    "aae4c2cdEXAMPLE54f9369dEXAMPLE66"
  ],
  "detail": {
    "RevisionIds": [
      "3afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEe7"
    ],
    "Revisions": [
      {
        "Id" : "3afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEe7",
        "Comment": "Revision_Comment_One"
      }
    ],
    "DataSets": [
      {
```

```
        "Id" : "aae4c2cdEXAMPLE54f9369dEXAMPLE66",
        "Name": "Data_Set_Hello_World_One"
    }
],
"Product": {
    "Id" : "prod-uEXAMPLEabc1d",
    "Name": "Product_Hello_World"
}
}
}
```

Amazon S3 データアクセスデータセットのリビジョンを追加する

プロバイダーが Amazon S3 データアクセスデータセットのリビジョンを製品に追加して公開すると、サブスクライバーは詳細タイプ: Revision Published To Amazon S3 Data Access Data Set のイベントを受け取ります。

以下は、追加された Amazon S3 データアクセスデータセットのリビジョンのイベント本文の例です。

```
{
  "version": "0",
  "id": "dc529cb6-2e23-4c5f-d020-EXAMPLE92231",
  "detail-type": "Revision Published to S3 Data Access Data Set(s)",
  "source": "aws.dataexchange",
  "account": "123456789012",
  "time": "2020-07-29T04:16:28Z",
  "region": "us-east-1",
  "resources": [
    "aae4c2cdEXAMPLE54f9369dEXAMPLE66"
  ],
  "detail": {
    "RevisionIds": [
      "3afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEe7"
    ],
    "Revisions": [
      {
        "Id" : "3afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEe7",
        "Comment": "Revision_Comment_One"
      }
    ],
    "DataSets": [
      {
```

```
        "Id" : "4afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEe8",
        "Name": "Data_Set_Hello_World_One"
    }
],
"Product": {
    "Id" : "prod-uEXAMPLEabc1d",
    "Name": "Product_Hello_World"
}
}
}
```

AWS Lake Formation データ許可データセットリビジョンを追加するためのイベント (プレビュー)

プロバイダーが AWS Lake Formation データアクセス許可データセットリビジョンを製品に追加して公開すると、サブスクライバーは詳細タイプ Revision Published to Lake Formation Data Permission Data Set (プレビュー) のイベントを受け取ります。

以下は、AWS Lake Formation データアクセス許可データセットに追加されたリビジョンのイベント本文の例です。(プレビュー)

```
{
  "version": "0",
  "id": "dc529cb6-2e23-4c5f-d020-EXAMPLE92231",
  "detail-type": "Revision Published to Lake Formation Data Permission Data Set",
  "source": "aws.dataexchange",
  "account": "123456789012",
  "time": "2021-12-15T18:24:04Z",
  "region": "us-east-1",
  "resources": [
    "prod-uEXAMPLEabc1d"
  ],
  "detail": {
    "DataSetIds": [
      "4afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEe8",
      "5bgd734EXAMPLE100f7gdd9EXAMPLEe9"
    ],
    "DataSets": [
      {
        "Id": "4afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEe8",
        "Name": "Data_Set_Hello_World_One"
      }
    ],
  }
}
```

```
    {
      "Id": "5bgd734EXAMPLE100f7gdd9EXAMPLEe9",
      "Name": "Data_Set_Hello_World_Two"
    }
  ],
  "Product": {
    "Id": "prod-uEXAMPLEeabc1d",
    "Name": "Product_Hello_World"
  }
}
```

Amazon Redshift データ共有データセットのリビジョンを追加する

プロバイダーが Amazon Redshift データシェアデータセットのリビジョンを製品に追加して公開すると、サブスクライバーは詳細タイプ: Revision Published To Redshift Data Shares Data Set のイベントを受け取ります。

以下は、追加された Amazon Redshift データ共有データセットのリビジョンのイベント本文の例です。

```
{
  "version": "0",
  "id": "dc529cb6-2e23-4c5f-d020-EXAMPLE92231",
  "detail-type": "Revision Published To Redshift Data Shares Data Set",
  "source": "aws.dataexchange",
  "account": "123456789012",
  "time": "2021-12-15T18:24:04Z",
  "region": "us-east-1",
  "resources": [
    "aae4c2cdEXAMPLE54f9369dEXAMPLE66"
  ],
  "detail": {
    "RevisionIds": [
      "3afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEe7"
    ],
    "Revisions": [
      {
        "Id": "3afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEe7",
        "Comment": "Revision_Comment_One"
      }
    ],
    "DataSets": [
```

```
{
  "Id" : "aae4c2cdEXAMPLE54f9369dEXAMPLE66",
  "Name": "Data_Set_Hello_World_One"
},
"Product": {
  "Id" : "prod-uEXAMPLEabc1d",
  "Name": "Product_Hello_World"
}
}
```

Amazon API Gateway APIデータセットリビジョンを追加するためのイベント

プロバイダーが Amazon API Gateway APIデータセットリビジョンを製品に追加して公開すると、サブスクライバーは詳細タイプのイベントを受け取りますRevision Published To API Gateway Data Set。

以下は、追加された Amazon API Gateway APIデータセットリビジョンのイベント本文の例です。

```
{
  "version": "0",
  "id": "dc529cb6-2e23-4c5f-d020-EXAMPLE92231",
  "detail-type": "Revision Published To API Gateway API Data Set",
  "source": "aws.dataexchange",
  "account": "123456789012",
  "time": "2021-12-15T18:24:04Z",
  "region": "us-east-1",
  "resources": [
    "aae4c2cdEXAMPLE54f9369dEXAMPLE66"
  ],
  "detail": {
    "RevisionIds": [
      "3afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEe7"
    ],
    "Revisions": [
      {
        "Id" : "3afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEe7",
        "Comment": "Revision_Comment_One"
      }
    ]
  }
}
```

```

    "DataSets": [
      {
        "Id" : "aae4c2cdEXAMPLE54f9369dEXAMPLE66",
        "Name": "Data_Set_Hello_World_One"
      }
    ],
    "Product": {
      "Id" : "prod-uEXAMPLEabc1d",
      "Name": "Product_Hello_World"
    }
  }
}

```

次の表は、APIGateway APIデータセットリビジョンエラーコードを示しています。

エラーコード	メッセージ	説明
CLUSTER_DELETED	The datashare is unavailable because the provider deleted their cluster. Please contact the provider for more information.	このメッセージは、プロバイダがデータ共有を含むクラスターを削除したためにデータ共有が使用できなくなったときに送信されます。
CLUSTER_ENCRYPTION_DISABLED	The datashare is unavailable because the provider disabled encryption on their cluster. Please contact the provider for more information.	このメッセージは、プロバイダーがクラスターの暗号化を無効にしたためにデータ共有が使用できなくなったときに送信されます。データ共有を使用するには、プロバイダーとサブスクライバーの両方で暗号化が有効になっている必要があります。
DATASHARE_DELETED	The datashare is unavailable because the provider deleted the datashare. Please	このメッセージは、プロバイダーがデータ共有を削除したためにデータ共有が使用できなくなったときに送信されます。データに再びアクセスで

エラーコード	メッセージ	説明
	contact the provider for more information.	きるように、プロバイダーは新しいデータ共有を作成する必要があります。
DATASHARE_DEAUTHORIZED	The datashare is unavailable because the provider deauthorized the datashare . Please contact the provider for more information.	このメッセージは、プロバイダーがデータ共有の認証を解除したためにデータ共有が使用できなくなったときに送信されます。データに再びアクセスできるように、プロバイダーは新しいデータ共有を作成する必要があります。

エラーコード	メッセージ	説明
DATASHARE_PUBLIC_CONSUMER_BLOCKED	You cannot access a non-publicly accessible datashare from a publicly accessible cluster. You must turn off public accessibility on your cluster to access this datashare . Please contact your provider for more information.	<p>このメッセージは、プロバイダーがデータ共有を含むクラスターで [パブリックアクセス可能] オプションを [無効] に設定したときに送信されます。サブスクライバーのクラスターの [パブリックアクセス可能] オプションが [無効] に設定されている場合、サブスクライバーのデータ共有へのアクセスには影響しません。サブスクライバーがデータ共有にアクセスするには、サブスクライバーがクラスターの [パブリックアクセス可能] オプションを [無効] に設定するか、プロバイダーがクラスターの [パブリックアクセス可能] オプションを [有効] に設定する必要があります。</p> <p>データ共有を含むクラスターでは無効にします。サブスクライバーのクラスターの [パブリックアクセス可能] オプションが [無効] に設定されている場合、サブスクライバーのデータ共有へのアクセスには影響しません。サブスクライバーがデータ共有にアクセスするには、サブスクライバーがクラスターの [パブリックアクセス可能] オプションを [無効] に設定するか、プロバイダーがクラスターの [パブリッ</p>

エラーコード	メッセージ	説明
		クアクセス可能] オプションを [有効] に設定する必要があります。

リビジョンを取り消すためのイベント

プロバイダーが製品のリビジョンを取り消して公開すると、サブスクライバーは詳細タイプ: Revision Revoked のイベントを受信します。

以下は、取り消されたリビジョンのイベント本文の例です。

```
{
  "version": "0",
  "id": "dc529cb6-2e23-4c5f-d020-EXAMPLE92231",
  "detail-type": "Revision Revoked",
  "source": "aws.dataexchange",
  "account": "123456789012",
  "time": "2022-02-17T21:25:06Z",
  "region": "us-east-1",
  "resources": [
    "aae4c2cdEXAMPLE54f9369dEXAMPLE66"
  ],
  "detail": {
    "RevisionIds": [
      "3afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEEe7"
    ],
    "RevocationComment": "example revocation comment",
    "Revisions": [
      {
        "Id" : "3afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEEe7",
        "Comment": "Revision_Comment_One"
      }
    ],
    "DataSets": [
      {
        "Id" : "aae4c2cdEXAMPLE54f9369dEXAMPLE66",
        "Name": "Data_Set_Hello_World_One"
      }
    ],
    "Product": {
```

```
        "Id" : "prod-uEXAMPLEabc1d",
        "Name": "Product_Hello_World"
    }
}
}
```

Amazon Redshift リソースで実行されるアクションのイベント

プロバイダーが Amazon Redshift リソースに対してサブスクライバーからのアクセスを削除する可能性のあるアクションを実行すると、サブスクライバーは詳細タイプ: Action Performed On Redshift Data Share By Provider のイベントを受信します。

たとえば、プロバイダーがデータ共有のパブリックアクセシビリティ設定を true から false に変更すると、サブスクライバーはイベントを受け取ります。

以下は、Amazon Redshift リソースで実行されるアクションのイベント本体の例です。

```
{
  "version": "0",
  "id": "dc529cb6-2e23-4c5f-d020-EXAMPLE92231",
  "detail-type": "Action Performed On Redshift Data Share By Provider",
  "source": "aws.dataexchange",
  "account": "123456789012",
  "time": "2021-12-15T18:24:04Z",
  "region": "us-east-1",
  "resources": [
    "arn:aws:redshift:us-east-1:098765432123:datashare:01234567-2590-7654-1234-f57ea0081234/test_data_share"
  ],
  "detail": {
    "Message": "This is an example message which explains why you may have lost access.",
    "AssociatedProducts": [
      {
        "ProductId": "aae4c2cdEXAMPLE54f9369dEXAMPLE66",
        "DataSetIds": [
          "4afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEe8"
        ],
        "DataSets": [
          {
            "Id" : "4afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEe8",
            "Name": "Data_Set_Hello_World_One"
          }
        ]
      }
    ]
  }
}
```

```
    ],
    "Product": {
      "Id" : "aae4c2cdEXAMPLE54f9369dEXAMPLE66",
      "Name": "Product_Hello_World"
    }
  ]
}
}
```

Amazon Redshift データ共有にアクセスできなくなった場合のイベント

プロバイダーが自分の Amazon Redshift リソースに対してサブスクライバーからのアクセスを削除するアクションを実行すると、サブスクライバーは次の詳細タイプのイベント: Redshift Data Share Access Lost を受け取ります。

たとえば、プロバイダーが Amazon Redshift データ共有を削除したり、クラスターを削除したりすると、サブスクライバーはイベントを受け取ります。

Amazon Redshift データ共有にアクセスできなくなった場合のイベント本文の例を次に示します。

```
{
  "version": "0",
  "id": "dc529cb6-2e23-4c5f-d020-EXAMPLE92231",
  "detail-type": "Redshift Data Share Access Lost",
  "source": "aws.dataexchange",
  "account": "123456789012",
  "time": "2021-12-15T18:24:04Z",
  "region": "us-east-1",
  "resources": [
    "arn:aws:redshift:us-east-1:098765432123:datashare:01234567-2590-7654-1234-f57ea0081234/test_data_share"
  ],
  "detail": {
    "Message": "This is an example message which explains why you may have lost access.",
    "AssociatedProducts": [
      {
        "ProductId": "aae4c2cdEXAMPLE54f9369dEXAMPLE66",
        "DataSetIds": [
          "4afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEe8"
        ]
      }
    ],
    "DataSets": [
```

```
        {
          "Id" : "4afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEEe8",
          "Name": "Data_Set_Hello_World_One"
        }
      ],
      "Product": {
        "Id" : "prod-uEXAMPLEabc1d",
        "Name": "Product_Hello_World"
      }
    }
  ]
}
```

自動エクスポートジョブのイベントが完了しました

自動エクスポートジョブが、新しく公開されたファイルデータセットリビジョンのすべてのデータを、サブスクライバーが選択した Amazon S3 バケットに移動すると、サブスクライバーは自動エクスポートジョブ完了 イベントを受け取ります。

以下は、自動エクスポートジョブが完了したときのイベント本文の例です。

```
{
  "version": "0",
  "id": "dc529cb6-2e23-4c5f-d020-EXAMPLE92231",
  "detail-type": "Auto-export Job Completed",
  "source": "aws.dataexchange",
  "account": "123456789012",
  "time": "2020-07-29T18:24:04Z",
  "region": "us-east-1",
  "resources": [
    "prod-uEXAMPLEabc1d"
  ],
  "detail": {
    "RevisionIds": [
      "3afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEEe7"
    ],
    "Revisions": [{
      "Id": "3afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEEe7",
      "Comment": "Revision_Comment_One"
    }],
    "DataSetIds": [
      "4afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEEe8",
```

```
    ],
    "DataSets": [{
      "Id": "4afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEEe8",
      "Name": "Data_Set_Hello_World_One"
    }],
    "Product": {
      "Id": "prod-uEXAMPLEeabc1d",
    }
  }
}
```

自動エクスポートジョブのイベントが失敗しました

自動エクスポートジョブが失敗すると、サブスクライバーは 自動エクスポートジョブ失敗 イベントを受け取ります。

以下は、自動エクスポートジョブ失敗 のイベント本文の例です。

```
{
  "version": "0",
  "id": "dc529cb6-2e23-4c5f-d020-EXAMPLE92231",
  "detail-type": "Auto-Export job failed",
  "source": "aws.dataexchange",
  "account": "123456789012",
  "time": "2020-07-29T18:24:04Z",
  "region": "us-east-1",
  "resources": [
    "prod-uEXAMPLEeabc1d"
  ],
  "detail": {
    "RevisionIds": [
      "3afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEEe7"
    ],
    "Revisions": [{
      "Id": "3afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEEe7",
      "Comment": "Revision_Comment_One"
    }],
    "DataSetIds": [
      "4afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEEe8",
      "5bgd734EXAMPLE100f7gdd9EXAMPLEEe9"
    ],
    "DataSets": [{
      "Id": "4afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEEe8",
```

```
        "Name": "Data_Set_Hello_World_One"
      },
      {
        "Id": "5bgd734EXAMPLE100f7gdd9EXAMPLEe9",
        "Name": "Data_Set_Hello_World_Two"
      }
    ],
    "Product": {
      "Id": "prod-uEXAMPLEabc1d",
    }
  }
}
```

プロバイダーが生成するデータ更新通知のイベント

プロバイダーがデータ更新の通知を送信すると、サブスクライバーは「データセット内データ更新」という詳細タイプのイベントを受け取ります。

以下は、プロバイダーがデータ更新の通知を送信したときの通知のイベント本文の例です。

```
{
  "version": "0",
  "id": "dc529cb6-2e23-4c5f-d020-EXAMPLE92231",
  "detail-type": "Data Updated in Data Set",
  "source": "aws.dataexchange",
  "account": "123456789012",
  "time": "2023-08-21T10:29:48Z",
  "region": "us-east-1",
  "resources": [
    "arn:aws:dataexchange:us-east-1::data-sets/b5538f9f45e4613d448eb9eEXAMPLEc6"
  ],
  "detail": {
    "DataSet": {
      "Id": "b5538f9f45e4613d448eb9eEXAMPLEc6",
      "Name": "Example Data Set",
      "AssetType": "S3_DATA_ACCESS"
    },
    "Product": {
      "Id": "prod-7ip6EXAMPLEhs",
      "Name": "Example Data Product",
      "ProviderContact": "no-reply@marketplace.aws"
    },
    "Notification": {
```

```
    "Comment": "This is a test DATA_UPDATE notification.",
    "Type": "DATA_UPDATE",
    "Details": {
      "DataUpdate": {
        "DataUpdatedAt": "2023-07-12T00:00:00Z"
      }
    },
    "Scope": {
      "S3DataAccesses": [{
        "KeyPrefixes": [
          "KeyPrefix"
        ],
        "Keys": [
          "KeyA",
          "KeyB"
        ]
      }]
    }
  }
}
```

プロバイダーが生成するスキーマ変更通知のイベント

プロバイダーがスキーマ変更の通知を送信すると、サブスクライバーは「データセットのスキーマ変更計画済み」という詳細タイプのイベントを受け取ります。

以下は、プロバイダーがスキーマ変更通知を送信したときの通知のイベント本文の例です。

```
{
  "version": "0",
  "id": "dc529cb6-2e23-4c5f-d020-EXAMPLE92231",
  "detail-type": "Schema Change Planned for Data Set",
  "source": "aws.dataexchange",
  "account": "123456789012",
  "time": "2023-08-21T10:29:48Z",
  "region": "us-east-1",
  "resources": [
    "arn:aws:dataexchange:us-east-1::data-sets/b5538f9f45e4613d448eb9eEXAMPLEc6"
  ],
  "detail": {
    "DataSet": {
      "Id": "b5538f9f45e4613d448eb9eEXAMPLEc6",
```

```
    "Name": "Example Data Set",
    "AssetType": "S3_DATA_ACCESS"
  },
  "Product": {
    "Id": "prod-7ip6EXAMPLEhs",
    "Name": "Example Data Product",
    "ProviderContact": "no-reply@marketplace.aws"
  },
  "Notification": {
    "Comment": "This is a test SCHEMA_CHANGE notification.",
    "Type": "SCHEMA_CHANGE",
    "Details": {
      "SchemaChange": {
        "Changes": [{
          "Type": "ADD",
          "Description": "This object is being added to the bucket or
a field is being added to the object.",
          "Name": "KeyA"
        },
        {
          "Type": "REMOVE",
          "Description": "This object is being removed from the
bucket or a field is being removed from the object.",
          "Name": "KeyB"
        },
        {
          "Type": "MODIFY",
          "Description": "The usage or meaning of this key prefix is
changing or something is changing about every file under this key prefix.",
          "Name": "KeyPrefix"
        }
      ],
      "SchemaChangeAt": "2023-09-08T13:46:01Z"
    }
  },
  "Scope": {
    "S3DataAccesses": [{
      "KeyPrefixes": [
        "KeyPrefix"
      ],
      "Keys": [
        "KeyA",
        "KeyB"
      ]
    }
  ]
}
```

```
    ]
  }
}
```

プロバイダーが生成するデータ遅延通知のイベント

プロバイダーがデータ遅延の通知を送信すると、サブスクライバーは「データセット更新遅延」という詳細タイプのイベントを受信します。

以下は、プロバイダーがデータ遅延通知を送信したときの通知のイベント本文の例です。

```
{
  "version": "0",
  "id": "dc529cb6-2e23-4c5f-d020-EXAMPLE92231",
  "detail-type": "Data Set Update Delayed",
  "source": "aws.dataexchange",
  "account": "123456789012",
  "time": "2023-08-21T10:29:48Z",
  "region": "us-east-1",
  "resources": [
    "arn:aws:dataexchange:us-east-1::data-sets/b5538f9f45e4613d448eb9eEXAMPLEc6"
  ],
  "detail": {
    "DataSet": {
      "Id": "b5538f9f45e4613d448eb9eEXAMPLEc6",
      "Name": "Example Data Set",
      "AssetType": "S3_DATA_ACCESS"
    },
    "Product": {
      "Id": "prod-7ip6EXAMPLEhs",
      "Name": "Example Data Product",
      "ProviderContact": "no-reply@marketplace.aws"
    },
    "Notification": {
      "Comment": "This is a test DATA_DELAY notification.",
      "Type": "DATA_DELAY",
      "Scope": {
        "S3DataAccesses": [{
          "KeyPrefixes": [
            "KeyPrefix"
          ]
        }
      ],
    }
  }
}
```

```
        "Keys": [
            "KeyA",
            "KeyB"
        ]
    }
}
```

プロバイダーが生成するデータ廃止通知のイベント

プロバイダーがデータ廃止の通知を送信すると、サブスクライバーは「データセットの廃止予定」という詳細タイプのイベントを受け取ります。

以下は、プロバイダーがデータ廃止の通知を送信したときの通知のイベント本文の例です。

```
{
  "version": "0",
  "id": "dc529cb6-2e23-4c5f-d020-EXAMPLE92231",
  "detail-type": "Deprecation Planned for Data Set",
  "source": "aws.dataexchange",
  "account": "123456789012",
  "time": "2023-08-21T10:29:48Z",
  "region": "us-east-1",
  "resources": [
    "arn:aws:dataexchange:us-east-1::data-sets/b5538f9f45e4613d448eb9eEXAMPLEc6"
  ],
  "detail": {
    "DataSet": {
      "Id": "b5538f9f45e4613d448eb9eEXAMPLEc6",
      "Name": "Example Data Set",
      "AssetType": "S3_DATA_ACCESS"
    },
    "Product": {
      "Id": "prod-7ip6EXAMPLEhs",
      "Name": "Example Data Product",
      "ProviderContact": "no-reply@marketplace.aws"
    },
    "Notification": {
      "Comment": "This is a test DEPRECATION notification.",
      "Type": "DEPRECATION",
      "Details": {
```

```
    "Deprecation": {
      "DeprecationAt": "2023-09-08T13:46:01Z"
    },
  },
  "Scope": {
    "S3DataAccesses": [{
      "KeyPrefixes": [
        "KeyPrefix"
      ],
      "Keys": [
        "KeyA",
        "KeyB"
      ]
    }]
  }
}
```

AWS Data Exchange イベントのユーザー通知

[AWS ユーザー通知](#) を使用して、AWS Data Exchange イベントについて通知する配信チャネルを設定できます。指定したルールにイベントが一致すると、通知を受け取ります。Eメール、AWS Chatbot チャット通知、AWS Console Mobile Application プッシュ通知など、複数のチャネルを通じてイベントの通知を受信できます。ユーザー通知コンソールのコンソール通知センターを使用してAWS通知を表示することもできます。AWS ユーザー通知は集約をサポートしているため、特定のイベント中に受信する通知の数を減らすことができます。詳細については、「[AWS ユーザー通知ユーザーガイド](#)」を参照してください。

AWS ユーザー通知を使用するには、正しいAWS Identity and Access Management (IAM) アクセス許可が必要です。アクセスIAM許可の設定の詳細については、[AWS 「ユーザー通知ユーザーガイド」](#)のAWS 「ユーザー通知の設定」を参照してください。

次の表は、AWS ユーザー通知を使用してAWS Data Exchange イベント用に設定できる通知に関する詳細情報を示しています。

アクション	サブスクライバーが受信した通知
ファイルベースのデータセットを製品に追加し、発行する	Data Sets Published To Product

アクション	サブスクライバーが受信した通知
Amazon Redshift データセットを製品に追加し、発行する	Redshift Data Shares Data Sets Published To Product
ファイルベースのデータセットのリビジョンを製品に追加し、発行する	Revision Published To Data Set
製品へのリビジョンを取り消します。	Revision Revoked
Amazon Redshift データセットのリビジョンを製品に追加し、発行する	Revision Published To Redshift Data Shares Data Set
Amazon Redshift リソースに対して、サブスクライバーからのアクセスを削除する可能性のあるアクションを実行します。	Action Performed On Redshift Data Share By Provider
Amazon Redshift リソースに対してサブスクライバーからのアクセスを削除するアクションを実行します	Redshift Data Share Access Lost
Amazon API Gateway データセットを製品に追加して公開します	API Gateway API Data Sets Published To Product
Amazon API Gateway データセットリビジョンを製品に追加して公開します	Revision Published To API Gateway API Data Set
AWS Lake Formation 製品にデータセットを追加し、公開します (プレビュー)	Lake Formation Data Permission Data Sets Published To Product (Preview)
AWS Lake Formation 製品にデータセットリビジョンを追加し、公開します (プレビュー)	Revision Published To Lake Formation Data Permission Data Set (Preview)
自動エクスポートジョブ完了	Auto-export Job Completed
自動エクスポートジョブ失敗	Auto-export Job Failed
データ更新の通知を送信する	Data Updated in Data Set

アクション	サブスクライバーが受信した通知
スキーマ変更の通知を送信する	Schema Change Planned for Data Set
データ遅延の通知を送信する	Data Set Update Delayed
データ廃止の通知を送信する	Deprecation Planned for Data Set

を使用した通話のログ記録 AWS Data Exchange API AWS CloudTrail

AWS Data Exchange は AWS CloudTrail、ユーザー、ロール、または AWS のサービスによって実行されたアクションの記録を提供するサービスと統合されています AWS Data Exchange。は、AWS Data Exchange コンソールからの呼び出しや オペレーションへの AWS Data Exchange APIコード呼び出しを含む、オペレーションへのすべての呼び出しをイベントとして AWS CloudTrail キャプチャします AWS Data Exchange API。

証跡を作成する場合は、の CloudTrail イベントを含む Amazon Simple Storage Service (Amazon S3) バケットへのイベントの継続的配信を有効にできます AWS Data Exchange。証跡を設定しない場合でも、CloudTrail コンソールのイベント履歴で最新のイベントを表示できます。によって収集された情報を使用して CloudTrail、に対して行われたリクエスト AWS Data Exchange、リクエスト元の IP アドレス、リクエスト者、リクエスト日時などの詳細を確認できます。

Important

実行できるアクションの一部は、コンソール限定アクションです。AWS SDK または AWS Command Line Interface () APIには対応するはありませんAWS CLI。これらは、製品の公開やサブスクライブなどの AWS Marketplace 機能に依存するアクションです。は、これらのコンソールのみアクションのサブセットの CloudTrail ログ AWS Data Exchange を提供します。CloudTrail ログが提供されているコンソールのみアクションの次のリストを参照してください。

詳細については、[「とは」を参照してください AWS CloudTrail。](#)

すべての [AWS Data Exchange APIs](#) および対応するコンソールアクションの CloudTrail イベントに加えて、は、AWS Marketplaceがバックアップしたコンソールのみアクションのサブセットの

CloudTrail 証跡 AWS Data Exchange も提供します。AWS Data Exchange は、次のコンソールのみ
のアクションの CloudTrail ログを提供します。

サブスクライバーアクション

- 製品をサブスクライブする
- サブスクリプション検証リクエストを送信する
- サブスクリプションの自動更新を有効にする
- サブスクリプションの自動更新を無効にする
- サブスクリプション検証リクエストをキャンセルする
- アクティブなサブスクリプションをリストする
- サブスクリプションのステータスを確認する
- ターゲットのプライベートオファーを一覧表示する
- 特定の製品およびオファーの詳細を表示する
- 特定のサブスクリプションの詳細を表示する
- 特定のサブスクリプション検証リクエストの詳細を表示する

プロバイダーアクション

- 製品を公開する
- 製品を非公開にする
- 製品を編集する
- カスタムオファーを作成する
- カスタムオファーを編集する
- サブスクリプション検証リクエストを承認する
- サブスクリプション検証リクエストを拒否する
- サブスクライバーの連絡先情報を削除する
- サブスクリプション検証リクエストをリストする
- 特定のサブスクリプション検証リクエストの詳細を表示する
- データセットの通知を送信

AWS Data Exchange の情報 CloudTrail

CloudTrail を作成すると、 が有効になります AWS アカウント。でアクティビティが発生すると AWS Data Exchange、アクティビティは CloudTrail イベント履歴 の他の AWS サービスイベントとともにイベントに記録されます。で最近のイベントを表示、検索、ダウンロードできます AWS アカウント。詳細については、AWS CloudTrail 「[ユーザーガイド](#)」の「[イベント履歴を含む CloudTrail イベントの表示](#)」を参照してください。

のイベントなど AWS アカウント、 内のイベントの継続的なレコードについては AWS Data Exchange、trail を作成します。この証跡 CloudTrail を使用してログファイルを S3 バケットに配信します。デフォルトでは、コンソールを使用して証跡を作成すると、すべての に適用されます AWS リージョン。証跡は、すべてのリージョンからのイベントをログし、ユーザー指定の S3 バケットにログファイルを配信します。CloudTrail ログで収集されたイベントデータをさらに分析してそれに対応するように、他の AWS サービスを設定できます。詳細については、以下を参照してください。

- [証跡を作成するための概要](#)
- [CloudTrail サポートされているサービスと統合](#)
- [の Amazon SNS Notifications の設定 CloudTrail](#)
- [複数のリージョンからの CloudTrail ログファイルの受信](#)
- [複数のアカウントからの CloudTrail ログファイルの受信](#)

すべての AWS Data Exchange アクションは、AWS Data Exchange API リファレンスに記載されています。を除くすべての AWS Data Exchange アクションは SendAPIAsset、 によってログに記録されます CloudTrail。例えば、CreateDataSet、 、および ListRevisionAssetsAPI オペレーションを呼び出すと StartImportAssetsFromS3Workflow、 CloudTrail ログファイルにエントリが生成されます。

各イベントまたはログエントリには、誰がリクエストを生成したかという情報が含まれます。アイデンティティ情報は、以下を判別するのに役立ちます:

- リクエストがルートまたは AWS Identity and Access Management (IAM) 認証情報を使用して行われたかどうか。
- リクエストがロールまたはフェデレーションユーザーのテンポラリなセキュリティ認証情報を使用して行われたかどうか。
- リクエストが別の AWS サービスによって行われたかどうか。

詳細については、[CloudTrail userIdentity 「要素」](#) を参照してください。

AWS Data Exchange ログファイルエントリについて

証跡は、指定した S3 バケットにログファイルとしてイベントを配信できるようにする設定です。CloudTrail ログファイルには 1 つ以上のログエントリが含まれています。イベントは、任意のソースからの単一のリクエストを表し、リクエストされたアクション、アクションの日付と時刻、リクエストパラメータなどに関する情報が含まれます。CloudTrail ログファイルはパブリックAPIコールの順序付けられたスタックトレースではないため、どの順序でも表示されません。

Note

これらの例は、読みやすさを向上させるためにフォーマットされています。CloudTrail ログファイルでは、すべてのエントリとイベントが 1 行に連結されます。この例では、1 つの AWS Data Exchange エントリに制限されています。実際の CloudTrail ログファイルには、複数の AWS サービスからのエントリとイベントが表示されます。

次の例は、CreateDataSetオペレーションを示す CloudTrail ログエントリを示しています。

```
{
  "eventVersion": "1.05",
  "userIdentity": {
    "type": "AssumedRole",
    "principalId": "AIDACKCEVSQ6C2EXAMPLE:account_name",
    "arn": "arn:aws:sts::123456789012:user/Mary_Major",
    "accountId": "123456789012",
    "accessKeyId": "AKIAIOSFODNN7EXAMPLE",
    "sessionContext": {
      "attributes": {
        "mfaAuthenticated": "false",
        "creationDate": "2018-06-20T18:32:25Z"
      },
      "sessionIssuer": {
        "type": "Role",
        "principalId": "AIDACKCEVSQ6C2EXAMPLE",
        "arn": "arn:aws:iam::123456789012:role/Admin",
        "accountId": "123456789012",
        "userName": "username"
      }
    }
  }
}
```

```
  },
  "eventTime": "2018-06-20T19:04:36Z",
  "eventSource": "dataexchange.amazonaws.com",
  "eventName": "CreateDataSet",
  "awsRegion": "us-east-1",
  "sourceIPAddress": "203.0.113.12",
  "userAgent": "console.amazonaws.com",
  "requestParameters": {
    "Name": "MyDataSet",
    "AssetType": "S3_SNAPSHOT",
    "Description": "This is my data set"
  },
  "responseElements": {
    "Origin": "OWNED",
    "AssetType": "S3_SNAPSHOT",
    "Name": "MyDataSet",
    "CreatedAt": 1726255485679,
    "UpdatedAt": 1726255485679,
    "Arn": "arn:aws:dataexchange:us-east-1:123456789012:data-sets/
DataSetIdentifier",
    "Id": "DataSetIdentifier",
    "Description": "This is my data set"
  },
  "requestID": "cb8c167e-EXAMPLE",
  "eventID": "e3c6f4ce-EXAMPLE",
  "readOnly": false,
  "eventType": "AwsApiCall",
  "recipientAccountId": "123456789012"
}>
```

今後のログ記録の変更 AWS Data Exchange CloudTrail点

このセクションでは、のでのAPI呼び出しのログ記録 AWS CloudTrail に関する今後の変更点をまとめます AWS Data Exchange。この変更の発効日は 2023 年 9 月 1 日以降です。この変更がモニタリング、分析、または監査に影響を与えないように、CloudTrail 使用状況を確認することをお勧めします。質問や懸念事項については、[AWS Support](#) にメールメッセージを送信してください。

顧客ペルソナ	イベントの説明	前 eventName	新規 eventName	前 eventSource	新規 eventSource
サブスクライバー	製品をサブスクライブする	Subscribe	CreateAgreementRequest および AcceptAgreementRequest	aws-marketplace.amazonaws.com	agreement-marketplace.amazonaws.com
サブスクライバー	サブスクリプション検証リクエストを送信する	Subscribe	CreateAgreementRequest および AcceptAgreementRequest	aws-marketplace.amazonaws.com	agreement-marketplace.amazonaws.com
サブスクライバー	サブスクリプションの自動更新を有効にする	Subscribe	CreateAgreementRequest および AcceptAgreementRequest	aws-marketplace.amazonaws.com	agreement-marketplace.amazonaws.com
サブスクライバー	サブスクリプションの自動更新を無効にする	Unsubscribe	CreateAgreementRequest および AcceptAgreementRequest	aws-marketplace.amazonaws.com	agreement-marketplace.amazonaws.com

顧客ペルソナ	イベントの説明	前 eventName	新規 eventName	前 eventSource	新規 eventSource
サブスクライバー	サブスクリプション検証リクエストをキャンセルする	CancelAgreementRequest	CancelAgreementRequest	aws-marketplace.amazonaws.com	agreement-marketplace.amazonaws.com
プロバイダー	製品を公開する	StartChangeSet	StartChangeSet	aws-marketplace.amazonaws.com	marketplacecatalog.amazonaws.com
プロバイダー	製品を編集する	StartChangeSet	StartChangeSet	aws-marketplace.amazonaws.com	marketplacecatalog.amazonaws.com
プロバイダー	製品を発行解除する	StartChangeSet	StartChangeSet	aws-marketplace.amazonaws.com	marketplacecatalog.amazonaws.com
プロバイダー	カスタムオファーを作成する	StartChangeSet	StartChangeSet	aws-marketplace.amazonaws.com	marketplacecatalog.amazonaws.com
プロバイダー	カスタムオファーを編集する	StartChangeSet	StartChangeSet	aws-marketplace.amazonaws.com	marketplacecatalog.amazonaws.com
プロバイダー	サブスクリプション検証リクエストを承認する	AcceptAgreementApprovalRequest	AcceptAgreementApprovalRequest	aws-marketplace.amazonaws.com	agreement-marketplace.amazonaws.com

顧客ペルソナ	イベントの説明	前 eventName	新規 eventName	前 eventSource	新規 eventSource
プロバイダー	サブスクリプション検証リクエストを拒否する	RejectAgreementApprovalRequest	RejectAgreementApprovalRequest	aws-marketplace.amazonaws.com	agreement-marketplace.amazonaws.com
プロバイダー	サブスクライバーの連絡先情報を削除する	UpdateAgreementApprovalRequest	UpdateAgreementApprovalRequest	aws-marketplace.amazonaws.com	agreement-marketplace.amazonaws.com

セキュリティ

のクラウドセキュリティが最優先事項 AWS です。お客様は AWS、セキュリティに敏感な組織の要件を満たすように構築された複数のデータセンターとネットワークアーキテクチャを活用できます。

セキュリティは、AWS とユーザーの間で責任を共有します。[責任共有モデル](#)では、これをクラウドのセキュリティおよびクラウド内のセキュリティとして説明しています。

- クラウドのセキュリティ – AWS で AWS サービスを実行するインフラストラクチャを保護する責任があります AWS クラウド。は、安全に使用できるサービス AWS も提供します。当社のセキュリティの有効性は、[AWSコンプライアンスプログラム](#)の一環として、サードパーティーの監査人によって定期的にテストおよび検証されます。に適用されるコンプライアンスプログラムについては AWS Data Exchange、[AWS「コンプライアンスプログラムによる対象範囲内のサービス」](#)を参照してください。
- クラウドのセキュリティ – お客様の責任は、使用する AWS サービスによって決まります。ユーザーは、ユーザーのデータの機密性、組織の要件、および適用法と規制などのその他要因に対する責任も担います。

このドキュメントは、AWS Data Exchangeの使用時における責任共有モデルの適用方法を理解するために役立ちます。以下のトピックでは、セキュリティとコンプライアンスの目的を満たす AWS Data Exchange ように を設定する方法を示します。また、AWS Data Exchange リソースのモニタリングと保護に役立つ他の AWS サービスの使用方法についても説明します。

でのデータ保護 AWS Data Exchange

責任 AWS [共有モデル](#)、 のデータ保護に適用されます AWS Data Exchange。このモデルで説明されているように、AWS は、すべての を実行するグローバルインフラストラクチャを保護する責任があります AWS クラウド。お客様は、このインフラストラクチャでホストされているコンテンツに対する管理を維持する責任があります。また、使用する AWS のサービスのセキュリティ設定と管理タスクもユーザーの責任となります。データプライバシーの詳細については、「[データプライバシーFAQ](#)」を参照してください。欧州でのデータ保護の詳細については、[AWS「責任共有モデル」とGDPR](#) AWS 「セキュリティブログ」のブログ記事を参照してください。

データ保護の目的で、認証情報を保護し AWS アカウント、AWS IAM Identity Center または AWS Identity and Access Management () を使用して個々のユーザーを設定することをお勧めしますIAM。この方法により、それぞれのジョブを遂行するために必要な権限のみが各ユーザーに付与されます。また、次の方法でデータを保護することもお勧めします:

- 各アカウントで多要素認証 (MFA) を使用します。
- SSL/TLS を使用して AWS リソースと通信します。1.2 が必要で TLS、1.3 TLS をお勧めします。
- で API とユーザーアクティビティのログ記録を設定します AWS CloudTrail。証 CloudTrail 跡を使用して AWS アクティビティをキャプチャする方法については、AWS CloudTrail 「ユーザーガイド」の [CloudTrail 「証跡の操作」](#) を参照してください。
- AWS 暗号化ソリューションと、内のすべてのデフォルトのセキュリティコントロールを使用します AWS のサービス。
- Amazon Macie などの高度なマネージドセキュリティサービスを使用します。これらは、Amazon S3 に保存されている機密データの検出と保護を支援します。
- コマンドラインインターフェイスまたは AWS を介して にアクセスするときに FIPS 140-3 検証済みの暗号化モジュールが必要な場合は API、FIPS エンドポイントを使用します。利用可能な FIPS エンドポイントの詳細については、[「連邦情報処理標準 \(FIPS\) 140-3」](#) を参照してください。

お客様の E メールアドレスなどの極秘または機密情報は、タグ、または名前フィールドなどの自由形式のテキストフィールドに配置しないことを強くお勧めします。これには、コンソール、AWS Data Exchange または AWS のサービス を使用して API AWS CLI または他の を操作する場合も含まれます AWS SDKs。名前に使用する自由記述のテキストフィールドやタグに入力したデータは、課金や診断ログに使用される場合があります。URL を外部サーバーに提供する場合は、そのサーバーへのリクエストを検証 URL するために認証情報を に含めないことを強くお勧めします。

AWS Data Exchange には、データセットに存在するコンテンツの保護に役立つ以下のオプションが用意されています。

トピック

- [保管中の暗号化](#)
- [転送中の暗号化](#)
- [コンテンツに対するアクセス制限](#)

保管中の暗号化

AWS Data Exchange は、追加の設定を必要とせずに、保管中のサービスに保存されているすべてのデータ製品を暗号化します。この暗号化は、 を使用する場合に自動的に行われます AWS Data Exchange。

転送中の暗号化

AWS Data Exchange は転送中の暗号化に Transport Layer Security (TLS) とクライアント側の暗号化を使用します。この通信 AWS Data Exchange は常に を介して行われるHTTPSため、データは転送中に常に暗号化されます。この暗号化は、 を使用するときデフォルトで設定されます AWS Data Exchange。

コンテンツに対するアクセス制限

ベストプラクティスとして、適切なユーザーのサブセットへのアクセスを制限する必要があります。 を使用すると AWS Data Exchange、 を使用するユーザー、グループ、ロール AWS アカウントに適切なアクセス許可を付与することで、これを行うことができます。IAM エンティティのロールとポリシーの詳細については、[IAM「ユーザーガイド」](#)を参照してください。

Amazon S3 データアクセスのキー管理

このページは、プロバイダーが SSE- を使用して暗号化されたオブジェクトを共有している Amazon S3 データアクセスタイプに固有のものですKMS。サブスクライバーは、アクセスに使用するキーを付与されている必要があります。

Amazon S3 バケットに AWS KMS カスタマーマネージドキーを使用して暗号化されたデータが含まれている場合は、それらを AWS KMS keys と共有 AWS Data Exchange して Amazon S3 データアクセスデータセットを設定する必要があります。詳細については、「[the section called “ステップ 2: Amazon S3 データアクセスを設定する”](#)」を参照してください。

トピック

- [AWS KMS 許可の作成](#)
- [暗号化コンテキストと許可制約](#)
- [AWS KMS keys での のモニタリング AWS Data Exchange](#)

AWS KMS 許可の作成

Amazon S3 データアクセスデータセット AWS KMS keys の一部として を指定すると、AWS Data Exchange は各 AWS KMS key 共有に AWS KMS 許可を作成します。親grant と呼ばれるこのgrant は、サブスクライバーに追加の AWS KMS grant を作成する AWS Data Exchange アクセス許可を付与するために使用されます。これらの追加許可は子許可補助金と呼ばれます。各サブスクライバーには 1 つの AWS KMS 許可が付与されます。サブスクライバーは、 を復号するアクセス許

可を取得します AWS KMS key。その後、共有されている暗号化された Amazon S3 オブジェクトを復号して使用できます。詳細については、「AWS Key Management Service デベロッパーガイド」の「[AWS KMSでの許可](#)」を参照してください。

AWS Data Exchange は、AWS KMS 親グラントを使用して、作成した AWS KMS グラントのライフサイクルを管理します。サブスクリプションが終了すると、は対応するサブスクライバー用に作成された AWS KMS 子グラントを AWS Data Exchange 廃止します。リビジョンが取り消された場合、またはデータセットが削除された場合、は AWS KMS 親グラントを AWS Data Exchange 廃止します。AWS KMS アクションの詳細については、[AWS KMS APIリファレンス](#) を参照してください。

暗号化コンテキストと許可制約

AWS Data Exchange は、リクエストに指定された暗号化コンテキストが含まれている場合にのみ、許可制約を使用して復号オペレーションを許可します。Amazon S3 バケットキー機能を使用して Amazon S3 オブジェクトを暗号化し、と共有できます AWS Data Exchange。バケット Amazon リソースネーム (ARN) は、Amazon S3 によって暗号化コンテキストとして暗黙的に使用されます。次の例は、が AWS KMS 作成するすべての許可の許可制約ARNとしてバケット AWS Data Exchange を使用することを示しています。

```
"Constraints": {
  "EncryptionContextSubset": "aws:s3:arn": "arn:aws:s3:::<Bucket ARN>"
}
```

AWS KMS keys での のモニタリング AWS Data Exchange

AWS KMS カスタマーマネージドキーをと共有する場合 AWS Data Exchange、[AWS CloudTrail](#)を使用して、AWS Data Exchange またはデータサブスクライバーがに送信するリクエストを追跡できます AWS KMS。以下は、CreateGrantおよびへのDecrypt呼び出しのCloudTrail ログがどのように表示されるかの例です AWS KMS。

CreateGrant for parent

CreateGrant は、自体のためにによって作成された親許可 AWS Data Exchange 用です。

```
{
  "eventVersion": "1.08",
  "userIdentity": {
    "type": "AssumedRole",
```

```
"principalId": "AROAIKDTESTANDEXAMPLE:Provider01",
"arn": "arn:aws:sts::<your-account-id>:assumed-role/Admin/Provider01",
"accountId": "<your-account-id>",
"accessKeyId": "AKIAIOSFODNN7EXAMPLE",
"sessionContext": {
  "sessionIssuer": {
    "type": "Role",
    "principalId": "AROAIKDTESTANDEXAMPLE",
    "arn": "arn:aws:iam::<your-account-id>:role/Admin/Provider01",
    "accountId": "<your-account-id>",
    "userName": "Admin"
  },
  "webIdFederationData": {},
  "attributes": {
    "creationDate": "2023-02-16T17:29:23Z",
    "mfaAuthenticated": "false"
  }
},
"invokedBy": "datax.amazonaws.com"
},
"eventTime": "2023-02-16T17:32:47Z",
"eventSource": "kms.amazonaws.com",
"eventName": "CreateGrant",
"awsRegion": "us-east-2",
"sourceIPAddress": "datax.amazonaws.com",
"userAgent": "datax.amazonaws.com",
"requestParameters": {
  "keyId": "<Key ARN of the Key you shared with AWS Data Exchange>",
  "operations": [
    "CreateGrant",
    "Decrypt",
    "RetireGrant"
  ],
  "granteePrincipal": "dataexchange.us-east-2.amazonaws.com",
  "retiringPrincipal": "dataexchange.us-east-2.amazonaws.com",
  "constraints": {
    "encryptionContextSubset": {
      "aws:s3:arn": "arn:aws:s3:::<Your Bucket ARN>"
    }
  }
},
"responseElements": {
  "grantId": "<KMS Grant ID of the created Grant>",
  "keyId": "<Key ARN of the Key you shared with AWS Data Exchange>"
}
```

```
  },
  "requestID": "ff000af-00eb-00ce-0e00-ea000fb0fba0SAMPLE",
  "eventID": "ff000af-00eb-00ce-0e00-ea000fb0fba0SAMPLE",
  "readOnly": false,
  "resources": [
    {
      "accountId": "<Your Account Id>",
      "type": "AWS::KMS::Key",
      "ARN": "<Key ARN of the Key you shared with AWS Data Exchange>"
    }
  ],
  "eventType": "AwsApiCall",
  "managementEvent": true,
  "recipientAccountId": "<Your Account Id>",
  "eventCategory": "Management"
}
```

CreateGrant for child

CreateGrant は、サブスクリイバー用に によって作成された子許可 AWS Data Exchange 用です。

```
{
  "eventVersion": "1.08",
  "userIdentity": {
    "type": "AWSService",
    "invokedBy": "datax.amazonaws.com"
  },
  "eventTime": "2023-02-15T23:15:49Z",
  "eventSource": "kms.amazonaws.com",
  "eventName": "CreateGrant",
  "awsRegion": "us-east-2",
  "sourceIPAddress": "datax.amazonaws.com",
  "userAgent": "datax.amazonaws.com",
  "requestParameters": {
    "keyId": "<Key ARN of the Key you shared with AWS Data Exchange>",
    "operations": [
      "Decrypt"
    ],
    "granteePrincipal": "<Subscriber's account Id>",
    "retiringPrincipal": "dataexchange.us-east-2.amazonaws.com",
    "constraints": {
```

```
        "encryptionContextSubset": {
            "aws:s3:arn": "arn:aws:s3:::<Your Bucket ARN>"
        }
    },
    "responseElements": {
        "grantId": "<KMS Grant ID of the created Grant>",
        "keyId": "<Key ARN of the Key you shared with AWS Data Exchange>"
    },
    "requestID": "ff000af-00eb-00ce-0e00-ea000fb0fba0SAMPLE",
    "eventID": "ff000af-00eb-00ce-0e00-ea000fb0fba0SAMPLE",
    "readOnly": false,
    "resources": [
        {
            "accountId": "<Your Account Id>",
            "type": "AWS::KMS::Key",
            "ARN": "<Key ARN of the Key you shared with AWS Data Exchange>"
        }
    ],
    "eventType": "AwsApiCall",
    "managementEvent": true,
    "recipientAccountId": "<Your Account Id>",
    "sharedEventID": "ff000af-00eb-00ce-0e00-ea000fb0fba0SAMPLE ",
    "eventCategory": "Management"
}
```

Decrypt

Decryptは、サブスクライバーがサブスクライブしている暗号化データを読み取ろうとしたときに呼び出されます。

```
{
  "eventVersion": "1.08",
  "userIdentity": {
    "type": "AWSAccount",
    "principalId": "AROAIIGDTESTANDEXAMPLE:Subscriber01",
    "accountId": "<subscriber-account-id>",
    "invokedBy": "<subscriber's IAM identity>"
  },
  "eventTime": "2023-02-15T23:28:30Z",
  "eventSource": "kms.amazonaws.com",
  "eventName": "Decrypt",
  "awsRegion": "us-east-2",
```

```
"sourceIPAddress": "<subscriber's IP address>",
"userAgent": "<subscriber's user agent>",
"requestParameters": {
  "encryptionContext": {
    "aws:s3:arn": "arn:aws:s3:::<Your Bucket ARN>"
  },
  "encryptionAlgorithm": "SYMMETRIC_DEFAULT"
},
"responseElements": null,
"requestID": "\"ff000af-00eb-00ce-0e00-ea000fb0fba0SAMPLE\"",
"eventID": "\"ff000af-00eb-00ce-0e00-ea000fb0fba0SAMPLE\"",
"readOnly": true,
"resources": [
  {
    "accountId": "<Your Account Id>",
    "type": "AWS::KMS::Key",
    "ARN": "<Key ARN of the Key you shared with AWS Data Exchange>"
  }
],
"eventType": "AwsApiCall",
"managementEvent": true,
"recipientAccountId": "602466227860",
"sharedEventID": "bcf4d02a-31ea-4497-9c98-4c3549f20a7b",
"eventCategory": "Management"
}
```

でのアイデンティティとアクセスの管理 AWS Data Exchange

を使用してインポートジョブを作成する AWS Data Exchange、AWS Data Exchange コンソールで製品を AWS SDK サブスクリプションするなど、でオペレーションを実行するには、AWS Identity and Access Management (IAM) は承認済み AWS ユーザーであることを認証する必要があります。例えば、コンソールを使用している場合 AWS Data Exchange は、サインイン認証情報を指定して ID AWS を認証します。

ID を認証すると、は一連のオペレーションとリソースに対する一連の定義済みのアクセス許可 AWS を使用してへのアクセスIAMを制御します。アカウント管理者の場合は、IAMを使用して、アカウントに関連付けられているリソースへの他のユーザーのアクセスを制御できます。

トピック

- [認証](#)

- [アクセスコントロール](#)
- [AWS Data Exchange API アクセス許可: アクションとリソースリファレンス](#)
- [AWS の マネージドポリシー AWS Data Exchange](#)

認証

には、次のいずれかのタイプの ID AWS でアクセスできます。

- **AWS アカウント ルートユーザー** – を作成するときは AWS アカウント、アカウント内のすべてのおよび リソースへの AWS のサービス 完全なアクセス権を持つ 1 つのサインイン ID から始めます。この ID は AWS アカウント ルートユーザーと呼ばれ、アカウントの作成に使用した E メールアドレスとパスワードでサインインしてアクセスします。日常的なタスクには、ルートユーザーを使用しないことを強くお勧めします。ルートユーザーの認証情報は保護し、ルートユーザーでしか実行できないタスクを実行するときに使用します。ルートユーザーとしてサインインする必要があるタスクの完全なリストについては、IAM 「ユーザーガイド」の [「ルートユーザーの認証情報を必要とするタスク」](#) を参照してください。
- **ユーザー** – [ユーザー](#) は、特定のカスタム許可を持つ AWS アカウント 内のアイデンティティです。IAM 認証情報を使用してサインインし、AWS Management Console や AWS Support センターなどの AWS ウェブページを保護することができます。
- **IAM ロール** – [IAM ロール](#) は、特定のアクセス許可を持つアカウントで作成できる IAM ID です。IAM ロールは、で AWS ID ができることとできないことを決定するアクセス許可ポリシーを持つ ID であるという点で、IAM ユーザーと似ています AWS。ただし、ユーザーは 1 人の特定の人に一意に関連付けられますが、ロールはそれを必要とする任意の人が引き受けるようになっています。また、ロールには標準の長期認証情報 (パスワードやアクセスキーなど) も関連付けられません。代わりに、ロールを引き受けると、ロールセッション用の一時的なセキュリティ認証情報が提供されます。ロールと一時的な認証情報は、次の状況で役立ちます。
- **フェデレーティッドユーザーアクセス** – ユーザーを作成する代わりに、エンタープライズユーザーディレクトリ AWS Directory Service、またはウェブ ID プロバイダーから既存の ID を使用できます。これらはフェデレーティッドユーザーと呼ばれます。は、ID プロバイダーを介してアクセスがリクエストされると、フェデレーティッドユーザーにロールを AWS 割り当てます。フェデレーティッドユーザーの詳細については、[「フェデレーティッドユーザーとロール」](#) を参照してください。
- **AWS のサービス アクセス – サービスロール** は、ユーザーに代わってアカウントでアクションを実行するためにサービスが引き受ける IAM ロールです。AWS のサービス 環境には、セットアップ時にサービスが引き受けるロールを定義する必要があるものもあります。このサービスロール

には、サービスが必要な AWS リソースにアクセスするために必要なすべてのアクセス許可が含まれている必要があります。サービスロールはサービスによって異なりますが、多くのサービスロールでは、そのサービスの文書化された要件を満たしている限り、許可を選択することができます。サービスロールは、お客様のアカウント内のみでアクセスを提供します。他のアカウントのサービスへのアクセス権を付与するためにサービスロールを使用することはできません。サービスロールは、内から作成、変更、削除できませんIAM。例えば、Amazon Redshift がユーザーに代わって Simple Storage Service (Amazon S3) バケットにアクセスし、そのバケットのデータを Amazon Redshift クラスターにロードすることを許可するロールを作成できます。詳細については、[AWS「サービスにアクセス許可を委任するロールの作成」](#)を参照してください。

- Amazon で実行されているアプリケーション EC2 – IAMロールを使用して、Amazon EC2インスタンスで実行され、AWS CLI または AWS APIリクエストを行うアプリケーションの一時的な認証情報を管理できます。これは、Amazon EC2インスタンスにアクセスキーを保存するよりも望ましいです。Amazon EC2インスタンスに AWS ロールを割り当て、そのすべてのアプリケーションで使用できるようにするには、インスタンスにアタッチされたインスタンスプロファイルを作成します。インスタンスプロファイルには ロールが含まれており、Amazon EC2インスタンスで実行されているプログラムが一時的な認証情報を取得できるようにします。詳細については、[IAM「ロールを使用して Amazon EC2 インスタンスで実行されているアプリケーションにアクセス許可を付与する」](#)を参照してください。

アクセスコントロール

AWS Data Exchange リソースを作成、更新、削除、または一覧表示するには、オペレーションを実行し、対応するリソースにアクセスするためのアクセス許可が必要です。操作をプログラマ的に実行するには、有効なアクセスキーも必要です。

AWS Data Exchange リソースへのアクセス許可の管理の概要

すべての AWS リソースは によって所有され AWS アカウント、リソースを作成またはアクセスするためのアクセス許可はアクセス許可ポリシーによって管理されます。アカウント管理者は、ユーザー、グループ、およびロールにアクセス許可ポリシーをアタッチできます。一部のサービス (AWS Lambdaなど) は、リソースへの許可ポリシーのアタッチもサポートします。

Note

アカウント管理者 (または管理者) は、管理者権限を持つユーザーです。詳細については、[IAM「ベストプラクティス」](#)を参照してください。

アクセス権限を付与するには、ユーザー、グループ、またはロールにアクセス許可を追加します。

- のユーザーとグループ AWS IAM Identity Center :

アクセス許可セットを作成します。「AWS IAM Identity Center ユーザーガイド」の「[権限設定を作成する](#)」の手順に従ってください。

- ID プロバイダーIAMを介して で管理されるユーザー :

ID フェデレーションのロールを作成します。IAM ユーザーガイドの「[サードパーティー ID プロバイダーのロールの作成 \(フェデレーション\)](#)」の指示に従います。

- IAM ユーザー :

- ユーザーが担当できるロールを作成します。「[ユーザーガイド](#)」のIAM「[ユーザーのロールを作成する](#)」の手順に従います。IAM

- (お奨めできない方法) ポリシーをユーザーに直接アタッチするか、ユーザーをユーザーグループに追加する。IAM ユーザーガイドの「[ユーザー \(コンソール\) へのアクセス許可の追加](#)」の手順に従います。

トピック

- [AWS Data Exchange リソースとオペレーション](#)
- [リソース所有権について](#)
- [リソースへのアクセスの管理](#)
- [ポリシー要素 \(アクション、効果、プリンシパル\) の指定](#)
- [ポリシーでの条件の指定](#)

AWS Data Exchange リソースとオペレーション

では AWS Data Exchange、コントロールプレーンが異なる 2 種類のプライマリリソースがあります。

- のプライマリリソース AWS Data Exchange は、データセットとジョブ です。 はリビジョンとアセット AWS Data Exchange もサポートしています。
- プロバイダーとサブスクライバー間のトランザクションを容易にするために、AWS Data Exchange は、製品、オファー、サブスクリプションなどの AWS Marketplace 概念とリソースも使用します。AWS Marketplace Catalog APIまたは AWS Data Exchange コンソールを使用して、製品、オファー、サブスクリプションリクエスト、サブスクリプションを管理できます。

リソース所有権について

は、リソースを作成したユーザーに関係なく、アカウントで作成されたリソース AWS アカウントを所有します。具体的には、リソース所有者は、リソース作成リクエストを認証する [プリンシパルエンティティ](#) (つまり、AWS アカウント ルートユーザー、ユーザー、またはロール) AWS アカウントの です。以下は、この仕組みを説明する例です。

リソース所有権

正しいアクセス許可 AWS アカウント を持つ 内の IAM エンティティは、AWS Data Exchange データセットを作成できます。IAM エンティティがデータセットを作成すると、エンティティはデータセット AWS アカウント を所有します。公開されたデータ製品には、それらを AWS アカウント 作成した のみが所有するデータセットを含めることができます。

AWS Data Exchange 製品をサブスクライブするには、IAM エンティティには AWS Data Exchange、(関連するサブスクリプション検証に合格 AWS Marketplace した場合) の `aws-marketplace:subscribe`、`aws-marketplace:aws-marketplace>CreateAgreementRequest`、および のアクセス許可に加えて、 を使用する `aws-marketplace:AcceptAgreementRequest` IAM アクセス許可が必要です。サブスクライバーのアカウントには権限を持つデータセットに対する読み取りアクセス権がありますが、アカウントは権限を持つデータセットを所有しません。Amazon S3 にエクスポートされる権限を持つデータセットは、サブスクライバーの AWS アカウントが所有します。

リソースへのアクセスの管理

このセクションでは、 のコンテキスト IAM での の使用について説明します AWS Data Exchange。IAM サービスに関する詳細情報は提供されません。詳細な IAM ドキュメントについては、IAM 「ユーザーガイド」の [「とはIAM」](#) を参照してください。IAM ポリシーの構文と説明については、「ユーザーガイド」の [AWS IAM 「ポリシーリファレンス」](#) を参照してください。IAM

アクセスポリシーは、誰が何に対するアクセス権を持っているのかを説明します。以下のセクションでは、アクセス権限のポリシーを作成するためのオプションについて説明します。

IAM ID にアタッチされたポリシーは、ID ベースのポリシー (IAM ポリシー) と呼ばれます。リソースにアタッチされたポリシーは、リソースベースのポリシーと呼ばれます。は、アイデンティティベースのポリシー (IAM ポリシー) のみ AWS Data Exchange をサポートします。

トピック

- [ID ベースのポリシーと権限](#)

• [リソースベースのポリシー](#)

ID ベースのポリシーと権限

AWS Data Exchange には 4 つの 管理ポリシーがあります。

- AWSDataExchangeFullAccess
- AWSDataExchangeSubscriberFullAccess
- AWSDataExchangeProviderFullAccess
- AWSDataExchangeReadOnly

これらのポリシーとその許可に関する詳細については、「[AWS の マネージドポリシー AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

Amazon S3 許可

Amazon S3 から アセットをインポートする場合 AWS Data Exchange、AWS Data Exchange サービス S3 バケットに書き込むためのアクセス許可が必要です。同様に、 から Amazon S3 AWS Data Exchange にアセットをエクスポートする場合、AWS Data Exchange サービス S3 バケットから読み取るアクセス許可が必要です。これらの許可は前述のポリシーに含まれていますが、独自のポリシーを作成して、ユーザーに実行してもらいたい操作だけを許可することもできます。これらのアクセス許可は、名前aws-data-exchangeに を含むバケットにスコープし、[CalledVia](#)アクセス許可を使用して、プリンシパル AWS Data Exchange に代わって によって行われたリクエストに対するアクセス許可の使用を制限できます。

例えば、これらのアクセス許可 AWS Data Exchange を含む へのインポートとエクスポートを許可するポリシーを作成できます。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": "s3:GetObject",
      "Resource": "arn:aws:s3::*aws-data-exchange*",
      "Condition": {
        "ForAnyValue:StringEquals": {
          "aws:CalledVia": [
```

```
        "dataexchange.amazonaws.com"
      ]
    }
  },
  {
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
      "s3:PutObject",
      "s3:PutObjectAcl"
    ],
    "Resource": "arn:aws:s3::*aws-data-exchange*",
    "Condition": {
      "ForAnyValue:StringEquals": {
        "aws:CalledVia": [
          "dataexchange.amazonaws.com"
        ]
      }
    }
  },
]
}
```

これらのアクセス許可により、プロバイダーは を使用してインポートおよびエクスポートできます AWS Data Exchange。ポリシーには、以下の許可と制限が含まれています。

- s3:PutObject および s3:PutObjectAcl – これらのアクセス許可は、名前aws-data-exchangeに を含む S3 バケットのみに制限されます。これらのアクセス許可により、プロバイダーは Amazon S3 からインポートするときに AWS Data Exchange サービスバケットに書き込むことができます。
- s3:GetObject – このアクセス許可は、名前aws-data-exchangeに を含む S3 バケットに制限されています。このアクセス許可により、 から Amazon S3 AWS Data Exchange にエクスポートするときに、お客様は AWS Data Exchange サービスバケットから を読み取ることができます。
- これらのアクセス許可は、 を IAMCalledVia条件で使用して行われたリクエストに制限 AWS Data Exchange されます。これにより、S3 アクセスPutObject許可を AWS Data Exchange コンソールまたは のコンテキストでのみ使用できますAPI。
- AWS Lake Formation および AWS Resource Access Manager (AWS RAM) – AWS Lake Formation データセットを使用するには、サブスクリプションを持つ新しいプロバイダーごとに AWS RAM 共有招待を受け入れる必要があります。AWS RAM 共有招待を受け入れるには、AWS RAM 共有招待を受け入れるアクセス許可を持つロールを引き受ける必要があります。の管

理 AWS ポリシーの詳細については AWS RAM、[「の管理ポリシー」を参照してください AWS RAM。](#)

- AWS Lake Formation データセットを作成するには、がロールIAMを に渡すことができる引き受けたロールを持つデータセットを作成する必要があります AWS Data Exchange。これにより、ユーザーに代わって Lake Formation リソースにアクセス許可 AWS Data Exchange を付与および取り消すことができます。以下のポリシーの例を参照してください。

```
{
  "Effect": "Allow",
  "Action": "iam:PassRole",
  "Resource": "*",
  "Condition": {
    "StringEquals": {
      "iam:PassedToService": "dataexchange.amazonaws.com"
    }
  }
}
```

Note

ユーザーには、この例で説明されていない独自の S3 バケットとオブジェクトに対して読み取りまたは書き込みを行うための追加の許可も必要になる場合があります。

ユーザー、グループ、ロール、アクセス許可の詳細については、IAM ユーザーガイドの[「アイデンティティ \(ユーザー、グループ、ロール\)」](#)を参照してください。

リソースベースのポリシー

AWS Data Exchange はリソースベースのポリシーをサポートしていません。

Amazon S3 などの他のサービスは、リソースベースの許可ポリシーをサポートします。例えば、ポリシーを S3 バケットにアタッチして、そのバケットに対するアクセス許可を管理できます。

ポリシー要素 (アクション、効果、プリンシパル) の指定

を使用するには AWS Data Exchange、ポリシーでユーザーアクセス許可を定義する必要があります IAM。

最も基本的なポリシーの要素を次に示します。

- リソース – ポリシーでは、Amazon リソースネーム (ARN) を使用して、ポリシーが適用されるリソースを識別します。すべての AWS Data Exchange API オペレーションはリソースレベルのアクセス許可 (RLP) をサポートしていますが、AWS Marketplace アクションは をサポートしていません RLP。詳細については、「[AWS Data Exchange リソースとオペレーション](#)」を参照してください。
- アクション – アクションキーワードを使用して、許可または拒否するリソース操作を特定します。
- 効果 – ユーザーが特定のアクションをリクエストするときの効果 (許可または拒否) を指定します。リソースに対するアクセス権を明示的に付与 (許可) しない場合、アクセスは暗黙的に拒否されます。また、明示的にリソースへのアクセスを拒否すると、別のポリシーによってアクセスが許可されている場合でも、ユーザーはそのリソースにアクセスできなくなります。
- プリンシパル – ID ベースのポリシー (IAM ポリシー) では、ポリシーがアタッチされているユーザーが暗黙的なプリンシパルです。リソースベースのポリシーでは、アクセス許可を受け取るユーザー、アカウント、サービス、またはその他のエンティティを指定します (リソースベースのポリシーにのみ適用されます)。リソースベースのポリシー AWS Data Exchange はサポートされていません。

IAM ポリシーの構文と説明の詳細については、「ユーザーガイド」の[AWS IAM 「ポリシーリファレンス」](#)を参照してください。IAM

ポリシーでの条件の指定

アクセス許可を付与するときは、IAM ポリシー言語を使用して、ポリシーを有効にする条件を指定できます。では AWS Data Exchange、CreateJob、GetJob、および StartJobCancelJob API オペレーションが条件付きアクセス許可をサポートします。許可は JobType レベルで提供できます。

AWS Data Exchange 条件キーリファレンス

条件キー	説明	[Type] (タイプ)
"dataexchange:JobType": "IMPORT_ASSETS_FROM_S3"	Amazon S3 からアセットをインポートするジョブに許可をスコープします。	文字列
"dataexchange:JobType": "IMPORT_ASSETS_FROM_LAKE_FORMATION_TAG_POLICY" (Preview)	AWS Lake Formation からアセットをインポートするジョブに対するアクセス許可の範囲を設定します (プレビュー)	文字列

条件キー	説明	[Type] (タイプ)
"dataexchange:JobType":"IMPORT_ASSET_FROM_SIGNED_URL"	署名付き からアセットをインポートするジョブへのアクセス許可をスコープしますURL。	文字列
"dataexchange:JobType":"IMPORT_ASSET_FROM_REDSHIFT_DATA_SHARES"	Amazon Redshift からアセットをインポートするジョブに許可をスコープします。	文字列
"dataexchange:JobType":"IMPORT_ASSET_FROM_API_GATEWAY_API"	Amazon API Gateway からアセットをインポートするジョブへのアクセス許可をスコープします。	文字列
"dataexchange:JobType":"EXPORT_ASSETS_TO_S3"	Amazon S3 にアセットをエクスポートするジョブに許可をスコープします。	文字列
"dataexchange:JobType":"EXPORT_ASSETS_TO_SIGNED_URL"	署名付き にアセットをエクスポートするジョブへのアクセス許可をスコープしますURL。	文字列
"dataexchange:JobType":"EXPORT_REVISIONS_TO_S3"	Amazon S3 にリビジョンをエクスポートするジョブに許可をスコープします。	文字列

ポリシー言語で条件を指定する方法の詳細については、IAM「ユーザーガイド」の[「条件」](#)を参照してください。

条件を表現するには、事前定義された条件キーを使用します。にはAPIオペレーションJobTypeの条件AWS Data Exchangeがあります。必要に応じて使用できるAWS全体の条件キーもあります。AWSワイドキーの完全なリストについては、[IAM「ユーザーガイド」](#)を参照してください。

AWS Data Exchange API アクセス許可: アクションとリソースリファレンス

(IAM) ID AWS Identity and Access Management (アイデンティティベースのポリシー) にアタッチできるアクセス許可ポリシーを設定[アクセスコントロール](#)および記述する場合は、次の表を参照として使用します。テーブルには、各 AWS Data Exchange API オペレーション、アクションを実行するためのアクセス許可を付与できるアクション、およびアクセス許可を付与できる AWS リソースが一覧表示されます。アクションは、ポリシーの Action フィールドで指定します。リソース値は、ポリシーの Resource フィールドで指定します。

Note

アクションを指定するには、dataexchange:プレフィックスの後にAPIオペレーション名 (例:) を使用しますdataexchange>CreateDataSet。

AWS Data Exchange API アクションに必要なアクセス許可

AWS Data Exchange API オペレーション	必要なアクセス許可 (API アクション)	リソース	条件
CreateDataSet	dataexchange:CreateDataSet	該当なし	aws:TagKeys aws:RequestTag
GetDataSet	dataexchange:GetDataSet	データセット	aws:RequestTag
UpdateDataSet	dataexchange:UpdateDataSet	データセット	aws:RequestTag
PublishDataSet	dataexchange:PublishDataSet	データセット	aws:RequestTag
DeleteDataSet	dataexchange>DeleteDataSet	データセット	aws:RequestTag
ListDataSets	dataexchange:ListDataSets	該当なし	該当なし

AWS Data Exchange API オペレーション	必要なアクセス許可 (API アクション)	リソース	条件
CreateRevision	dataexchange:CreateRevision	データセット	aws:TagKeys aws:RequestTag
GetRevision	dataexchange:GetRevision	リビジョン	aws:RequestTag
DeleteRevision	dataexchange>DeleteRevision	リビジョン	aws:RequestTag
ListDataSetRevisions	dataexchange:ListDataSetRevisions	データセット	aws:RequestTag
ListRevisionAssets	dataexchange:ListRevisionAssets	リビジョン	aws:RequestTag
CreateEventAction	dataexchange:CreateEventAction	該当なし	該当なし
UpdateEventAction	dataexchange:UpdateEventAction	EventAction	該当なし
GetEventAction	dataexchange:GetEventAction	EventAction	該当なし
ListEventActions	dataexchange:ListEventActions	該当なし	該当なし
DeleteEventAction	dataexchange>DeleteEventAction	EventAction	該当なし
CreateJob	dataexchange>CreateJob	該当なし	dataexchange:JobType
GetJob	dataexchange:GetJob	ジョブ	dataexchange:JobType

AWS Data Exchange API オペレーション	必要なアクセス許可 (API アクション)	リソース	条件
StartJob**	dataexchange:StartJob	ジョブ	dataexchange:JobType
CancelJob	dataexchange:CancelJob	ジョブ	dataexchange:JobType
ListJobs	dataexchange>ListJobs	該当なし	該当なし
ListTagsForResource	dataexchange>ListTagsForResource	リビジョン	aws:RequestTag
TagResource	dataexchange:TagResource	リビジョン	aws:TagKeys aws:RequestTag
UntagResource	dataexchange:UntagResource	リビジョン	aws:TagKeys aws:RequestTag
UpdateRevision	dataexchange:UpdateRevision	リビジョン	aws:RequestTag
DeleteAsset	dataexchange>DeleteAsset	[アセット]	該当なし
GetAsset	dataexchange:GetAsset	[アセット]	該当なし
UpdateAsset	dataexchange:UpdateAsset	[アセット]	該当なし
SendApiAsset	dataexchange:SendApiAsset	[アセット]	該当なし

** 開始するジョブのタイプによっては、追加のIAMアクセス許可が必要になる場合があります。ジョブタイプと関連する追加のIAMアクセス許可については、AWS Data Exchange 次の表を参照してください。ジョブの詳細については、「[のジョブ AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

Note

現在、SendApiAssetオペレーションは、次の ではサポートされていませんSDKs。

- AWS SDK for .NET
- AWS SDK for C++
- SDK for Java 2.x

AWS Data Exchange のジョブタイプのアクセス許可 **StartJob**

ジョブタイプ	必要な追加のIAMアクセス許可
IMPORT_ASSETS_FROM_S3	dataexchange:CreateAsset
IMPORT_ASSET_FROM_SIGNED_URL	dataexchange:CreateAsset
IMPORT_ASSETS_FROM_API_GATEWAY_API	dataexchange:CreateAsset
IMPORT_ASSETS_FROM_REDSHIFT_DATA_SHARES	dataexchange:CreateAsset , redshift:AuthorizeDataShare
EXPORT_ASSETS_TO_S3	dataexchange:GetAsset
EXPORT_ASSETS_TO_SIGNED_URL	dataexchange:GetAsset
EXPORT_REVISIONS_TO_S3	dataexchange:GetRevision dataexchange:GetDataSet

Note

アクセスIAM許可dataexchange:GetDataSet は、
をEXPORT_REVISIONS_TO_S3 ジョブタイプの動的リファレンスDataSet.Name として使用している場合にのみ必要です。

以下の例にあるように、ワイルドカードを使用することによって、データセットアクションをリビジョンまたはアセットレベルにスコープできます。

```
arn:aws:dataexchange:us-east-1:123456789012:data-sets/99EXAMPLE23c7c272897cf1EXAMPLE7a/
revisions/*/assets/*
```

一部の AWS Data Exchange アクションはコンソールでのみ実行できます AWS Data Exchange。これらのアクションは AWS Marketplace 機能と統合されています。アクションには、次の表に示す AWS Marketplace アクセス許可が必要です。

AWS Data Exchange サブスクライバーのコンソールでのみ実行できるアクション

コンソールアクション	IAM アクセス許可
製品をサブスクライブする	aws-marketplace:Subscribe aws-marketplace:CreateAgreementRequest aws-marketplace:AcceptAgreementRequest
サブスクリプション検証リクエストを送信する	aws-marketplace:Subscribe aws-marketplace:CreateAgreementRequest aws-marketplace:AcceptAgreementRequest
サブスクリプションの自動更新を有効にする	aws-marketplace:Subscribe aws-marketplace:CreateAgreementRequest aws-marketplace:AcceptAgreementRequest
サブスクリプションの自動更新ステータスを表示する	aws-marketplace:ListEntitlementDetails

コンソールアクション	IAM アクセス許可
	aws-marketplace:ViewSubscriptions aws-marketplace:GetAgreementTerms
サブスクリプションの自動更新を無効にする	aws-marketplace:Subscribe aws-marketplace:CreateAgreementRequest aws-marketplace:AcceptAgreementRequest
アクティブなサブスクリプションをリストする	aws-marketplace:ViewSubscriptions aws-marketplace:SearchAgreements aws-marketplace:GetAgreementTerms
サブスクリプションを表示する	aws-marketplace:ViewSubscriptions aws-marketplace:SearchAgreements aws-marketplace:GetAgreementTerms aws-marketplace:DescribeAgreement
サブスクリプション検証リクエストをリストする	aws-marketplace:ListAgreementRequests
サブスクリプション検証リクエストを表示する	aws-marketplace:GetAgreementRequest

コンソールアクション	IAM アクセス許可
サブスクリプション検証リクエストをキャンセルする	<code>aws-marketplace:CancelAgreementRequest</code>
アカウントを対象とするすべてのオファーを表示する	<code>aws-marketplace:ListPrivateListings</code>
特定のオファーの詳細を表示する	<code>aws-marketplace:GetPrivateListing</code>

AWS Data Exchange プロバイダーのコンソールでのアクション

コンソールアクション	IAM アクセス許可
製品にタグ付けする	<code>aws-marketplace:TagResource</code> <code>aws-marketplace:UntagResource</code> <code>aws-marketplace:ListTagsForResource</code>
オファーにタグ付けする	<code>aws-marketplace:TagResource</code> <code>aws-marketplace:UntagResource</code> <code>aws-marketplace:ListTagsForResource</code>
製品を公開する	<code>aws-marketplace:StartChangeSet</code> <code>aws-marketplace:DescribeChangeSet</code> <code>dataexchange:PublishDataSet</code>
製品を非公開にする	<code>aws-marketplace:StartChangeSet</code> <code>aws-marketplace:DescribeChangeSet</code>
製品を編集する	<code>aws-marketplace:StartChangeSet</code> <code>aws-marketplace:DescribeChangeSet</code>

コンソールアクション	IAM アクセス許可
カスタムオファーを作成する	<code>aws-marketplace:StartChangeSet</code> <code>aws-marketplace:DescribeChangeSet</code>
カスタムオファーを編集する	<code>aws-marketplace:StartChangeSet</code> <code>aws-marketplace:DescribeChangeSet</code>
製品の詳細を表示する	<code>aws-marketplace:DescribeEntity</code> <code>aws-marketplace:ListEntities</code>
製品のカスタムオファーを表示する	<code>aws-marketplace:DescribeEntity</code>
製品ダッシュボードを表示する	<code>aws-marketplace:ListEntities</code> <code>aws-marketplace:DescribeEntity</code>
データセットまたはリビジョンが発行された製品をリストする	<code>aws-marketplace:ListEntities</code> <code>aws-marketplace:DescribeEntity</code>
サブスクリプション検証リクエストをリストする	<code>aws-marketplace:ListAgreementApprovalRequests</code> <code>aws-marketplace:GetAgreementApprovalRequest</code>
サブスクリプション検証リクエストを承認する	<code>aws-marketplace:AcceptAgreementApprovalRequest</code>
サブスクリプション検証リクエストを拒否する	<code>aws-marketplace:RejectAgreementApprovalRequest</code>
サブスクリプション検証リクエストからの情報を削除する	<code>aws-marketplace:UpdateAgreementApprovalRequest</code>

コンソールアクション	IAM アクセス許可
サブスクリプションの詳細を表示する	aws-marketplace:SearchAgreements aws-marketplace:GetAgreementTerms

AWS の マネージドポリシー AWS Data Exchange

AWS マネージドポリシーは、によって作成および管理されるスタンドアロンポリシーです AWS。AWS マネージドポリシーは、多くの一般的なユースケースに対するアクセス許可を提供するように設計されているため、ユーザー、グループ、ロールへのアクセス許可の割り当てを開始できます。

AWS マネージドポリシーは、すべての AWS お客様が使用できるため、特定のユースケースに対して最小権限のアクセス許可を付与しない場合があることに注意してください。ユースケース別に [カスタマー マネージドポリシー](#) を定義して、マネージドポリシーを絞り込むことをお勧めします。

AWS マネージドポリシーで定義されているアクセス許可は変更できません。が マネージドポリシーで AWS 定義されたアクセス許可 AWS を更新すると、ポリシーがアタッチされているすべてのプリンシパル ID (ユーザー、グループ、ロール) に影響します。AWS は、新しい が起動されるか、新しい API オペレーション AWS のサービス が既存のサービスで使用できるようになったときに、AWS マネージドポリシーを更新する可能性が高くなります。

詳細については、「ユーザーガイド」の [AWS 「マネージドポリシー」](#) を参照してください。IAM

AWS マネージドポリシー: `AWSDataExchangeFullAccess`

ID IAM に `AWSDataExchangeFullAccess` ポリシーをアタッチできます。

このポリシーは、AWS Management Console とを使用した AWS Data Exchange および AWS Marketplace アクションへのフルアクセスを許可する管理アクセス許可を付与します SDK。また、Amazon S3 への選択アクセスを提供し、AWS Key Management Service 必要に応じて を最大限に活用できます AWS Data Exchange。

許可の詳細

このポリシーには、以下の許可が含まれています。

- AWS Data Exchange – プリンシパルに へのフルアクセスを許可します AWS Data Exchange。これには、データ製品の提供とデータ製品のサブスクライブの両方が含まれます。

- AWS Marketplace – プリンシパルが にアクセスして、製品 AWS Marketplace の提供、製品のサブスクライブ、製品契約の管理を行うことができます。これは、データ製品の提供、またはデータ製品のサブスクライブに必要です。
- Amazon S3 – プリンシパルが Amazon Simple Storage Service から AWS Data Exchange 関連オブジェクト (データ製品ファイルを含む) を取得し、AWS Data Exchange 関連ファイルを Amazon S3 にアップロードできるようにします。これは、データ製品の提供とサブスクライブに必要です。
- Amazon Redshift – プリンシパルが Amazon Redshift AWS Data Exchange のデータ共有を表示してインポートし、承認できるようにします。これは Amazon Redshift データ製品の提供に必要です。
- Amazon API Gateway – プリンシパルが Amazon API Gateway APIs から Amazon API Gateway を取得し、 をアップロードできるようにします APIs。これは、Amazon API Gateway データセットを提供するために必要です。
- AWS KMS – AWS Key Management Service 内のキーのリストと説明へのアクセスを許可します。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Sid": "DataExchangeActions",
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "dataexchange:*"
      ],
      "Resource": "*"
    },
    {
      "Sid": "S3GetActionConditionalResourceAndADX",
      "Effect": "Allow",
      "Action": "s3:GetObject",
      "Resource": "arn:aws:s3::*aws-data-exchange*",
      "Condition": {
        "ForAnyValue:StringEquals": {
          "aws:CalledVia": [
            "dataexchange.amazonaws.com"
          ]
        }
      }
    }
  ],
}
```

```
{
  "Sid": "S3GetActionConditionalTagAndADX",
  "Effect": "Allow",
  "Action": "s3:GetObject",
  "Resource": "*",
  "Condition": {
    "StringEqualsIgnoreCase": {
      "s3:ExistingObjectTag/AWSDataExchange": "true"
    },
    "ForAnyValue:StringEquals": {
      "aws:CalledVia": [
        "dataexchange.amazonaws.com"
      ]
    }
  }
},
{
  "Sid": "S3WriteActions",
  "Effect": "Allow",
  "Action": [
    "s3:PutObject",
    "s3:PutObjectAcl"
  ],
  "Resource": "arn:aws:s3::*aws-data-exchange*",
  "Condition": {
    "ForAnyValue:StringEquals": {
      "aws:CalledVia": [
        "dataexchange.amazonaws.com"
      ]
    }
  }
},
{
  "Sid": "S3ReadActions",
  "Effect": "Allow",
  "Action": [
    "s3:GetBucketLocation",
    "s3:ListBucket",
    "s3:ListAllMyBuckets"
  ],
  "Resource": "*"
},
{
  "Sid": "AWSMarketplaceProviderActions",
```

```
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
        "aws-marketplace:DescribeEntity",
        "aws-marketplace:ListEntities",
        "aws-marketplace:StartChangeSet",
        "aws-marketplace:ListChangeSets",
        "aws-marketplace:DescribeChangeSet",
        "aws-marketplace:CancelChangeSet",
        "aws-marketplace:GetAgreementApprovalRequest",
        "aws-marketplace:ListAgreementApprovalRequests",
        "aws-marketplace:AcceptAgreementApprovalRequest",
        "aws-marketplace:RejectAgreementApprovalRequest",
        "aws-marketplace:UpdateAgreementApprovalRequest",
        "aws-marketplace:SearchAgreements",
        "aws-marketplace:GetAgreementTerms",
        "aws-marketplace:TagResource",
        "aws-marketplace:UntagResource",
        "aws-marketplace:ListTagsForResource"
    ],
    "Resource": "*"
},
{
    "Sid": "AWSMarketplaceSubscriberActions",
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
        "aws-marketplace:Subscribe",
        "aws-marketplace:Unsubscribe",
        "aws-marketplace:ViewSubscriptions",
        "aws-marketplace:GetAgreementRequest",
        "aws-marketplace:ListAgreementRequests",
        "aws-marketplace:CancelAgreementRequest",
        "aws-marketplace:ListPrivateListings",
        "aws-marketplace:DescribeAgreement"
    ],
    "Resource": "*"
},
{
    "Sid": "KMSActions",
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
        "kms:DescribeKey",
        "kms:ListAliases",
        "kms:ListKeys"
    ],
}
```

```
    "Resource": "*"
  },
  {
    "Sid": "RedshiftConditionalActions",
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
      "redshift:AuthorizeDataShare"
    ],
    "Resource": "*",
    "Condition": {
      "StringEqualsIgnoreCase": {
        "redshift:ConsumerIdentifier": "ADX"
      }
    }
  },
  {
    "Sid": "RedshiftActions",
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
      "redshift:DescribeDataSharesForProducer",
      "redshift:DescribeDataShares"
    ],
    "Resource": "*"
  },
  {
    "Sid": "APIGatewayActions",
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
      "apigateway:GET"
    ],
    "Resource": "*"
  }
]
```

AWS マネージドポリシー: **AWSDataExchangeProviderFullAccess**

ID IAM にAWSDataExchangeProviderFullAccessポリシーをアタッチできます。

このポリシーは、AWS Management Console と を使用してデータプロバイダーが AWS Data Exchange および AWS Marketplace アクションにアクセスできるようにするアクセス許可を寄稿者に付与しますSDK。また、Amazon S3 への選択アクセスを提供し、AWS Key Management Service 必要に応じて を最大限に活用できます AWS Data Exchange。

許可の詳細

このポリシーには、以下の許可が含まれています。

- AWS Data Exchange – プリンシパルが でデータ製品を提供するフルアクセスを許可します AWS Data Exchange。プリンシパルは、AWS Data Exchangeで製品を作成、更新、および削除することができます。
- AWS Marketplace – プリンシパルが にアクセスして、データ製品の AWS Marketplace 提供とサブスクライブ、サブスクリプション検証リクエストの管理を行うことができます。これは、データ製品を提供するために必要です。
- Amazon S3 – プリンシパルが Amazon Simple Storage Service から AWS Data Exchange 関連オブジェクト (データ製品ファイルを含む) を取得し、AWS Data Exchange 関連ファイルを Amazon S3 にアップロードできるようにします。これは、データ製品の提供に必要です。
- Amazon API Gateway – プリンシパルが Amazon API Gateway APIsから Amazon API Gateway を取得し、 をアップロードできるようにしますAPIs。これは、Amazon API Gateway APIデータセットを提供するために必要です。
- Amazon Redshift – プリンシパルが Amazon Redshift AWS Data Exchange のデータ共有を表示してインポートし、承認できるようにします。これは Amazon Redshift データ製品の提供に必要です。
- AWS KMS – キーを使用して AWS Key Management Service データを暗号化してアクセスできるように、へのアクセスを許可します。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "dataexchange:CreateDataSet",
        "dataexchange:CreateRevision",
        "dataexchange:CreateAsset",
        "dataexchange:Get*",
        "dataexchange:Update*",
        "dataexchange:List*",
        "dataexchange>Delete*",
        "dataexchange:TagResource",
        "dataexchange:UntagResource",
        "dataexchange:PublishDataSet",
```

```
        "dataexchange:SendApiAsset",
        "dataexchange:RevokeRevision",
        "dataexchange:SendDataSetNotification",
        "tag:GetTagKeys",
        "tag:GetTagValues"
    ],
    "Resource": "*"
},
{
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
        "dataexchange:CreateJob",
        "dataexchange:StartJob",
        "dataexchange:CancelJob"
    ],
    "Resource": "*",
    "Condition": {
        "StringEquals": {
            "dataexchange:JobType": [
                "IMPORT_ASSETS_FROM_S3",
                "IMPORT_ASSET_FROM_SIGNED_URL",
                "EXPORT_ASSETS_TO_S3",
                "EXPORT_ASSET_TO_SIGNED_URL",
                "IMPORT_ASSET_FROM_API_GATEWAY_API",
                "IMPORT_ASSETS_FROM_REDSHIFT_DATA_SHARES"
            ]
        }
    }
},
{
    "Effect": "Allow",
    "Action": "s3:GetObject",
    "Resource": "arn:aws:s3::*aws-data-exchange*",
    "Condition": {
        "ForAnyValue:StringEquals": {
            "aws:CalledVia": [
                "dataexchange.amazonaws.com"
            ]
        }
    }
},
{
    "Effect": "Allow",
    "Action": "s3:GetObject",
```

```
    "Resource": "*",
    "Condition": {
      "StringEqualsIgnoreCase": {
        "s3:ExistingObjectTag/AWSDataExchange": "true"
      },
      "ForAnyValue:StringEquals": {
        "aws:CalledVia": [
          "dataexchange.amazonaws.com"
        ]
      }
    }
  },
  {
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
      "s3:PutObject",
      "s3:PutObjectAcl"
    ],
    "Resource": "arn:aws:s3::*aws-data-exchange*",
    "Condition": {
      "ForAnyValue:StringEquals": {
        "aws:CalledVia": [
          "dataexchange.amazonaws.com"
        ]
      }
    }
  },
  {
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
      "s3:GetBucketLocation",
      "s3:ListBucket",
      "s3:ListAllMyBuckets"
    ],
    "Resource": "*"
  },
  {
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
      "aws-marketplace:DescribeEntity",
      "aws-marketplace:ListEntities",
      "aws-marketplace:DescribeChangeSet",
      "aws-marketplace:ListChangeSets",
      "aws-marketplace:StartChangeSet",
```

```

        "aws-marketplace:CancelChangeSet",
        "aws-marketplace:GetAgreementApprovalRequest",
        "aws-marketplace:ListAgreementApprovalRequests",
        "aws-marketplace:AcceptAgreementApprovalRequest",
        "aws-marketplace:RejectAgreementApprovalRequest",
        "aws-marketplace:UpdateAgreementApprovalRequest",
        "aws-marketplace:SearchAgreements",
        "aws-marketplace:GetAgreementTerms",
        "aws-marketplace:DescribeAgreement"
    ],
    "Resource": "*"
},
{
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
        "aws-marketplace:TagResource",
        "aws-marketplace:UntagResource",
        "aws-marketplace:ListTagsForResource"
    ],
    "Resource": "*"
},
{
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
        "kms:DescribeKey",
        "kms:ListAliases",
        "kms:ListKeys"
    ],
    "Resource": "*"
},
{
    "Effect": "Allow",
    "Action": ["redshift:AuthorizeDataShare"],
    "Resource": "*",
    "Condition": {
        "StringEqualsIgnoreCase": {
            "redshift:ConsumerIdentifier": "ADX"
        }
    }
},
{
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
        "redshift:DescribeDataSharesForProducer",

```

```
        "redshift:DescribeDataShares"
      ],
      "Resource": "*"
    },
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "apigateway:GET",
      ],
      "Resource": "*"
    }
  ]
}
```

AWS マネージドポリシー: **AWSDataExchangeReadOnly**

ID IAM にAWSDataExchangeReadOnlyポリシーをアタッチできます。

このポリシーは、AWS Management Console および を使用した AWS Data Exchange および AWS Marketplace アクションへの読み取り専用アクセスを許可する読み取り専用アクセス許可を付与しますSDK。

許可の詳細

このポリシーには、以下の許可が含まれています。

- AWS Data Exchange – AWS Data Exchange 製品への読み取り専用アクセスをプリンシパルに許可します。これには、提供されたデータ製品とサブスクライブされたデータ製品の両方が含まれます。
- AWS Marketplace – 提供された製品とサブスクライブされた製品に関する AWS Marketplace への読み取り専用アクセスをプリンシパルに許可します。これは、データ製品を表示するために必要です。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Sid": "DataExchangeReadOnlyActions",
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "dataexchange:GetAsset",
```

```
        "dataexchange:GetDataSet",
        "dataexchange:GetEventAction",
        "dataexchange:GetJob",
        "dataexchange:GetRevision",
        "dataexchange:ListDataSetRevisions",
        "dataexchange:ListDataSets",
        "dataexchange:ListEventActions",
        "dataexchange:ListJobs",
        "dataexchange:ListRevisionAssets",
        "dataexchange:ListTagsForResource"
    ],
    "Resource": "*"
},
{
    "Sid": "AWSMarketplaceReadOnlyActions",
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
        "aws-marketplace:ViewSubscriptions",
        "aws-marketplace:GetAgreementRequest",
        "aws-marketplace:ListAgreementRequests",
        "aws-marketplace:GetAgreementApprovalRequest",
        "aws-marketplace:ListAgreementApprovalRequests",
        "aws-marketplace:DescribeEntity",
        "aws-marketplace:ListEntities",
        "aws-marketplace:DescribeChangeSet",
        "aws-marketplace:ListChangeSets",
        "aws-marketplace:SearchAgreements",
        "aws-marketplace:GetAgreementTerms",
        "aws-marketplace:ListPrivateListings",
        "aws-marketplace:ListTagsForResource"
    ],
    "Resource": "*"
}
]
```

AWS マネージドポリシー: **AWSDataExchangeSubscriberFullAccess**

ID IAM にAWSDataExchangeSubscriberFullAccessポリシーをアタッチできます。

このポリシーは、AWS Management Console および [AWS CLI](#) を使用したデータサブスクライバーによる AWS Data Exchange および AWS Marketplace アクションへのアクセスを許可するアクセス許可を

寄稿者に付与しますSDK。また、Amazon S3 への選択アクセスを提供し、AWS Key Management Service 必要に応じて を最大限に活用できます AWS Data Exchange。

許可の詳細

このポリシーには、以下の許可が含まれています。

- AWS Data Exchange – プリンシパルのサブスクライバー機能へのフルアクセスを許可します AWS Data Exchange。これには、データ製品へのサブスクライブとアクセスが含まれます。
- AWS Marketplace – プリンシパルが にアクセスして、製品 AWS Marketplace を表示およびサブスクライブできるようにします。これは、データ製品をサブスクライブするために必要です。
- Amazon S3 – プリンシパルが Amazon Simple Storage Service から AWS Data Exchange 関連オブジェクト (データ製品ファイルを含む) を表示および取得できるようにします。これは、サブスクライブされたデータ製品へのアクセスに必要です。
- AWS KMS – キーを使用して暗号化されたデータへのアクセス AWS Key Management Service をに許可します。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Sid": "DataExchangeReadOnlyActions",
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "dataexchange:Get*",
        "dataexchange:List*"
      ],
      "Resource": "*"
    },
    {
      "Sid": "DataExchangeExportActions",
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "dataexchange:CreateJob",
        "dataexchange:StartJob",
        "dataexchange:CancelJob"
      ],
      "Resource": "*",
      "Condition": {
        "StringEquals": {
```

```
        "dataexchange:JobType": [
            "EXPORT_ASSETS_TO_S3",
            "EXPORT_ASSET_TO_SIGNED_URL",
            "EXPORT_REVISIONS_TO_S3"
        ]
    }
},
{
    "Sid": "DataExchangeEventActionActions",
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
        "dataexchange:CreateEventAction",
        "dataexchange:UpdateEventAction",
        "dataexchange>DeleteEventAction",
        "dataexchange:SendApiAsset"
    ],
    "Resource": "*"
},
{
    "Sid": "S3GetActionConditionalResourceAndADX",
    "Effect": "Allow",
    "Action": "s3:GetObject",
    "Resource": "arn:aws:s3::*aws-data-exchange*",
    "Condition": {
        "ForAnyValue:StringEquals": {
            "aws:CalledVia": [
                "dataexchange.amazonaws.com"
            ]
        }
    }
},
{
    "Sid": "S3ReadActions",
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
        "s3:GetBucketLocation",
        "s3:ListBucket",
        "s3:ListAllMyBuckets"
    ],
    "Resource": "*"
},
{
    "Sid": "AWSMarketplaceSubscriberActions",
```

```

    "Effect": "Allow",
    "Action": [
      "aws-marketplace:Subscribe",
      "aws-marketplace:Unsubscribe",
      "aws-marketplace:ViewSubscriptions",
      "aws-marketplace:GetAgreementRequest",
      "aws-marketplace:ListAgreementRequests",
      "aws-marketplace:CancelAgreementRequest",
      "aws-marketplace:ListPrivateListings"
    ],
    "Resource": "*"
  },
  {
    "Sid": "KMSActions",
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
      "kms:DescribeKey",
      "kms:ListAliases",
      "kms:ListKeys"
    ],
    "Resource": "*"
  }
]
}

```

AWS Data Exchange AWS マネージドポリシーの更新

次の表は、このサービスがこれらの変更の追跡を開始 AWS Data Exchange してからの AWS の管理ポリシーの更新に関する詳細を示しています。このページの変更 (および本ユーザーガイドへのその他の変更) に関する自動アラートについては、[のドキュメント履歴 AWS Data Exchange](#) ページの RSS フィードにサブスクライブしてください。

変更	説明	日付
AWSDataExchangeReadOnly	ポリシーを読みやすく IDs するためのステートメントを追加し、ワイルドカードアクセス許可を読み取り専用 ADX アクセス許可の完全なリストに拡張し、新しいアクション <code>aws-marketplace:ListTagsForResource</code> とを追加	2024 年 7 月 9 日

変更	説明	日付
	しましたaws-marketplace:ListPrivateListings。	
AWSDataExchangeFullAccess	削除されたアクション: aws-marketplace:GetPrivateListing	2024年5月22日
AWSDataExchangeSubscriberFullAccess	ポリシーを読みやすくIDsするためのステートメントを追加し、新しいアクションを追加しました。aws-marketplace:ListPrivateListings	2024年4月30日
AWSDataExchangeFullAccess	ポリシーを読みやすくIDsするためのステートメントを追加し、aws-marketplace:TagResource、aws-marketplace:UntagResource、aws-marketplace:ListTagsForResource、aws-marketplace:ListPrivateListings、aws-marketplace:GetPrivateListing、およびの新しいアクションを追加しましたaws-marketplace:DescribeAgreement。	2024年4月30日
AWSDataExchangeProviderFullAccess	ポリシーを読みやすくIDsするためのステートメントを追加しました。	2024年8月9日
AWSDataExchangeProviderFullAccess	dataexchange:SendDataSetNotification データセット通知を送信する新しいアクセス許可である を追加しました。	2024年3月5日

変更	説明	日付
AWSDataExchangeSubscriberFullAccess 、 AWSDataExchangeProviderFullAccess 、 AWSDataExchangeFullAccess 、 AWSDataExchangeReadOnly 既存のポリシーの更新	すべてのマネージドポリシーにきめ細かいアクションを追加しました。新たに追加されたアクション: <code>aws-marketplace:CreateAgreementRequest</code> 、 <code>aws-marketplace:AcceptAgreementRequest</code> 、 <code>aws-marketplace:ListEntitlementDetails</code> 、 <code>aws-marketplace:ListPrivateListings</code> 、 <code>aws-marketplace:GetPrivateListing</code> 、 <code>license-manager:ListReceivedGrants</code> 、 <code>aws-marketplace:TagResource</code> 、 <code>aws-marketplace:UntagResource</code> 、 <code>aws-marketplace:ListTagsForResource</code> 、 <code>aws-marketplace:DescribeAgreement</code> 、 <code>aws-marketplace:GetAgreementTerms</code> 、 <code>aws-marketplace:GetLicense</code>	2023 年 7 月 31 日
AWSDataExchangeProviderFullAccess – 既存のポリシーの更新	リビジョンを取り消すための新しい権限 <code>dataexchange:RevokeRevision</code> が追加されました。	2022 年 3 月 15 日
AWSDataExchangeProviderFullAccess および AWSDataExchangeFullAccess — 既存のポリシーの更新	Amazon API Gateway から API アセットを取得する <code>apigateway:GET</code> 新しいアクセス許可である <code>apigateway:GET</code> を追加しました。	2021 年 12 月 3 日
AWSDataExchangeProviderFullAccess および AWSDataExchangeSubscriberFullAccess — 既存のポリシーの更新	<code>dataexchange:SendApiAsset</code> アセットにリクエストを送信する新しいアクセス許可である <code>dataexchange:SendApiAsset</code> を追加しました API。	2021 年 11 月 29 日

変更	説明	日付
AWSDataExchangeProviderFullAccess および AWSDataExchangeFullAccess — 既存のポリシーの更新	Amazon Redshift データセットへのアクセスを承認し、それらを作成するための新しい許可である <code>redshift:AuthorizeDataShare</code> 、 <code>redshift:DescribeDataSharesForProducer</code> 、および <code>redshift:DescribeDataShares</code> を追加しました。	2021 年 11 月 1 日
AWSDataExchangeSubscriberFullAccess – 既存ポリシーへの更新	データセットの新しいリビジョンを自動的にエクスポートするためのアクセスを制御する新しい許可である <code>dataexchange:CreateEventAction</code> 、 <code>dataexchange:UpdateEventAction</code> 、および <code>dataexchange>DeleteEventAction</code> を追加しました。	2021 年 9 月 30 日
AWSDataExchangeProviderFullAccess および AWSDataExchangeFullAccess — 既存のポリシーの更新	データセットの新しいバージョンを発行するためのアクセスを制御する新しい許可である <code>dataexchange:PublishDataSet</code> を追加しました。	2021 年 5 月 25 日
AWSDataExchangeReadOnly 、 AWSDataExchangeProviderFullAccess 、 AWSDataExchangeFullAccess – 既存のポリシーの更新	製品とオファ어의サブスクリプションの表示を可能にする <code>aws-marketplace:SearchAgreements</code> および <code>aws-marketplace:GetAgreementTerms</code> を追加しました。	2021 年 5 月 12 日
AWS Data Exchange 変更の追跡を開始しました	AWS Data Exchange は、AWS マネージドポリシーの変更の追跡を開始しました。	2021 年 4 月 20 日

のコンプライアンス検証 AWS Data Exchange

AWS のサービス が特定のコンプライアンスプログラムの範囲内にあるかどうかを確認するには、[AWS のサービス「コンプライアンスプログラムによるスコープ」](#)の「」の「」を参照し、関心のあるコンプライアンスプログラムを選択します。一般的な情報については、[AWS「コンプライアンスプログラム」](#)を参照してください。

を使用して、サードパーティーの監査レポートをダウンロードすることができます AWS Artifact。詳細については、「」の [AWS Artifact](#)」を参照してください。

を使用する際のお客様のコンプライアンス責任 AWS のサービス は、データの機密性、会社のコンプライアンス目的、および適用される法律と規制によって決まります。は、コンプライアンスに役立つ以下のリソース AWS を提供します。

- [セキュリティとコンプライアンスのクイックスタートガイド](#) – これらのデプロイガイドでは、アーキテクチャ上の考慮事項について説明し、セキュリティとコンプライアンスに重点を置いたベースライン環境 AWS を にデプロイする手順について説明します。
- [Amazon Web Services HIPAA のセキュリティとコンプライアンスのためのアーキテクチャ](#) – このホワイトペーパーでは、企業が AWS を使用して HIPAA 対象アプリケーションを作成する方法について説明します。

Note

すべての AWS のサービス がHIPAA対象となるわけではありません。詳細については、[HIPAA「対象サービスリファレンス」](#)を参照してください。

- [AWS コンプライアンスリソース](#) – このワークブックとガイドのコレクションは、お客様の業界とロケーションに適用される場合があります。
- [AWS カスタマーコンプライアンスガイド](#) – コンプライアンスの観点から責任共有モデルを理解します。このガイドでは、ガイダンスを保護し AWS のサービス、複数のフレームワーク (米国国立標準技術研究所 (NIST)、Payment Card Industry Security Standards Council ()、国際標準化機構 (ISO) などPCI) のセキュリティコントロールにマッピングするためのベストプラクティスをまとめています。
- AWS Config デベロッパーガイドの [ルールを使用したリソースの評価](#) – この AWS Config サービスは、リソース設定が内部プラクティス、業界ガイドライン、および規制にどの程度準拠しているかを評価します。

- [AWS Security Hub](#) – これにより AWS のサービス、内のセキュリティ状態を包括的に確認できます AWS。Security Hub では、セキュリティコントロールを使用して AWS リソースを評価し、セキュリティ業界標準とベストプラクティスに対するコンプライアンスをチェックします。サポートされているサービスとコントロールのリストについては、[Security Hub のコントロールリファレンス](#)を参照してください。
- [Amazon GuardDuty](#) – これにより AWS アカウント、疑わしいアクティビティや悪意のあるアクティビティがないか環境をモニタリングすることで、ワークロード、コンテナ、データに対する潜在的な脅威 AWS のサービスを検出できます。GuardDuty は、特定のコンプライアンスフレームワークで義務付けられている侵入検出要件を満たすことでDSS、PCI などのさまざまなコンプライアンス要件に対応するのに役立ちます。
- [AWS Audit Manager](#) – これにより AWS のサービス、AWS 使用状況を継続的に監査し、リスクと規制や業界標準へのコンプライアンスの管理を簡素化できます。

PCI DSS コンプライアンス

AWS Data Exchange は、加盟店またはサービスプロバイダーによるクレジットカードデータの処理、保存、送信をサポートし、Payment Card Industry (PCI) Data Security Standard () に準拠していることが確認されていますDSS。コンプライアンスパッケージのコピーを AWS PCIリクエストする方法などPCIDSS、の詳細については、[PCIDSS「レベル1」](#)を参照してください。

でのレジリエンス AWS Data Exchange

AWS グローバルインフラストラクチャは、AWS リージョン とアベイラビリティゾーンを中心に構築されています。は、低レイテンシー、高スループット、および冗長性の高いネットワークに接続されている複数の物理的に分離および分離されたアベイラビリティゾーン AWS リージョン を提供します。アベイラビリティゾーンでは、アベイラビリティゾーン間で中断されることなく自動的にフェイルオーバーするアプリケーションとデータベースを設計および運用することができます。アベイラビリティゾーンは、従来の単一または複数のデータセンターインフラストラクチャよりも可用性、耐障害性、および拡張性に優れています。

AWS Data Exchange には、プロバイダーが提供するグローバルに利用可能な単一の製品カタログがあります。サブスクライバーは、使用しているリージョンにかかわらず、同一のカタログを表示できます。製品の基盤となるリソース(データセット、リビジョン、アセット)は、プログラムで管理するリージョンリソースです。サポートされているリージョンでは、AWS Data Exchange コンソールを通じて管理します。は、サービスが動作するリージョン内の複数のアベイラビリティゾーンにデータを AWS Data Exchange レプリケートします。サポートされるリージョンの詳細については、「[グローバルインフラストラクチャのリージョン表](#)」を参照してください。

AWS リージョン およびアベイラビリティーゾーンの詳細については、[AWS 「グローバルインフラストラクチャ」](#) を参照してください。

のインフラストラクチャセキュリティ AWS Data Exchange

マネージドサービスとして、AWS Data Exchange は AWS グローバルネットワークセキュリティによって保護されています。AWS セキュリティサービスと インフラストラクチャ AWS を保護する方法については、[AWS 「クラウドセキュリティ」](#) を参照してください。インフラストラクチャセキュリティのベストプラクティスを使用して AWS 環境を設計するには、「Security Pillar AWS Well-Architected Framework」の「[Infrastructure Protection](#)」を参照してください。

AWS 公開されたAPI呼び出しを使用して、ネットワーク AWS Data Exchange 経由で にアクセスします。クライアントは以下をサポートする必要があります：

- Transport Layer Security (TLS)。1.2 が必要でTLS、1.3 TLS をお勧めします。
- (DHEエフェメラルディフィ-ヘルマンPFS) や (エリプティックカーブエフェメラルディフィ-ヘルマン) など、完全なフォワードシークレット ECDHE () を持つ暗号スイート。これらのモードは、Java 7 以降など、ほとんどの最新システムでサポートされています。

さらに、リクエストは、アクセスキー ID とプリンシパルに関連付けられているシークレットアクセスキーを使用して署名する必要があります。または、[AWS Security Token Service](#) (AWS STS) を使用して、一時セキュリティ認証情報を生成し、リクエストに署名することもできます。

AWS Data Exchange およびインターフェイスVPCエンドポイント (AWS PrivateLink)

インターフェイスVPCエンドポイント を作成 AWS Data Exchange することで、仮想プライベートクラウド (VPC) と の間にプライベート接続を確立できます。インターフェイスエンドポイントは、インターネットゲートウェイ[AWS PrivateLink](#)、NATデバイス、VPN接続、または AWS Direct Connect 接続を必要とせずにプライベートにオペレーションにアクセスできる AWS Data Exchange APIテクノロジーである を搭載しています。内のインスタンスは、オペレーションと AWS Data Exchange API通信するためにパブリック IP アドレスを必要としVPCません。VPC と 間のトラフィック AWS Data Exchange は Amazon ネットワークから離れません。

各インターフェイスエンドポイントは、サブネット内の 1 つ以上の [Elastic Network Interface](#) によって表されます。

Note

を除くすべての AWS Data Exchange アクションが SendAPIAsset でサポートされています VPC。

詳細については、「Amazon ユーザーガイド」の「[インターフェイスVPCエンドポイント \(AWS PrivateLink\)](#)」を参照してください。 VPC

エンドポイントに関する AWS Data Exchange VPC考慮事項

のインターフェイスVPCエンドポイントを設定する前に AWS Data Exchange、Amazon VPC ユーザーガイドの「[インターフェイスエンドポイントのプロパティと制限](#)」を確認してください。

AWS Data Exchange は、からのすべてのAPIオペレーションへの呼び出しをサポートしますVPC。

のインターフェイスVPCエンドポイントの作成 AWS Data Exchange

Amazon VPCコンソールまたは AWS Command Line Interface () を使用して、AWS Data Exchange サービスのVPCエンドポイントを作成できますAWS CLI。詳細については、「Amazon ユーザーガイド」の「[インターフェイスエンドポイントの作成](#)」を参照してください。 VPC

次のサービス名 AWS Data Exchange を使用して VPCエンドポイントを作成します。

- `com.amazonaws.region.dataexchange`

エンドポイントDNSのプライベートを有効にすると、のデフォルトDNS名 AWS リージョン、例えば AWS Data Exchange を使用してにAPIリクエストできます `com.amazonaws.us-east-1.dataexchange`。

詳細については、「Amazon VPCユーザーガイド」の「[インターフェイスエンドポイントを介したサービスへのアクセス](#)」を参照してください。

のVPCエンドポイントポリシーの作成 AWS Data Exchange

へのアクセスを制御するエンドポイントポリシーをVPCエンドポイントにアタッチできます AWS Data Exchange。このポリシーでは、以下の情報を指定します。

- アクションを実行できるプリンシパル

- 実行可能なアクション
- アクションを実行できるリソース

詳細については、「Amazon VPCユーザーガイド」の[VPC「エンドポイントを使用したサービスへのアクセスの制御」](#)を参照してください。

例: AWS Data Exchange アクションのVPCエンドポイントポリシー

以下は、 のエンドポイントポリシーの例です AWS Data Exchange。エンドポイントにアタッチされると、このポリシーは、すべてのリソースのすべてのプリンシパルに対して、リストされた AWS Data Exchange アクションへのアクセスを許可します。

このVPCエンドポイントポリシーの例では、 から bts の AWS アカウント 123456789012ユーザーにのみフルアクセスを許可します vpc-12345678。ユーザーはリソースを読み取ることができますが、他のすべてのIAMプリンシパルはエンドポイントへのアクセスを拒否されます。

```
{
  "Id": "example-policy",
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Sid": "Allow administrative actions from vpc-12345678",
      "Effect": "Allow",
      "Principal": {
        "AWS": [
          "arn:aws:iam::123456789012:user/bts"
        ]
      },
      "Action": "*",
      "Resource": "*",
      "Condition": {
        "StringEquals": {
          "aws:sourceVpc": "vpc-12345678"
        }
      }
    },
    {
      "Sid": "Allow ReadOnly actions",
      "Effect": "Allow",
      "Principal": {
```

```
        "AWS": [
            "arn:aws:iam::123456789012:user/readUser"
        ]
    },
    "Action": [
        "dataexchange:list*",
        "dataexchange:get*"
    ],
    "Resource": "*",
}
]
```

AWS Marketplace カタログ AWS Data Exchange での の使用 API

この章には、AWS Data Exchange と AWS Marketplace カタログ を使用するための補足情報が含まれていますAPI。AWS Marketplace Catalog APIサービスは、プロバイダーとして AWS Marketplace セルフサービスの発行機能にプログラムでアクセスするためのAPIインターフェイスを提供します。

API は、製品を表示および管理するための幅広いオペレーションをサポートしています。API 統合 AWS Marketplace を通じて内部ビルドまたはデプロイパイプラインを に拡張し、製品更新プロセスを自動化できます。また、 の上に独自の内部ユーザーインターフェイスを作成してAPI、 で製品を管理することもできます AWS Marketplace。

Catalog を使用して AWS Data Exchange 製品 AWS Marketplace APIを更新できます。製品を表示するには、ListEntitiesおよび DescribeEntityAPIオペレーションを使用できます。AWS Data Exchange 製品を更新するには、新しい変更セットを作成する必要があります。これは、製品の管理に使用される非同期オペレーションを表す Catalog APIリソースです。詳細については、[AWS Marketplace カタログAPIリファレンス](#) を参照してください。

Catalog を操作するときは、次の点に注意してくださいAPI。

- 各 AWS Data Exchange 製品は、カタログで [エンティティ](#) APIとして表されます。
- AWS Data Exchange 製品には DataProductが として含まれていますEntityType。
- 各製品では、一度に 1 つの変更セットしか実行できません。つまり、最初の変更セットの実行が完了するまでは、2 番目の変更セットを作成できないことになります。

トピック

- [データセットを に追加する AWS Data Exchange](#)

データセットを に追加する AWS Data Exchange

Note

Catalog API変更セットを介して追加されたデータセットのタイプはAddDataSets、デフォルトで製品の発行方法になります。

AWS Data Exchange 製品にデータセットを追加するには、タイプの変更セットを開始します AddDataSets。これを行うには、StartChangeSetAPI オペレーションを使用して、変更タイプ、製品識別子、製品タイプ、およびデータセット Amazon リソースネーム () を含む詳細を指定できます ARN。

チュートリアル: 公開済みのデータ製品への新しいデータセットの追加

このチュートリアルでは、公開済み製品に新しい AWS Data Exchange データセットを追加する詳細なステップについて説明します。このチュートリアルのおおまかな手順は以下のとおりです。

トピック

- [IAM アクセス許可を設定する](#)
- [AWS Marketplace カタログにアクセスする API](#)
- [AWS Data Exchange コンソールから製品 ID を取得する](#)
- [変更リクエストを開始する](#)
- [変更セットのステータスをチェックする](#)

IAM アクセス許可を設定する

開始する前に、AWS Marketplace カタログを使用するための AWS Identity and Access Management (IAM) アクセス許可が必要です API。これらのアクセス許可は、を使用するために必要なアクセス許可に加えて付与されます AWS Data Exchange。

1. ブラウザを IAM コンソールに移動し、IAM アクセス許可を管理 **AWS アカウント できる** を使用してサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインで [ポリシー] を選択します。
3. [Create policy] を選択します。
4. JSON タブを選択し、次のアクセス許可を指定します。これにより、AWS Marketplace カタログへのフルアクセスが可能になります API。アクセス権は、ユースケースの必要に応じて制限できます。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
```

```
    "aws-marketplace:CancelChangeSet",
    "aws-marketplace:ListChangeSets",
    "aws-marketplace:DescribeEntity",
    "aws-marketplace:StartChangeSet",
    "aws-marketplace:ListEntities",
    "aws-marketplace:DescribeChangeSet",
    "dataexchange:PublishDataSet"
  ],
  "Resource": "*"
}
]
```

5. [次へ: レビュー] を選択します。
6. ポリシーの名前 (**CatalogAPIFullAccess** など) を入力してから、[ポリシーを作成] を選択します。
7. IAM コンソールを使用して、ポリシーをアタッチするユーザー、グループ、またはロールを選択します。

AWS Marketplace カタログにアクセスする API

AWS Marketplace カタログ にアクセスするにはAPI、次のHTTPクライアントエンドポイントを使用します。

```
catalog.marketplace.us-east-1.amazonaws.com
```

AWS Data Exchange コンソールから製品 ID を取得する

Catalog AWS Marketplace API を使用して新しいデータセットを発行する前に、AWS Data Exchange コンソールから製品 ID を取得します。[Product] (製品) ダッシュボードに移動して、データセットを発行する製品 ID をコピーします。Catalog を使用して、**DataProduct@1.0**エンティティタイプで ListEntities アクションを使用して製品 ID [AWS Marketplace API](#)を検索することもできます。

変更リクエストを開始する

変更リクエストを開始してテスト製品にデータセットを追加する

1. 「[AWS Data Exchange コンソールから製品 ID を取得する](#)」の手順に従って取得できるエンティティ ID をコピーします。

2. AddDataSets 変更タイプを使用して StartChangeSet リクエストを実行します。

Note

AWS Marketplace カタログ の変更セットの操作についてはAPI、[「変更セットの操作」](#)を参照してください。エンティティの識別子の使用に関する詳細については、[「識別子」](#)を参照してください。

リクエストの例

```
https://catalog.marketplace.us-east-1.amazonaws.com/StartChangeSet
```

リクエストボディの例

```
{
  "Catalog": "AWSMarketplace",
  "ChangeSetName": "Adding Data Set to my test Data Product",
  "ChangeSet": [
    {
      "ChangeType": "AddDataSets",
      "Entity": {
        "Identifier": "entity-id@1",
        "Type": "DataProduct@1.0"
      },
      "Details": "{ \"DataSets\": [ { \"Arn\": \"data-set-arn\" } ] }"
    }
  ]
}
```

レスポンスの例

```
{
  "ChangeSetId": "cs-bnEXAMPLE4mkz9oh",
  "ChangeSetArn": "arn:aws:aws-marketplace:us-east-1:account-id:AWSMarketplace/ChangeSet/cs-bnEXAMPLE4mkz9oh"
}
```

変更セットのステータスをチェックする

StartChangeSet API オペレーションを使用して変更リクエストを開始したら、DescribeChangeSet オペレーションを使用してステータスを確認できます。StartChangeSet API レスポンスで返される変更セット ID を指定します。

リクエストの例

```
https://catalog.marketplace.us-east-1.amazonaws.com/DescribeChangeSet?
catalog=AWSMarketplace&changeSetId=cs-bnEXAMPLE4mkz9oh
```

リクエストボディの例

```
{
  "changeSetId": "cs-bnEXAMPLE4mkz9oh"
}
```

レスポンスの例

```
{
  "ChangeSetId": "cs-bnEXAMPLE4mkz9oh",
  "ChangeSetArn": "arn:aws:aws-marketplace:us-east-1:account-id:AWSMarketplace/
ChangeSet/cs-bnEXAMPLE4mkz9oh",
  "ChangeSetName": "Adding Data Set to my test Data Product",
  "StartTime": "2018-09-20T19:45:03.115+0000",
  "EndTime": "2018-09-20T19:48:12.517+0000",
  "Status": "SUCCEEDED",
  "FailureDescription": null,
  "ChangeSet": [
    {
      "ChangeType": "AddDataSets",
      "Entity": {
        "Type": "DataProduct@1.0",
        "Identifier": "entity-id@1"
      },
      "ErrorList": []
    }
  ]
}
```

AddDataSets 例外

AWS Marketplace API カタログを で使用すると、次の例外が発生する可能性があります AWS Data Exchange。

DATA_SET_NOT_FOUND

これは、リクエストされたデータセットが見つからなかった場合に発生します。この問題を解決するには、データセットに誤字がなく、 がデータセット AWS アカウント を所有ARNしていることを確認してください。

INVALID_INPUT

無効な入力が原因で、リクエストを処理できませんでした。この問題を解決するには、リクエストにタイプミスがないことと、製品がデータセットの許容最大数を越えていないことを確認してください。

DATA_SET_ALREADY_PUBLISHED

これは、製品にデータセットが既に追加されている場合に発生します。

DATA_SET_DUPLICATE_PROVIDED

これは、リクエスト内で同じデータセットが複数回提供されている場合に発生します。

のドキュメント履歴 AWS Data Exchange

以下の表は、本リリースの「AWS Data Exchange ユーザーガイド」のドキュメントを説明するものです。このドキュメントの更新に関する通知については、RSSフィードをサブスクライブできません。

RSS 更新をサブスクライブするには、使用しているブラウザで RSS プラグインが有効になっている必要があります。

変更	説明	日付
既存のポリシーに対する更新	ワイルドカードによるアクセス許可を読み取り専用 ADX アクセス許可の完全なリストに拡張し、aws-marketplace:ListTagsForResource と aws-marketplace:ListPrivateListings を追加しました AWSDataExchangeReadOnly 。	2024 年 7 月 9 日
既存のポリシーに対する更新	AWSDataExchangeFullAccess および aws-marketplace:GetPrivateListing からアクションを削除しました AWSDataExchangeProviderFullAccess 。	2024 年 5 月 22 日
既存のポリシーに対する更新	これらのポリシーには IDs、AWSDataExchangeReadOnly 管理ポリシー: aws-marketplace:ListTagsForResource および aws-marketplace:ListPrivateListings 、	2024 年 4 月 30 日

AWSDataExchangeSubscriberFullAccess 管理ポリシー: aws-marketplace:ListPrivateListings、AWSDataExchangeFullAccess 管理ポリシー: aws-marketplace:TagResource、aws-marketplace:UntagResource、aws-marketplace:ListTagsForResource、aws-marketplace:ListPrivateListings、というステートメントaws-marketplace:GetPrivateListing と新しいアクションが追加されましたaws-marketplace:DescribeAgreement。詳細については、「[AWS マネージドポリシー](#)」を参照してください。

既存のポリシーの更新

次の新しい権限がAWSDataExchangeProviderFullAccess マネージドポリシーに追加されました:dataexchange:SendDataSetNotification。詳細については、「[AWS マネージドポリシー](#)」を参照してください。

2024 年 3 月 5 日

[データ許可を作成する機能が利用可能になりました](#)

データ所有者は、販売者として登録 AWS Data Exchange しなくても、AWS Marketplace を使用してデータを共有できるようになりました。詳細については、「[AWS Data Exchangeでのデータ許可の作成](#)」を参照してください。

2023 年 12 月 14 日

[プロバイダ生成通知が利用可能になりました](#)

プロバイダは、データ更新、データ遅延、スキーマ変更、廃止に関する通知を送信できます。サブスクライバーは、これらの通知を Amazon のイベントとして受け取り、自動化されたワークフローを構築 EventBridge したり、AWS ユーザー通知を使用して E メールやチャットプログラムに人間が読み取れる通知を配信したりできます。詳細については、「[プロバイダ生成通知](#)」を参照してください。

2023 年 10 月 31 日

[自動エクスポートジョブで利用できる新しいサブスクライバーイベント通知](#)

サブスクライバーは、「自動エクスポートジョブ完了」と「自動エクスポートジョブ失敗」の 2 つの新しいイベントの通知を受け取ることができます。詳細については、「[自動エクスポートジョブが完了したときのイベント](#)」と「[自動エクスポートジョブが失敗したときのイベント](#)」を参照してください。

2023 年 10 月 4 日

[サブスクライバーが Amazon S3 バケットから直接ファイルをダウンロードする機能](#)

サブスクライバーは、AWS Data Exchange コンソールからプロバイダーの Amazon S3 バケットから直接ファイルをダウンロードできるようになりました。詳細については、「[Amazon S3 データ アクセスを含む新しい製品の公開](#)」を参照してください。

2023 年 9 月 5 日

[AWS Marketplace Agreement Service の変更 AWS Data Exchange AWS CloudTrail と移行 \(MPAS \)](#)

AWS Data Exchange は、イベントの変更を引き起こす AWS Marketplace 契約サービスに移行しています AWS Data Exchange CloudTrail。詳細については、「[の AWS Data Exchange CloudTrail ログ記録における今後の変更](#)」を参照してください。

2023 年 6 月 1 日

[AWS ユーザー通知を使用する機能](#)

AWS ユーザー通知では、アカウント、AWS リージョンおよびのサービス全体で関連するすべての AWS 通知をセットアップして表示するための単一の場所が AWS Management Console ユーザーに提供されます。ユーザーは、電子メール、チャット、モバイルプッシュ通知など、通知の配信チャネルを設定できます。詳細については、「[AWS Data Exchange の AWS ユーザー通知](#)」を参照してください。

2023 年 5 月 18 日

[Amazon S3 データアクセスを含む製品を公開およびサブスクライブする機能](#)

Amazon S3 データアクセスを含むデータ製品のサブスクリプションと公開が一般に利用可能になりました。詳細については、「[Amazon S3 データアクセスを含む新しい製品の公開](#)」および「[Amazon S3 データアクセスを含む製品へのサブスクリプション](#)」を参照してください。

2023 年 3 月 14 日

[サブスクライバーが Amazon S3 データアクセスデータセットリソースの通知を受信する機能](#)

プロバイダが Amazon S3 リソースに対してアクションを実行したときに、サブスクライバーが通知を受け取ることができるようになりました。詳細については、「[Amazon EventBridge イベント](#)」を参照してください。

2023 年 2 月 10 日

[Amazon S3 \(テスト製品\) AWS Data Exchange に含めるようにチュートリアルを更新 \(プレビュー\)](#)

次のチュートリアルでは、AWS Data Exchange カタログを参照して for AWS Data Exchange Amazon S3 (テスト製品) (プレビュー): [チュートリアル: AWS Data Exchange for Amazon S3 \(テスト製品\) \(プレビュー\)](#) をサブスクライブする方法を示します。

2023 年 2 月 6 日

[Amazon S3 データアクセスを含む製品を公開およびサブスクライブする機能 \(プレビュー\) データサブスクライバーが を介して AWS GlueAWS Lake Formation テーブルにアクセスできる機能 \(プレビュー\)](#)

プロバイダは Amazon S3 データアクセスを含む製品を作成できるようになりました。詳細については、「[Amazon S3 データ アクセスを含む新しい製品の公開 \(プレビュー\)](#)」を参照してください。サブスクライバーは、データプロバイダの Amazon S3 データセットからデータを検索、サブスクライブ、使用できるようになりました。詳細については、「[Amazon S3 データ アクセスを含む製品のサブスクリプション \(プレビュー\)](#)」を参照してください。サブスクライバーは、AWS Lake Formation AWS を通じてライブのサードパーティー Glue テーブルを検索してサブスクライブできます。これらのテーブルは ready-to-use、基盤となるファイルを抽出、変換、ロードすることなくクエリおよび分析できます。詳細については、「[AWS Lake Formation データセットを含む製品をサブスクライブしてアクセスする \(プレビュー\)](#)」[Amazon S3 データアクセスを含む製品をサブスクライブする \(プレビュー\)](#)」を参照してください。サブスクライバーは、を通じてライブのサードパーティー AWS Glue テーブルを検索してサブスクライブでき

2022 年 11 月 30 日

ます。AWS Lake Formation
これにより ready-to-use、基
盤となるファイルを抽出、変
換、ロードすることなく、ク
エリや分析を行うことができ
ます。詳細については、[AWS
Lake Formation 「データセッ
トを含む製品をサブスクラ
イプしてアクセスする \(プレ
ビュー\)」](#)を参照してくださ
い。

[現在、イスラエルは適格な管 轄区域となっています](#)

イスラエル在住者は AWS
Data Exchange で販売者にな
れます。詳細については、「
[プロバイダとして開始する](#)」
を参照してください。

2022 年 8 月 29 日

[拡張プロバイダープログラム](#)

拡張プロバイダープログラ
ム (EPP) が一般公開されま
した。詳細については、「[拡
張プロバイダープログラム
\(EPP\)](#)」を参照してくださ
い。

2022 年 8 月 9 日

[エクスポートファイルのサイズ制限の引き上げ](#)

Amazon S3 へのリビジョンのクロスリージョンエクスポートのファイルサイズ制限が 100 GB から 1,000 GB に引き上げられました。単一のクロスリージョンジョブで Amazon S3 にエクスポートできるアセットの数が 2,000 から 10,000 に増加しました。詳細については、「エクスポートおよびインポートジョブのガイドライン」を参照してください。

2022 年 8 月 4 日

[類似製品](#)

サブスクライバーは商品詳細ページの下部に類似商品のリストを表示できるようになり、検索結果ページに戻らなくても閲覧を続けることができます。詳細については、「[製品へのサブスクリプションとアクセス](#)」を参照してください。

2022 年 7 月 28 日

サブスクリプション後の機能強化

異なるタイプのデータセットを含む製品をサブスクライブすると、サブスクライバーは異なるタイプのデータセットを表示するアイコン付きのカードを別々に表示できるようになりました。サブスクライバーはデータセットに関する詳細情報を確認でき、サブスクリプション後のページから利用資格のあるデータに直接アクセスできます。さらに、S3 データセットを含む製品のサブスクライバーは、サブスクリプション後のページで直接手動または自動エクスポートを設定できます。詳細については、「[製品へのサブスクリプションとアクセス](#)」を参照してください。

2022 年 7 月 25 日

リビジョンのエクスポート時にデータセット ID とデータセット名をエクスポートする機能

Amazon S3 バケットにリビジョンをエクスポートする際、プロバイダとサブスクライバーの両方が、データセット ID とエクスポートされるデータセットの名前をエクスポートできるようになりました。詳細については、「[リビジョンのエクスポート](#)」を参照してください。

2022 年 7 月 14 日

[での Open Data との統合 AWS](#)

の有無にかかわらず、誰でも AWS アカウントプロジェクトの [Open Data AWS](#) からデータ製品を検索および検索できるようになりました。詳細については、「[AWS データセットでのオープンデータの使用](#)」を参照してください。

2022 年 6 月 21 日

[データセットエクスポートの 動画](#)

動画を追加するためのドキュメントのみの更新: からのサードパーティーデータセットの 1 回限りのエクスポート AWS Data Exchange。詳しくは、「[アセットのエクスポート](#)」と「[リビジョンのエクスポート](#)」を参照してください。

2022 年 5 月 27 日

[API製品の従量制コストを指定し、従量制料金でAPI製品をサブスクライブする機能](#)

プロバイダーは、API製品の従量制コストを指定できるようになりました。詳細については、「[を含む製品の公開 APIs](#)」を参照してください。サブスクライバーは、従量制料金 APIs でサードパーティーを検索してサブスクライブできるようになりました。この機能により、毎月のデータファイルサブスクリプションと比較して、サブスクリプション契約者の初期費用が削減されます。詳細については、「[を含む製品をサブスクライブしてアクセスする APIs](#)」を参照してください。

2022 年 5 月 19 日

[プロバイダとしてサブスクリプション検証リクエストを表示および編集する機能](#)

プロバイダとしてのサブスクリプション検証リクエストの表示と編集の方法が明確になるように、ドキュメントのみを更新しました。詳細については、「[プロバイダのサブスクリプション検証](#)」を参照してください。

2022 年 5 月 6 日

[データディクショナリとサンプルを含むようにチュートリアルを更新しました](#)

次のチュートリアルには、データディクショナリとサンプルが含まれるようになりました。[チュートリアル: で AWS Data Exchange ハートビートをサブスク AWS Data Exchangeライブする、チュートリアル: で APIs \(テスト製品\) AWS Data Exchange をサブスクライブ AWS Data Exchangeする、およびチュートリアル: で Worldwide Event Attendance \(テスト製品\) をサブスクライブする AWS Data Exchange](#)。

2022 年 4 月 13 日

[データディクショナリとサンプルを含む製品を提供およびサブスクライブする機能](#)

プロバイダは、データディクショナリとサンプルを含むデータ製品を作成および更新できるようになりました。詳細については、「[データディクショナリとサンプル](#)」を参照してください。サブスクライバーは、データディクショナリとサンプルを含む製品をサブスクリプション前に評価できません。詳細については、「[データディクショナリとサンプル](#)」を参照してください。サブスクライバーは、[新しいトピック「サブスクリプションの管理」](#)でサブスクリプションの管理方法について詳しく知ることができます。

2022 年 3 月 31 日

[製品動画の公開](#)

動画を追加するためのドキュメントのみの更新: で製品を公開します AWS Data Exchange。詳細については、「[新しい製品を公開する](#)」を参照してください。

2022 年 3 月 18 日

[既存のポリシーの更新](#)

次の新しい権限がAWSDataExchangeProviderFullAccess マネージドポリシーに追加されました:dataexchange:RevokeRevision
詳細については、「[AWS マネージドポリシー](#)」を参照してください。

2022 年 3 月 15 日

[リビジョンを取り消す機能](#)

プロバイダは、サブスクライバーのリビジョンへのアクセス権を取り消したり、リビジョンのアセットを削除したりできます。詳細については、「[トークンの取り消し](#)」を参照してください。サブスクライバーは、リビジョンへのアクセスが取り消されたこと、および取り消しの理由を通知する Amazon EventBridge イベントを受け取ります。詳細については、「[Amazon EventBridge イベント](#)」を参照してください。

2022 年 3 月 15 日

[APIデータセットを含む製品をサブスクライブするためのチュートリアルを追加](#)

次の新しいチュートリアルが追加されました。[チュートリアル: の APIs \(テスト製品\) AWS Data Exchange のをサブスクライブする AWS Data Exchange](#)。

2022 年 1 月 14 日

[Amazon Redshift サブスクリプション製品を公開およびサブスクライブする機能](#)

2022 年 1 月 4 日

プロバイダは、Amazon Redshift データセットを作成、ライセンス供与できるようになりました。詳細については、「[Amazon Redshift データセットを含む製品の公開](#)」を参照してください。サブスクライバーは、データプロバイダの Amazon Redshift データセットからデータを検索、サブスクライブ、使用できるようになりました。詳細については、「[Amazon Redshift データセットを含む製品のサブスクリプション](#)」を参照してください。サブスクライバーは、プロバイダが Amazon Redshift リソースに対してアクションを実行したときに通知を受け取ることもできます。詳細については、「[Amazon EventBridge イベント](#)」を参照してください。次のチュートリアルが追加されました: [チュートリアル: AWS Data Exchange でワールドワイドイベントアテンダンス\(テスト製品\)にサブスクライブする](#)。

既存のポリシーに対する更新

Amazon API Gateway APIから取得する次の新しいアクセス許可が AWS マネージドポリシーに追加されました: `AWSDataExchangeProviderFullAccess` および `AWSDataExchangeFullAccess` : `apigateway:GET`。詳細については、「[AWS マネージドポリシー](#)」を参照してください。

2021 年 12 月 3 日

既存のポリシーに対する更新

API アセットにリクエストを送信する次の新しいアクセス許可が AWS マネージドポリシーに追加されました: `AWSDataExchangeProviderFullAccess` および `AWSDataExchangeSubscriberFullAccess` : `dataexchange:SendApiAsset`。詳細については、「[AWS マネージドポリシー](#)」を参照してください。

2021 年 11 月 29 日

[サードパーティーに提供およびサブスクライブする機能 APIs](#)

プロバイダーは、を使用して APIデータ製品を作成し AWS Data Exchange、AWS Data Exchange を使用してサブスクライバーの認証、料金、請求、および REST pay-as-you-go へのアクセスを管理できるようになりましたAPIs。詳細については、[「新しいAPIデータ製品の公開」](#)を参照してください。サブスクライバーは、REST APIsでサードパーティーから APIベースのデータを検索してサブスクライブできるようになりました AWS クラウド。AWS ネイティブ認証とガバナンスを使用し、AWS生成SDKsのを使用してAPI呼び出しを行うことができます。詳細については、[API「データ製品へのサブスクライブ」](#)を参照してください。

2021 年 11 月 29 日

既存のポリシーに対する更新 (パブリックプレビュー)

Amazon Redshift データセットへのアクセスと作成を許可する次の新しいアクセス許可が、AWS マネージドポリシー (パブリックプレビュー) に追加されました。AWSDataExchangeProviderFullAccess および AWSDataExchangeFullAccess : redshift:AuthorizeDataShare、redshift:DescribeDataSharesForProducer、および redshift:DescribeDataShares。詳細については、「[AWS マネージドポリシー](#)」を参照してください。

2021 年 11 月 1 日

[Amazon Redshift データ製品を公開してサブスクライブする機能 \(パブリックプレビュー\)](#)

プロバイダーは、を使用して Amazon Redshift データ製品を作成およびライセンスできるようになりました AWS Data Exchange。詳細については、「[新しい Amazon Redshift データ製品の公開 \(プレビュー\)](#)」を参照してください。サブスクライバーは、データプロバイダの Amazon Redshift データセットからデータを検索、サブスクライブ、使用できるようになりました。詳細については、「[Amazon Redshift データ製品のサブスクリプション \(プレビュー\)](#)」を参照してください。

2021 年 10 月 19 日

[既存のポリシーの更新](#)

データセットの新しいリビジョンを自動的にエクスポートするためのアクセスを制御するための次の新しいアクセス許可が、AWSDataExchangeSubscriberFullAccess AWS マネージドポリシー dataexchange:CreateEventAction、dataexchange:UpdateEventAction、および追加されました dataexchange:DeleteEventAction。詳細については、「[AWS マネージドポリシー](#)」を参照してください。

2021 年 9 月 30 日

[リビジョンを自動的にエクスポートする機能](#)

サブスクライバーは、リビジョンを自動的にエクスポートできるようになりました。詳細については、「[サブスクライバーとしての S3 バケットへのリビジョンの自動エクスポート \(コンソール\)](#)」を参照してください。

2021 年 9 月 30 日

[ジョブの使用方法に関する手順を更新](#)

ジョブを使用してアセットのインポートとエクスポート、およびリビジョンのエクスポートを実行する方法を明確にするために、「[AWS Data Exchangeのジョブ](#)」セクションが更新されました。

2021 年 9 月 7 日

[データ製品のサブスクリプションを解除する方法に関する手順を追加](#)

「[AWS Data Exchangeでのデータ製品のサブスクリプション](#)」セクションが再編成され、製品のサブスクリプションを解除する方法を明確にするための新しいサブセクションが追加されました。詳細については、「[で製品のサブスクリプションを解除する AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

2021 年 8 月 11 日

[AWS License Manager によるライセンス共有のサポート](#)

AWS 組織内の他のアカウントと購入した製品にライセンスを共有できます。詳細については、「[組織内でのライセンスサブスクリプションの共有](#)」を参照してください。

2021 年 8 月 4 日

リビジョンを自動的に発行する機能	プロバイダは、データセットにリビジョンを自動的に発行できるようになりました。詳細については、「 自動リビジョン発行を使用した新しいデータセットリビジョンの発行 」を参照してください。既存のデータセットを自動リビジョン発行に移行する方法については、「 既存製品の自動リビジョン発行への移行 」を参照してください。	2021年7月22日
製品説明テンプレートを更新	次の製品説明テンプレートが更新されました: メディアとエンターテイメントの詳細な説明テンプレート と 小売と場所の詳細な説明テンプレート 。	2021年7月19日
より適格な管轄区域	AWS Data Exchange香港SARとカタールでの販売者になる資格が付与されました。詳細については、「 AWS Data Exchange 製品の対象管轄区域 」を参照してください。	2021年6月24日
マネージドポリシーに対する変更を表示する機能	の AWS 管理ポリシーに加えられた変更を確認できるようになりました AWS Data Exchange。これらは、「 AWS Data Exchange向けのAWS マネージドポリシー 」トピックで追跡されます。	2021年5月25日

支払いスケジューラを追加	支払いスケジュールを使用して、プライベートオファーや更新されたプライベートオファーのサブスクライバーに料金を請求できるようになりました。詳細については、「 プライベートオファーを作成する 」を参照してください。	2021 年 5 月 24 日
データセットをプログラムの追加する機能を追加	AWS Marketplace Catalog API サービスを使用してデータセットを追加できるようになりました。詳細については、 AWS Marketplace 「カタログ AWS Data Exchange」の使用API 」を参照してください。	2020 年 8 月 23 日
希望通貨のサポート	AWS Data Exchange サブスクリプションの料金は、希望の通貨を使用して支払うことができます。詳細については、「 料金 」を参照してください。	2020 年 7 月 27 日
より適格な管轄区域	AWS Data Exchange バーレーン、ノルウェー、スイス、およびアラブ首長国連邦 () で販売される資格が付与されました UAE。詳細については、「 AWS Data Exchange 製品の対象管轄区域 」を参照してください。	2020 年 6 月 16 日

[データセットのエクスポート に対する暗号化のサポートを 追加](#)

AWS Data Exchange は、データセットを Amazon S3 にエクスポートするときに、設定可能な暗号化パラメータをサポートするようになりました。詳細については、「[Amazon S3 バケットへのデータセットのエクスポート](#)」を参照してください。

2020 年 4 月 27 日

[AWS Data Exchange が一般公開されました](#)

AWS Data Exchange は、お客様が AWS クラウドでファイルベースのデータセットを簡単に AWS 作成、更新、保守、および安全に交換できるようにするサービスです。

2019 年 11 月 13 日

翻訳は機械翻訳により提供されています。提供された翻訳内容と英語版の間で齟齬、不一致または矛盾がある場合、英語版が優先します。